㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第265集

荒砥荒子遺跡

昭和57・58年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

古墳時代中期の居館

2000

群　馬　県　教　育　委　員　会
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第265集

荒砥荒子遺跡

昭和57・58年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

古墳時代中期の居館

2000

群馬県教育委員会
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

居館の全景（上空から）

荒砥城の遺跡と赤坂古墳の航空写真（富士空から）

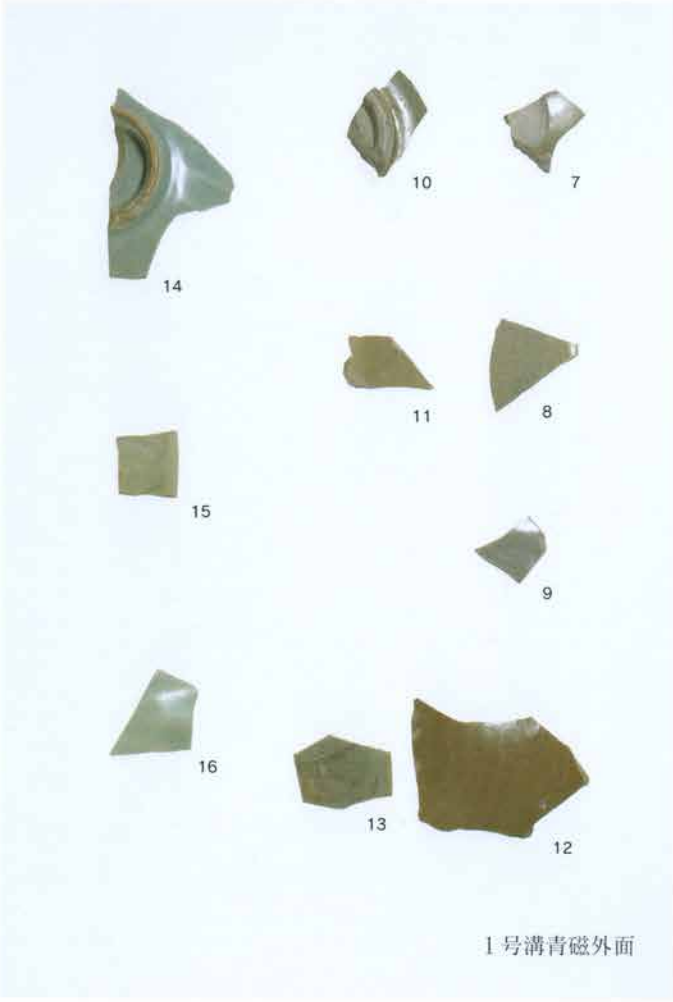
居館周辺を含む全景（北上空から）

居館周辺を含む全景（西上空から）

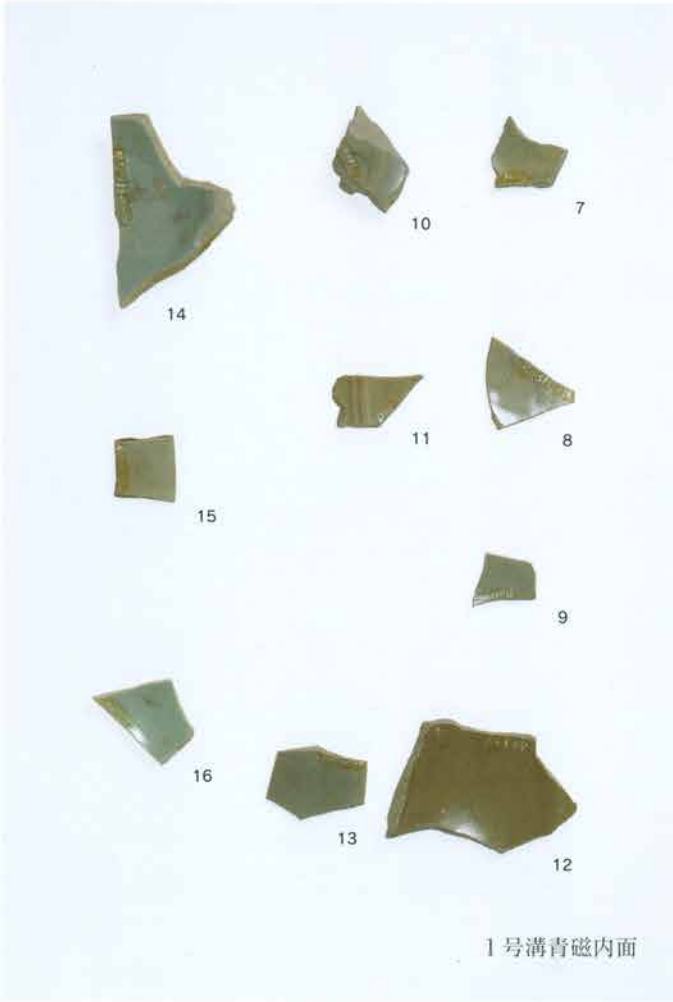
居館全景（東上空から）

居館全景（北西上空から）

荒砥荒子遺跡の現状



1号溝青磁外面



1号溝青磁内面

序

前橋市の旧荒砥村地区では、昭和56年度から国道50号線の北の地域を対象にした県営荒砥北部圃場整備事業が始まり、平成３年度まで行われました。圃場整備の対象となった地域は、県内でも有数の埋蔵文化財の密集地で、圃場整備に先駆け埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。当事業団も昭和56年度から59年度に対象となった事業地内の埋蔵文化財の発掘調査を行いました。本来なら発掘調査後、直ちに報告書を刊行する予定でしたが、諸般の事情により、その刊行が遅れていました。その後、関係者の御努力により、平成５年度から報告書刊行のための整理事業が再開されることとなりました。

平成11年度には、昭和57・58年度に発掘調査を実施した『荒砥荒子遺跡』の整理事業を実施し、ここにその報告書を刊行することとなりました。

『荒砥荒子遺跡』は、四方に堀と柵列を巡らした古墳時代中期の「居館」を中心とする遺跡で、当時の社会状況を知る上で重要な遺跡であり、本報告書は、考古学研究者はもちろん、郷土の歴史に関心をお持ちの県民の皆様にも大いに役立つものと確信しております。

最後になりますが、発掘調査から報告書刊行まで一方ならぬご協力を賜りました、群馬県農政部土地改良課、前橋土地改良事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、衷心より感謝の意を表し、序といたします。

平成12年３月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　**小 野 宇 三 郎**

例　　言

1．本書は昭和57・58年度の県営圃場整備事業荒砥北部地区に伴う荒砥荒子遺跡の発掘調査報告書である。

2．荒砥荒子遺跡は、群馬県前橋市荒子町諏訪370、東原373・375・376番地を中心としている。居館の中心は東原375・376番地にあたる。遺跡名は便宜上字名を採用しないで、遺跡のある旧村名である「荒砥（あらと）」に、町名である「荒子（あらこ）」を付して「荒砥荒子遺跡」とした。

3．発掘調査は、群馬県農政部・前橋土地改良事務所・群馬県教育委員会の委託により、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査の期間・体制は次の通りである。

期　　間　昭和58年３月22日～昭和58年５月10日

管理・指導　小林起久治、白石保三郎、松本浩一、近藤平志、細野雅男

事務担当　国定　均、笠原秀樹、山本朋子、吉田有光、柳岡良宏
（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団職員）
野島のぶ江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子、（同補助員）

調査担当　鹿田雄三（現　県立伊勢崎東高等学校教諭）、相京建史、中沢　悟、菊池　実、小島敦子、
斉藤利昭（同調査研究員）

4．発掘資料の整理および報告書の作成は、群馬県教育委員会の委託により、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書の作成期間・体制は次の通りである。

期　　間　平成11年４月１日～平成12年３月31日

管理・指導　小野宇三郎、赤山容造、住谷　進、神保侑史、水田　稔、佐藤明人

事務担当　坂本敏夫、笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、岡嶋伸昌、片岡徳雄、
（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団職員）
大澤友治（同嘱託）、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、若田　誠、
佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、浅見宣記、吉田　茂、
（同補助員）

編　　集　中沢　悟　（同主幹）

本文執筆　中沢　悟

遺構写真　調査担当者

遺物写真　佐藤元彦（同係長代理）

遺物観察　中沢　悟（青磁以外）　　青磁は王　小蒙（中国陝西省考古学研究所　歴史学碩士）

金属器保存処理　関　邦一（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団係長代理）土橋まり子（同嘱託員）
小材浩一、高橋初美（同補助員）

器械実測　佐藤美代子、田中富子、富沢スミ江、小菅優子（同補助員）

遺物整理・図面作成　遺構遺物トレース　戸神晴美、宮沢房子、光安文子、高橋優子、羽鳥望東子、
矢野純子（同補助員）

委託関係　居館全体図トレース　（株）測研

5．居館の航空測量図（付図として添付）と航空写真は中央航業株式会社が作成した。（巻頭カラーの周辺全景を省く）

6．石材鑑定については、飯島静雄氏（群馬県地質研究会会員）にご教示を得た。

7．発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご助言、ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。

甘粕　健　石野博信　井上唯雄　小林昌二　酒井清治　鹿田雄三　鈴木靖民　田中広明　橋本博文　土生田純之　坂野和信（敬称略）

群馬県農政部土地改良課　群馬県農政部前橋土地改良事務所　荒砥北部土地改良区　群馬県教育委員会

8．出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財センターおよび（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

凡　　例

1．本調査に用いたグリッドは、調査区全体をカバーできるように、100mの大グリッドを18個設定し、その中を5×5mの小グリッドとした。グリッドの呼称は100mの大グリッドを独立した単位とし、北西コーナーの交点をA-1とし東から西方向に1から20まで、北から南方向にAからTまでとし、14F-1のように呼称した。

2．本書における遺構番号は、調査時に付されたものをそのまま使用している。このため土坑や住居等において欠番が生じている。

3．遺構図の中で使用した北方位は、居館の航空測量図（座標北を使用）以外すべて磁北を使用している。

4．遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付した。

遺構図　住居1：60　住居竈1：30　土坑1：60　井戸1：60　溝1：80と1：100

遺物図　坏・鉢・坩1：3　甕・石臼1：4

5．遺物番号は本文・挿図・表と一致する。

6．図中で使用したスクリントーンは以下のとおりである。

（遺構）浅間Bテフラ（As-B）　焼　土　炭

（遺物）吸炭による黒色処理　内面漆

7．面積は、住居の上端をプラニメーターを用いて3回平均値で測定した。なお竈を持つ住居では竈を含めていない。

8．方位は、北方向に最も近い壁の方向を計測した。

目　　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
図版目次
抄録
第１章　調査に至る経過……1
　第１節　県営圃場整備事業と発掘調査の経過……1
　第２節　調査の経過……3
　第３節　調査の方法……4
第２章　遺跡の立地と環境……5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……6
第３章　検出した遺構と遺物……11
　第１節　住居跡……11
　第２節　竪穴状遺構……51
　第３節　溝……54
　第４節　井戸……70
　第５節　土坑……72
　第６節　埋没谷……80
　第７節　支用１号(南端調査部分)……83.84
　第８節　小穴群……85
　第９節　北調査区……87
　　(1)　北調査区住居跡……88
　　(2)　北調査区溝……97
　　(3)　北調査区土坑……98
　第10節　居館……101
　　(1)　居館の堀……101
　　(2)　居館の柵……101
　　(3)　堀と９号溝出土遺物について……110
　第11節　遺構外……128
第４章　調査成果と整理のまとめ……129
　第１節　調査された遺構と遺物について……129
　第２節　荒砥地域における古墳時代の土器について……130
　第３節　荒子・丸山・梅木遺跡の居館について……141

文献
写真図版　　遺構 PL１～PL29
　　遺物 PL30～PL43
報告書抄録

挿図目次

第１図　荒砥荒子遺跡の位置（丸印）……１
第２図　発掘調査区（圃場整備７－１工区）……４
第３図　グリッド配置図……４
第４図　群馬県中央部の地形と荒砥荒子遺跡……５
第５図　荒砥地域における地形と
　　古墳時代の遺跡分布図 ……７．８
第６図　１号住居跡……11
第７図　１号住居跡出土遺物……12
第８図　２号住居跡……14
第９図　２号住居跡出土遺物……15
第10図　３号住居跡・出土遺物（１）……17
第11図　３号住居跡出土遺物（２）……18
第12図　３号住居跡出土遺物（３）……19
第13図　４号住居跡（１）……20
第14図　４号住居跡(2)・出土遺物（１）……21
第15図　４号住居跡出土遺物（２）……22
第16図　５号住居跡……23
第17図　５号住居跡出土遺物（１）……24
第18図　５号住居跡出土遺物（２）……25
第19図　６号住居跡（１）……26
第20図　６号住居跡（２）・出土遺物 ……27
第21図　７号住居跡（１）……29
第22図　７号住居跡（２）・出土遺物（１）……30
第23図　７号住居跡出土遺物（２）……31
第24図　８号住居跡・出土遺物……33
第25図　９号住居跡……34
第26図　９号住居跡出土遺物……35
第27図　10号住居跡（１）……35
第28図　10号住居跡（２）……36
第29図　10号住居跡（３）・出土遺物 ……37
第30図　11号住居跡・出土遺物……39
第31図　12号住居跡（１）……40
第32図　12号住居跡（２）・出土遺物 ……41
第33図　13号住居跡・出土遺物……43
第34図　14号住居跡（１）……44
第35図　14号住居跡（２）・出土遺物（１）……45
第36図　14号住居跡出土遺物（２）……46
第37図　15号住居跡……47
第38図　15号住居跡出土遺物……48
第39図　16号住居跡・出土遺物（１）……49
第40図　16号住居跡出土遺物（２）……50
第41図　１号竪穴状遺構……52
第42図　２号竪穴状遺構……52
第43図　３号竪穴状遺構・出土遺物……53
第44図　１・７・８号溝 ……55.56
第45図　１号溝出土遺物……57
第46図　２・３号溝……58
第47図　５号溝出土遺物……59
第48図　４・５号溝……60
第49図　６号溝……61
第50図　９・10号溝 ……63.64
第51図　９号溝出土遺物（１）……65
第52図　９号溝出土遺物（２）……66
第53図　９号溝出土遺物（３）……67
第54図　11号溝……69
第55図　１号井戸・出土遺物……70
第56図　２・３号井戸……71
第57図　１号土坑・出土遺物……72
第58図　２～６・８号土坑……73
第59図　９～17号土坑……74
第60図　18～24・26号土坑……75
第61図　28～35号土坑……76
第62図　36～42・45・51号土坑……77
第63図　43号土坑・出土遺物……78
第64図　46～50号土坑……80
第65図　埋没谷・出土遺物 ……81.82
第66図　支用１号(南端調査部分) ……83.84
第67図　第１小穴群……85
第68図　第２小穴群……86
第69図　北調査区……87

第70図　北１号住居跡・出土遺物……88
第71図　北３号住居跡（１）……89
第72図　北３号住居跡（２）……90
第73図　北３号住居跡出土遺物……91
第74図　北４・５号住居跡……93
第75図　北５号住居跡出土遺物（１）……94
第76図　北５号住居跡出土遺物（２）……95
第77図　北１・２号溝……97
第78図　北２号溝出土遺物……98
第79図　北１・２号土坑……98
第80図　北３～６号土坑・北１・２・６号
土坑出土遺物……99
第81図　居館とほぼ同時期の遺構配置図 ……102
第82図　居館の堀と柵（１）　……103.104
第83図　居館の堀と柵（２）　……105.106
第84図　居館の堀と柵（全体）　……107.108
第85図　張り出し部分詳細図 ……109
第86図　柵北端部詳細図 ……109
第87図　居館の堀と９号溝出土遺物分布 …111.112
第88図　居館の堀と出土遺物分布（１）　…113.114
第89図　居館の堀と出土遺物分布（２）　…115.116
第90図　居館の堀出土遺物（１）　……117
第91図　居館の堀出土遺物（２）　……118
第92図　居館の堀出土遺物（３）　……119
第93図　居館の堀出土遺物（４）　……120
第94図　居館の堀出土遺物（５）　……121
第95図　居館の堀出土遺物（６）　……122
第96図　居館の堀出土遺物（７）　……123
第97図　遺構外出土遺物 ……128
第98図　荒砥地域における古墳時代の
土器群（１）　……132
第99図　荒砥地域における古墳時代の
土器群（２）　……133
第100図　荒砥地域における古墳時代の
土器群（３）……134
第101図　荒砥地域における古墳時代の
土器群（４）……135
第102図　荒砥地域における古墳時代の
土器群（５）……136
第103図　荒砥地域における古墳時代の
土器群（６）……137
第104図　荒砥地域における古墳時代の
土器群（７）……138
第105図　荒砥地域における古墳時代の
土器群（８）……139
第106図　荒砥地域における５世紀代の
３居館全体図……143
第107図　３居館に関連した遺構出土遺物…146.147
第108図　３居館の平面規模の比較
（推定復元図による）……149
付図１．荒砥荒子遺跡全体図
付図２．荒砥荒子遺跡居館の全体図
（航空写真測量図）
付図３．荒砥荒子遺跡居館の堀と９号溝出土遺物分
布図

写真図版目次

巻頭カラー　居館の全景（上空から）
巻頭カラー　荒砥荒子遺跡と赤城南面の航空写真（南上空から）
巻頭カラー　居館周辺を含む全景（北上空から）
巻頭カラー　居館周辺を含む全景（西上空から）
巻頭カラー　居館全景（東上空から）
巻頭カラー　居館全景（北西上空から）
巻頭カラー　荒砥荒子遺跡の現状
巻頭カラー　1号溝出土の青磁
PL. 1　1号住居跡全景（西から）
1号住居跡カマド（西から）
2号住居跡全景（西から）
2号住居跡カマド（西から）
3号住居跡全景（西から）
3号住居跡遺物出土状況（西から）
3号住居跡カマド（西から）
4号住居跡全景（西から）
PL. 2　4号住居跡遺物除去後全景（南から）
4号住居跡カマド（南から）
5号住居跡全景（西から）
5号住居跡カマド（西から）
6号住居跡全景（西から）
6号住居跡カマド付近（西から）
6号住居跡カマド（西から）
7号住居跡全景（西から）
PL. 3　7号住居跡カマド付近（西から）
7号住居跡カマド解体状況1（西から）
7号住居跡カマド解体状況2（南から）
8号住居跡全景（西から）
9号住居跡全景（西から）
10号住居跡全景（西から）
10号住居跡カマド（西から）
10号住居跡床下セクション（西から）
PL. 4　10号住居跡床下全景（西から）
11号住居跡全景（南から）
11号住居跡遺物出土状況（東から）
12号住居跡全景（南から）
12号住居跡カマド（西から）
12号住居跡カマド解体状況（西から）
13号住居跡全景（東から）
13号住居跡遺物出土状況（北から）
PL. 5　14号住居跡全景（北から）
15号住居跡全景（南から）
15号住居跡遺物出土状況（南から）
16号住居跡全景（西から）
16号住居跡遺物出土状況（上から）
16号住居跡カマド（西から）
16号住居跡カマド解体状況（西から）
1号竪穴状遺構（西から）
PL. 6　①2号竪穴状遺構（北から）
②1号溝（北から）
③2・3号溝（北から）
④4・5号溝（北から）
⑤4・5号溝（東から）
⑥6号溝（南から）
PL. 7　7号溝（北東から）
7号溝（南東から）
9号溝（北から）
10号溝（北から）
9・10号溝合流付近（北西から）
9・10号溝南側（北西から）
9・10号溝合流付近セクション（南東から）
9・10号溝と発掘風景（北東から）
PL. 8　9・10号溝（航空写真）
PL. 9　11号溝全景（上から）
11号溝セクション（東から）
1号井戸全景（西から）
1号井戸セクション（北から）
2号井戸セクション（南から）
3号井戸全景（南から）

3号井戸セクション（南から）
PL.10 1号土坑全景（北から）
1号土坑セクション（北から）
2号土坑全景（南から）
2号土坑セクション（南から）
3号土坑全景（南から）
3号土坑セクション（南から）
4号土坑全景（南から）
5号土坑全景（北から）
PL.11 6号土坑全景（東から）
8号土坑全景（南から）
9号土坑全景（西から）
10・11号土坑全景（東から）
10・11号土坑全景（南から）
12号土坑全景（西から）
13号土坑全景（南から）
13号土坑セクション（南から）
PL.12 14・15・16・17号土坑全景（北から）
18号土坑全景（北東から）
18号土坑セクション（南から）
19号土坑全景（東から）
20号土坑全景（東から）
PL.13 21号土坑全景（東から）
22号土坑全景（南から）
23号土坑全景（西から）
23号土坑セクション（南から）
24号土坑全景（東から）
24号土坑セクション（北から）
26号土坑全景（南から）
26号土坑セクション（南から）
PL.14 28・29号土坑全景（西から）
30号土坑全景（東から）
31号土坑全景（東から）
32号土坑全景（西から）
33号土坑全景（西から）
33号土坑セクション（南から）
34・35号土坑全景（南から）
36号土坑全景（南から）
PL.15 37号土坑全景（西から）
39号土坑全景（西から）
40号土坑全景（北西から）
41号土坑全景（西から）
43号土坑全景（北西から）
45号土坑全景（南東から）
51号土坑全景（東から）
46～50号土坑全景（南から）
PL.16 埋没谷全景（上空から）
居館と埋没谷（東上空から）
PL.17 埋没谷北側調査状況（北西上空から）
埋没谷（北東から）
PL.18 ①埋没谷除去後（北東から）
②埋没谷南北セクション（西から）
③埋没谷下面セクション（北西から）
④埋没谷南北トレンチ（南から）
PL.19 ①埋没谷南北トレンチ（北から）
②埋没谷南北トレンチ北側セクション（南西から）
③埋没谷南北トレンチ中央部セクション（南西から）
④埋没谷南北トレンチ中央部セクション（北西から）
⑤埋没谷南北トレンチ（南から）
⑥第1小穴群（上空から）
⑦第2小穴群（北から）
PL.20 ①支用1号の東側全景（北東から）
②支用1号の東側全景（北西から）
③支用1号の西側（北東から）
④支用1号の西側（北西から）

荒砥荒子遺跡北調査区
PL.21 北調査区を含む遺跡全景（北上空から）
北調査区全景（北上空から）
PL.22 北調査区全景（南から）
北調査区全景（北から）
北調査区全景（北から）
北調査区北側部分（南から）

北１号住居跡全景（西から）
北１号住居跡北東部分（西から）
北１号住居跡北東部分（北東から）
北１号住居跡貯蔵穴（北から）
PL.23 北３号住居跡全景（西から）
北３号住居跡カマド周辺（西から）
北３号住居跡カマド付近（南から）
北３号住居跡貯蔵穴付近（煙道部方向から）
北３号住居跡カマド（西から）
北３号住居跡床面遺物除去後全景（西から）
北４・５号住居跡全景（西から）
北４・５号住居跡全景（東から）
PL.24 北４・５号住居跡全景（北から）
北５号住居跡カマド付近（南から）
北５号住居跡カマド付近（煙道部方向から）
北５号住居跡カマド付近（北から）
北５号住居跡カマド（西から）
北５号住居跡カマド（南から）
北５号住居跡カマド遺物除去後（西から）
北５号住居跡カマド遺物除去後（南から）
PL.25 北５号住居跡カマド解体状況（南から）
北１号溝（西から）
北２号溝（南から）
北１・２号土坑（南から）
北３号土坑（南から）
北４号土坑（南から）
北５号土坑（南から）
北６号土坑（西から）
PL.26 ①居館の堀張り出し部分（南から）
②居館の堀東西部分（東から）
③居館の堀東西～南北部分（東から）
PL.27 ①居館の堀南北部分遺物出土状況（北から）
②居館の堀南北部分遺物出土状況（南から）
③居館の堀南北部分（南東から）
④居館の堀南北部分（南東から）
⑤居館の堀南北部分北端（東から）
PL.28 ①居館の堀遺物出土状況（北から）
②居館の堀遺物出土状況（北から）
③居館の堀遺物出土状況（北西から）
④居館の堀遺物出土状況（北から）
⑤居館の堀遺物出土状況（東から）
⑥居館の堀遺物出土状況（北西から）
PL.29 埋戻状況
埋戻状況
埋戻状況
埋戻状況
埋戻状況
埋戻状況
荒砥荒子遺跡の現状
荒砥荒子遺跡の現状
出土土器
PL.30 １・２・３号住居跡
PL.31 ３・４・５号住居跡
PL.32 ５・６・７号住居跡
PL.33 ７～12号住居跡
PL.34 12・13・14号住居跡
PL.35 15・16号住居跡
PL.36 ９号溝
PL.37 ９号溝・北６号土坑・43号土坑・埋没谷・遺構外
PL.38 北１・北３・北５号住居跡
PL.39 居館の堀（１）
PL.40 居館の堀（２）
PL.41 居館の堀（３）
PL.42 居館の堀（４）
PL.43 遺跡内出土の石製品

第１章　調査に至る経過

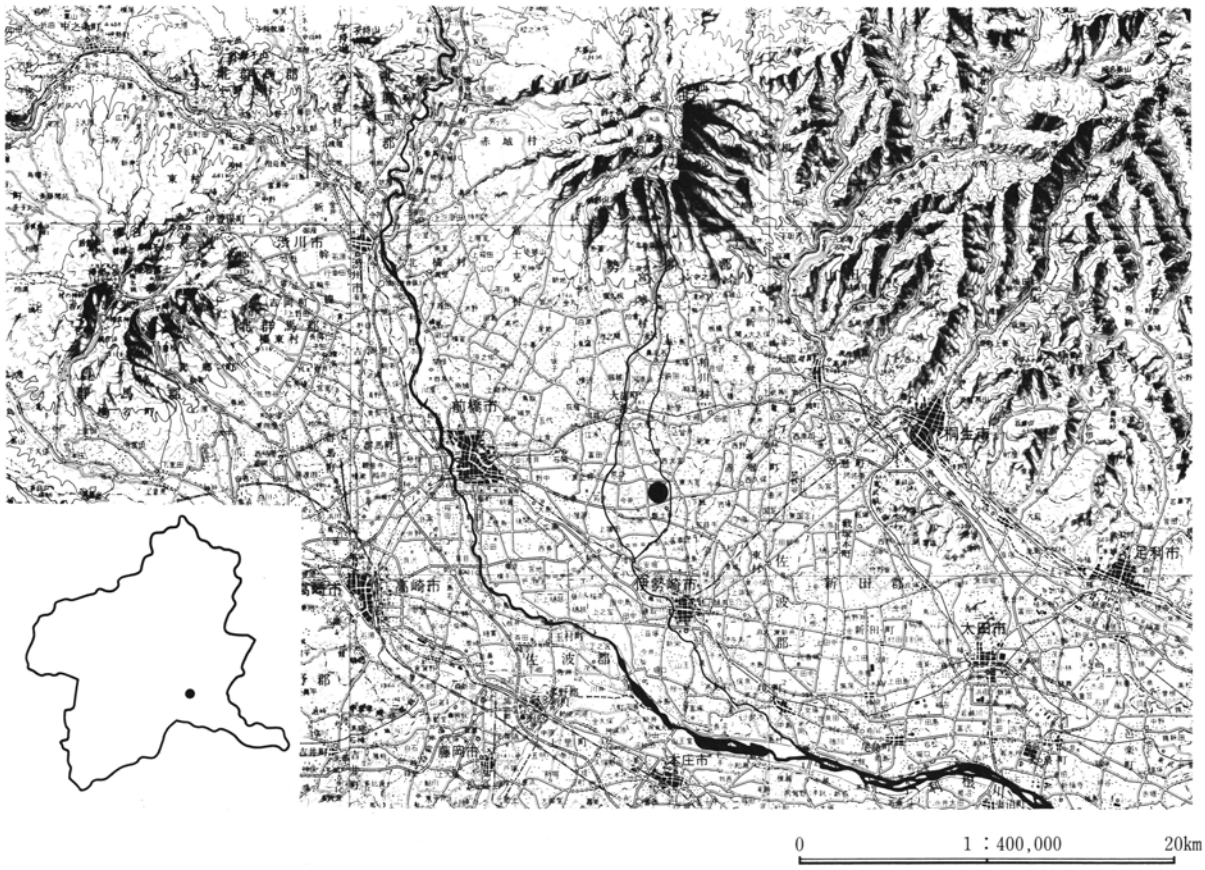
第１節　県営圃場整備事業と発掘調査の経過

荒砥荒子遺跡は県営圃場整備事業荒砥北部地区に伴って発掘調査された遺跡群の１つである。この県営圃場整備事業は昭和49年から56年にかけて荒砥南部地区、昭和56年から平成３年にかけて荒砥北部で実施され、工事対象面積は南部900ha、北部821haに及んだ。この大規模な県営圃場整備事業が実施されたのは、群馬県前橋市の東端部の旧荒砥村域で、現在の笂井町・今井町・二之宮町・飯土井町・東大室町・荒子町・下大屋町にまたがる広大な地域である。

この地域は、赤城山南麓の丘陵性台地の末端あたり、山麓を流下する荒砥川と神沢川にほぼ挟まれた地域である。これらの主要河川以外にも山麓を開析する帯状沖積地が発達していて、起伏に富んだ地形である。このような地域の中で実施する圃場整備事業では、土砂の切り盛りが著しく、多量の土砂を移動する工事計画となった。

しかし、この地域には、群馬県内でも有数の大型前方後円墳が集中する大室古墳群をはじめとして、原始・古代の多くの遺跡が分布する。したがって、圃場整備事業が開始されるにあたっては、埋蔵文化財の保護が大きな課題となった。そこで、群馬県農政部と群馬県教育委員会は、埋蔵文化財の保護を前提にした協議を行い、工事によって破壊される切り土部分と道水路部分について、事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施することが確認されたのである。

発掘調査は、昭和49年から52年まで県教育委員会の直営で実施されたが、昭和53年７月の（財）群馬



第１図　荒砥荒子遺跡の位置（丸印）

県埋蔵文化財調査事業団の設立に伴って、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を受託することになった。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団は、県農政部の受託を受けて、荒砥南部地区の圃場整備事業が終了する昭和59年度までの７年間に13遺跡を調査した。また、県教育委員会の委託事業として昭和57年から平成４年度までに９冊の発掘調査報告書を刊行した。継続して（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団は、昭和56年度から荒砥北部地区の発掘調査を受託し、昭和59年度まで調査を実施した。相前後して昭和59年度以降の発掘調査は、県教育委員会と荒砥北部遺跡群調査会に引き継がれ、平成３年度で終了した。荒砥北部地区の報告書についても、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が県教育委員会の委託をうけて、平成５年度から整理事業を実施し、平成10年度までに６冊の発掘調査報告書を刊行している。本年度はその第７年次にあたる。

荒砥荒子遺跡は昭和58年２月に試掘調査を、３月から５月まで本調査をおこなっている。昭和57年度は、県営圃場整備事業荒砥北部地区の６工区と７－１工区が事業対象地域であった。この年には荒砥荒子遺跡の他に、荒砥中屋敷遺跡・荒砥下押切遺跡・荒砥舞台西遺跡・荒砥新屋敷遺跡が発掘調査されている。昭和58年度は、県営圃場整備事業荒砥北部地区の４工区と本遺跡の７－１工区が事業対象地域であった。この年には荒砥荒子遺跡の他に宮田遺跡・諏訪遺跡・諏訪西遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・堤東遺跡が（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団と県教育委員会により調査されている。

本書で報告する荒砥荒子遺跡は、古墳時代中期の居館を中心とし、数は少ないが、奈良・平安時代の住居や中世の溝等が調査されている複合集落遺跡である。調査面積は9800㎡である。

県営圃場整備荒砥北部地区における昭和57年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

工　事	遺　跡　名	発掘分担	発　掘　担　当　者	面　積	期　　間
6　区	荒砥上ノ坊遺跡 荒砥下押切遺跡 (低地部)	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・小島敦子・斉藤利昭 岩崎泰一	42,000㎡	昭和57年７月１日～昭和58年３月25日
6　区	荒砥中屋敷Ⅰ遺跡 荒砥下押切Ⅰ遺跡 舞台西遺跡	群馬県教育委員会文化財保護課	神保侑史・秋池　武・西田健彦 松田　猛	6,900㎡	昭和57年12月６日～昭和57年12月23日
6　区	荒砥中屋敷Ⅱ遺跡 荒砥下押切Ⅱ遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	相京建史・中沢　悟・菊池　実	9,245㎡	昭和57年12月13日～昭和58年２月18日
7-１区	荒砥荒子遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・相京建史・中沢　悟 小島敦子・菊池　実・斉藤利昭	9,800㎡ 次年度含	昭和58年３月22日～昭和58年３月31日

県営圃場整備荒砥北部地区における昭和58年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

工　事	遺　跡　名	発掘分担	発　掘　担　当　者	面　積	期　　間
7-１区	荒砥荒子遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・相京建史・中沢　悟 小島敦子・菊池　実・斉藤利昭	9,800㎡ 前年度含	昭和58年４月１日～昭和58年５月10日
4　区	荒砥宮田遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・藤巻幸夫・小島敦子 徳江秀夫・斉藤利昭・細野政夫 下城　正・相京建史	20,265㎡	昭和58年８月23日～昭和59年３月24日
4　区	荒砥諏訪西遺跡 荒砥諏訪遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・藤巻幸夫・小島敦子 徳江秀夫・斉藤利昭	38,550㎡	昭和58年８月23日～昭和59年３月24日
4　区	荒砥諏訪西遺跡 荒砥諏訪遺跡	群馬県教育委員会文化財保護課	井上唯夫・徳江　紀・神保侑史 西田健彦・松田　猛・調査補助員松村和夫	9,300㎡	昭和58年12月～昭和59年２月
4　区	柳久保遺跡	群馬県教育委員会文化財保護課	徳江　紀・神保侑史・西田健彦 松田　猛	1,200㎡	昭和58年12月
4　区	川籠皆戸遺跡 堤東遺跡	群馬県教育委員会文化財保護課	徳江　紀・神保侑史・西田健彦 松田　猛・調査補助員松村和夫	10,500㎡	昭和59年１月～昭和59年２月

第２節　調査の経過

昭和58年２月県教育委員会により、7－1工区の県営圃場整備事業に先立ち試掘調査が実施された。

その結果堀に囲まれた居館の存在があきらかとなった。居館地域の大部分を（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が、そして居館北の道水路部分（本報告書では北調査区と呼称している地域）を、県教育委員会が調査を行うこととなった。

３月22日から調査を始める。県教育委員会により表土の多くは除去され、居館・住居・溝・谷等の存在も明らかにされていたので、それらの調査に入る。

３月26日　１～３号住居全景写真撮影。居館・溝・堀の調査。

３月28日　（４月に桑を植える都合で居館以外の大部分を４月中旬までに終了させて欲しいとの申し入れがある。）居館の堀の北端部分の調査。

３月29日　居館内の１～５号住居実測遺物とり上げ終了。支道４号・支道５号・支道７号の部分から多くの住居と溝の存在が確認された。

３月30～４月１日　重機により、居館東部分の表土除去を進める。3月30日には、新聞記者の取材あり。

４月２～４日　居館の東と南堀完掘、東堀と重複して10号溝が掘られており、重複関係により居館の堀より古いことを確認。居館の北西部分を掘込んでいる谷を重機を用いて掘り始める。支排１号部分の１・７・８号溝と10号住居の調査。

４月５～７日　居館の東側９号溝の調査を開始する。支排１号１・７・８号溝と５・９・10号住居の調査終了。支道４号６・７・８号住居、２・３・４・５・６号溝の調査終了。居館の北西部分の谷のＢ軽石を除去しその面で広げる。水路は存在したが、畔等はなく水田としては使用されていない事が明らかになる。大きな谷のために全面は発掘できないので、居館に接した部分のみを完掘し、溝の幅と位置はトレンチ調査で確認する。支道５号北の14～17号土坑の調査。

４月８～９日　居館内の柵列ほぼ掘り終わる。西側の柵列はさらに北の谷まで延びていることを確認。１号井戸の調査、13号住居調査終了。

４月11～13日　支道5号平面図終了。9・10号溝全景写真、2～11・19～26号土坑写真と実測。居館内に多くの小穴があり、掘立柱建物跡の存在を確認するため、形や埋土の違いから調べるが、建物となるものは存在していないことがわかる。２・３号井戸の調査。

４月14～16日　１号竪穴住居、11・12・15号住居調査、９・10号溝実測と遺物の取り上げ。14号住居調査終了。居館の調査に伴い、現地説明会開催を計画。

４月18～20日　18日より県教育委員会が居館北にできる道水路部分（本報告書では北調査区と呼称している地域）の調査に入る。居館の堀全景写真。居館１/200全体図終了。２・３号井戸の調査終了。谷部分Ｂ軽石除去。新聞記者の取材あり。

４月21～23日　12・14・16号住居調査終了。２・３号竪穴状遺構の調査。23日午前航空測量、午後現地説明会見学者287名。

４月25～27日　25日午前航空写真撮影。居館の堀１/40平面図終了、１/20遺物出土状況図と遺物取り上げ終了。柵列の写真、12・16号住居の調査終了。谷の調査終了。25日にて一部を残して作業員の雇用を終了。調査担当は６名から３名となる。新潟大学・国学院大学・東大資料編纂所・文化庁・前橋市役所公報課・荒子小学校の先生と５～６年生100名・群馬町の父兄と小学生等の見学者が来る。

４月28～30日　28日に全ての図面終了。保存のために砂を居館内と居館外５ｍまでの範囲に厚さ５㎝ほど埋めて遺構面を保護する。金古小学校の先生・新聞記者等の見学者30名近く見学有り。

５月１～３日　１日砂での埋め戻し終了。引き続き土で谷部分の埋め戻しにはいる。調査事務所の撤去を急いでほしいとの申し入れにより、計画より２日速めて引越（２日）と事務所の撤去（３日）以後図面と写真の整理は事業団で行う。南山大学・橿原考古学研究所から見学に訪れる（２日）。

５月４～10日　土中保存のため掘削面の高さ問題協議。掘削の高さを当初計画より高くすることで合意。

第３節　調査の方法

(1)　遺跡名の選定

発掘調査対象地区は、県営圃場整備事業以前の番地で、前橋市荒子町諏訪370、東原373・375・376番地を中心としている。居館の中心は東原375・376番地にあたる。遺跡名は、遺跡のある旧村名である「荒砥（あらと）」に、町名である「荒子（あらこ）」を付して「荒砥荒子遺跡」とした。

(2)　グリッドの設定

調査の実施にあたっては、調査区全体をカバーできるように、100mの大グリッドを18区画に設定し、その中を５×５mの小グリッドとした。グリッドの呼称は100mの大グリッドを独立した単位とし、北西コーナーの交点をA-１とし東西方向に１から20まで、南北方向をAからTまでとし、18S—19のように呼称した。

大グリッド設定の基本線は調査区中央を南北に走る水路（県営圃場整備事業では支用１号と呼称している）の西ラインをもって、南北方向の基本線とした。東西方向は支用１号と直行する水路（県営圃場整備事業では支用１—２号と呼称している）の中央ラインをもって東西方向の基本線とした。北西の100m大グリッドから東西方向に１～18まで決めた。(第２図参照)

(3)　遺構の調査

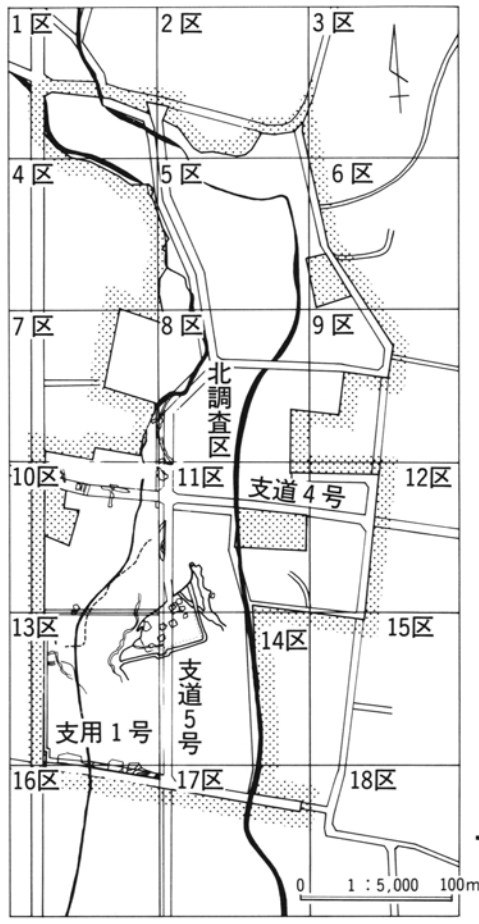
重機による表土除去後、遺構の確認調査にはいった。各遺構の調査にあたっては土層観察用のベルトをのこし実施し、実測はグリッド軸にそった平板測量で行った。基準測量は工事用水準杭を用いた。

(4)　遺物の取り上げ方

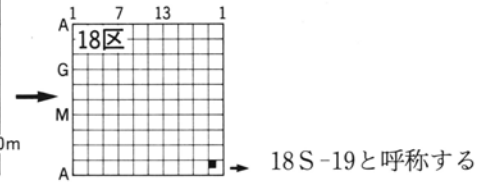
出土遺物の中で遺構に伴わないものはグリッド遺物として扱った。遺構に伴うもので床面よりはるかに高く、小さな破片は覆土として取り上げた。それ以外の遺物は平面・垂直位置・写真撮影等の記録をおこなった。

(5)　写真撮影

遺構写真は35㎜白黒フィルムとカラースライドフィルムおよび６×９白黒フィルムを用いた地上撮影を実施した。



第２図　発掘調査区（圃場整備７-１工区）



第３図　グリッド配置図

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

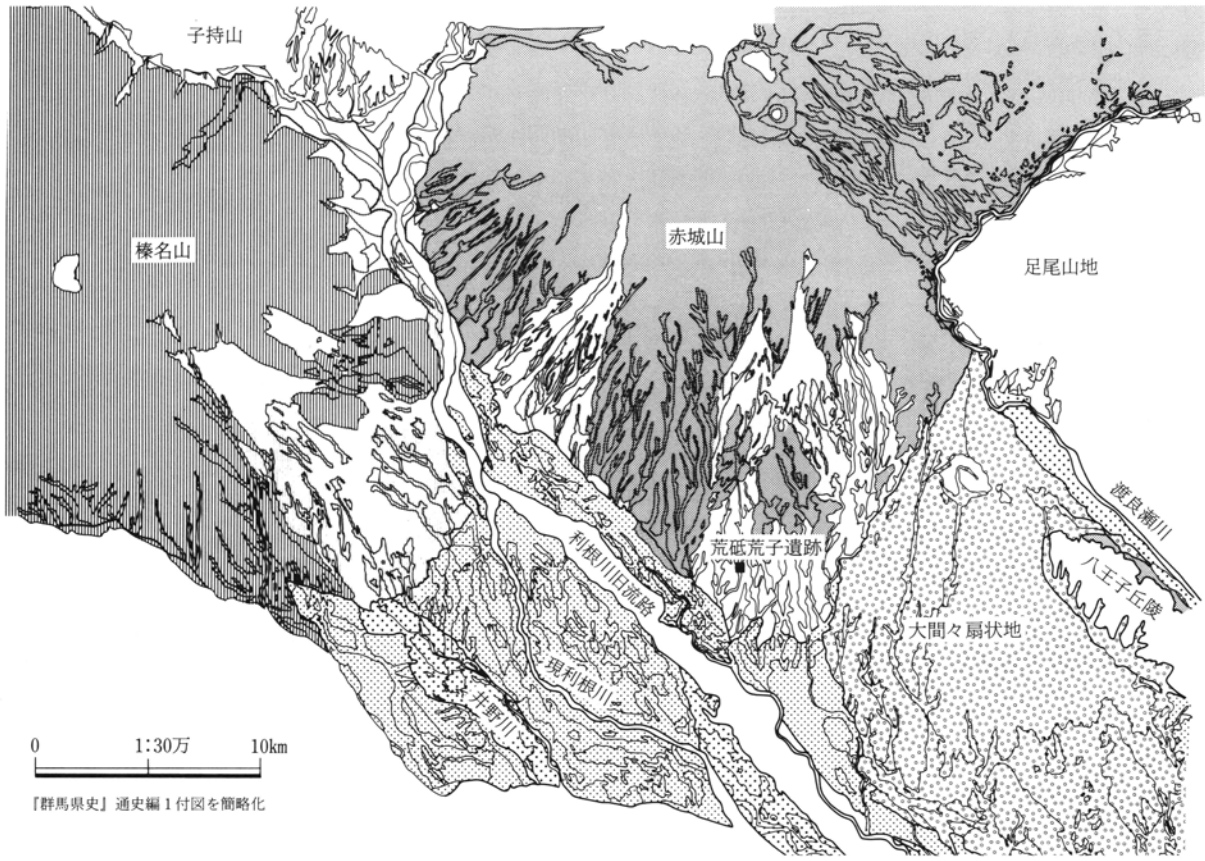
本遺跡は前橋市の市街地から国道50号線を東へ約10km、二之宮十字路の北約600mの地点に所在する。

谷頭を遺跡の北約700mに持つ小さな川である江竜川の右岸で、標高は100～105mと緩やかな斜面に立地する。

遺跡（第３図）は、複合成層火山である赤城山（1828m）の南に広く延びる裾野の末端部に位置している。山麓端部は河川の侵食が著しく、山体の北側や西側には河岸段丘が形成され、山体の南西麓や南東麓は直線的な崖線地形が発達している。また、山体自体も河川や湧水に侵食され、北麓や西麓では大規模なＶ字状の深い谷と広大な裾野地形が発達する。

一方南麓では標高500m地帯で山地帯から丘陵性台地への地形変換点がみられ、200mより下位の地域は低台地化している。大小の河川や湧水が豊富で、南北に長い沖積地と丘陵性の台地が交互に入り組む、複雑な地形を呈している。また、その末端は旧利根川の侵食による崖線が形成され、利根川の氾濫源によって南側の前橋台地と隔絶されている。

遺跡周辺に流れる主な河川は、西から荒砥川・宮川・江竜川・神沢川・桂川等である。このうち荒砥川・神沢川・桂川は標高200m以上に水源を持つ流域の長い河川である。一方、宮川は標高150m以下、江竜川は標高120m以下に水源を持つ、流域の短い小河川である。



第４図　群馬県中央部の地形と荒砥荒子遺跡

次に荒砥遺跡周辺の地形と土地の利用状況について調べてみる。第４・５図に第一軍管地方迅速図の大胡町（明治18年）及び伊勢崎町（明治29年）を掲載した。その地図を急傾斜地・緩傾斜地・畑・水田別に色分けしてみる。最も広い面積となっているのは、緑色で塗分けた緩傾斜地である。次に多いのが畑のピンク色と水田の青色である。急傾斜地は多田山･乾谷沼周辺であり、狭い範囲に限定されている。

ここで注目されるのは、多くの平地があり、小さな河川が多く存在しているにもかかわらず、平地において水田ではなく畑の面積が特に多いことである。荒砥荒子遺跡周辺の平地では大部分水田ではなくて畑となっている。

現在では、大正用水や群馬用水の整備により水の確保が出来るようになっている。そのために明治時代に畑として使われていた耕地の一部は水田として使われている。しかしこれらの大きな用水が完成しさらに県営圃場整備事業が終了している今日においても、水田の面積は著しい増加をしていない。このようにこの地域では水田耕作に適さない地域である。

第２節　歴史的環境

荒砥周辺の歴史的環境については、これまで刊行されてきた多くの報告書により詳しく紹介されている。特に小島敦子氏はこの地域を詳しく研究しその成果を紹介している[註]。

ここではこの遺跡が古墳時代の居館跡が特に注目されるので、周辺遺跡を古墳時代を主とし、発掘調査され時期の明らかな住居を中心に、発掘調査されている方形周溝墓と古墳を少し含めた。

周辺遺跡の主な範囲は、西を荒砥川付近、南を荒砥川と神沢川が合流する付近から北、東は桂川付近まで、北は上大屋付近までとした東西南北約7k 四方の範囲である。

88遺跡の中から、古墳時代の住居・方形周溝墓・古墳の数を４世紀から７世紀まで約50年単位で調べてみた。その結果を約100年単位にまとめて、先に触れた第４図に色と形を変えて表現した。個々の遺跡では地域の様子がわからないので、地域全体を理解するために、宮川上流・下流、江竜川上流・下流、神沢川上流の５地域に分け遺跡の様子を探る。

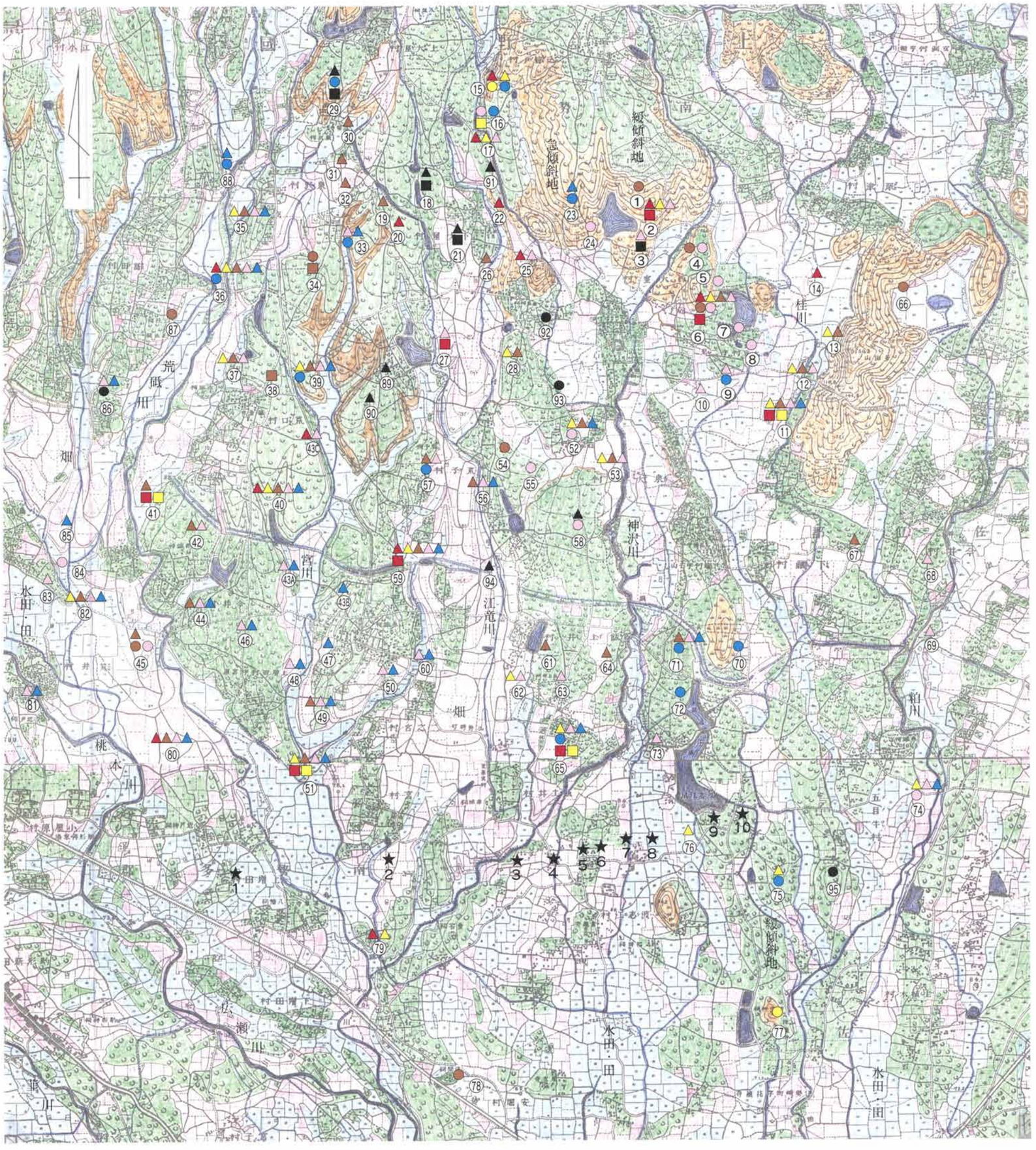
古墳時代以前の弥生時代には、現在までに中期後半に次の５遺跡から11軒確認されている（鶴が谷遺跡群１軒・頭無遺跡１軒・荒砥島原遺跡２軒・荒砥北三木堂遺跡５軒･荒砥前原遺跡２軒）。集落規模は小さく、これらの集落はその後継続して後期までつながることはないようである。

古墳時代初頭段階になると、弥生時代の櫛描文様を持つ樽式土器と縄文や口縁外面に段を持つ施文に特色のある赤井戸式土器に小型高坏や器台を持つ集落が多く登場してくる(内堀遺跡等)。さらに、北陸系の土器を多く持つ遺跡（上ノ坊遺跡）や南関東系の特色を持つ集落（荒砥前原遺跡）が登場してくるようである。弥生時代後期に人がほとんど住んでいなかったこの地域に一気に100軒近くの住居が展開するようになる。その後櫛描文・縄文・南関東系・北陸系の特色が薄れた段階でも100軒近くの住居が継続する。古墳時代前期後半に少し住居数が減少するようであるが、中期以前の段階までを含めた古墳時代前期では、500軒近い住居が造られ続ける。それら前期の集落は先の河川上流の地域が特に多い。

中期になると上流地域に多く展開していた集落が減少し、宮川や江竜川下流の地域に集落の増加が見られる。多くの遺跡で集落が造られるようになり、居住範囲が拡大してゆく状況を示している。この傾向は後期の６・７世紀になるとさらに多くなり、下流地域が荒砥地区の居住地域中心地となってゆく。

古墳は４世紀段階にはなく５世紀中頃に今井神社古墳が造られ、その後円墳が７世紀後半段階まで継続的に造られてゆく。

註　小島敦子「荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995



第一軍管地方迅速測図「大胡町」「伊勢崎町」（明治18年測量）２万分の１使用

0　1：30,000　1,000m

凡例

住　居	▲ 3世紀	△ 4世紀	▲ 5世紀	△ 6世紀	▲ 7世紀	▲ 時期別に分けられない
古　墳		○ 4世紀	● 5世紀	○ 6世紀	● 7世紀	● 時期別に分けられない
方形周溝墓	■ 3世紀	□ 4世紀	■ 時期別に分けられない			

★　北関東自動車道建設に伴い調査された遺跡

第５図　荒砥地域における地形と古墳時代の遺跡分布図

荒砥地区住居時期別一覧

	遺　跡　名	3世紀後半	3～4初頭	4世紀前半	4世紀後半	5世紀前半	5世紀後半	6世紀前半	6世紀後半	7世紀前半	7世紀後半	計	備　考（時期不明及び未報告住居数）	文献	地域
2	西大室遺跡群	2	1	1	1				3			8		2	神沢川上流域
3	北山遺跡							1	5			6		3	
6	内堀遺跡群	46	13	5	11	3	7	4	4			93		5	
9	荒砥上諏訪遺跡							2				2		8	
10	大室小学校校庭・農場遺跡							2				2		9	
11	荒砥上川久保遺跡			2			4	1			1	8		10	
12	荒砥五反田遺跡			1	1		4		1			7		11	
13	梅木遺跡			1	5	6	1					13	西大室遺跡群梅の木地区を含む	12	
14	久保皆戸遺跡		1									1		3	
15	熊の穴、熊の穴Ⅱ遺跡		5	17	4							26		13	江竜川上流域
17	大道遺跡（横俵）		14	18	3			31	7			73		15	
18	東原Ａ、Ｂ遺跡											0	古墳住居２軒、前期主体住居35軒	16	
19	東原西遺跡											0	和泉期住居２軒	17	
20	村主遺跡		1									1	古墳時代前期住居31軒、後期住居５軒	18	
21	中山Ａ、Ｂ遺跡											0	古墳前期住居20軒、後期２軒	19	
22	阿弥陀井戸道上遺跡		1									1		20	
23	小稲荷遺跡										3	3	古墳時代前期61軒、後期10軒	21	
25	明神山遺跡		1					1				2	石田川期住居34、鬼高期住居12軒	20	
26	北田下遺跡											0	和泉期住居１軒	18	
27	堤東遺跡								1			1		22	
28	下境Ⅰ遺跡			1	1	1						3		23	
29	谷津遺跡											0	鬼高期の住居７軒	24	宮川上流域
30	寺東遺跡											0	和泉期の住居３軒	17	
31	寺前遺跡											0	和泉期の住居４軒	17	
32	東前田遺跡											0	和泉期住居３軒、鬼高期住居１軒	17	
33	向原遺跡								2	1		3		25	
35	丸山遺跡			4	9	13	2		2	9	2	41	古墳時代の住居60軒以上	26	
36	北原遺跡		5	9	4	5	7	1	2	14	10	57		26	
37	諏訪西遺跡			4		3		2				9	諏訪西Ⅱ遺跡に前期49軒・後期10軒	27	
39	柳久保遺跡Ⅰ.Ⅵ.Ⅶ				11	14		1	2	7	9	44		28	
40	鶴谷遺跡群		2	1		5	2		9	1	2	22	古墳時代住居94軒	29	宮川下流域
41	荒砥北原遺跡						1					1		30	
42	荒砥北三木堂遺跡					4	48	3				55		31	
43	荒砥大日塚遺跡		2					1	6	1	2	12		32	
44	今井道上遺跡						8	5	6	8	2	29		33	
45	今井神社古墳					2						2		30	
46	二之宮谷地遺跡							1	5	2	2	10		34	
47	荒砥宮西遺跡									4	4	8		35	
48	荒砥洗橋遺跡							1	4	4	25	34		35	
49	荒砥天之宮遺跡						13	12	17	7	10	59		36	
50	二之宮宮下東遺跡							9	3	2	1	15		37	
51	荒砥島原遺跡			6		6	6	4	3	5	5	35		38	
52	地田栗Ⅲ遺跡			2			2				1	5		39	江竜川下流域
53	荒砥東原遺跡			1	3		1	4	2			11		40	
55	西大室丸山遺跡											0	５Ｃ中頃の祭祀跡１	42	
56	荒砥荒子遺跡					4			2	5		11		43	
57	荒砥下押切Ⅱ　中屋敷Ⅱ					7	4	5				16		44	
58	天神遺跡											0	古墳時代以降住居12軒	23	
59	荒砥上ノ坊遺跡	12	13	2		2		1	2		13	45		45	
60	荒砥青柳Ⅱ遺跡							1	4	1	4	10		46	
61	中並木遺跡					3						3		47	
62	飯土井上組遺跡			1	1			1				3		48	
63	飯土井中央遺跡								1			1		49	
64	飯土井二本松遺跡		1									1		50	
65	荒砥二之堰遺跡			3	8				3	3		17		51	
67	下触向井遺跡						1					1	鬼高期住居26軒	53	その他の地域
68	今井南原遺跡							1				1	古墳前期36軒・後期以降112軒	54	
69	川上遺跡							1				1	古墳時代前期以降の住居49軒	55	
71	下触牛伏遺跡						1	6	1	2	2	12		57	
73	波志江今宮遺跡							4	3			7		59	
74	五目牛清水田遺跡			2	5			1	2	7	15	32	７Ｃ後半の祭祀跡３	60	
75	蟹沼東古墳群											0	石田川期住居６軒	58	
76	大沼下遺跡											0	石田川期住居４軒	61	
79	荒砥前原遺跡		7	1								8	６Ｃ前半を中心とした祭祀跡１	64	
80	中原遺跡群		2			1	14	2	2	3	1	25		65	
81	笂井中屋敷遺跡								1		1	2		66	
82	今井白山遺跡				1	2	1	1	5	4	4	18		67	
83	笂井八日市遺跡							2				2		68	
85	宮田遺跡										1	1		70	
86	富田遺跡							1	4		3	8		71	
88	稲荷前遺跡										1	1		72	
89	大久保遺跡											0	古墳時代住居３軒	73	
90	頭無遺跡											0	古墳時代住居１軒	73	
91	山王遺跡											0	古墳時代住居25軒	1	
94	元屋敷遺跡											0	古墳時代住居16軒	41	
	合　計	60	69	82	68	81	127	113	114	90	124	928			

遺跡番号は、地図上の番号と一致する。文献番号の文献は本文最後の151ページに掲載した。

荒砥地区古墳時期別一覧

	遺　跡　名	4世紀前半	4世紀後半	5世紀前半	5世紀後半	6世紀前半	6世紀後半	7世紀前半	7世紀後半	計	備　　考	文献
1	七ツ石遺跡				1					1		1
4	上縄引遺跡				3	1				4		3
5	後二子古墳						1			1		4
6	内堀遺跡群				1	1	1			3		5
7	中二子古墳					1				1		6
8	前二子古墳					1				1		7
9	荒砥上諏訪遺跡							1		1		8
15	熊の穴、熊の穴Ⅱ遺跡		1						4	5		13
16	上横俵遺跡					3	1		3	7		14
23	小稲荷遺跡							1	1	2		21
24	大稲荷古墳									0	６Ｃ古墳１基	1
29	谷津遺跡								4	4		24
33	向原遺跡								1	1		25
34	新山遺跡				1					1		17
36	北原遺跡							1		1		26
39	柳久保遺跡群Ⅰ.Ⅵ.Ⅶ								1	1		28
45	今井神社古墳				1		1			2	古墳群を含む	30
52	地田栗Ⅲ遺跡					1				1		39
54	舞台遺跡					1				1		41
55	西大室丸山遺跡						3			3		42
57	荒砥下押切Ⅱ中屋敷Ⅱ								1	1		44
58	天神遺跡						1			1	古墳39基	23
65	荒砥二之堰遺跡							4	5	9		51
66	赤堀茶臼山古墳			1						1		52
70	下触片田遺跡									0	７Ｃ初頭の古墳１基	56
71	下触牛伏遺跡							4	1	5		57
72	宮貝戸古墳群									0	７Ｃ前半の古墳４基	58
74	五目牛清水田遺跡						1			1		60
75	蟹沼東古墳群									0	７Ｃ前半の古墳20基	58
77	華蔵寺裏山古墳									0	４Ｃの古墳１基	62
78	御富士山古墳			1						1		63
84	小島田八日市遺跡						1			1		69
86	富田遺跡									0	５Ｃ～６Ｃ古墳７基、６Ｃ～７Ｃ古墳４基	71
87	おとうか山古墳				1					1		1
88	稲荷前遺跡								1	1		72
92	伊勢山遺跡									0	古墳16基	1
93	富士山遺跡									0	古墳１基	41
95	地蔵山古墳群									0	古墳15基	74
	合　　計	0	1	2	8	9	10	11	22	63		

荒砥地区方形周溝墓時期別一覧

	遺　跡　名	3～4初頭	3世紀後半	4世紀前半	4世紀後半	5世紀前半	計	備考	文献
2	西大室遺跡群	3					3		2
3	北山遺跡						0	古墳時代方形周溝墓12基	3
6	内堀遺跡群	1					1		5
11	荒砥上川久保遺跡		1	1	2		4		10
16	上横俵遺跡			2			2		14
18	東原Ａ、Ｂ遺跡						0	東原Ｂ遺跡周溝墓16基	16
21	中山Ａ、Ｂ遺跡						0	古墳時代周溝墓２基	19
27	堤東遺跡		2				2		22
29	谷津遺跡						0	弥生又は古墳時代の周溝墓2基	24
34	新山遺跡						0	和泉期の方形周溝墓1基	17
38	諏訪遺跡			6	13		19	諏訪Ⅱ前期６基	27
41	荒砥北原遺跡		1		1		2		30
51	荒砥島原遺跡		1	2	1		4		38
59	荒砥上ノ坊遺跡	4					4		45
65	荒砥二之堰遺跡	1	2	2			5		51
83	笂井八日市遺跡						0	５Ｃ後半方形区画遺構１	68
	合　　計	9	7	13	17	0	46		

文献は151ページに掲載

北関東自動車道調査遺跡

番号	遺　跡　名	遺　　構
1	下増田常木遺跡	住７
2	萩原遺跡	古墳～平安の集落
3	波志江中之面遺跡	住27周19
4	波志江西屋敷遺跡	掘立
5	岡屋敷遺跡	住91
6	波志江中屋敷西遺跡	水田
7	波志江中屋敷遺跡	水田
8	波志江中屋敷東遺跡	弥生～古墳住１
9	波志江西宿遺跡	住４掘立２
10	波志江中宿遺跡	住20

第３章　検出した遺構と遺物

第１節　住居跡

１号住居（第６・７図　PL.1・30・43）

位　置　14D・E－１グリッド

重　複　なし

形　状　正方形に近いが北側が東西方向にやや長い形を呈している。規模は東西方向が北壁面付近で4.1m、南壁面付近で3.6m、南北方向は3.7mである。

面　積　13.76m²　　**方　位**　N-10°-W

床　面　遺構確認面から20cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で、竈手前部分と床中央部分が踏み固められて硬化していた。竈手前部分には少量の焼土が残っていた。

埋没土　少量の焼土粒と灰黄褐色砂質土の小ブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

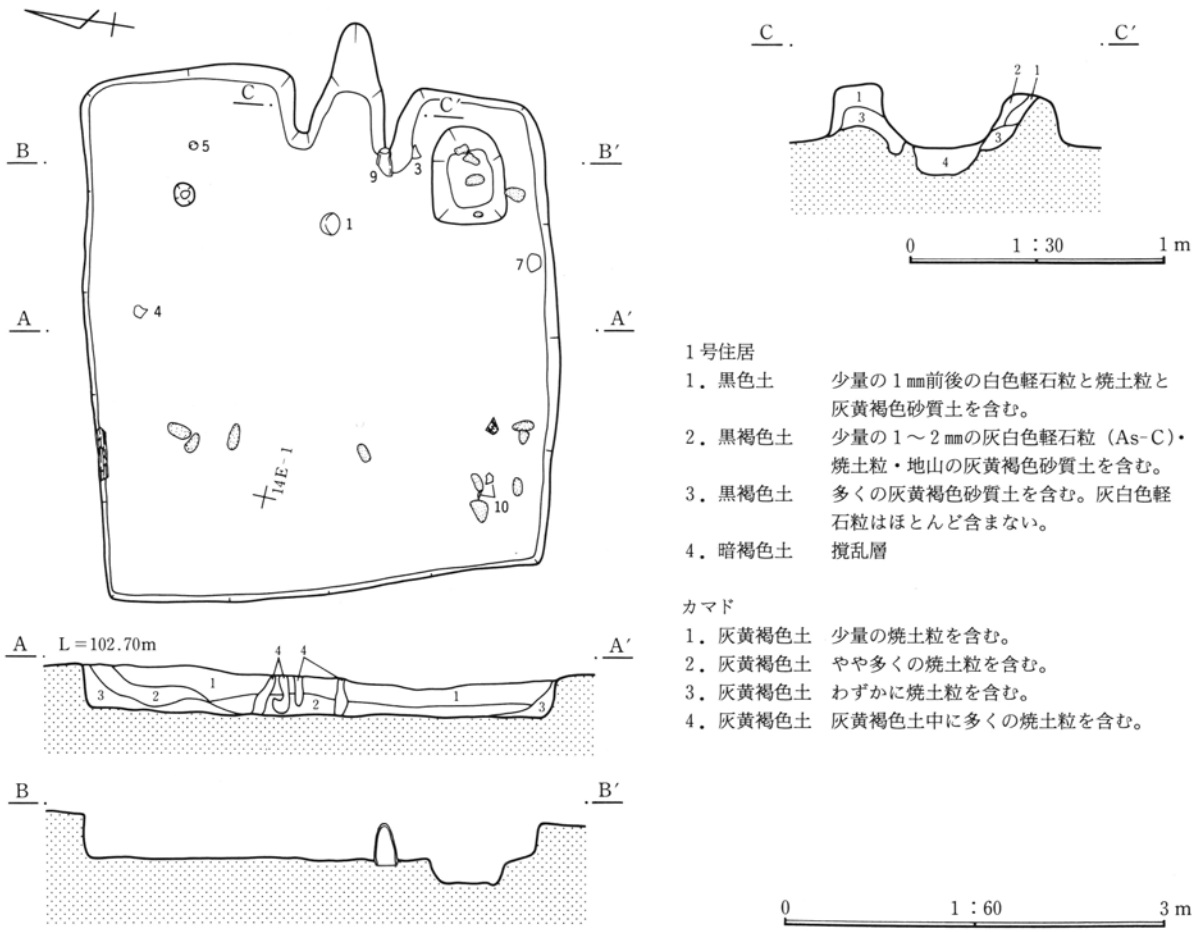
竈　東壁中央からやや南よりに竈が造られていた。両袖と燃焼部の大部分が床面上に位置しており、煙道部が壁面を掘り込んで造られていた。右袖は壁面から75cm、左袖は壁面から58cm残存していた。右袖先端の焚口部分に、完形の甕が口縁部を下にし袖として使用されていた。燃焼部幅50cm、煙道部方向120cmである。燃焼部奥壁部分と煙道部の壁面がよく焼けて焼土化していた。

周　溝　掘られていなかった。

柱　穴　掘られていなかった。

貯蔵穴　竈右側に浅い貯蔵穴が掘られていた。長径72cm、短径55cm、深さ38cmであり、中から４個の石が出土した。

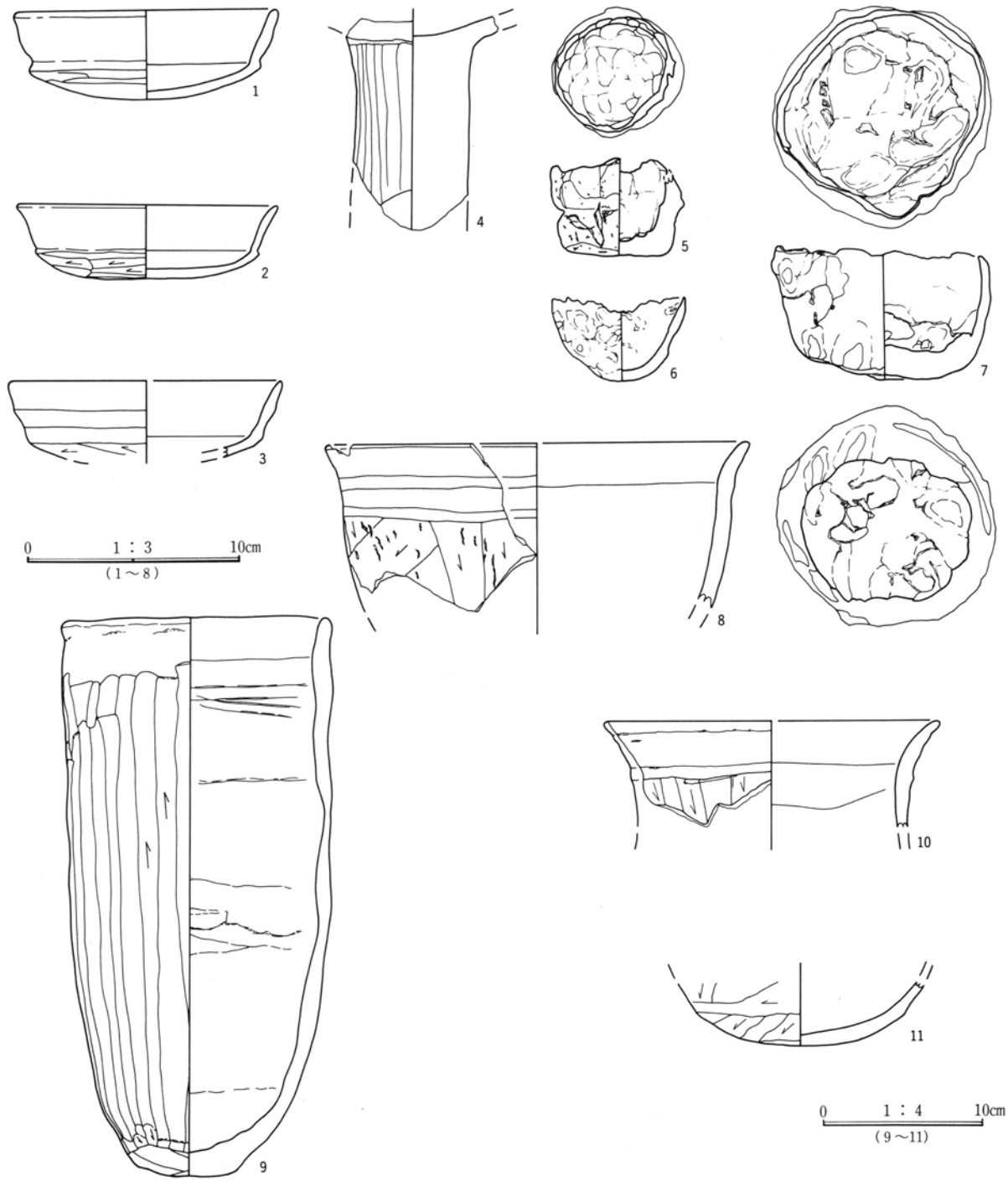
遺　物　竈右袖の芯に使用されていた完形の甕は、器肉が厚く口縁部が外反していない。また３個の手捏ね土器をはじめとして、やや特色のある遺物が多い。



１号住居
1．黒色土　少量の１㎜前後の白色軽石粒と焼土粒と灰黄褐色砂質土を含む。
2．黒褐色土　少量の１～２㎜の灰白色軽石粒（As-C）・焼土粒・地山の灰黄褐色砂質土を含む。
3．黒褐色土　多くの灰黄褐色砂質土を含む。灰白色軽石粒はほとんど含まない。
4．暗褐色土　撹乱層

カマド
1．灰黄褐色土　少量の焼土粒を含む。
2．灰黄褐色土　やや多くの焼土粒を含む。
3．灰黄褐色土　わずかに焼土粒を含む。
4．灰黄褐色土　灰黄褐色土中に多くの焼土粒を含む。

第６図　１号住居跡



第７図　１号住居跡出土遺物

１号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
7－1 30	土師器 坏	床面＋６ 完形	口 12.5 高　4.2 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔　硬質 ③にぶい橙色	底部外面にヘラナデの痕跡が一部残るが、ナデが主体となっておりヘラの単位不明瞭。全体に均整のとれた器形である。
7－2 30	土師器 坏	覆土 2/3	口 12.4 高　3.6 底 10.7	①１㎜以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔　硬質 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。底部外面ヘラ削り。砂粒の移動少なく、削りの単位明瞭でない胎土がやや粉状を呈している。

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
7－3	土師器 坏	床面＋1.5 小破片	口(13.0) 高　— 底　—	①１mm以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③断面鈍い褐色　表面黒褐色	底部外面ヘラ削り。内面ナデにて器表面密。
7－4	土師器 高坏	床面＋５ 図示部分 1/2	口　— 高　— 底　—	①密、１mm以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔　硬質 ③にぶい黄橙色　褐灰色	脚表面ヘラナデ、ナデの単位は明瞭でない。脚は筒状でなく全面粘土。高坏の脚部と思われるが明らかでない。
7－5 30	土師器 手捏ね	床面＋５ 口縁部一 部欠損	口　— 高　4.6 底　4.7	①１mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	外面ナデ、内面は径１cm前後の棒状工具による雑な整形、多くの凹凸面あり。
7－6 30	土師器 手捏ね	覆土 2/3	口 (6.2) 高 (4.0) 底　—	①１mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③灰色	外面指頭圧痕や多くの凹凸あり、内面ナデであるが雑で、凹凸面が残る。雑な作りである。
7－7 30	土師器 手捏ね	床面＋12 完形	口 10.4 高　6.3 底　7.5	①１mm以下の白色粒を多量に含む ②酸化焔 硬質 ③灰黄色　褐灰色　にぶい橙色	器表面全体指等によるナデ、内側底面に粘土を貼り付けている。全体に雑な作りである。
7－8	土師器 鉢	覆土 小破片	口(20.0) 高　— 底　—	①１mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラナデ。製作時にできた表面の亀裂が多く残る。内面ナデにて器表面密。
7－9 30	土師器 甕	右袖中 完形	口 17.1 高 35.2 底　6.8	①２mm前後の白色粒を少量、１mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	底面ヘラナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。３ケ所輪積痕が残る。口縁部を下にしてカマド右袖の芯材として使用されていた。
7－10	土師器 甕	床直 小破片	口(21.3) 高　— 底　—	①１mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が目だつ。胴部内面篦ナデ。
7－11	土師器 壺	覆土 底部	口　— 高　— 底　—	①密0.5mm以下の砂粒多く１mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③明赤褐色　断面にぶい橙色	底部外面ヘラ削り。削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。

石番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
12 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	14.8　7.2　2.4　360	断面形半円状。側面中央がやや凹状、火を受けて一部赤褐色に変色。	床面＋7.5
13 43	こも編石	完形	石英閃緑 岩	14.7　5.9　4.8　615	片側先端部が一部欠損、全体的に不定形。側面中央部に凹状部なし。	床面＋2.5
14 43	こも編石	完形	ひん岩	16.4　5.8　4.2　660	側面中央部がやや凹状となっていて表面全体が摩耗している。	床面＋2.5
15 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	11.9　5.8　3.6　310	側面中央部がやや凹状となっている。 小さなこも編石である。	床面＋3.0
16 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	11.2　6.4　4.6　390	側面中央部がやや凹状となっている。 小さなこも編石である。	床面＋12.5
17 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	15.0　7.5　2.9　545	扁平な石である側面中央部にやや凹状部が認められる。	床面＋1.5
18 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	12.5　6.7　4.2　580	表面全体が摩耗している。側面に凹状部分は認められない。	床面＋23.0
19 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	10.5　7.0　5.0　530	全体に不定形な石である。側面中央部に打ち欠いた様な凹状部あり。	床面－1.0
20 43	こも編石	一部欠損	粗粒輝石 安山岩	14.1　7.6　4.6　550	先端の一部が欠損している。側面中央部が凹でなく凸状に太い。	床面－0.5
21 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	12.0　7.1　5.2　480	短く小さな石である。側面中央の一部に凹状部が認められる。	床面＋1.0
22 43	こも編石	一部欠損	粗粒輝石 安山岩	10.7　6.7　4.2　320	先端一部が欠損全体的に小さく軽い石で側面中央の一部に凹状部あり。	床面＋8.5
23 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	11.3　7.9　4.2　410	側面中央部に大きく深い凹状部あり。側面両端部に小さな凹状あり。	床面＋5.5
24 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	11.2　5.9　4.9　380	側面三角形の小さな石である。側面中央部３ケ所に小さな凹状部あり。	床面＋5.5
25 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	11.2　5.3　3.0　210	断面三角形の小さな石である。側面中央部１ケ所に小さな凹状部あり。	床面＋8.5

所　見　出土遺物から、６世紀後半の住居と考えられる。

２号住居（第８・９図　PL.1・30・43）

位　置　14C-１グリッド

重　複　なし

形　状　正方形に近いが南北方向にやや長い長方形を呈している。規模は東西方向が3.6m、南北方向は竈付近で４mである。

面　積　14.12㎡　　**方　位**　N-18°-W

床　面　遺構確認面から23cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で、竈手前部分と床中央部分が踏み固められて少し硬化していた。竈手前部分には少量の焼土が残っていた。

埋没土　少量の灰白色軽石粒と灰黄褐色砂質土を含む黒褐色土で埋まっていた。

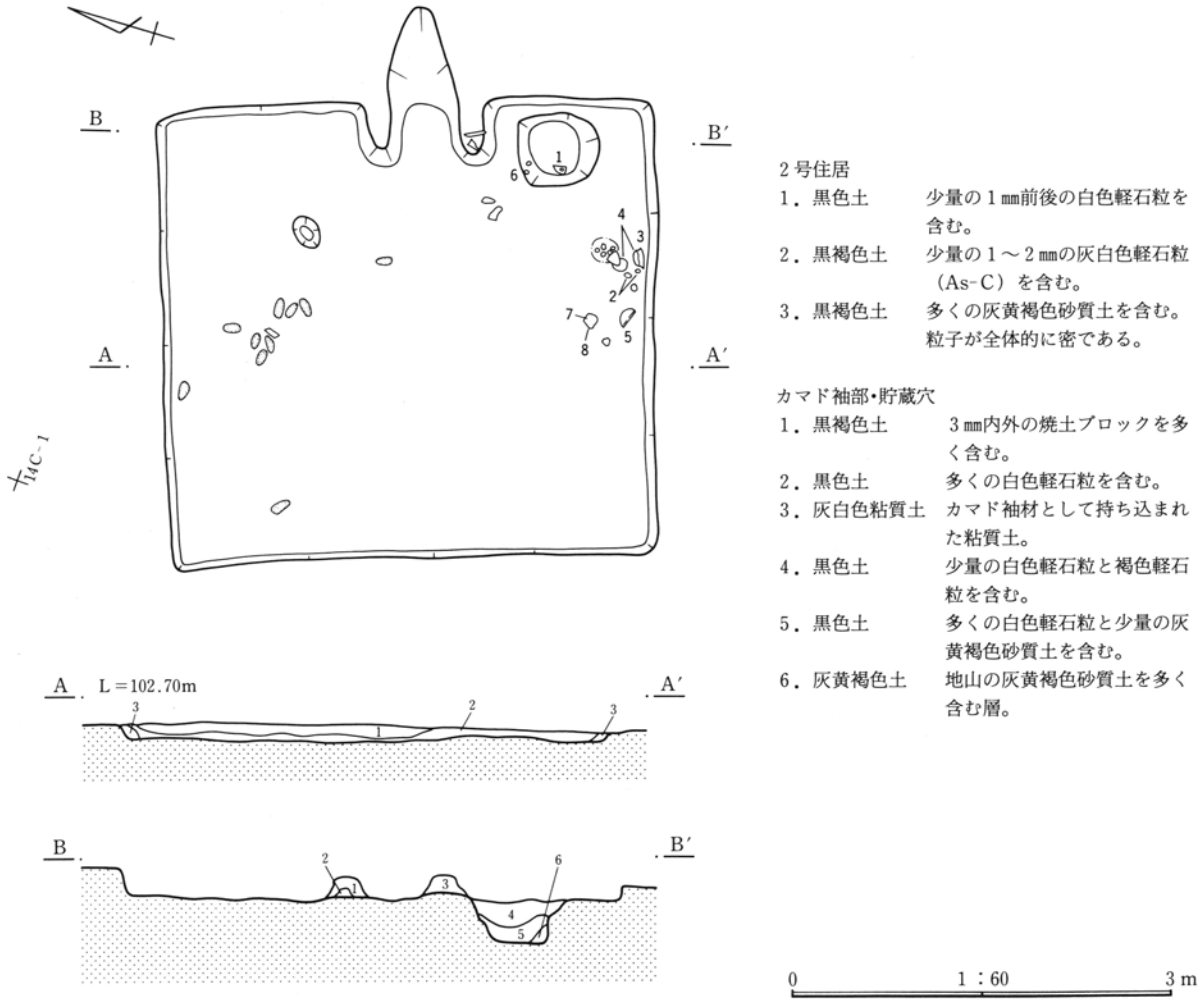
竈　東壁中央に竈が造られていた。両袖と燃焼部の大部分が床面上に位置しており、煙道部が壁面を掘り込んで造られていた。右袖は壁面から52cm、左袖は壁面から51cm残存していた。右袖先端の焚口部分に、丸胴の大きな甕が袖材として使われていた。完形ではなく、破片を利用していたようである。燃焼部幅52cm、煙道部方向125cmである。竈内から焼土の検出は少なかった。

周　溝　掘られていなかった。

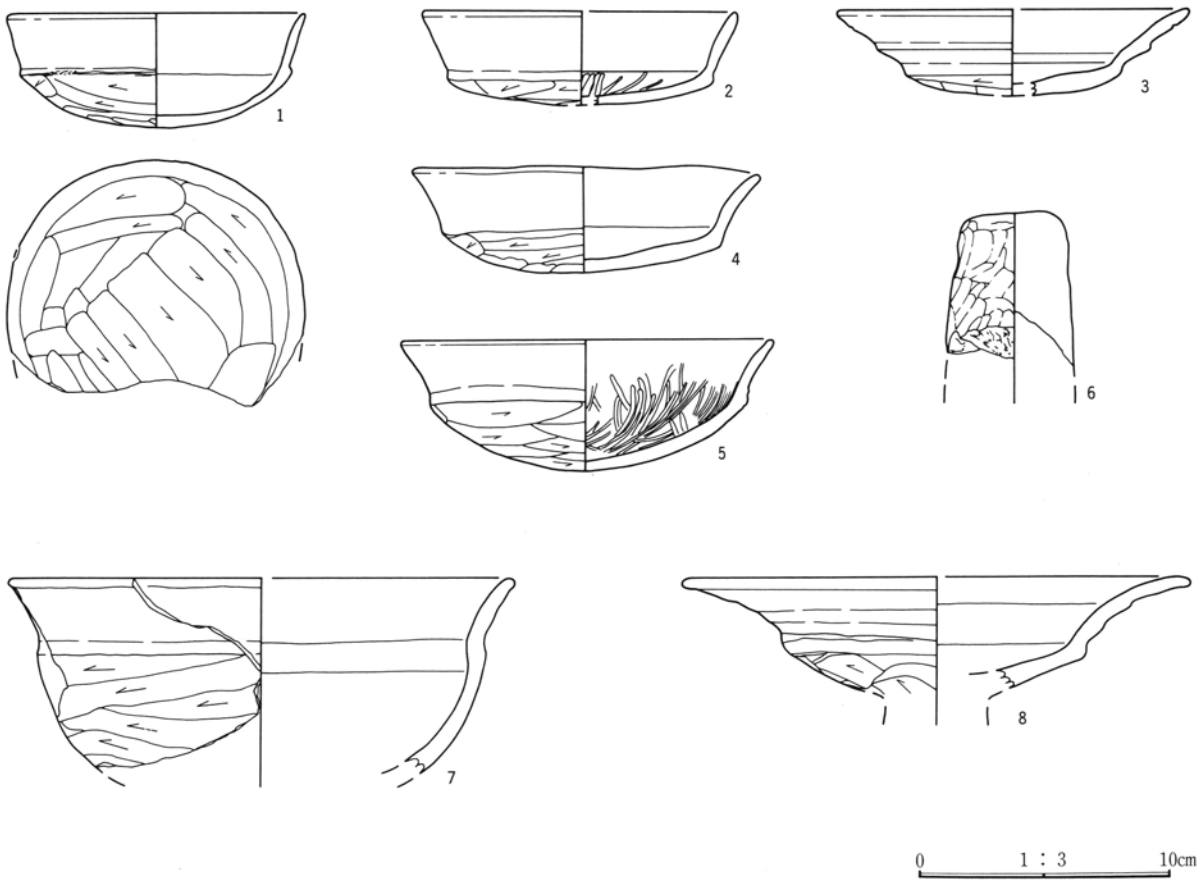
柱　穴　掘られていなかった。

貯蔵穴　竈右側に浅い貯蔵穴が掘られていた。長径66cm、短径58cm、深さ32cmである。

遺　物　出土例の少ない土製の支脚が出土している。高坏の口縁部が大きく外反している。また多くのこ



第８図　２号住居跡



第９図　２号住居跡出土遺物

２号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
9－1 30	土師器 坏	床面＋11 図示部分 残存	口(11.7) 高　4.5 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	底部外面ヘラ削り、砂粒は目だたない。内面ナデにて器表面密。 均整のとれた坏である。
9－2	土師器 坏	床面＋3.5 口縁1/8 底部1/5	口 12.6 高 (3.8) 底 10.0	①１㎜前後の白色粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③黒褐色　にぶい黄橙色	底部外面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。 内面に多くの放射状ヘラ磨き。
9－3	土師器 高坏	床面＋2.5 1/4	口(14.0) 高　— 底　—	①密、多くの黒く光る輝石粒を含む。②酸化焔 硬質 ③外面灰黄褐色　内面にぶい黄橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部外面に高い段を持つ。高坏の坏部と思われる。
9－4 30	土師器 坏	床面＋1.5 口2/3 底4/5	口 14.0 高　4.2 底 11.0	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	底部外面ヘラ削り。多くの砂粒が目だつ。底部内面ナデで器表面密であるが砂粒が目だつ。 全体がやや歪んでいる。
9－5 30	土師器 坏	床直 3/5	口 14.8 高　5.1 底　—	①１㎜以下の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	底部外面ヘラ削り。内面全面にわたり密なヘラ磨き。
9－6 30	土師器 支脚	床—13 図示部分 残存	口　— 高　— 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	外面ナデ等で凹凸しており、高坏の脚とは明らかに異なる。内面は空洞になっていない。 特に強く火をうけている様な痕跡は無い。
9－7	土師器 鉢	床面＋3.5 小破片	口(20.0) 高　— 底　—	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色　にぶい褐色	胴部外面ヘラ削り。削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。
9－8	土師器 高坏	床面＋3.5 口縁1/6 底部1/3	口(20.2) 高　— 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色　表面鈍い褐色	坏底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 口縁部が大きく外反する高坏である。

石番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計 測 値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
9 43	こも編石	一部欠損	ひん岩	14.2　6.8　4.1　590	先端の一部が欠損している。断面三角形でやや歪む。側面中央部に凹状部なし。	床面＋4.5
10 43	こも編石	完形	粗粒輝石安山岩	11.8　7.0　5.2　590	短い不定形な石である。側面中央部に凹状部は認められない。	床直
11 43	こも編石	完形	粗粒輝石安山岩	14.2　7.8　5.5　640	断面三角形である。側面中央部に２ケ所凹状あり、１ケ所は打ち欠いている。	床面＋1.5
12 43	こも編石	完形	砂岩	15.1　6.0　3.3　510	全体が摩耗し光沢を持つ、側面中央部全体的にゆるやかな凹状を呈する。	床面－0.5
13 43	こも編石	完形	粗粒輝石安山岩	14.1　6.1　4.8　650	均整のとれた石であり中央部に緩やかな凸状部あり。両端部に打痕あり。	床面－2.0
14 43	こも編石	完形	粗粒輝石安山岩	11.5　6.7　5.0　520	やや不定形の小さな石である。一側面中央部に凹状面あり。	床面－1.5
15 43	こも編石	完形	粗粒輝石安山岩	12.8　6.2　5.7　560	断面三角形の小さな石で、側面中央部はゆるやかな凸状部となっている。	床面＋2.5
16 43	こも編石	完形	粗粒輝石安山岩	13.2　6.6　4.4　620	断面半円状、平らな一側面がゆるやかな凹状となって全体が摩耗している。	床面＋1.5
17 43	こも編石	完形	粗粒輝石安山岩	13.2　6.7　4.4　400	側面中央３ケ所に凹状部が認められる。全体に粗い表面となっている。	床面＋1.0
18 43	こも編石	完形	石英閃緑岩	14.1　6.9　4.1　700	やや扁平な石である。一側面がゆるやかな凹状部を呈している。	床面－1.0
19 43	こも編石	完形	流紋岩	13.3　5.9　4.8　510	やや不定形な石である。側面中央部に凹状部が２ケ所認められる。	床面＋3.5

も編石が北側床面上からまとまって出土している。

所　見　出土遺物から、６世紀前半の住居と考えられる。

３号住居（第10～12図　PL.1・30・31・43）

位　置　14B・C－2・3グリッド

重　複　なし

形　状　北側と西側の壁面が西側と南側の壁面より長く少し歪んでいるが、全体的には正方形に近い。規模は東西方向が南壁面付近で3.9m、北壁面付近で4.4m、南北方向は東壁面付近で3.9m、西壁面付近で4.2mである。

面　積　16.83m²　　**方　位**　N-23°-W

床　面　遺構確認面から31cm掘り込んで床面となる。住居の残りが悪く、南壁面中央付近は撹乱を受けて壁面が残っていない。またその付近の床面の残りも悪かった。

埋没土　少量の焼土粒と灰黄褐色土の小ブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

竈　　東壁中央からやや南よりに竈が造られていた。両袖と燃焼部の大部分が床面上に位置しており、壁面は掘り込まれていなかった。調査後左右の袖を断ち割って調べた結果、両袖とも地山の黄褐色土を芯にした袖となっており、おそらく掘り残しによる袖と観察された。燃焼部中央やや左寄りに、支脚石がほぼ据えられたと思われる状態で直立して残っていた。右袖は壁面から67cm、左袖は壁面から68cm残存していた。左袖先端の焚口部分に、底部が欠損している甕が口縁部を下にし袖として使用されていた。燃焼部幅45cm、煙道部方向70cmであるが、煙道部の延長上の焼土を含む掘り込みが確認された。これが煙道の延長部分と考えられるため、その部分を含めると、煙道方向の長さは230cmとなる。竈内から焼土粒の出土は少なかった。

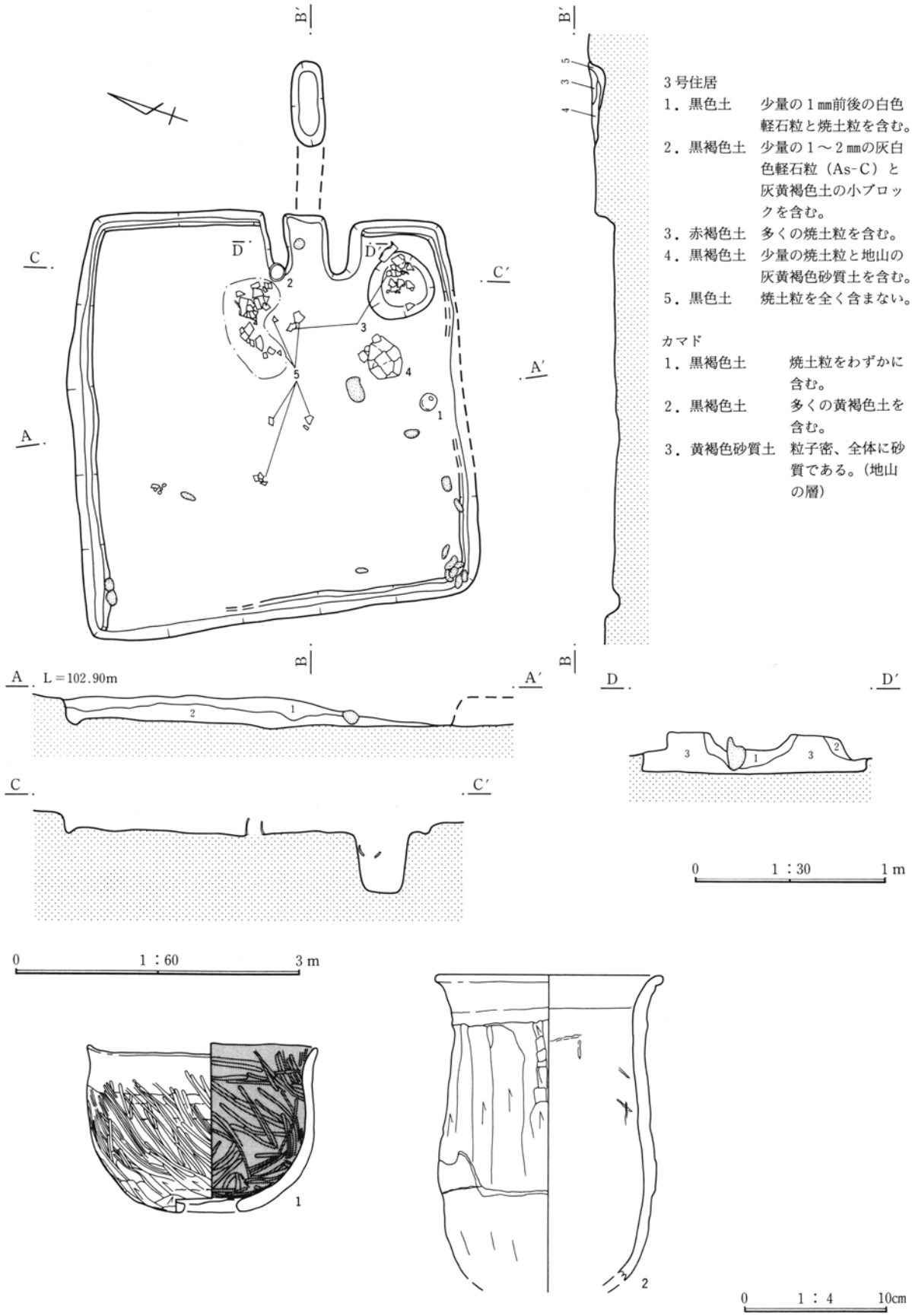
周　溝　一部確認されていないが、ほぼ全周していたようである。幅20cm深さ６cm前後である。

柱　穴　掘られていなかった。

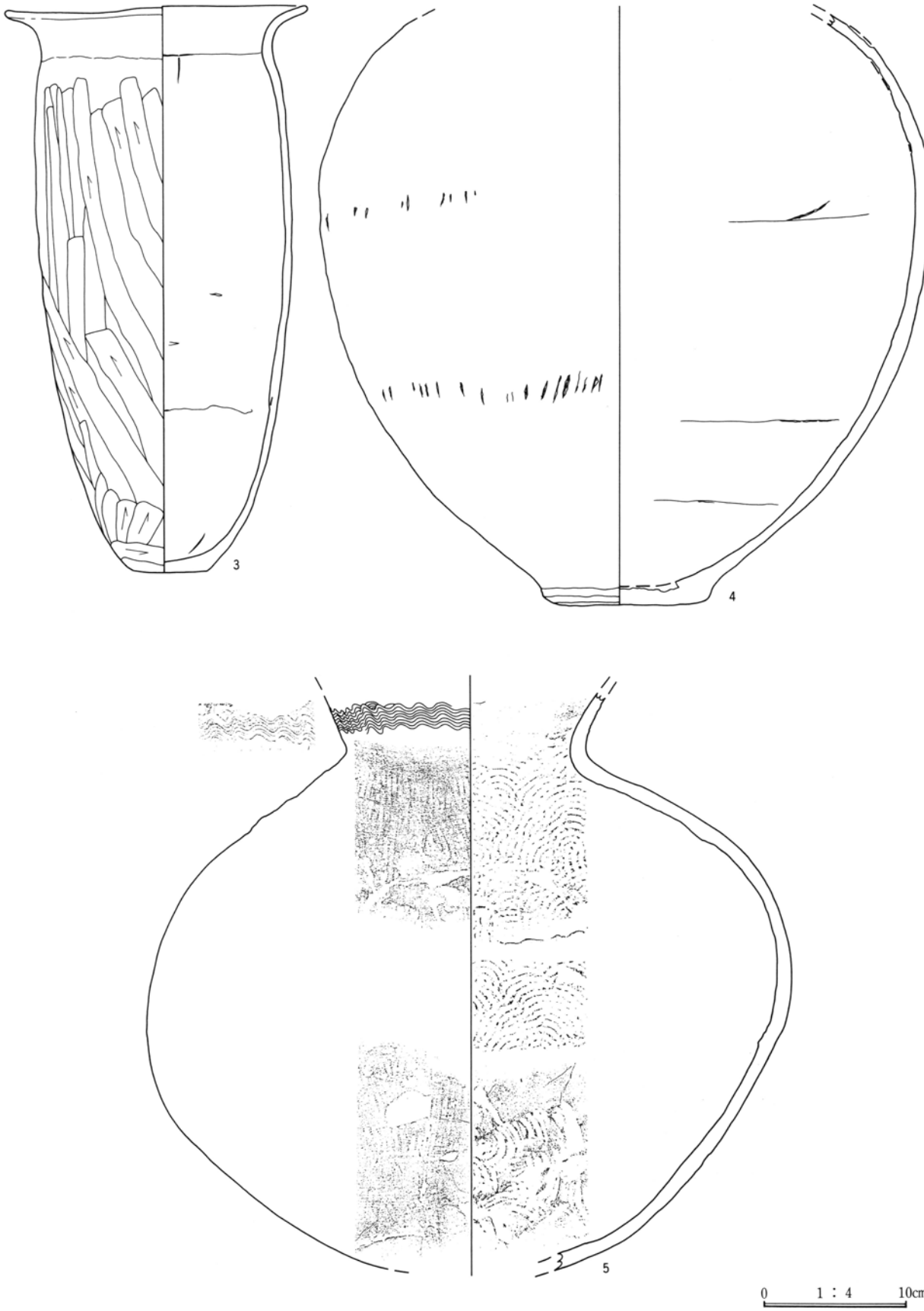
貯蔵穴　竈右側に浅い貯蔵穴が掘られていた。不定形の円形を呈しており、短径70cm長径72cm深さ53cmであり、中から２個の土器片が出土した。

遺　物　竈周辺と貯蔵穴付近から多く出土した。５の須恵器の甕は床面よりかなり高い位置から出土しているため、この住居にともなうものか疑問である。

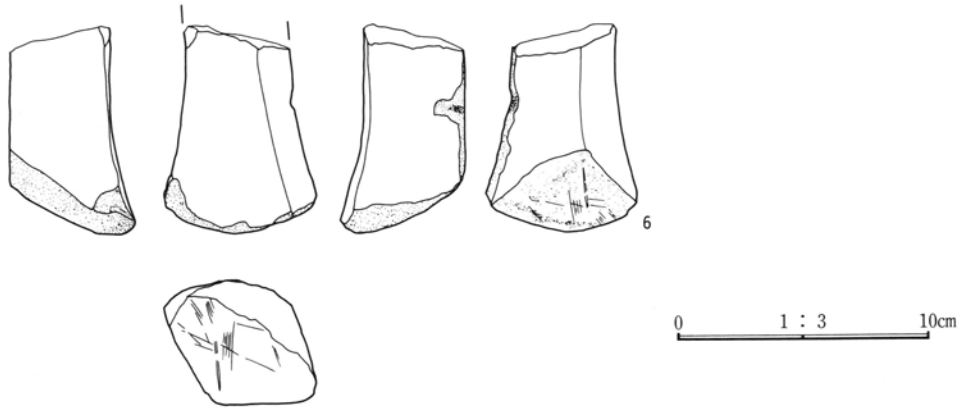
所　見　出土遺物から、７世紀前半の住居と考えられる。



第10図　３号住居跡・出土遺物（１）



第11図　３号住居跡出土遺物（２）



第12図　３号住居跡出土遺物（３）

３号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
10-1 30	土師器 甑	床面-10 完形	口 16.0 高 — 底 11.8	①１～３㎜の白色粒を少量１㎜以下の砂粒を多く含む。②酸化焔硬質③外面にぶい橙色　内面黒色	胴部外面上半ヘラ磨き、下半ヘラ削り。内面はナデにより器表面密にし、全面ヘラ磨き。 外面に輪積痕が残る。
10-2 30	土師器 甕	左袖中 口～胴部 4/5	口 16.0 高 — 底 —	①１～３㎜の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③下部明赤褐色　上部黒褐色	胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動は少ない。内面ナデにて器表面密、大きな砂粒が目だつ。胴外面下半の表面が剝離している。カマド右袖の芯材で使用。
11-3 30	土師器 甕	床面＋14 貯蔵穴 完形	口 21.3 高 39.6 底　5.1	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面にぶい黄橙色　内面浅黄橙色	底部外面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り、多くの砂粒が移動し器表面があらい。 胴部内面下半に胴部上半と下半に接合痕あり。
11-4 30	土師器 甕	床面＋7.5 胴部1/3 底部完形	口 — 高 — 底 10.0	①密、0.5cm以下の白色粒を多く、１～２㎜の砂粒は含まない。 ②酸化焔 硬質 ③灰褐色	胴部内外面ナデ、底部外面ナデ、胴部外面の２ケ所に粘土帯接合時に、付けたと思われる小さな溝が多数。内側器表面の多くが剝離している。
11-5 31	須恵器 甕	床面＋16 口縁1/4 他1/3	口 — 高 — 底 —	①密0.5㎜以下の白色粒を多く含む。②還元焔 硬質 ③表面灰色　断面橙色	口縁部外面波状文。胴部外面浅い平行叩き目、胴部内面横方向ナデ、部分的に青海波文が残っている。 内外の器表面の多くが剝離している。

挿図番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
12-6 43	砥石	破片	砥沢石	(8.2)　(6.0)　(5.0)　220	４側面を砥石として使用されている。 下面に断面Ｖ字状の溝あり。	覆土

石番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
7 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	13.5　8.2　3.7　620	全体にやや扁平。側面中央部に凹状部なし、こも編石としてはやや疑問である。	床面＋2.5
8 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	14.2　7.0　4.8　690	均整のとれた石である。一側面中央が、わずかに凹状面となっている。	床面＋0.5
9 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	13.2　5.0　3.7　440	側面中央３面がゆるやかな凹状となっている。表面全体が摩耗している。	床面＋11.0
10 43	こも編石	完形	ひん岩	13.4　4.8　3.1　360	側面中央部２面がゆるやかな凹状面となっている。	床面＋15.0
11 43	こも編石	一部欠損	かこう岩	13.4　8.4　5.0　820	側面中央部は凸状となっている。全体に火を受けて、もろくなっている。	床面＋6.0
12 43	こも編石	完形	ひん岩	12.2　5.6　4.7　460	側面中央部３面がゆるやかな凹状面となっている。表面全体が摩耗している。	床面＋6.5
13 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	11.2　6.6　3.0　410	やや扁平な小さな石である。側面中央部に凹状面は認められない。	床面＋14.0
14 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	12.0　7.0　3.4　480	やや扁平な小さな石である。側面中央部に凹状面は認められない。	床面＋4.5
15 43	こも編石	完形	変玄武岩	12.4　5.5　4.6　530	断面三角形に近い。１側面中央部が凹状となっている。	床面＋6.0

石番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計 測 値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
16 43	こも編石	完形	粗粒輝石安山岩	15.9　7.6　4.4　730	側面中央部は凸状面となっている。一部に火を受けた様な痕跡あり。	床面＋2.5
17 43	こも編石	完形	溶結凝灰岩	11.8　6.1　4.0　390	断面三角形に近い。一側面中央部が凹状となっている。	床面＋13.5
18 43	こも編石	完形	石英閃緑岩	13.7　6.6　3.9　520	側面中央部の１ケ所わずかな凹状面がみとめられる。	床面＋9.0
19 43	こも編石	完形	粗粒輝石安山岩	13.9　7.6　4.2　700	側面中央部が全体にわずかな凹状面となっている。	床面＋5.0
20 43	こも編石	完形	粗粒輝石安山岩	15.0　7.6　4.1　610	側面中央部に凹状面はないが、石材があらいためにヒモ固定の機能あり。	床面＋3.0

４号住居（第13～15図　PL.1・２・31・43）

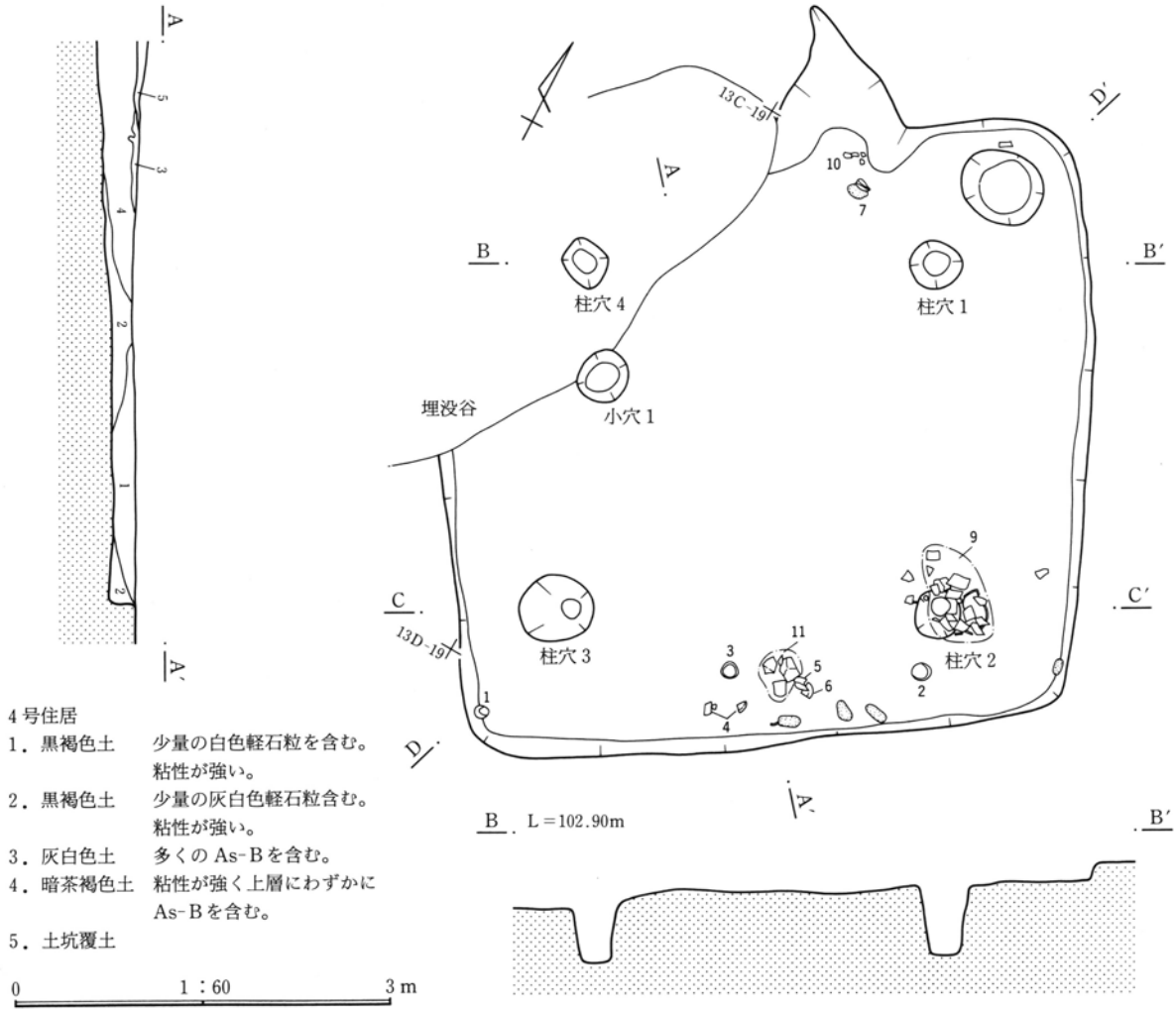
位　置　13C-19グリッド

重　複　北西部分を覆土上面に、As-Bの軽石を多く含む埋没谷に連なる浅い掘り込みにより壁面・床面・柱穴４の一部が掘り込まれていた。

形　状　一部撹乱を受けているが、ほぼ正方形に近い。規模は東西方向が残りの良い南壁面付近で4.9m、南北方向は4.8mである。

面　積　不明　　**方　位**　N-30°-W

床　面　遺構確認面から20cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であるが、特に踏み固められて硬化した床面は確認されなかった。



第13図　４号住居跡（１）

埋没土　全体に粘性の強い黒褐色土で埋まっていた。

竈　　北壁中央からやや東よりに竈が造られていた。残りが悪く、竈内から焼土の出土も少なかった。両袖と燃焼部の多くが床面上に位置しており、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んで造られていた。右袖は壁面から35cm、左袖は壁面から28cm残存していた。残りが悪く不明な部分が多いが、現状で燃焼部幅42cm、煙道部方向138cmである。燃焼部奥壁部分が少し焼けて焼土化していた。

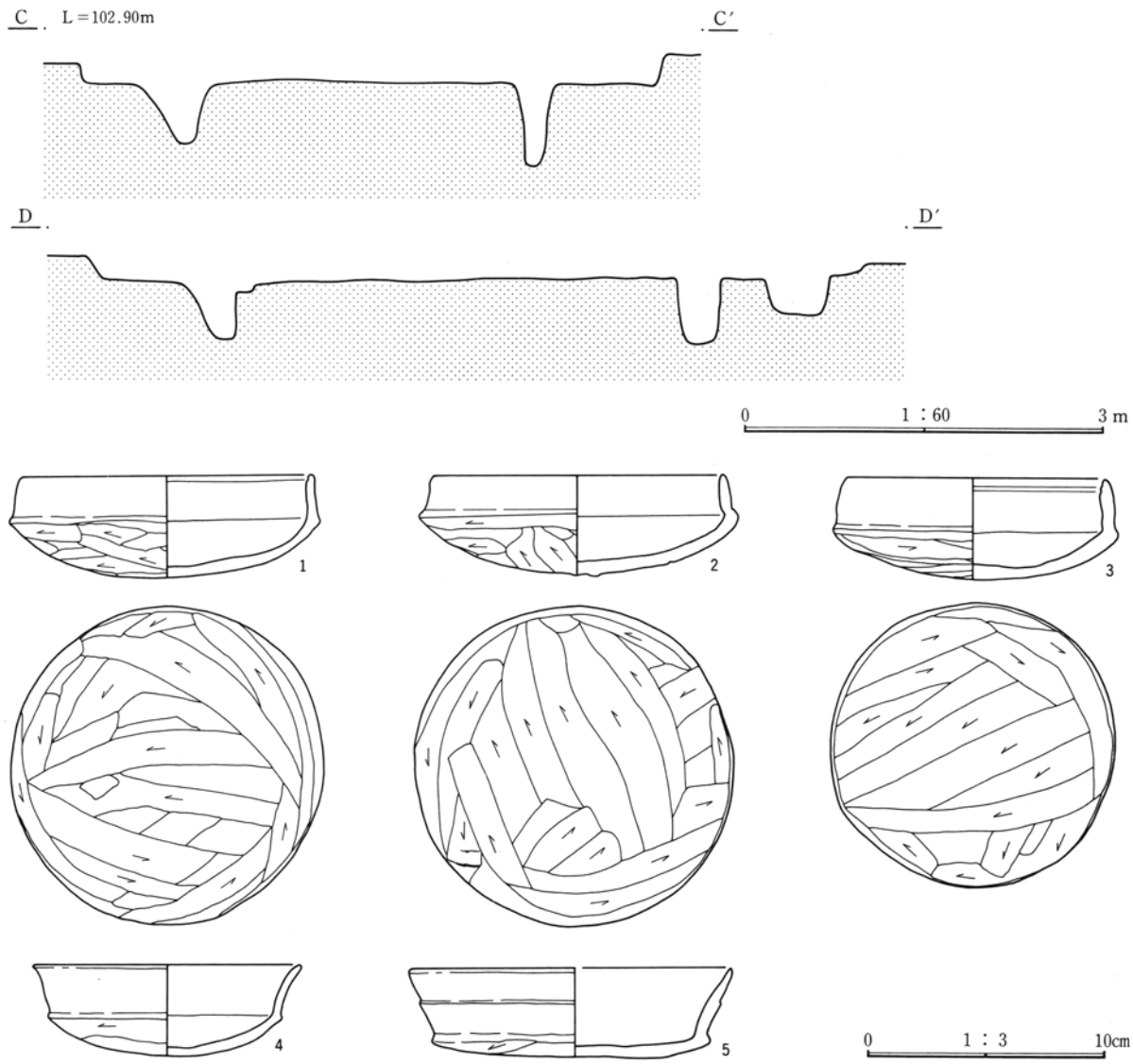
周　溝　掘られていなかった。

柱　穴　４本の主柱穴と１本の小穴が掘られていた。規模は、柱穴１が径42cm深さ56cm、柱穴２が径38cm深さ72cm、柱穴３が径60cm深さ55cm、柱穴４が径38cm深さ63cm、小穴１は径42cm深さ13.5cmである。

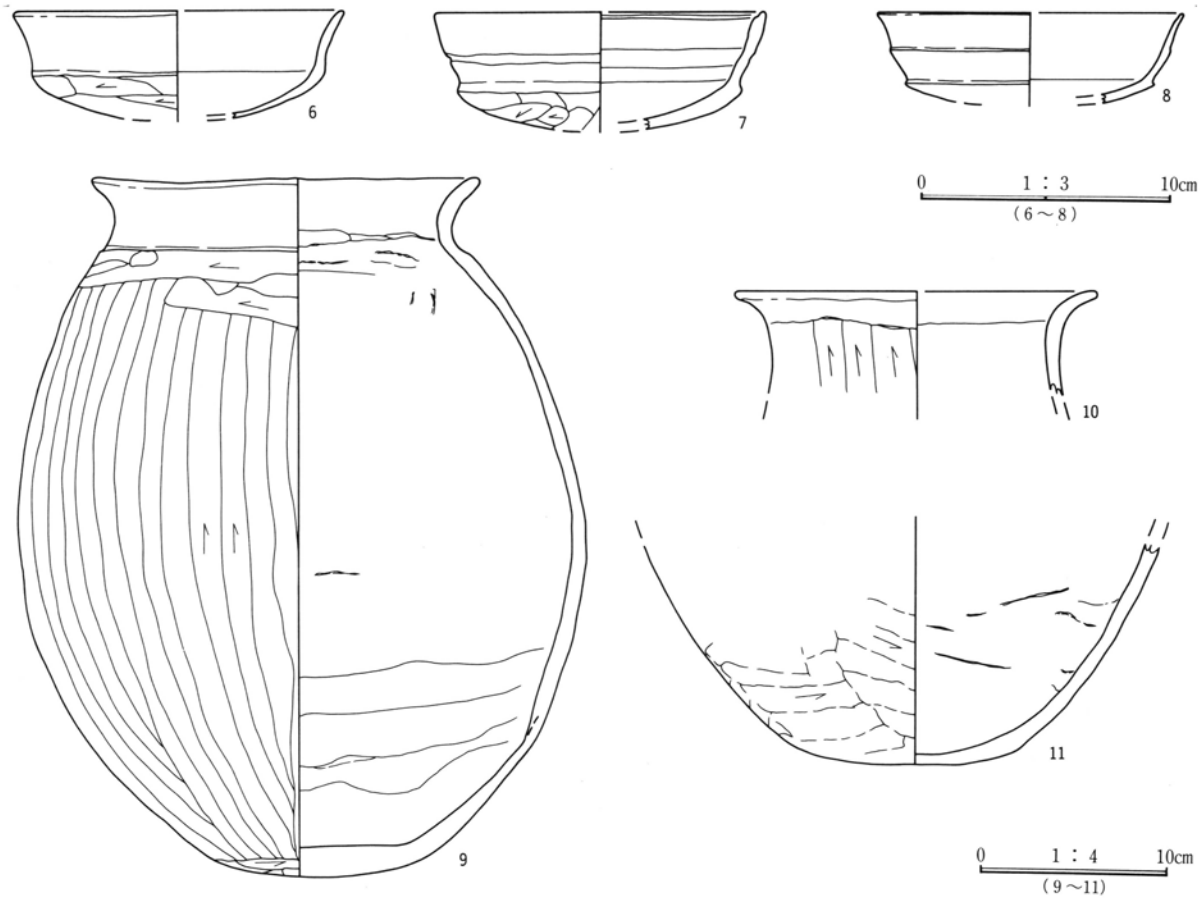
貯蔵穴　竈右側に貯蔵穴が掘られていた。長径68cm、短径58cm、深さ30cmである。

遺　物　南壁面近くから坏を中心に多くの土器が出土した。柱穴２付近から大型の壺が崩れた状態で出土した。復元の結果ほぼ完形となった。

所　見　出土遺物から、７世紀前半の住居と考えられる。



第14図　４号住居跡（２）・出土遺物（１）



第15図　４号住居跡出土遺物（２）

４号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
14-1 31	土師器 坏	床面＋3.5 完形	口 10.7 高　4.3 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色一部黒色	底部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
14-2 31	土師器 坏	床直 完形	口 12.4 高　4.3 底　—	①密、１㎜以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③外面にぶい黄橙色　内面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。口縁部上端内側にわずかな凹線あり。 均整のとれたきれいな坏である。
14-3 31	土師器 坏	床面＋21 口縁部一部欠	口 12.3 高　4.2 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色　灰褐色	底部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。
14-4 31	土師器 坏	床面＋2.5 ほぼ完形	口 11.2 高　3.8 底　—	①密１㎜以下の白色粒を多く含む ②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ヘラ削りと思われるが器表面が粉状を呈しており不明瞭。胎土が粉状を呈しており指に付着する。
14-5 31	土師器 坏	床直 口縁1/5 底部4/5	口(13.6) 高　3.8 底　—	①密、多くの輝石を含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色　黒色	底部外面ヘラナデ、口縁部横ナデ、口縁部の外面中段に弱い段あり。全体的に吸炭して黒色を呈している部分が多い。
15-6 31	土師器 坏	床面+2.5 1/2	口(13.2) 高　— 底　—	①１㎜以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面篦削り、削りの単位は明瞭でない。 少し全体に歪んでいる。
15-7	土師器 坏	床面＋2.0 1/3	口 13.1 高 (4.7) 底　—	①黒色の輝石粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面灰黄褐色　内面にぶい橙色	底部外面ヘラ削り、口縁部外面中央部に段を持つ。 口縁部内側に２条の凸帯あり。
15-8	土師器 坏	覆土 1/4	口 12.1 高　— 底　—	①光沢を持つ１㎜以下の黒色鉱物を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	底部ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法　の特徴・備考
15-9 31	土師器 甕	床面＋2.5 ほぼ完形	口 20.7 高 37.0 底 11.0	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	底部外面及び胴部外面ヘラナデ、口縁部横ナデ。内面下半胴部に接合痕あり。胴部下半～底部にかけて大きな黒斑あり。
15-10	土師器 甕	床面＋1.5 1/6	口(19.4) 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄色	胴部外面ヘラ削り、内面ナデ、器表面全体があれている。
15-11 31	土師器 甕	床直 胴下1/2 底部2/3	口 — 高 — 底 11.5	①１㎜前後の石英粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	内面ナデにより器表面密。外面ヘラ等を用いたナデ、砂粒の移動は少なくあれも少ない。

石番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
12 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	12.6　6.6　4.7　590	小さな石である。側面中央部２ケ所がゆるやかな凹状部となっいる。	床直
13 43	こも編石	完形	ひん岩	15.8　8.0　3.9　800	扁平で全体やや不定形側面中央部２ケ所ゆるやかな凹状部、全体光沢持つ。	床直
14 43	こも編石	完形	変質安山岩	13.5　5.7　4.1　470	やや不定形でありこも編石としてはやや疑問である。	床直
15 43	こも編石	完形	石英閃緑岩	14.6　7.5　5.7　970	厚く重量のある石である。中央側面の２ケ所に凹状部あり。	床直
16 43	平　石	完形	粗粒輝石 安山岩	14.2　12.3　3.4　980	扁平な石であり、用途は不明である。 表面全体が摩耗している。	床面＋3.0

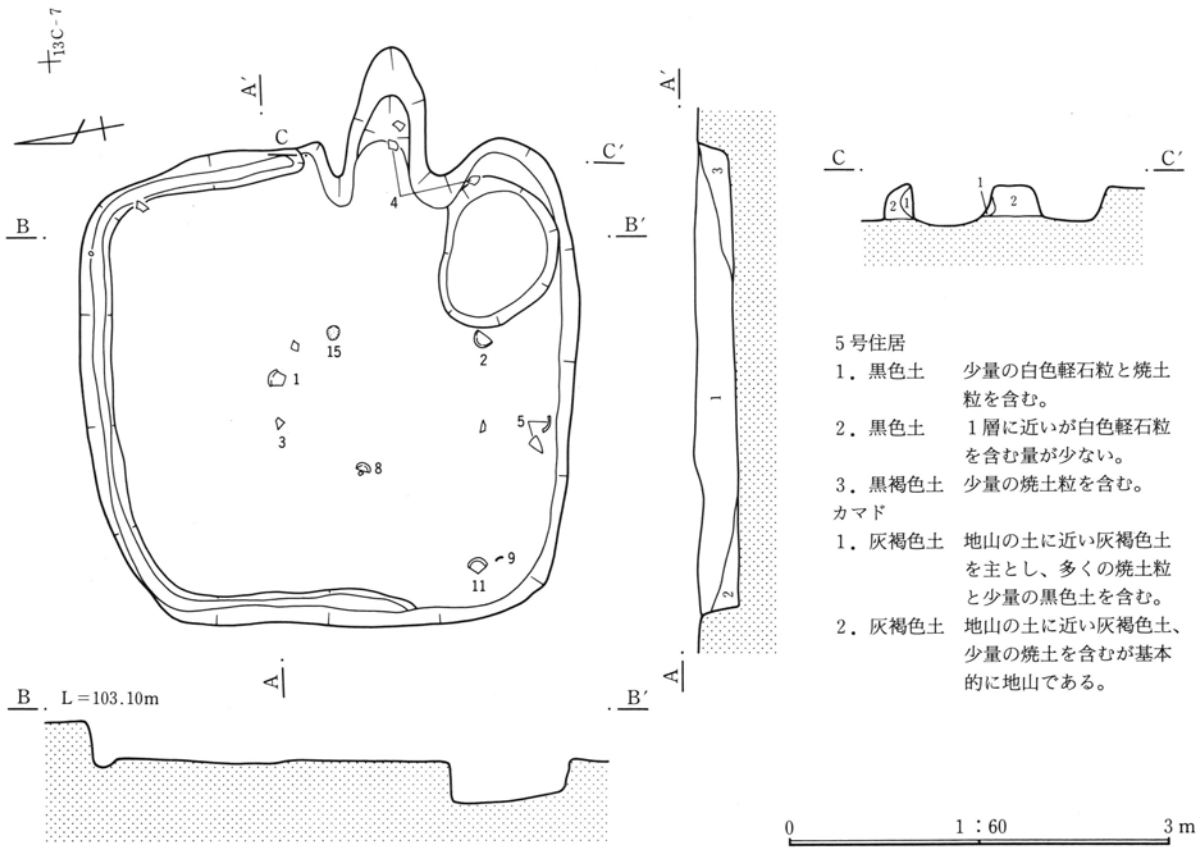
５号住居（第16～18図　PL.2・31・32・43）

位　置　13C-６グリッド

重　複　なし

形　状　ほぼ正方形に近い形を呈している。規模は東西方向が3.7m、南北方向が3.9mである。

面　積　13.57㎡　　**方　位**　N-６°-E



第16図　５号住居跡

床　面　遺構確認面から30cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であり、踏み固められて硬化していた面は確認できなかった。

埋没土　黒色土を主とし、全体に少量の焼土粒が混入していた。

竈　　東壁中央からやや南よりに竈が造られていた。両袖と燃焼部の多くが床面上に位置しており、煙道部と燃焼部の一部が壁面を掘り込んで造られていた。右袖は壁面から50cm、左袖は壁面から45cm残存していた。燃焼部幅60cm、煙道部方向125cmである。燃焼部奥壁部分と煙道部の壁面がよく焼けて焼土化していた。

周　溝　南壁面と西壁面の南側以外の壁面下に掘られていた。幅は18cm、深さは３cm前後である。

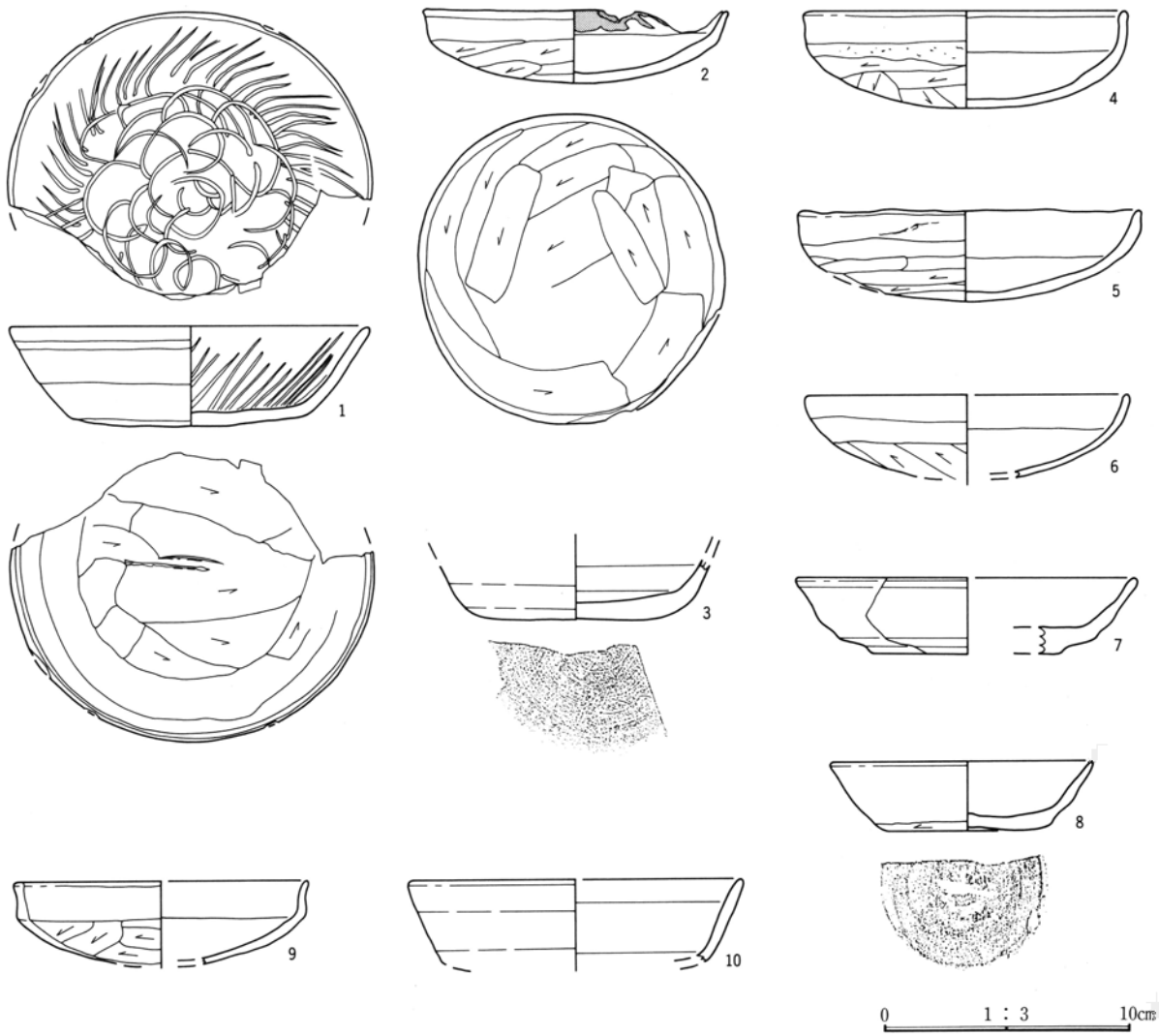
柱　穴　掘られていなかった。

貯蔵穴　竈右側に大きな貯蔵穴が掘られていた。長径118cm、短径90cm、深さ42cmである。

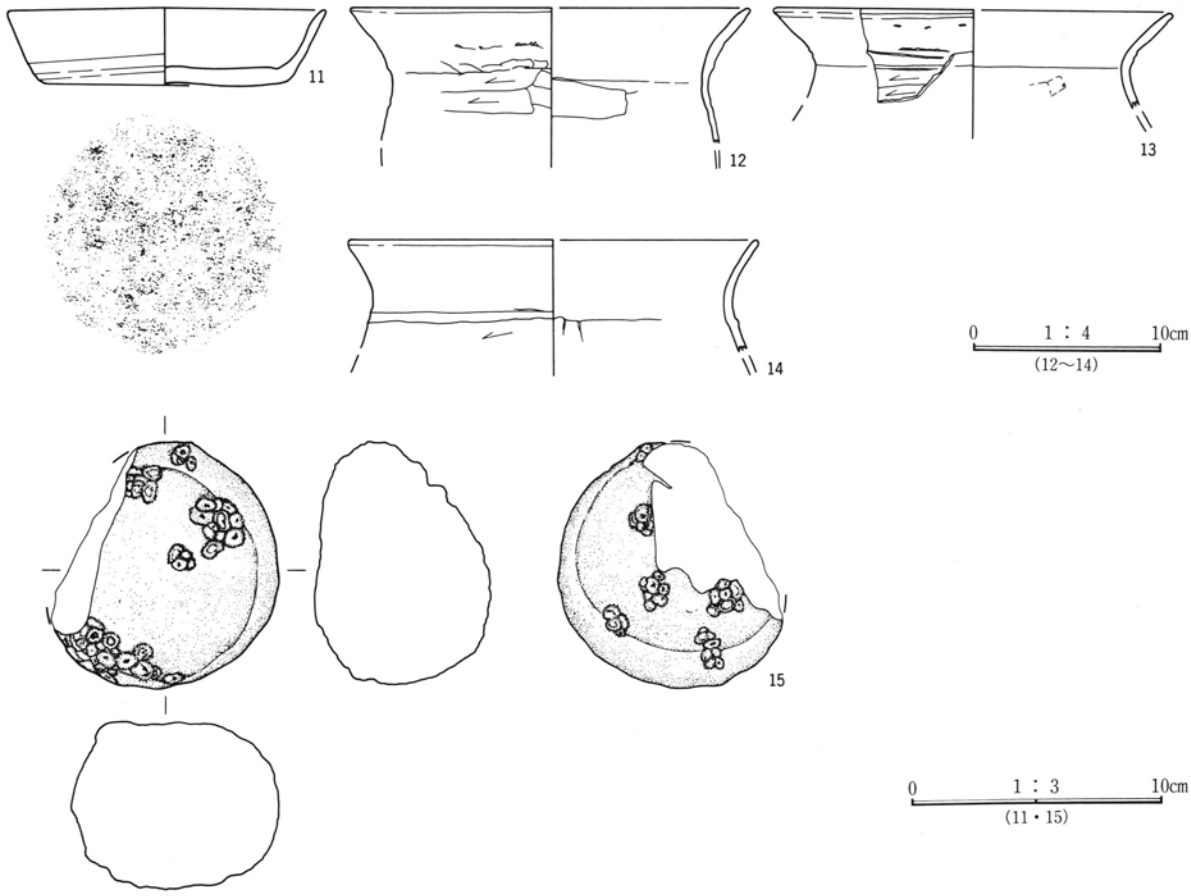
遺　物　５個須恵器が出土しており、いずれもヘラ切と思われる。第17-１の坏は内側底面に螺旋状の暗文を持つ。

所　見　床下調査により焚口付近とその北に床下土坑が確認された。床からの深さは焚口部分が42cmその北側が24cmである。

住居の時期は出土遺物から、８世紀前半の住居と考えられる。



第17図　５号住居跡出土遺物（１）



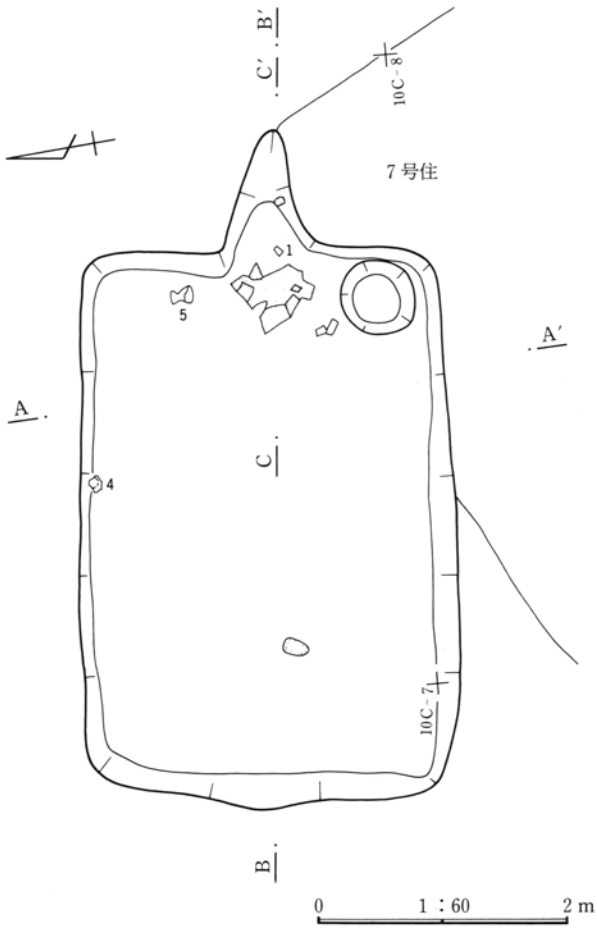
第18図　５号住居跡出土遺物（２）

５号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
17-1 31	土師器 坏	床面＋７ 3/5	口 14.8 高　4.0 底　9.6	①１㎜内外の砂粒を多く、１～２㎜の砂粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	口縁～内面横ナデ、体部横方向篦削り、底面篦削り。内面螺旋と方射状暗文。
17-2 31	土師器 坏 (灯明皿)	床直 ほぼ完形	口 12.4 高　3.0 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。 底面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。口縁部一部を割って灯明皿とし使用、その部分に黒斑。
17-3	須恵器 坏	床面＋12 1/3	口　— 高　— 底 (8.0)	①密 ②還元焔 硬質 ③表面灰色　断面灰赤色	底面右回転ヘラ削り。 器表面全体が非常に密である。
17-4 31	土師器 坏	床面＋5.5 カマド内 2/3	口 13.2 高　4.0 底　—	①１㎜以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。底面ヘラ削り。砂粒の移動は少なく削りの単位は明瞭でない。
17-5 31	土師器 坏	床面＋5.5 1/2	口 14.0 高　3.7 底　—	①密、0.5㎜以下の砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。口縁部外面に輪積痕残る。内面ナデにて器表面密。
17-6	土師器 坏	覆土 1/3	口(13.2) 高　— 底　—	①密、0.5㎜以下の砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。内面ナデにて器表面密。胎土中に多くの輝石が目だつ。
17-7	須恵器 坏	覆土 1/5	口 14.0 高　3.1 底　7.8	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②還元焔 硬質 ③灰色	底面あれていて不明確、手持ちヘラ削りの可能性あり。口縁部横ナデ。底部が特に厚い坏である。
17-8 32	須恵器 坏	床面＋２ 1/2	口 10.7 高　3.8 底　6.6	①１㎜以下の白色粒を多く含む。 ②還元焔 硬質 ③灰色	底面手持ちヘラ削り。体部下端ヘラ削り。 口縁部横ナデ。

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
17-9	土師器 坏	床面＋12 1/4	口(12.0) 高　— 底　—	①密、0.5㎜前後の砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	底部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
17-10	須恵器 坏	覆土 口縁1/3	口(13.6) 高　— 底　—	①密 ②還元焔 硬質 ③灰色	内外面横方向ナデにて器表面密。
18-11 31	須恵器 坏	床面＋15 口縁2/3 他完形	口 12.6 高　3.1 底　9.5	①１㎜以下の白色粒を多く含む。 ②還元焔 硬質 ③灰色	底部外面右回転ヘラ削り、ヘラ起しと思われるが不明。内側底部中央部が弱い凸状をなす。
18-12 32	土師器 甕	覆土 1/6	口(21.3) 高　— 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	肩部左横方向ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。口縁部に輪積痕あり。
18-13 32	土師器 甕	覆土 小破片	口(21.2) 高　— 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	口縁部横ナデ、胴部外面横方向ヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。
18-14 32	土師器 甕	覆土 小破片	口(22.0) 高　— 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	口縁部横ナデ。肩部横方向ヘラ削り。

挿図番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
18-15 43	くぼみ石	一部欠損	粗粒輝石 安山岩	9.7　8.3　6.5　528	全体に磨きあり。	床面＋2.5



第19図　６号住居跡（１）

６号住居（第19・20図　PL.2・32）

位　置　10B-７グリッド

重　複　南東コーナー部分で古墳時代の７号住居と重複しており、本住居が７号住居の北東部分を床面下まで掘り込んでいる。

形　状　東西方向に長い長方形を呈している。規模は東西方向が4.3m、南北方向が3.0mである。

面　積　12.16㎡　　**方　位**　N-９°-E

床　面　遺構確認面から50cm掘り込んで床面となる。床面は竈手前部分が少し低くなっていたが、ほとんど平坦で竈手前部分と床中央部分が踏み固められて少し硬化していた。

竈　　東壁中央に竈が造られていた。両袖と燃焼部の大部分及び煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。燃焼部幅50cm、煙道部方向115cmである。竈内から多くの焼土が出土した。特に煙道部先端付近の壁面が焼けて赤褐色を呈していた。

周　溝　掘られていなかった。

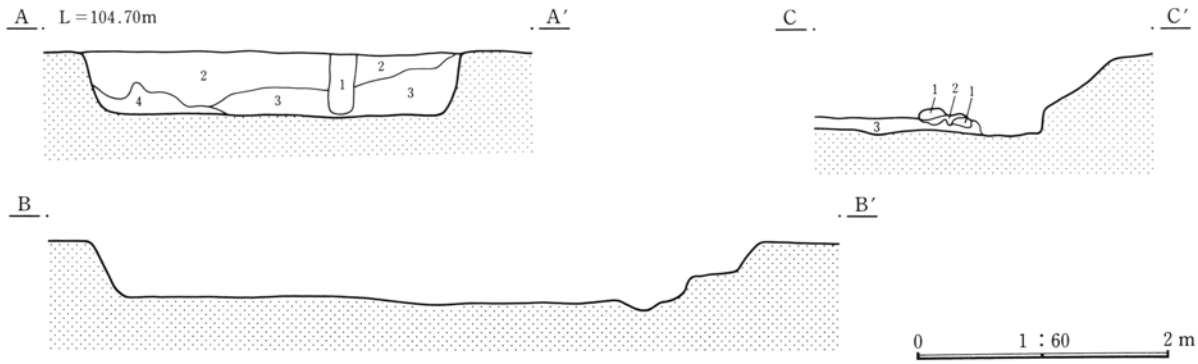
柱　穴　掘られていなかった。

貯蔵穴　竈右側に貯蔵穴が掘られていた。径60cm、

深さ24cmである。

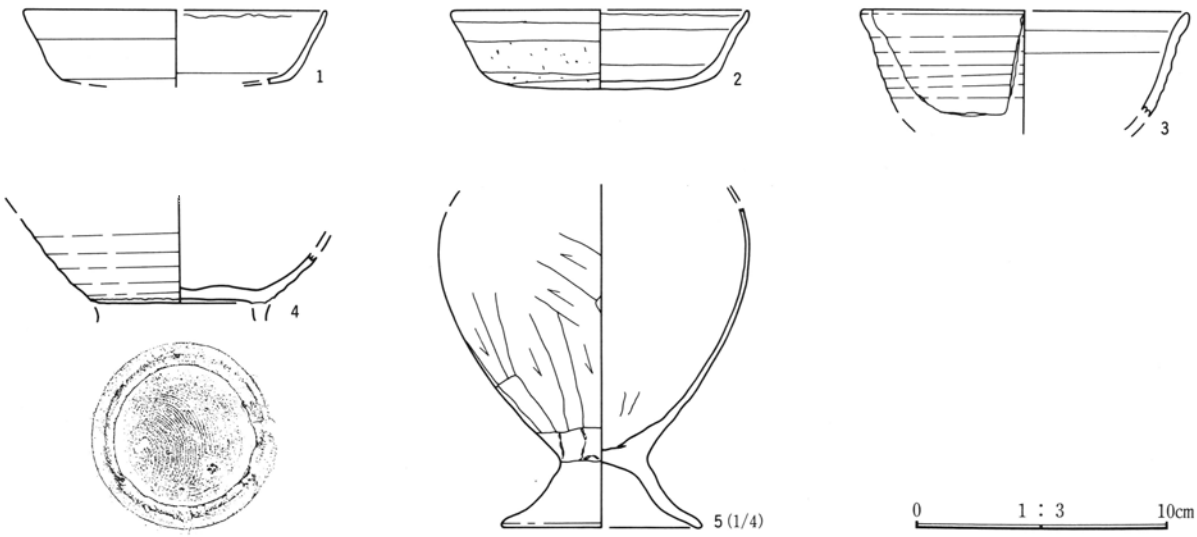
遺　物　破片も含めて出土量は少ない。第20図-４の須恵器埦は破片であるが、丁寧に造られ硬質に焼かれている。

所　見　竈焚口付近の床面上に、熱を受けてぼろぼろに砕けた多くの石が出土した。一部に袖石も含まれている事も考えられるが、おそらく焚口の天井に架けられていた石と思われる。石は赤色と黄色に変色していた。出土遺物から住居は、平安時代９世紀前半の住居と考えられる。



６号住居
1．黒褐色土　軽石粒を含む。土は固くしまっている。
2．黒褐色土　多くの白色軽石粒と少量の焼土粒とわずかな炭化物を含む。
3．黒褐色土　少量の白色軽石粒と焼土粒を１～２cmの暗褐色土の地山ブロックを含む。
4．黒褐色土　３層に近いが暗褐色が強く、軽石粒や焼土粒はほとんど含まない。１～４cmの地山ブロックを含む。

カマド
1．橙色の石　カマドの天井石として使用されていた石が、焼けてボロボロに砕けてカマド手前に崩れ落ちたと思われる。
2．赤色の石　１と同じく良く焼けて赤色化している。
3．黒褐色土　多くの地山の暗褐色土のブロックを含む。



第20図　６号住居跡（２）・出土遺物

６号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
20-１	土師器 坏	床直 図示部分 1/4	口 12.0 高 (3.0) 底　9.0	①密、0.5mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
20-２ 32	土師器 坏	貯蔵穴内 覆土 1/3	口 11.9 高　3.1 底　7.2	①密、0.5mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ヘラ削り。口縁部下半ナデ、上半横ナデ。

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
20-3	須恵器 坏	貯蔵穴内 小破片	口(13.0) 高　— 底　—	①１㎜以下の多くの白色粒を含む ②還元焰 硬質 ③灰色	外面に多くのロクロ目が目だつ。 表面に多くの気泡が目だつ。
20-4 32	須恵器 埦	床面＋12 体部下半 2/3底部完	口　— 高　— 底 (6.6)	①密、１㎜前後の白色粒を少量含む。②還元焰 硬質 ③灰色	底部外面右回転糸切り痕、高台はすべてはずれている、その部分に糸切り痕残る。
20-5 32	土師器 台付甕	床面＋4.0 胴下2/3 台部完形	口　— 高　— 底(10.6)	①密、0.5㎜以下の白色粒を多く含む。②酸化焰 硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、台部との接合付近～台部は横ナデ、胴内側底面に台部との接合痕明瞭。

７号住居（第21～23図　PL.2・３・32・33・43）

位　置　10C-７グリッド

重　複　北東部分で当住居より新しい平安時代の６号住居と重複しており、重複部分を６号住居により床面下部分まで掘り込まれている。また東側に６号溝があり、当住居竈の煙道部が溝の覆土上面を掘り込んでいる。

形　状　西側がやや狭くなる不自然な形をしているが、東西方向に少し長い長方形を呈している。規模は東西方向が5.4m、南北方向が4.9mである。

面　積　23.74㎡　　**方　位**　N-27°-W

床　面　遺構確認面からの深さは残りの良い北東コーナー付近で50cmとなっており、その部分まで掘り込んで床面としている。床面は竈手前部分が少し低くなっていたが、ほとんど平坦で竈手前部分と床中央部分が踏み固められて少し硬化していた。

竈　　東壁中央南よりに竈が造られていた。両袖と燃焼部の大部分とは床面上に位置しており、燃焼部と煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。右袖は壁面から52cm、左袖は壁面から42cm残存していた。燃焼部幅48cm、煙道部方向122cmである。左袖の芯として２個の完形の長甕が口縁部を下にして埋められていた。奥の甕は口縁部を欠損していた。手前の甕は底部が一部割れていたがほとんど完形であった。２個の甕は中に土を満載して使われたのか、あるいは空洞の状態で伏せられていたのかの観察を注意深くおこなった。その結果奥の甕は、口縁部から約10cmほど柔らかい土がはいっていたが、その上は底部まで空洞となっていた。手前の甕は底部が一部欠損していた。そして底部まで土が詰まっていた。割れた底部の破片は甕の中央部の土の中から出土した。おそらくこの甕も口縁部以外の大部分は空洞の状態であり、割れて土中に入ったものと考えられる。他の例では２号住居でもこのように袖に芯として長甕が使われており、中は口縁部付近以外は空洞であった。右袖に甕は使われていなかったが完形の坏が埋められていた。竈燃焼部に支脚石が中心から左に片寄って据えられていた。このような竈の場合２個の甕が据えられて同時に使用されている例が多い。おそらくこの竈でも２個の甕が使用されていたものと思われる。その２個の甕とは、竈燃焼部手前の７の甕と竈内から出土した９の甕が考えられる。竈内から焼土粒の出土は少なかった。

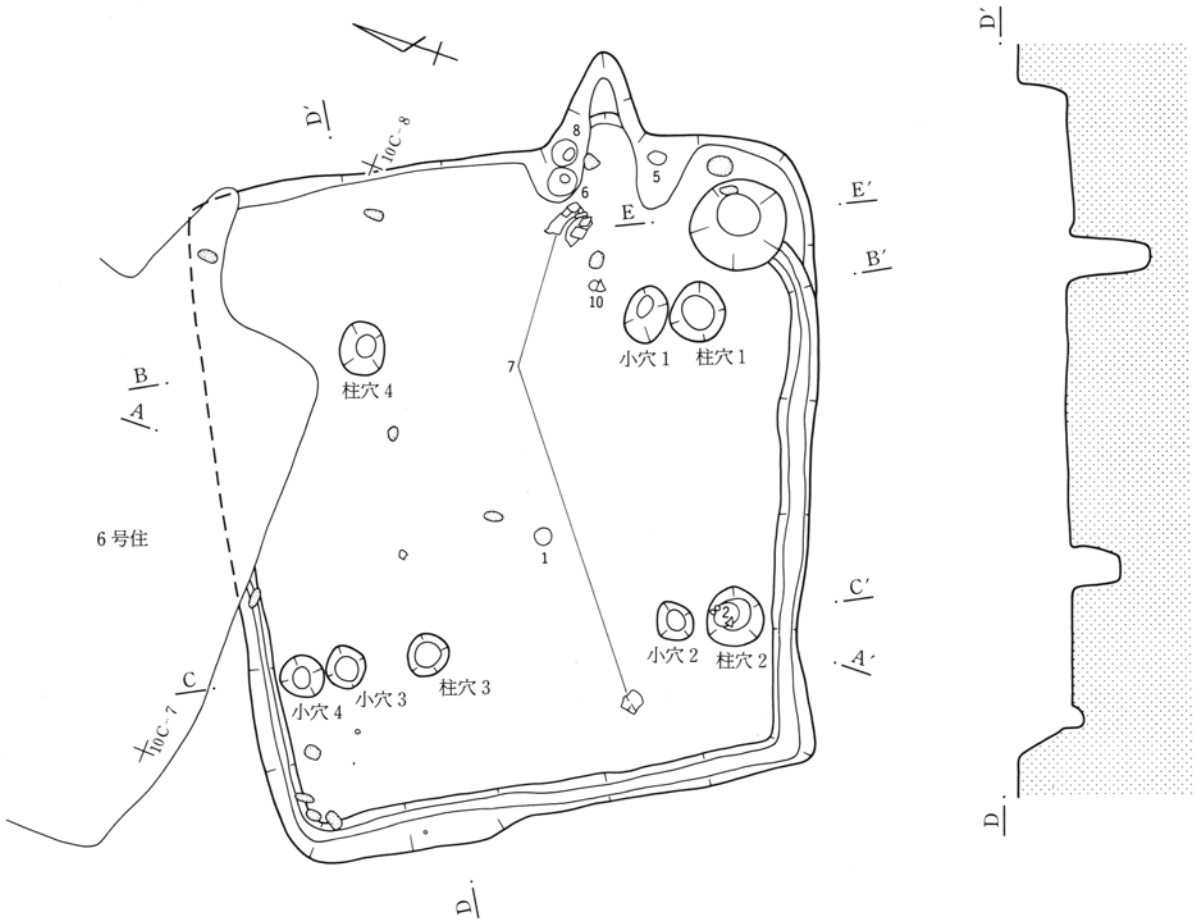
周　溝　北東壁面部分以外で掘られていた。幅15cm深さ６～７cmである。

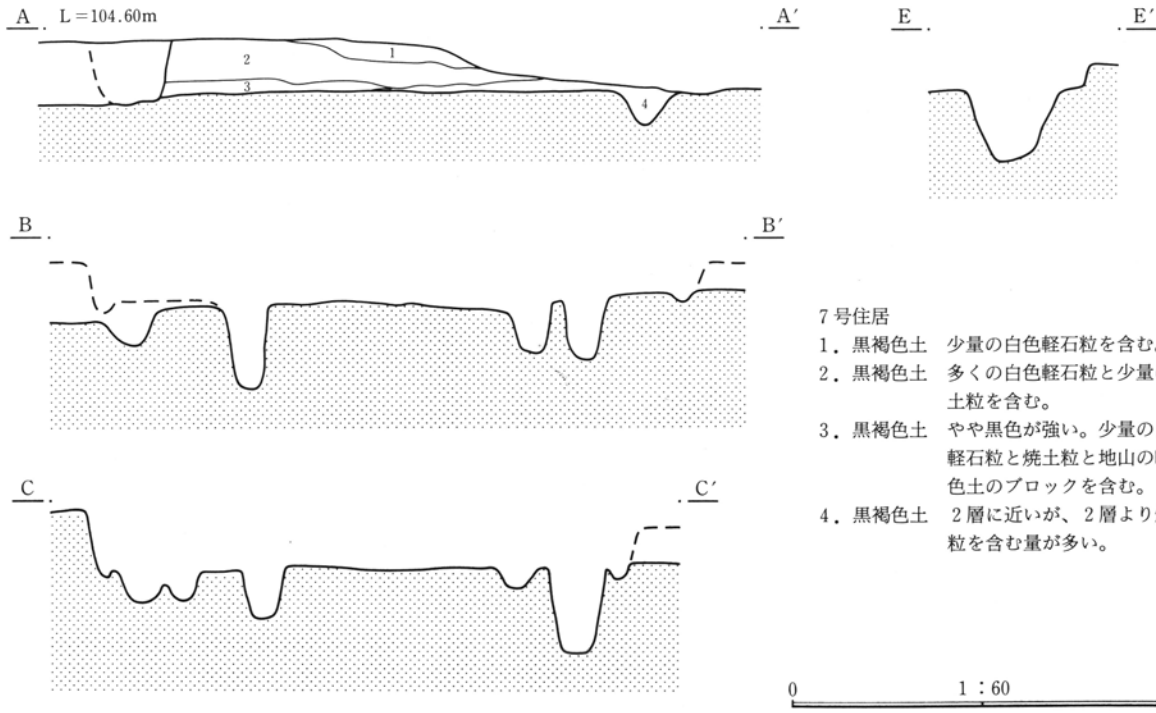
柱　穴　柱穴が４本小穴が４本掘られていた。規模は、柱穴１が径45cm深さ45cm、柱穴２が径50cm深さ60cm、柱穴３が径33cm深さ40cm、柱穴４が径38cm深さ68cm、小穴１が長径46cm短径31cm深さ45cm、小穴２が径30cm深さ18cm、小穴３が径30cm深さ28cm、小穴４が径36cm深さ30cmである。

貯蔵穴　竈右側に貯蔵穴が掘られていた。長径78cm、短径70cm深さ51cmである。

遺　物　甕を中心に多くの遺物が出土した。

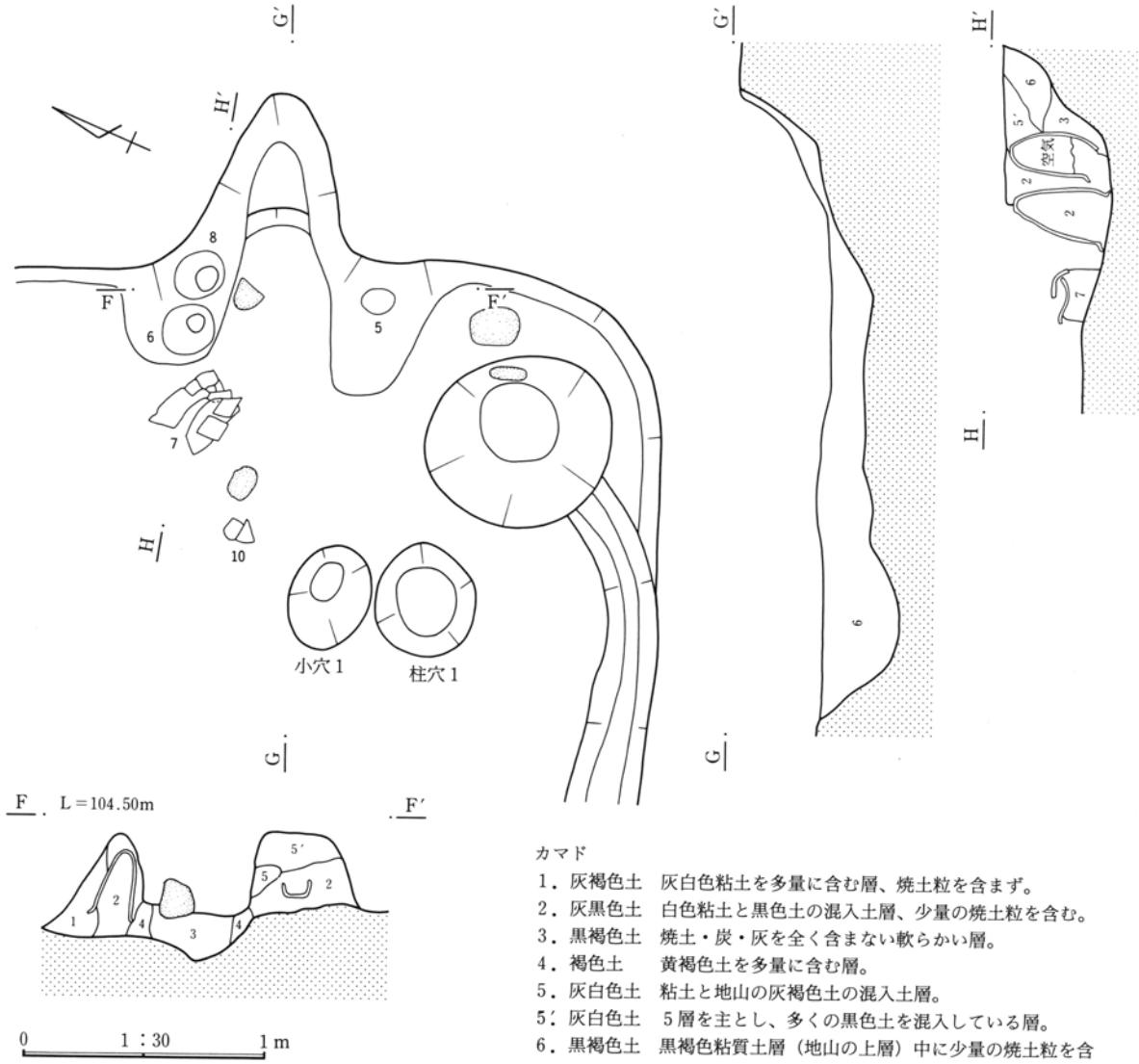
所　見　片側の袖に２個の甕が据えられていた例は少ない。出土遺物から、古墳時代後期７世紀前半の住居と考えられる。





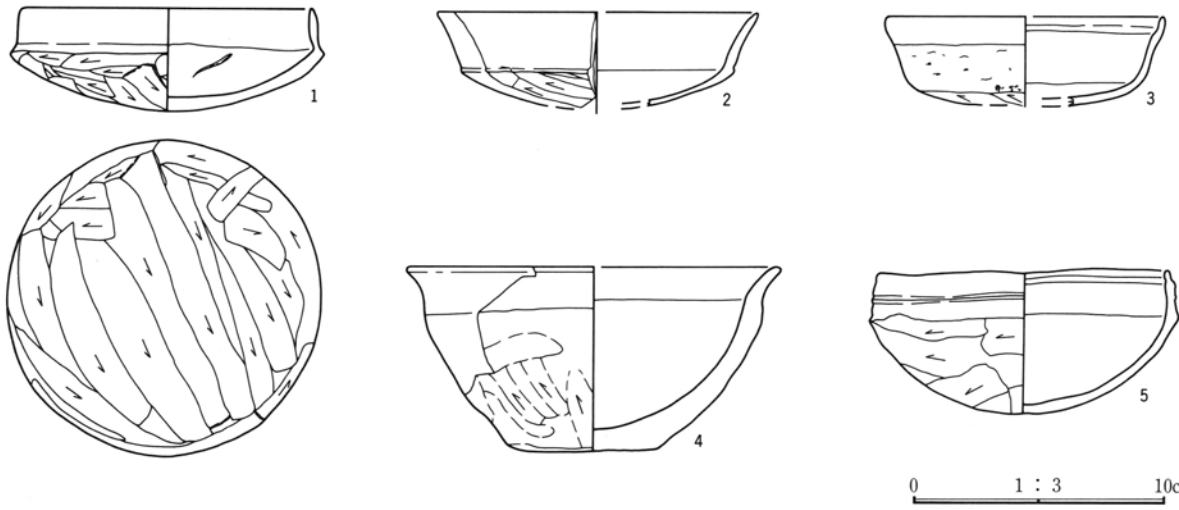
７号住居
１．黒褐色土　少量の白色軽石粒を含む。
２．黒褐色土　多くの白色軽石粒と少量の焼土粒を含む。
３．黒褐色土　やや黒色が強い。少量の白色軽石粒と焼土粒と地山の暗褐色土のブロックを含む。
４．黒褐色土　２層に近いが、２層より焼土粒を含む量が多い。

第21図　７号住居跡（１）

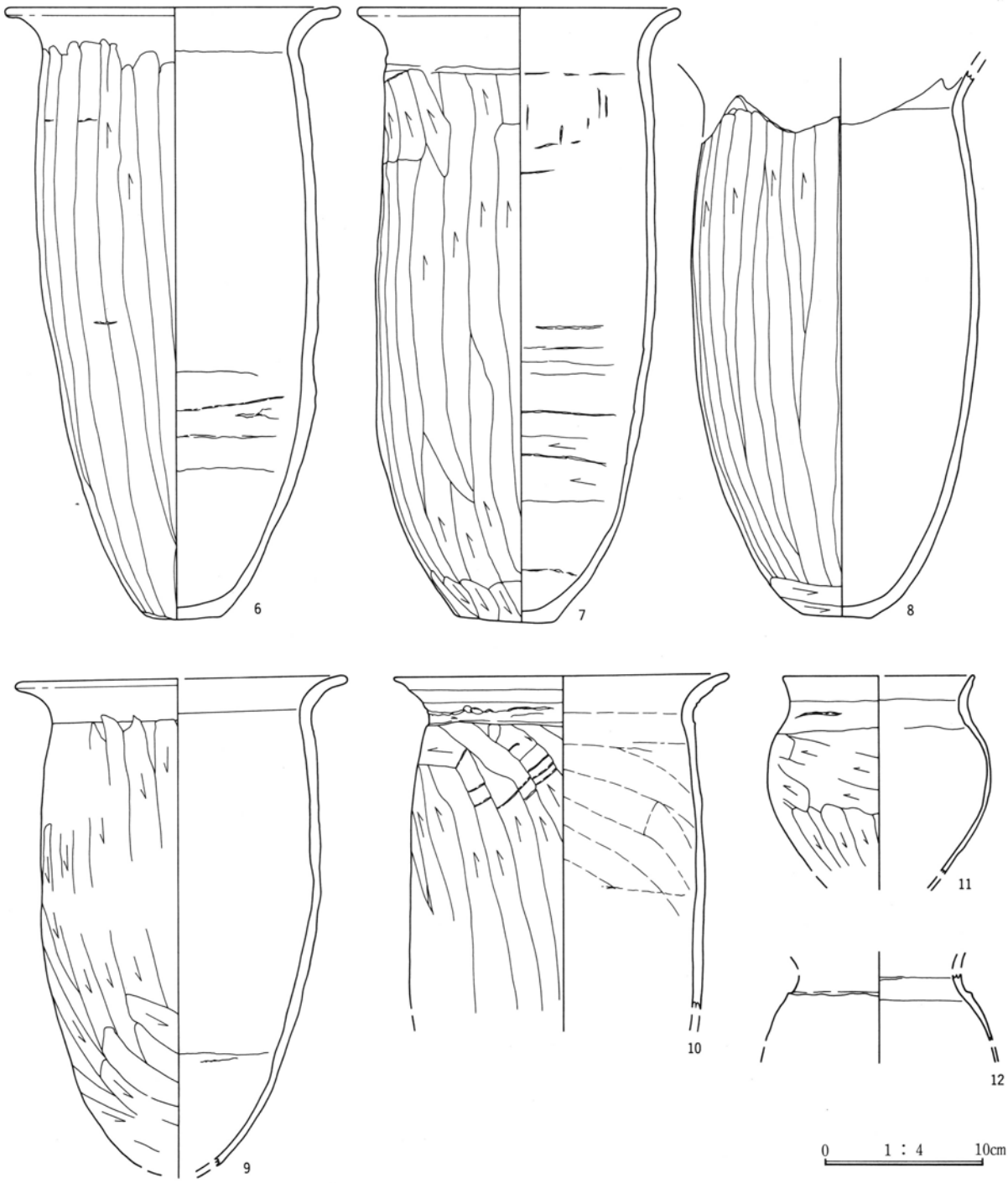


カマド

1．灰褐色土　灰白色粘土を多量に含む層、焼土粒を含まず。
2．灰黒色土　白色粘土と黒色土の混入土層、少量の焼土粒を含む。
3．黒褐色土　焼土・炭・灰を全く含まない軟らかい層。
4．褐色土　黄褐色土を多量に含む層。
5．灰白色土　粘土と地山の灰褐色土の混入土層。
5′．灰白色土　５層を主とし、多くの黒色土を混入している層。
6．黒褐色土　黒褐色粘質土層（地山の上層）中に少量の焼土粒を含む層、固くしまっている。
7．黒褐色土　やや黒色が強く、固くしまっている。



第22図　７号住居跡（２）・出土遺物（１）



第23図　７号住居跡出土遺物（２）

７号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
22-1 32	土師器 坏	床面＋２ 完形	口 11.6 高　4.0 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。底面ヘラ削り。削りの単位は明瞭である。 黒班は全く付着していない。
22-2	土師器 坏	床面-4.5 小破片	口(12.6) 高（4.0） 底　—	①密、１㎜以下の砂粒を少量含む ②酸化焔 硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、胎土が粉状で削りの単位不明瞭。口縁胎土が粉状を呈している。

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
22-3	土師器 坏	覆土 口1/4 底1/10	口(11.0) 高　— 底　—	①密、少量の輝石粒を含む。 ②酸化焔 硬質 ③明褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 口縁部内側上端近くに浅い一条の沈線あり。
22-4 32	土師器 坏	覆土 口～体1/5 底部4/5	口(14.8) 高　7.3 底　6.0	①密、0.5㎜前後の白色粒を多く赤色粒を少量含む。②酸化焔 硬質③にぶい黄橙色	底面ヘラナデ。体部外面指ナデ。口縁部横ナデ。 内側器表面はあれている。 内面吸炭による黒色を呈している。
22-5 32	土師器 坏	右袖中 完形	口 11.6 高　5.6 底　—	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	底部外面ヘラ削り。口縁部中央に２本の沈線。 内側に一本の沈線を持つ。全体に歪んでいる。
23-6 32	土師器 甕	左袖中 ほぼ完形	口 21.3 高 38.5 底　5.0	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色　にぶい黄橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動は少ない。 口縁部横ナデ。胴部内面下半の輪積、接合部分ヘラ削り。カマド左袖の芯材として使用。
23-7 32	土師器 甕	床面＋３ 口～底2/3	口(21.0) 高 38.7 底 (6.0)	①１～２㎜の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ヘラナデ、胴部外面ヘラ削り、削りの単位が明瞭で、多量の砂粒が目だつ。 胴部内面に多くの輪積痕が残る。
23-8 33	土師器 甕	左袖中 図示部分 完形	口　— 高　— 底　4.1	①１㎜前後の多くの砂粒と２㎜前後の赤色粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③明褐色	胴部外面ヘラ削り、削りの単位明瞭に残る。胴部内面ナデにて器表面密。底部外面ヘラ削り。ヘラ削りによる砂粒の移動はない。カマド左袖の芯材。
23-9 32	土師器 甕	カマド覆土 口縁2/3 胴部1/2	口 21.0 高(30.5) 底　—	①１～２㎜の石英粒と２～３㎜の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、多くの砂粒が移動し器表面あらい。内面ナデにて器表面密。胴部の上下面は別箇所からの図上復元。
23-10 33	土師器 甕	カマド 口縁完形 胴上半1/2	口 21.1 高　— 底　—	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、砂粒は目だつが移動は少ない。 胴部内面ヘラナデにて器表面密。
23-11 32	土師器 小型甕	覆土 1/2	口(12.0) 高　— 底　—	①１㎜以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	胴部外面上半横方向ヘラ削り、下半下方向ヘラ削り、頸部横方向浅い刷毛目。
23-12	土師器 小型甕	覆土 小破片	口　— 高　— 底　—	①１㎜以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③表面橙色　断面にぶい黄橙色	短頸の壺の破片と思われる。胎土が粉状であり、整形痕不明。黒斑は全く認められない。

石番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
13 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	15.6　7.7　2.7　680	長方形で扁平な石で、一側面がゆるやかな凹状面となっている。全体が摩耗。	床面＋3.0
14 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	13.9　6.6　4.1　610	断面半円状を呈する。側面中央部にわずかな凹状部が認められる。	床面＋3.5
15 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	13.7　6.4　3.2　440	やや不定形な石である。側面中央部に明瞭な凹面は認められない。	床面＋3.0
16 43	こも編石	完形	砂岩	13.0　7.1　3.9　560	側面中央部に明瞭な凹面は認めらず、表面が密で光沢を持つ。	床面＋1.0
17 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	13.7　5.5　4.2　510	側面中央部にわずかな凹状部２ケ所認められる。	床面＋1.0
18 43	石	完形	粗粒輝石 安山岩	9.6　8.0　4.1　340	平面形で全体に丸い石である。こも編石ではないと思われる。	床面＋1.0
19 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	14.6　7.5　5.6　650	一側面が大きな凹状となっている。大きいが軽い石である。	床面－5.5
20 43	こも編石	一部欠損	粗粒輝石 安山岩	13.4　6.0　3.1　410	一側面を打ち欠いて凹状部を作っている。表面全体は摩耗している。	床面＋6.0
21 43	こも編石	完形	変質安山 岩	15.4　8.8　2.7　580	全体に扁平な石である。一側面中央部に２ケ所打ち欠いたような凹状部あり。	床直
22 43	こも編石	完形	変質安山 岩	11.8　5.9　3.3　370	小さな石である。一側面中央部が凹状、他の側面中央部は凸状となっている。	床面＋11.5

８号住居（第24図　PL.3・33）

位　置　10D・E-10グリッド

重　複　なし

形　状　北側の壁面付近が撹乱を受けて残っていなかった。現状でおそらく南北方向に長い長方形を呈していると思われる。規模は東西方向で2.8m、南北方向は不明である。

面　積　不明　　**方　位**　N-20°-E

床　面　遺構確認面から６cm掘り込んで床面となる。

竈　東壁ほぼ中央と思われる位置に造られていた。残りが悪く不明な点が多いが、両袖と燃焼部の大部分は壁面を掘り込んで造られていたようである。燃焼部幅推定48cm、煙道部方向78cmである。竈内の煙道付近から多くの焼土粒の出土があった。

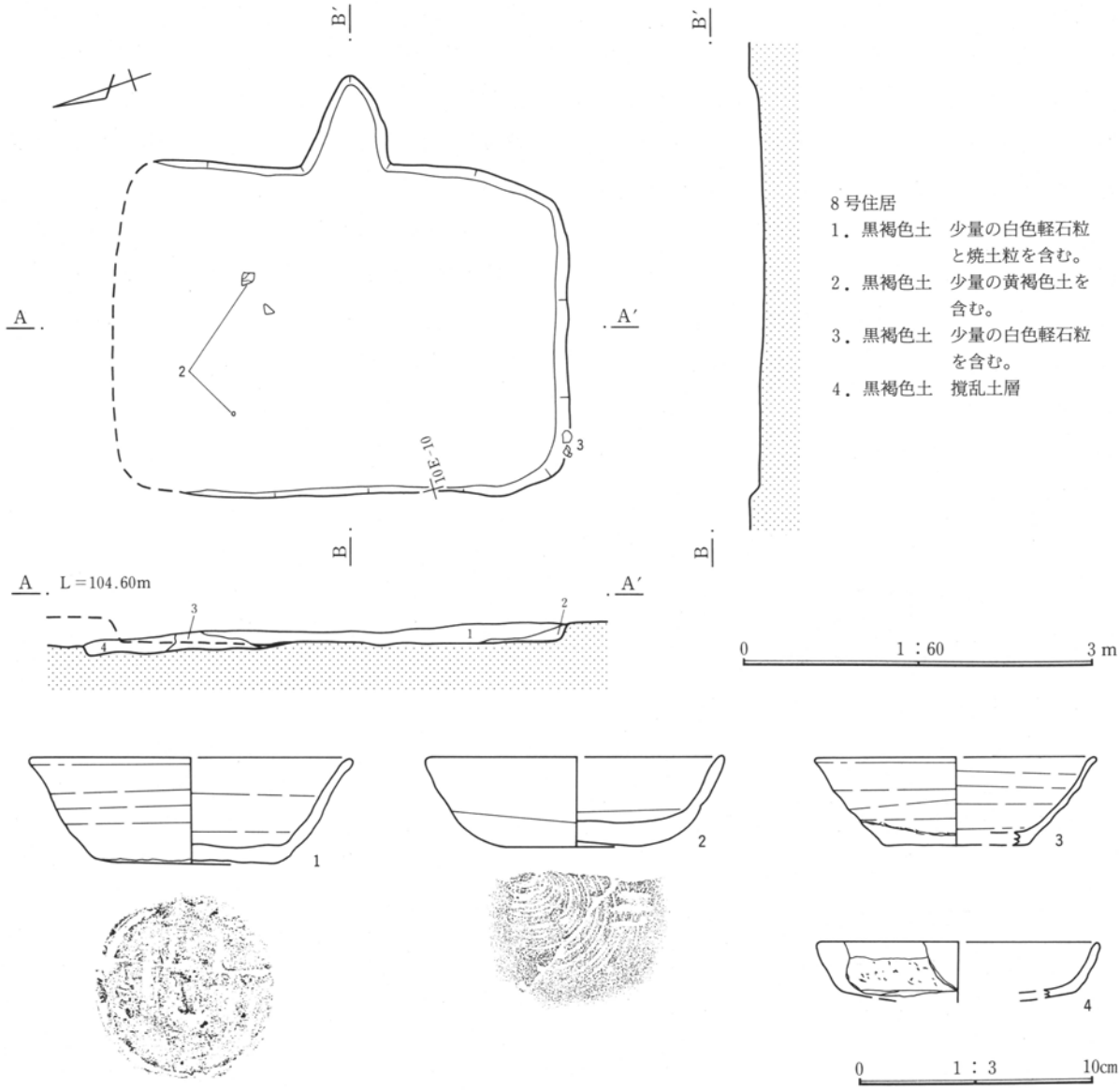
周　溝　掘られていなかった。

柱　穴　掘られていなかった。

貯蔵穴　掘られていなかった。

遺　物　４点図示した。１はヘラ切り２は糸切りでいずれも器肉の厚い須恵器坏で８世紀後半頃と思われる。３と４は９世紀に近いやや新しい要素をもっている。

所　見　全体に残りが悪く、遺物の出土量も少なかった。出土遺物から、８世紀後半の住居と考えられる。



第24図　８号住居跡・出土遺物

８号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
24-1 33	須恵器 坏	覆土 口縁1/2	口(13.7) 高　4.5 底 (8.2)	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②還元焔 硬質 ③灰黄色	底面ヘラ起し後、指等による再調整。 中央部に凸状突起が残る。
24-2 33	須恵器 坏	床面＋1.5 口縁1/2 底部2/3	口(12.7) 高　3.8 底 (7.7)	①１㎜前後白色粒を少量、１㎜以下の白色粒を多く含む。 ②還元焔 硬質 ③灰色	底面右回転糸切り痕、体部下端ヘラ削り。口縁部横ナデ。器肉の厚い坏である。
24-3	須恵器 坏	床面＋10 1/4	口(12.0) 高　3.8 底 (6.0)	①密、１～３㎜の白色粒を数個含む。②還元焔 硬質 ③灰色	底面回転糸切り痕。
24-4	土師器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 高　― 底　―	①少量の輝石を含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ヘラ削り、体部外面ナデ、口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。

９号住居（第25・26図　PL.3・33）

位　置　13A-９グリッド

重　複　なし

形　状　南北方向に長い長方形を呈している。規模は東西方向で2.02m、南北方向で2.75mである。

面　積　5.43m²　　**方　位**　N-５°-W

床　面　遺構確認面から40cm掘り込んで床面となる。

竈　東壁南寄りに造られていた。両袖と燃焼部の一部が床面上に位置し、燃焼部と煙道部が壁面を掘り込んで造られていた。右袖は壁面から28cm、左袖は壁面から32cm残存していた。燃焼部幅推定50cm、煙道部方向92cmである。竈内の煙道付近から多くの焼土粒の出土があった。

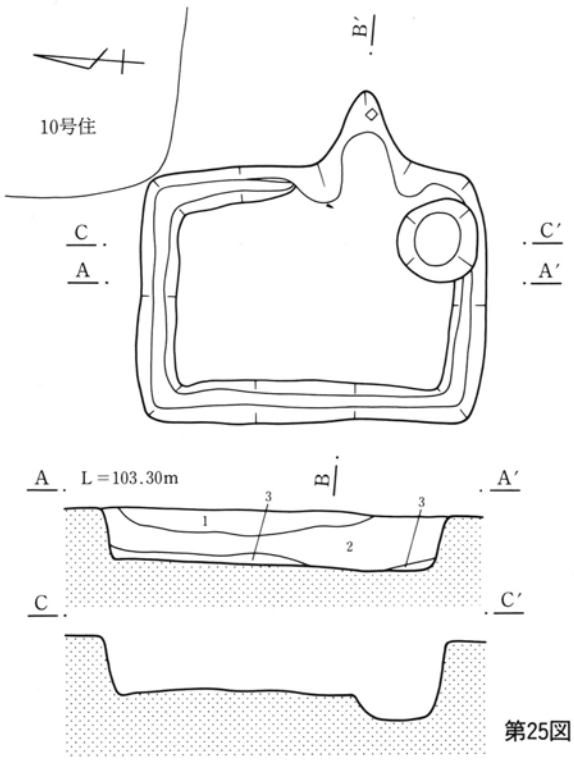
周　溝　竈と貯蔵穴部分以外の壁面下に掘られていた。幅25cm深さ２～５cmであった。

柱　穴　掘られていなかった。

貯蔵穴　竈右側に掘られており、規模は径61cm、深さ26cmである。

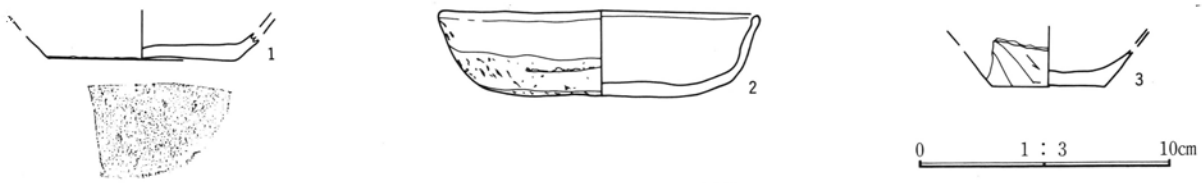
遺　物　覆土中より少量出土している。１の須恵器坏は底部ヘラ切りで８世紀でも古い要素を持ち、２と３の土師器坏と甕底部は新しい要素を持つ。

所　見　出土遺物から、８世紀後半の住居と考えられる。



９号住居
1．黒褐色土　少量の焼土粒と炭化物を含む。
2．黒褐色土　多くの焼土粒と少量の炭化物と白色軽石粒を含む。
3．暗褐色土　少量の地山の褐色土を小ブロックとして含む。

第25図　９号住居跡　0　1：60　3 m



第26図　９号住居跡出土遺物

９号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
26-1	須恵器 坏	覆土 小破片	口 — 高 — 底 (7.4)	①１mm前後の長石粒を少量含む。 ②還元焔 硬質 ③灰色	底部外面ヘラ起し後回転ヘラ調整。 口縁部下端にヘラ削りなし。
26-2 33	土師器 坏	覆土 2/3	口 12.7 高 3.4 底 10.0	①１mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。 胴部～底部外面小さな亀裂状の表面。 全体に歪んでいる。
26-3	土師器 甕	覆土 小破片	口 — 高 — 底 (2.2)	①密、１mm以上の砂粒含まず。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい赤褐色	底部内面ナデ、外面ヘラナデ。胴部下端ヘラ削り。

10号住居（第27～29図　PL.3・４・33・43）

位　置　10T-９・10グリッド

重　複　なし

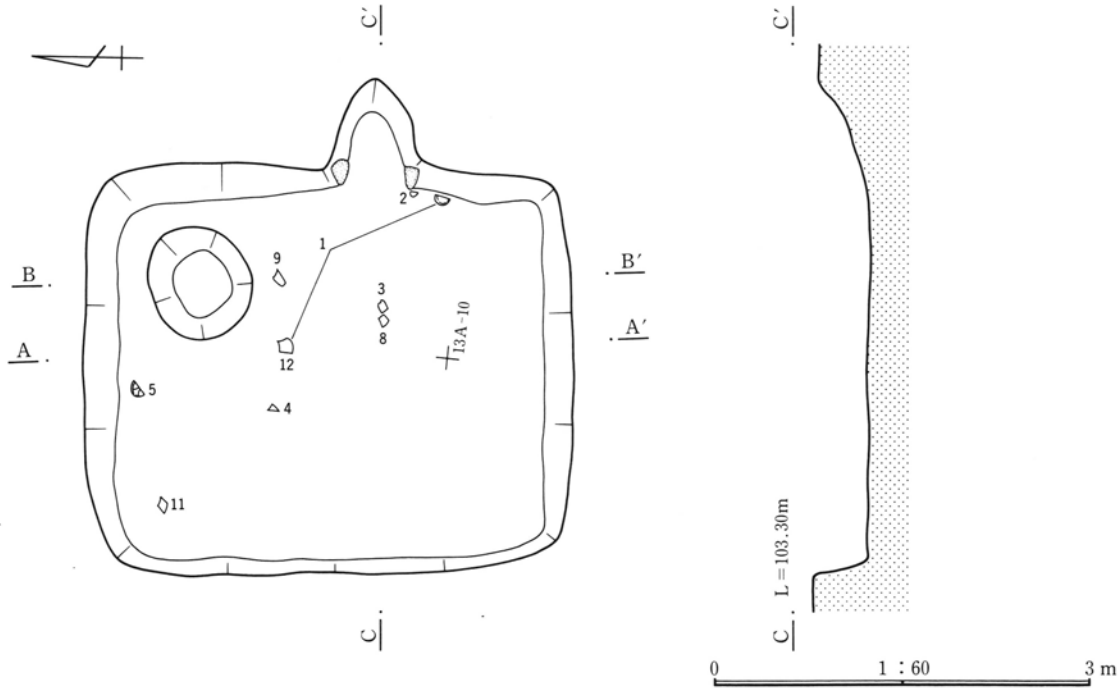
形　状　南北方向に長い長方形を呈している。規模は東西方向で3.3m、南北方向で3.9mである。

面　積　12.10m²　　**方　位**　N-３°-W

床　面　遺構確認面から42cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平に造られており、特に踏み固められた堅い面の確認は出来なかった。

竈　東壁南寄りに造られていた。両袖石が床面上ではなく、壁面を掘り込んだ位置に据えられていた。竈の大部分は壁面を掘り込んで造られていたようである。規模は燃焼部幅44cm、煙道部方向88cmである。竈内の煙道付近から多くの焼土粒の出土があった。

周　溝　掘られていなかった。



第27図　10号住居跡（１）

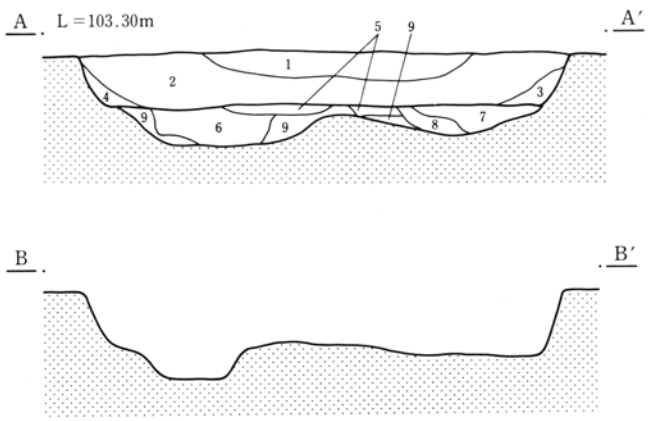
柱　穴　掘られていなかった。

貯蔵穴　竈左側に掘られており、規模は径80cm、深さ26cmである。

床　下　床面調査後床下を調査したところ、多くの床下土坑が掘られていた。それぞれの土坑の床面からの深さは、図上に数字で示した。

遺　物　比較的多く出土しているが破片が多い。土師器の坏が９世紀後半まで多く残っているのが、この地域の特徴と思われる。

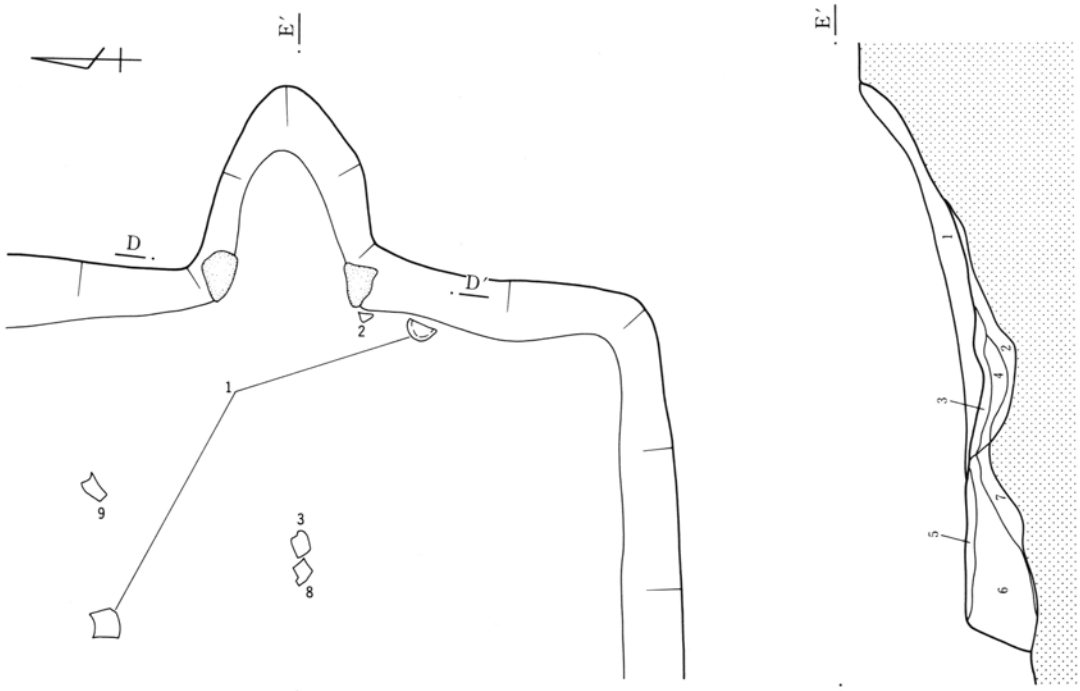
所　見　出土遺物から、９世紀後半の住居と考えられる。

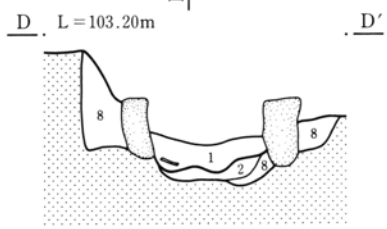


10号住居

1．暗褐色土　少量の白色軽石粒と焼土粒と炭化物を含む。
2．黒褐色土　多くの焼土粒と炭化物・少量の白色軽石粒を含む。
3．黒褐色土　少量の焼土粒と炭化物を含む。粘性の強い層。
4．灰褐色土　粘性は強いが軟質の層である。
5．黒褐色土　黄白色ブロックを全体に少量含む。踏み固められた床面。
6．黒褐色土　多くの焼土粒と少量の黄白色粒を含む。粘性あり。
7．黒褐色土　少量の焼土粒と炭化物を含む。
8．暗黄褐色土　黒褐色土を主とし、多くの淡黄褐色土粒を含む層。
9．淡黄褐色土　地山の淡黄褐色土粒とブロックを多く含む層。

0　1：60　3 m



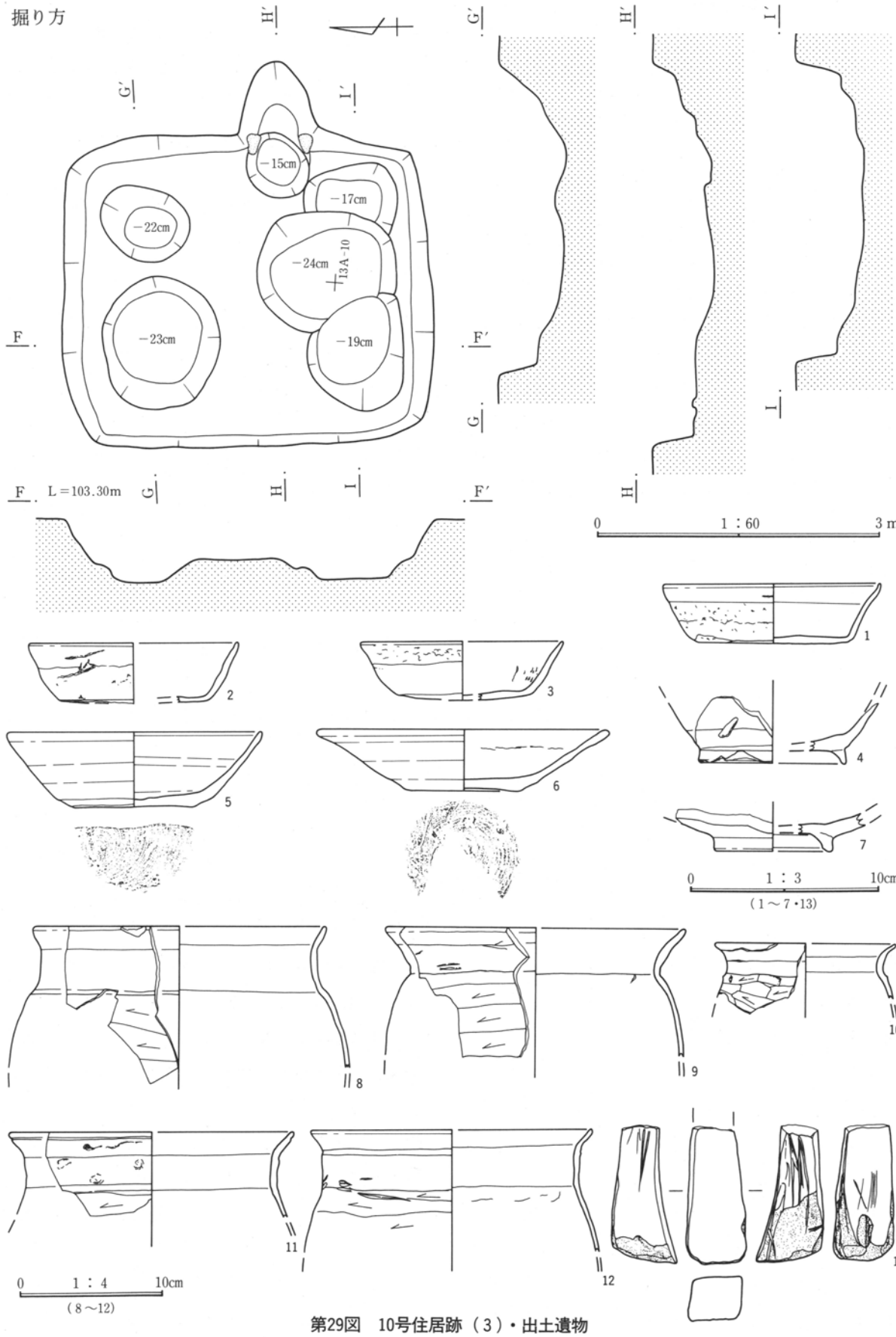


カマド

1．黄褐色土　多くの焼土粒を含む。
2．暗褐色土　地山の淡黄褐色土粒を主とし、焼土粒をわずかに含む。
3．黒色土　少量の焼土粒・炭・灰を含む。
4．黒褐色土　少量の焼土粒と黄褐色土を含む。
5．黒褐色土　淡黄褐色土粒を多く含む固い層。（床面）
6．暗褐色土　多くの淡黄褐色土粒とブロックを含む。
7．黒褐色土　多くの淡黄褐色土を含む。軟質の層。
8．淡黄褐色土　地山の層

0　1：30　1 m

第28図　10号住居跡（２）



第29図　10号住居跡（３）・出土遺物

10号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
29-1 33	土師器 坏	床直 1/2	口 11.4 高　3.1 底　8.1	①黒色の輝石を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。口縁～底部外面小さな亀裂状の凹凸あり。全体に器肉が薄い、少し歪んでいる。
29-2	土師器 坏	床面＋1.5 1/5	口(11.0) 高　— 底　—	①密、黒く光る少量の輝石を含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ナデ、多くの亀裂状の凹部が残る。 口縁部横ナデ。全体に少し歪んでいる。
29-3	土師器 坏	床面＋2.5 覆土 1/3	口(10.6) 高　— 底　—	①密 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部～内面横ナデにより器表面密。体部外面ナデ。小さな坏である。
29-4	須恵器 高台付埦	床面＋2.3 小破片	口　— 高　— 底 (7.8)	①密、１㎜以下の白色粒を多く含む。②還元焔 硬質 ③灰色	高台部内側回転ナデ、高台断面は三角形に近く丁寧に貼り付けている。体部下端回転ヘラ削り。
29-5 33	須恵器 坏	床面＋3.5 1/2	口(13.4) 高　4.0 底 (6.4)	①１㎜以下の白色粒を多く含む。 ②還元焔 硬質 ③灰色	口縁部弱いロクロ目、底部外面右回転糸切り痕。内側底面中央がわずかに凹状となる。
29-6 33	須恵器 皿	覆土 3/4	口 15.4 高　3.2 底　6.0	①１～５㎜の長石粒を少量含む。 ②還元焔 硬質 ③灰色	口縁部内外面回転横ナデ。底面に右回転糸切り痕。多くの砂粒の目だつやや雑な作りである。
29-7	土師器 高台付埦	覆土 小破片	口　— 高　— 底 (6.2)	①密、１㎜以上の砂粒含まず。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	高台部内側回転ナデで糸切り痕なし、高台は丁寧に貼り付けている。胎土がやや粉状を呈している。
29-8	土師器 甕	床面＋12 小破片	口(20.8) 高　— 底　—	①密 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
29-9	土師器 甕	床面＋６ 小破片	口(21.2) 高　— 底　—	①密、0.5㎜以下の砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③橙色	肩部横方向ヘラ削り。内面ナデにて器表面密。
29-10	土師器 小型甕	覆土 小破片	口(12.6) 高　— 底　—	①密 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	肩部ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
29-11	土師器 甕	床面＋11 小破片	口(21.2) 高　— 底　—	①密、１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	肩部横方向ヘラ削り。頸部にわずかに指頭圧痕。口縁部に輪積痕。口唇部付近に一条の沈線。
29-12 33	土師器 甕	床面＋6.5 口縁2/3 胴部1/3	口 12.0 高 (8.6) 底　—	①密、１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	口縁部横ナデ、胴部外面横方向ヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。

挿図番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
29-13 43	砥石	破片	砥沢石	7.1　3.2　3.5　90	表裏面とも砥石として使用され摩耗している。両側面に鋭利なＶ字状の溝あり。	覆土

11号住居（第30図　PL.4・33）

位　置　14A-３・４グリッド

重　複　西側の壁面部分で古墳時代後期の12号住居と重複しており、12号住居に重複部分を掘り込まれている。12号住居は住居中央を同じ古墳時代後期の16号住居により床下部分まで深く掘り込まれている。３軒の新旧関係は11号住居→12号住居→16号住居となっている。

形　状　東西方向に長い長方形を呈している。規模は東西方向3.16m、南北方向2.70mである。

面　積　7.92㎡　　**方　位**　N-16°-W

床　面　遺構確認面から22cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で、踏み固められて硬化した床面は確認できなかった。

埋没土　少量の灰白色軽石粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

炉　　床面中央部がやや低くなっており、少量の焼土と炭が出土した。また炉の床面が熱を受けて淡い橙色に変色していた。炉の規模は東西40cm、南北49cm、深さ４cmである。

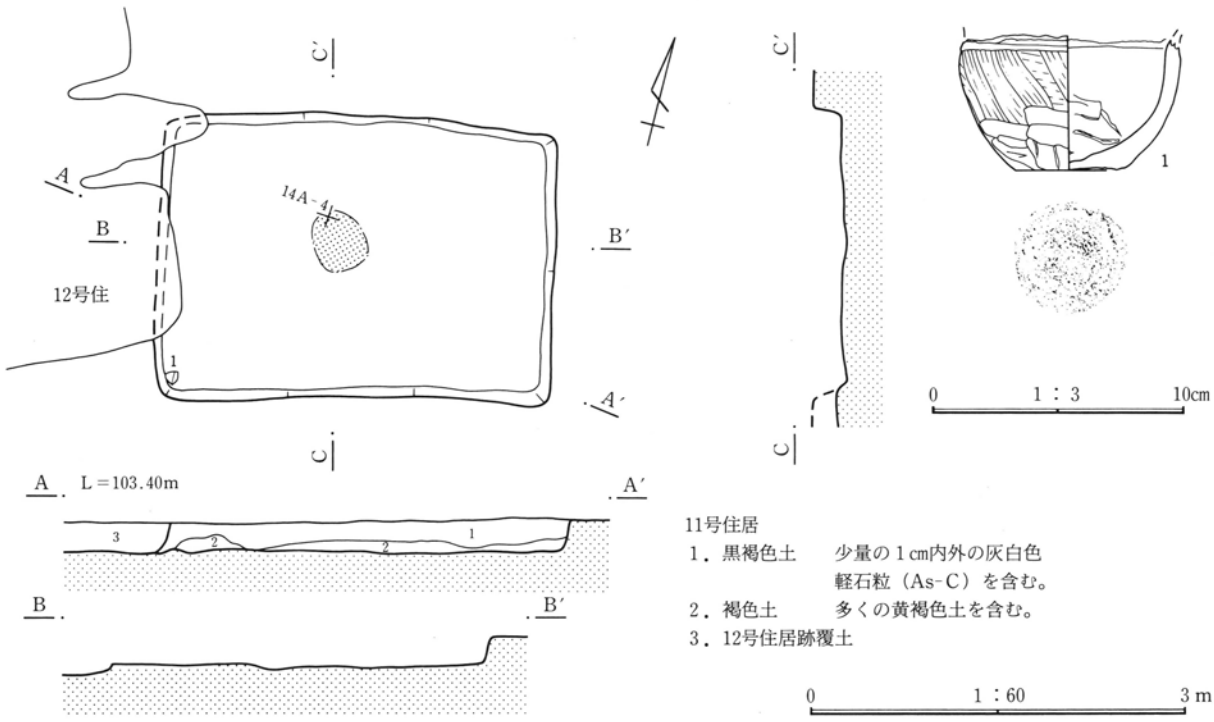
周　溝　掘られていなかった。

柱　穴　掘られていなかった。

貯蔵穴　掘られていなかった。

遺　物　少量出土している。

所　見　調査時点において土の識別が困難であったために、南壁面部分上半部を少し南側まで掘り過ぎた。出土遺物が少ないが、出土している土器は5世紀前半代であり、その時期の住居と考えられる。



第30図　11号住居跡・出土遺物

11号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
30-1 33	土師器 坏	床面＋2 図示部分 完形	口 — 高 — 底 —	①1㎜以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③赤褐色	胴部外面上部刷毛目、下部ヘラナデ、底部ナデ、底部中央がわずかに凹状になっている。丁寧な作りである。

12号住居（第31・32図　PL.4・33・34・43）

位　置　11T-2・3グリッド

重　複　住居南東コーナーの壁面部分で古墳時代前期の11号住居と重複しており、本住居が11号住居を掘り込んでいる。また本住居より小さな同じ古墳時代後期の16号住居全体が、住居中央で重複しており、16号住居により本住居の床下部分深くまで掘り込まれている。3軒の新旧関係は11号住居→12号住居→16号住居となっている。

形　状　ほぼ正方形を呈している。規模は東西方向が5.95m、南北方向は竈付近で6.05mである。

面　積　28.22㎡　　**方　位**　N-26°-W

床　面　遺構確認面から31cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で、竈手前部分が踏み固められて少し硬化していた。竈手前部分には少量の焼土が残っていた。

埋没土　少量の白色軽石粒と明黄褐色土を含む黒褐色土で埋まっていた。

竈　東壁の南寄りに竈が造られていた。両袖と燃焼部の多くが床面上に位置しており、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んで造られていた。右袖は壁面から78cm、左袖は壁面から72cm残存していた。

燃焼部幅45cm、煙道部方向108cmである。竈内から多くの焼土粒が出土した。また壁面の一部が焼土化していた。

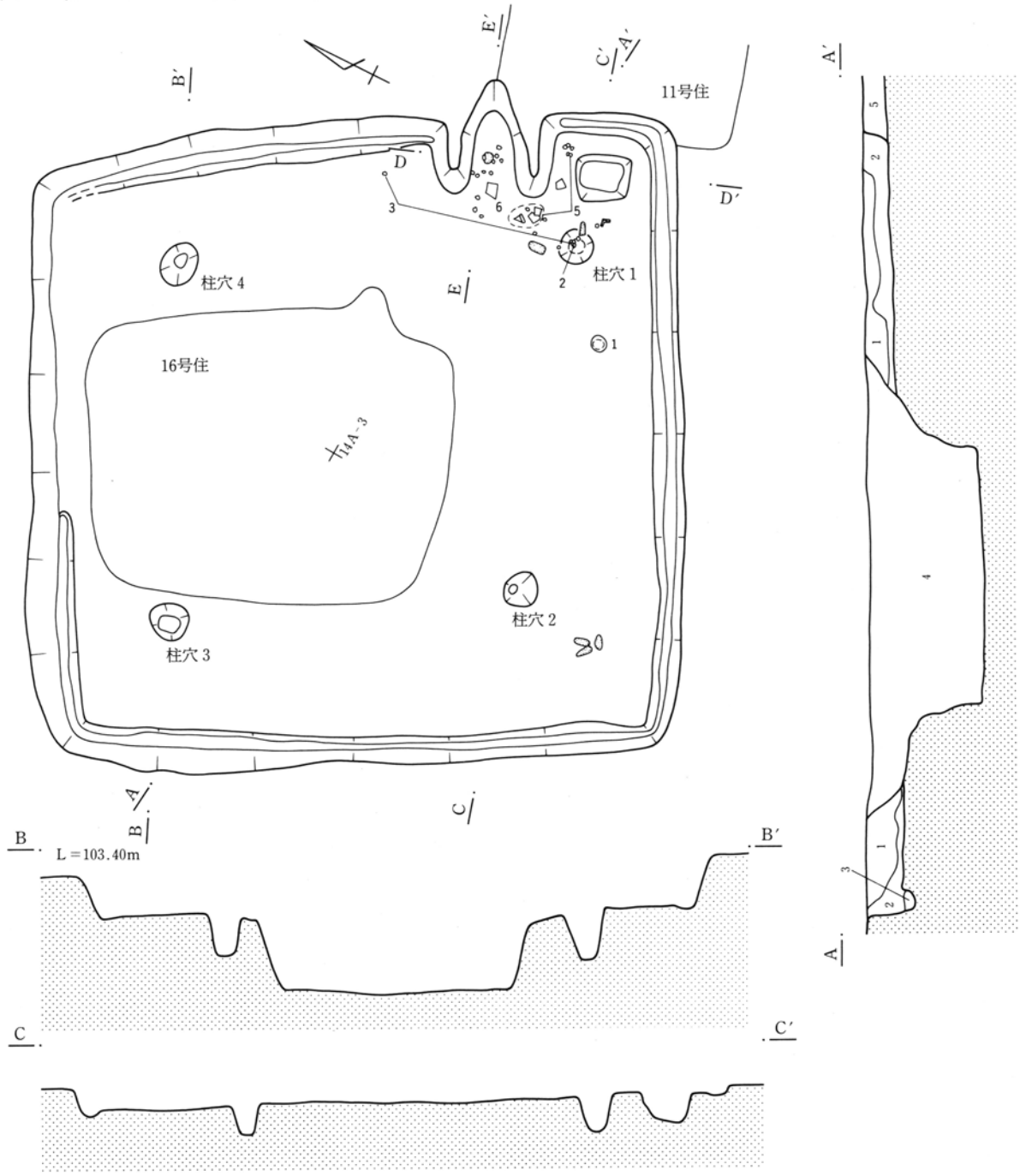
周　溝　北壁東側が一部不明であるが、その部分以外では掘られていた。幅25cm深さ４～６cmである。

柱　穴　４本掘られていた。規模は、柱穴１が径31cm深さは不明である。柱穴２が径33cm深さ17cm、柱穴３が径35cm深さ23cm、柱穴４が径36cm深さ32cmである。

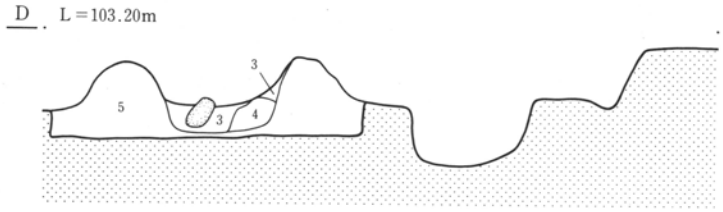
貯蔵穴　竈右側に浅い貯蔵穴が掘られていた。長径50cm、短径45cm、深さ27cmである。

遺　物　竈手前部分から多く出土している。５の坏は内面全面ヘラ磨きされており、やや異質な土器である。

所　見　出土遺物から、７世紀前半の住居と考えられる。

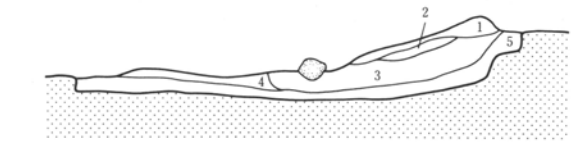


第31図　12号住居跡（１）



12号住居

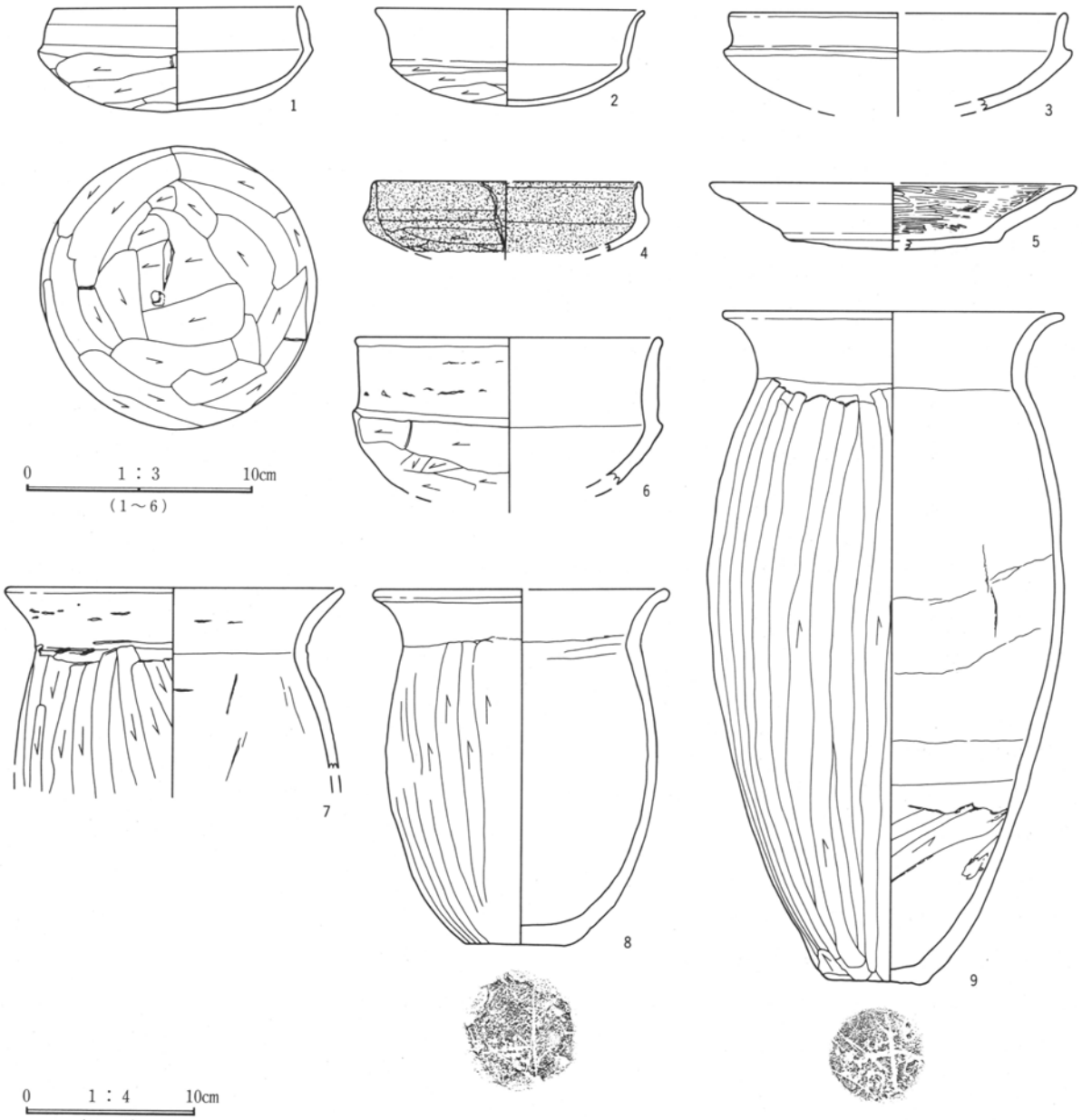
1．黒褐色土　多くの白色軽石粒と少量の焼土粒を含む。
2．明褐色土　明黄褐色土を多く含む粘性のやや強い層。
3．灰褐色土　多くの砂質の黄褐色土を含む。
4．16号住居跡覆土
5．11号住居跡覆土



カマド

1．黒褐色土　少量の焼土粒を含む。
2．黒褐色土　少量の焼土粒と炭をブロック状に含む。
3．黒褐色土　多くの焼土粒と炭を含む。
4．暗褐色土　少量の焼土粒と炭を含む。
5．灰黄褐色土　５㎜前後の砂粒を含む。地山を主とした層。

0　1：30　1 m



0　1：3　10cm
（1～6）

0　1：4　10cm
（7～9）

第32図　12号住居跡（２）・出土遺物

12号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
32-1 33	土師器 坏	床面＋10 完形	口 10.8 高　4.5 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③褐色	底面ヘラ削り、削りの単位明瞭。口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。全体に均一のとれた坏である。
32-2 33	土師器 坏	床面-2.5 4/5	口(11.3) 高　4.2 底　—	①多くの１㎜以下の砂粒と少量の赤色粒を含む粉状。 ②酸化焔 硬質 ③橙色一部黒色	口縁部横ナデ、内面ナデ、底部外面ヘラ削り。 胎土が粉状のため削りの単位不明瞭。 表面全面に黒漆の痕跡あり。
32-3 33	土師器 坏	床面＋2.5 カマド 小破片	口(14.8) 高　— 底　—	①密、砂粒はほとんど観察できない。②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色　底部黒褐色	底部ヘラ削りと思われるが、痕跡が残っていない。内面ナデにて器表面密。胎土が密でやや粉状を呈している。
32-4	土師器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 高　— 底　—	①密、0.5㎜以下の砂粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③表面黒褐色　断面にぶい黄橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。内外面とも、黒漆が塗られている。
32-5 33	土師器 坏	床面＋３ 1/2	口(16.0) 高 (2.8) 底 (9.3)	①１㎜以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	坏底面ヘラ削り。坏内面全面にわたりヘラ磨き。
32-6 33	土師器 坏	床面＋３ 口縁4/5 底部2/3	口 13.4 高　— 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。一部に輪積痕が残る。底部ヘラ削り。多くの砂粒が目だつ。
32-7 34	土師器 甕	カマド 口縁2/3 胴部1/3	口　9.8 高　— 底　—	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、砂粒の移動は少ないが目だつ。内面ナデにより器表面密。
32-8 34	土師器 甕	カマド前 口1/4胴 1/3底完	口 17.4 高 20.7 底　6.0	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色一部黒色	底部外面木葉痕。胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動は少ない。内面ナデにて器表面密。
32-9 34	土師器 甕	カマド前 口～胴1/2 底部完形	口 20.0 高 39.0 底　5.5	①密、１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③口～内面橙色　外面黒褐色	底部外面木葉痕。胴部外面ヘラナデ 、砂粒の移動は少ない。胴部内面下半部に接合痕。

石番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
10 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	14.3　8.0　4.8　670	断面三角形である。２側面が凹状を呈し一側面は凸状となっている。	床面＋15.0
11 43	こも編石	一部欠損	流紋岩	10.8　6.1　5.0　490	全体に火を受けて一部赤色化し、支脚石として使われた可能性あり。	床面＋9.0
12 43	こも編石	完形	石英閃緑岩	7.6　6.2　3.7　430	平面形三ケ月状であり一ケ所ゆるやかな凹状部となっている。全体的に摩耗。	床面＋2.5
13 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	10.7　5.7　2.8　350	小さな石でありやや不定形で２ケ所凹状面あり。全体的にゆるやかな凹状面。	床直
14 43	こも編石	完形	粗粒輝石 安山岩	14.3　4.8　4.0　340	表面全体が摩耗している。側面中央部２ケ所がゆるやか凹状面となっている。	床面＋1.5

13号住居（第33図　PL.4・34）

位　置　11S-７・８グリッド

重　複　なし

形　状　南北方向に長い長方形を呈している。規模は東西方向2.2m、南北方向3.7mである。

面　積　7.42㎡　　**方　位**　N-23°-E

床　面　遺構確認面から７㎝掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であるが、踏み固められて硬化した床面は確認できなかった。

埋没土　暗褐色土中に多くの木炭の破片が、また所々に焼土粒が混入していた。

炉　焼失住居であり、覆土や床面上に焼土粒や多くの炭が残っていた。それらを除去し調査したが確実な炉の確認はできなかった。

周　溝　掘られていなかった。

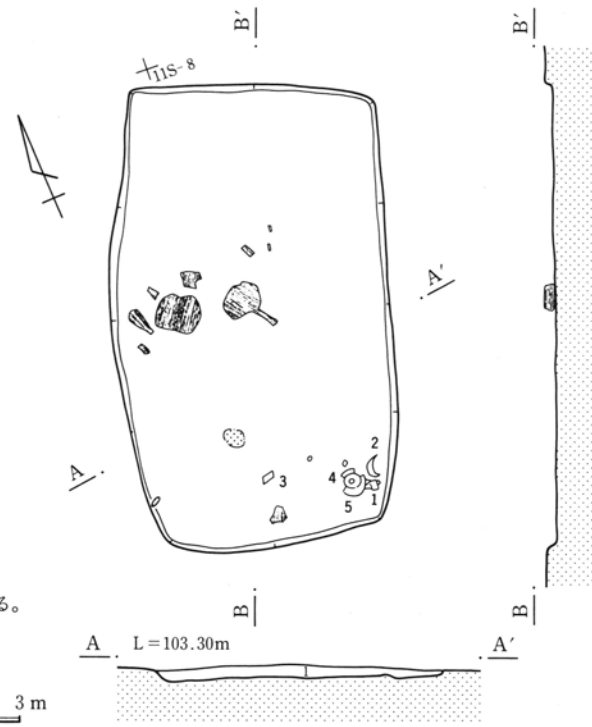
柱　穴　掘られていなかった。

貯蔵穴　掘られていなかった。

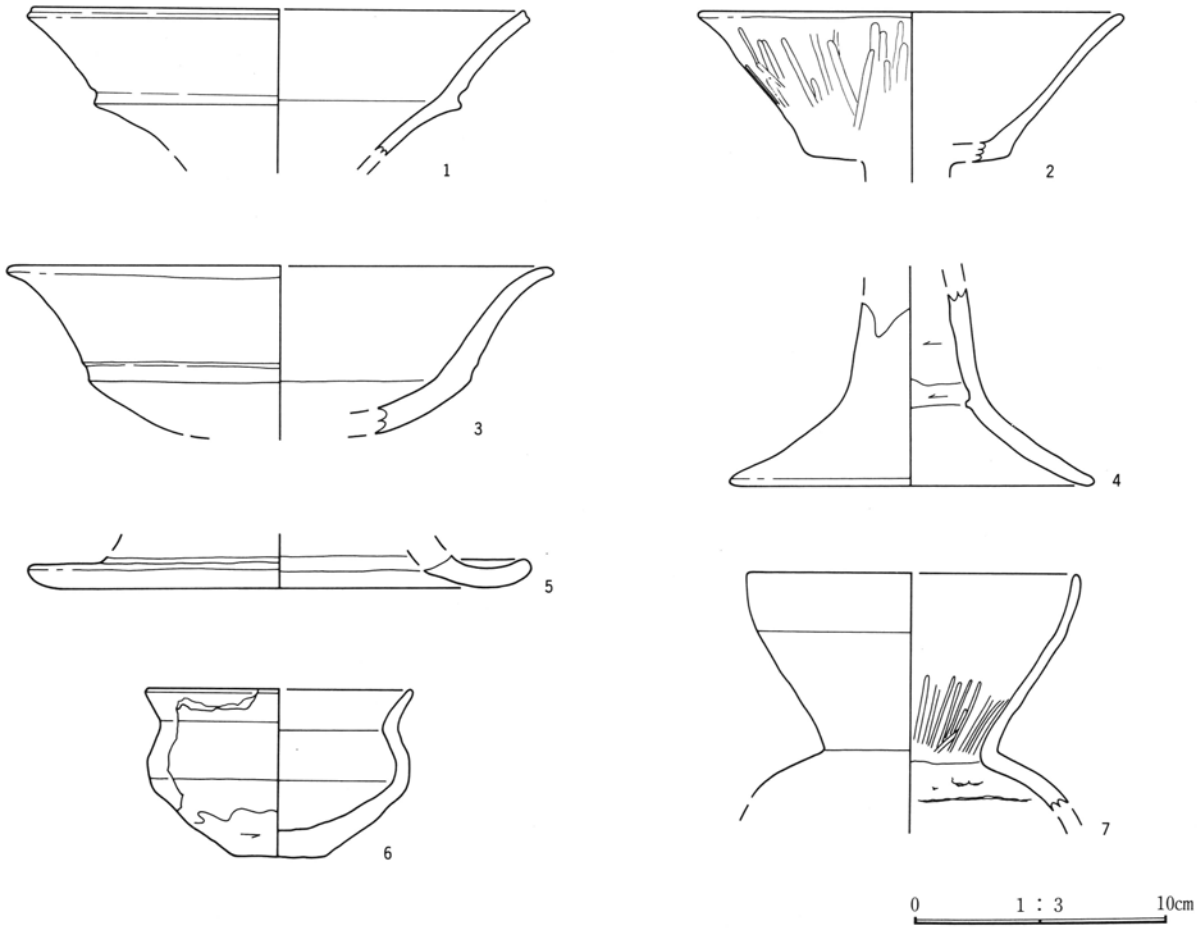
遺　物　南東コーナー部分で、床面に近い高さから坏類が多く出土している。第33図-５は有段高坏の下段の脚がそっくりはずれたものと思われる。

所　見　全体に残りの悪い住居であった。多くの炭が床面上に、また少量の焼土粒が覆土の所々に残っていた。おそらく焼失住居と思われる。

14号住居とともに、居館の区画溝外側に造られていた。14号住居は居館建設時に掘り直した９号溝により壊されているが、本住居はかろうじて削られていない。この13号住居は出土土器から見ておそらく居館に近い５世紀前半の住居と考えられる。



13号住居
１．暗褐色土　　木炭の小片が全体に入っている。
　　所々に焼土粒が混入している。



第33図　13号住居跡・出土遺物

13号住居跡出土遺物観察表

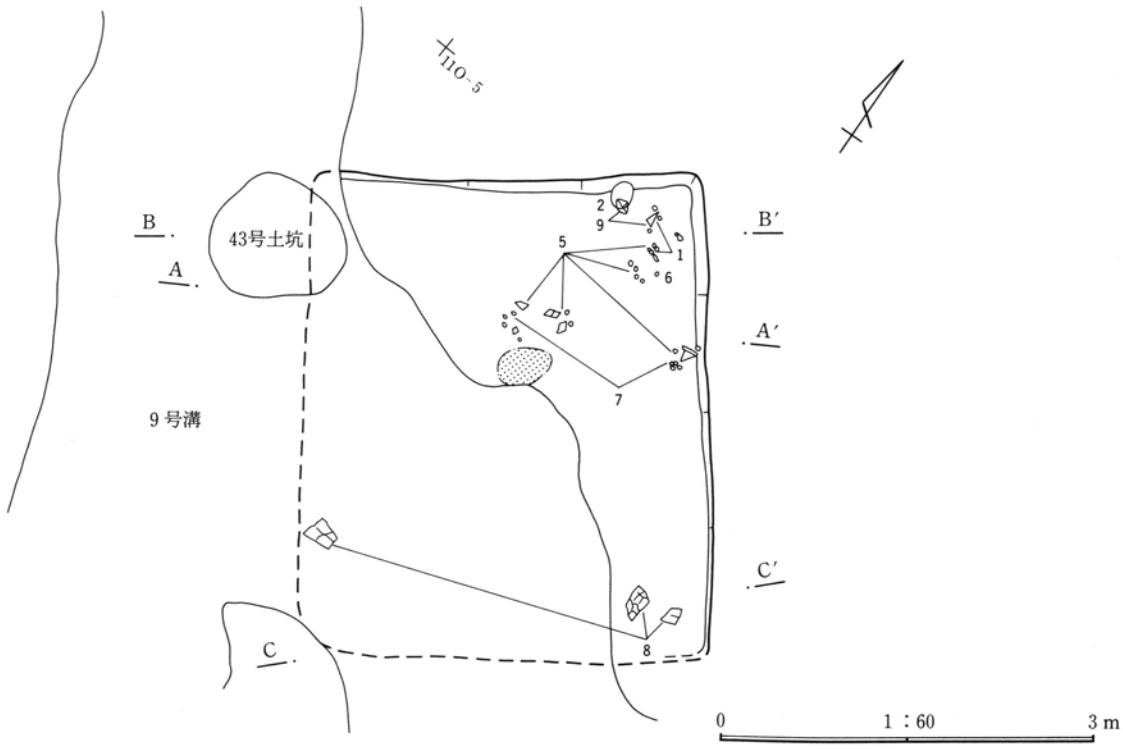
挿図番号 PL	土器種別 器　　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
33-1	土師器 高坏	床面＋4.5 1/4	口(19.8) 高　— 底　—	①１㎜前後の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	口縁部横ナデ、口唇部中央がわずかに凹状になっている。器表面全体があれている。有段坏、有段脚の高坏で坏部分と思われる
33-2 34	土師器 高坏	床面＋3.5 口縁4/5 底部1/5	口 16.3 高　— 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	底部外面ナデ。口縁部内外面ナデにて器表面密。口縁部外面に多くのヘラ磨き。器肉の薄い均一のとれた高坏である。
33-3	土師器 高坏	床面＋2.5 小破片	口(21.6) 高　— 底　—	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。底部内外面横ナデ。ヘラナデやヘラ磨きは行われていない。
33-4 34	土師器 高坏	床面＋4.5 図示部分 ほぼ完形	口　— 高　— 底 14.5	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	脚外面はヘラ磨き等の整形痕不明、ナデにて裾部分同様に器表面密。脚内面ヘラ削り。
33-5	土師器 高坏	床面＋4.5 図示部分 2/3	口 19.8 高　— 底　—	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	表面横ナデにより、器表面密。裏面には多くの砂粒が目だつ。有段坏、有段脚の高坏で脚下端部分と思われる。
33-6 34	土師器 埦	覆土 口小破片 他1/3	口(10.6) 高　— 底　3.8	①密、１㎜前後の砂粒をわずかに含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	底部外面と体部下半外面ヘラ削り、体部内面ナデにて器表面密。
33-7 34	土師器 坩	覆土 口縁1/6 肩部3/4	口 13.0 高　— 底　—	①密、１㎜以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③明黄褐色	口縁部横ナデ、口縁内面下半ヘラ磨き。肩部内面に輪積痕、肩部外面ナデで器表面密。

14号住居（第34～36図　PL.5・34）

位　置　11O-５グリッド

重　複　南西方向約半分を同じ古墳時代中期の９号溝により切り取られている。その後北西コーナー部分を同じ古墳時代中期の43号土坑により掘り込まれている。新旧関係は14号住居→９号溝→43号土坑である。

形状　長方形と思われるが全体が残っていないため明確でない。規模は推定で東西方向3.2m、南北方向3.8mである。



第34図　14号住居跡（１）

面　積　不明　　**方　位**　N-38°-E

床　面　遺構確認面から12cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であるが、踏み固められて硬化した床面は確認できなかった。

埋没土　黒色土中に多くの白色軽石粒が混入していた。

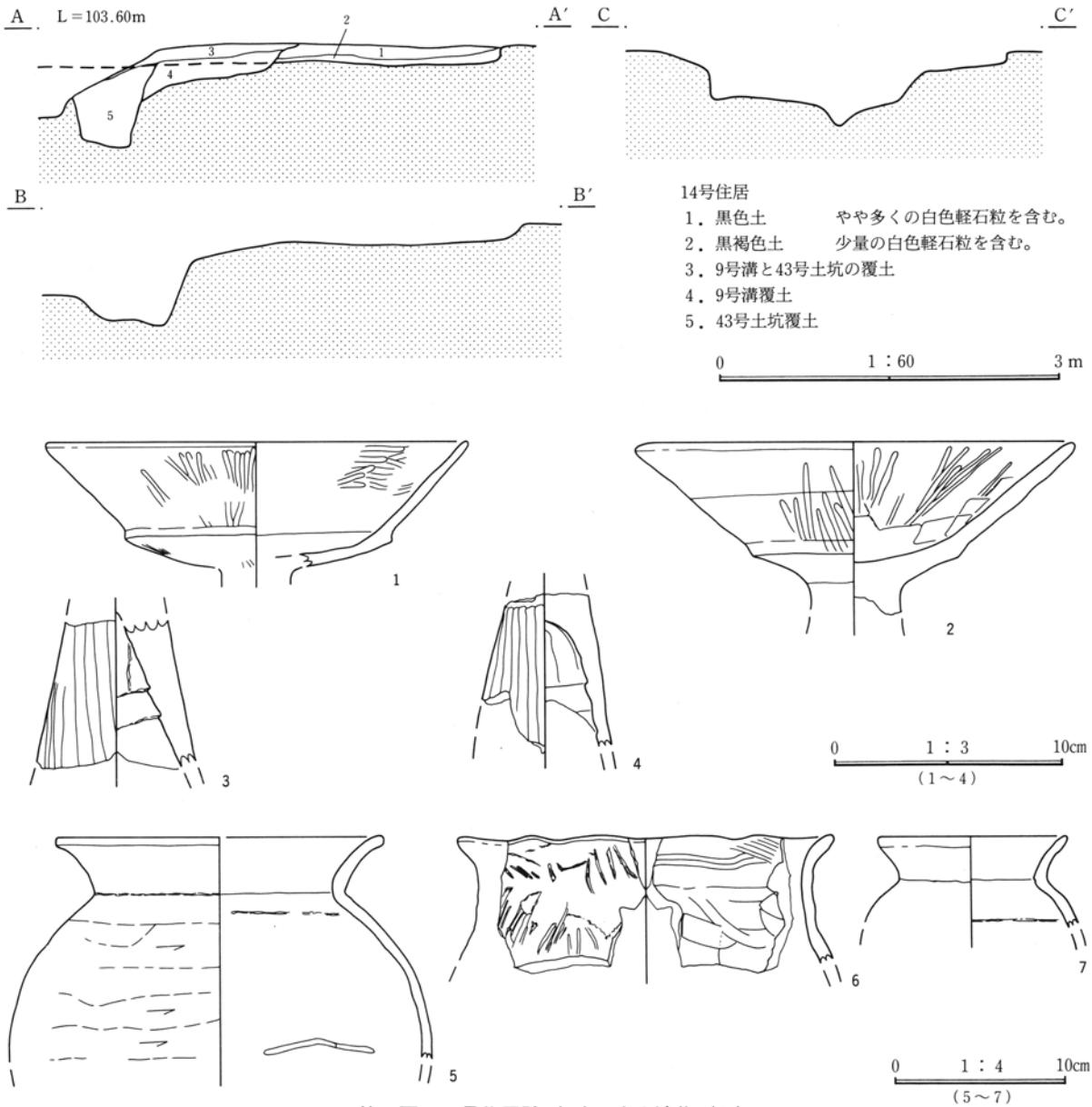
炉　住居中央やや北寄りの床面に、焼土面が確認されており、ここに炉が造られていたものと思われる。規模は長軸方向46cm、短軸方向28cmである。

周　溝　掘られていなかった。

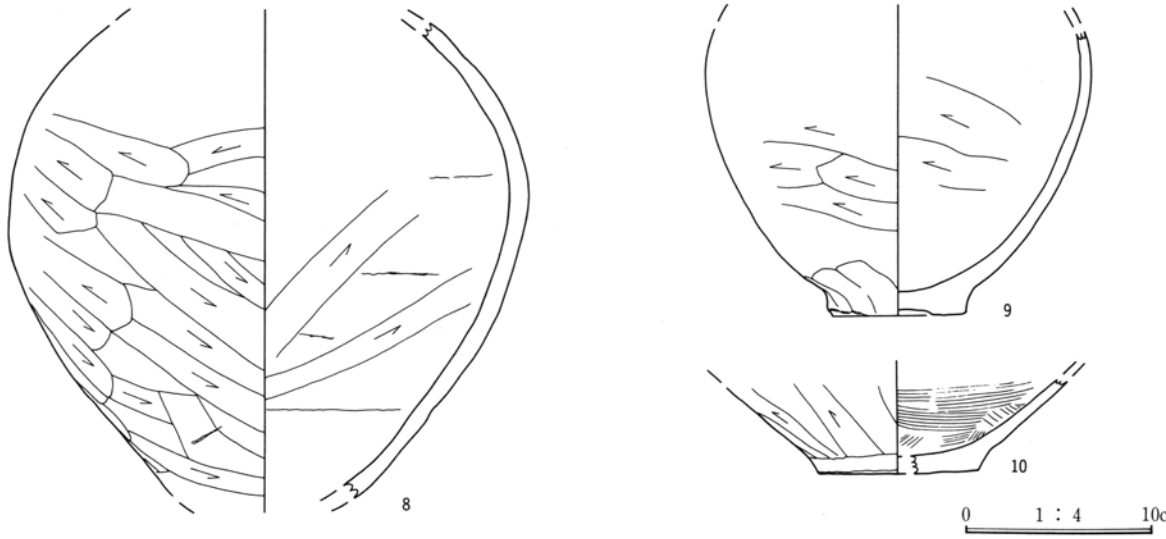
柱　穴　掘られていなかった。

遺　物　残された床面全体から、高坏と甕の破片が多く出土した。

所　見　南西方向約半分を９号溝により切り取られているために残りの悪い住居であった。９号溝は、館を造る時に館内に流れていた10号溝を廃止し新たに館の区画溝東側に平行して造られた溝と思われる。そのために館以前から存在し、溝の造られる位置に存在していた当住居が壊されたものと考えられる。住居の時期は、出土遺物から館建設に先立つ５世紀前半の住居と考えられる。



第35図　14号住居跡（２）・出土遺物（１）



第36図　14号住居跡出土遺物（２）

14号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
35-1 34	土師器 高坏	床面＋7.5 図示部分 2/3	口 18.4 高 — 底 —	①密、１㎜前後の砂粒をほとんど含まない。②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	表面が一部剝離している。内外面とも放射状のヘラ磨きは行なわれていないようである。 脚が坏底部の接合部分とともに割れて欠損。
35-2 34	土師器 高坏	床面＋8.0 図示部ほぼ完	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒と赤色粒を多量に含む。②酸化焔 硬質 ③橙色　にぶい黄橙色	器表面全体があれている。全体に器肉が厚く特に底部中央が厚い。
35-3	土師器 高坏	覆土 小破片	口 — 高 — 底 —	①１～２㎜の赤色粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③褐色	高坏脚部の小破片である。筒外面ヘラナデ。 内面上半指等による縦方向のナデ、下半に輪積痕。
35-4	土師器 高坏	覆土 破片	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	筒外面ヘラナデ。内面上部指等による縦方向のナデ下半に輪積痕。
35-5 34	土師器 甕	床面＋3.5 口縁1/2 胴上部1/4	口(19.0) 高 — 底 —	①密、１㎜以下の砂粒を多量に含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	胴部外面横方向のナデ。内面ナデにて器表面密。 全体に均整のとれた丁寧なつくりである。
35-6	土師器 甕	床面＋6.5 小破片	口(22.0) 高 — 底 —	①密、0.5㎜以下の砂粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③橙色	外面細い棒状工具による整形痕。内側口縁部刷毛目状の痕跡。胴部内面ナデ。全体に雑で均整のとれていない甕である。
35-7 34	土師器 甕	床面＋３ 口縁1/2 肩2/3	口(11.0) 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	口縁部横ナデ。肩部内外面ナデにて器表面密。 胴部内面に輪積痕が残る。
36-8 34	土師器 甕	床面＋9.0 2/3	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③赤褐色	胴部外面ヘラ削り。器表面のあれは少ない。 内面に指等による凹凸が多く残るヘラナデ。
36-9 34	土師器 甕	床面＋9.5 胴下1/3	口 — 高 — 底 7.0	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色一部黒褐色	底部はドーナツ状で中央部が凹状となる。胴部外面ヘラ削り。内面ヘラ状工具によるナデ。 器表面全体がややあれている。
36-10	土師器 甕	覆土 胴下～底部1/3	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の赤色粒を多量に含む。②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。 内面刷毛目。

15号住居（第37・38図　PL.5・35）

位　置　11S・T－３グリッド

重　複　なし

形　状　東西方向に長い長方形を呈している。規模は東西方向が3.8m、南北方向が2.9mである。

面　積　10.98m²　　**方　位**　N－18°－W

床　面　遺構確認面から25cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で、住居中央部分が踏み固められて少し硬化していた。

埋没土　上層の大部分には１～３cmの黄褐色ブロックを多く含む。床面近くの覆土は黒褐色を主とし、少量の黄褐色土であった。

炉　　住居の中央やや北寄りに、炉が造られていた。その部分の床面が少し凹んで橙色に焼土化していた。炉の大きさは、径40cm深さ２cmである。

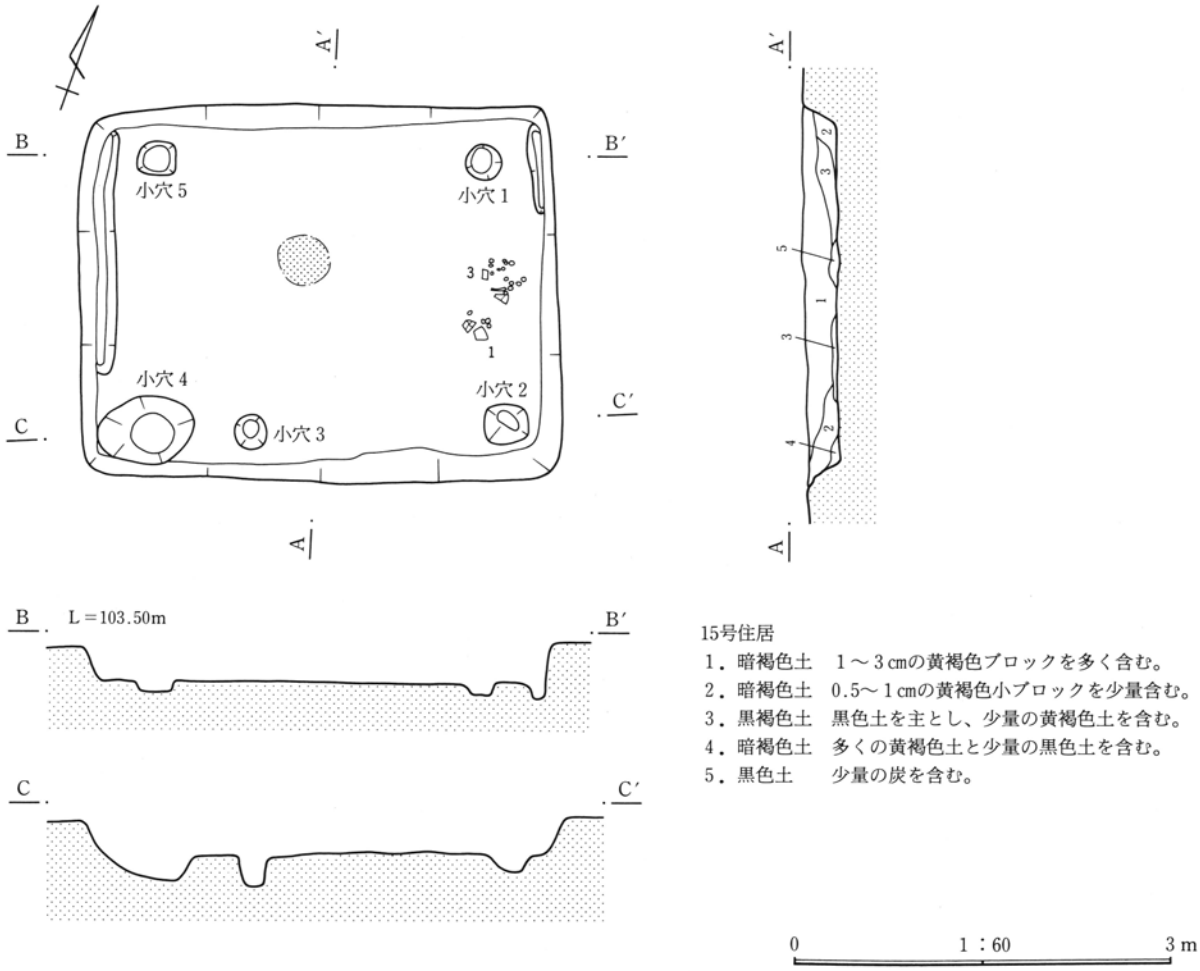
周　溝　東壁面部分と西壁面の一部に掘られていた。おそらく全体に掘られていたものと思われる。幅20cm深さ５cm前後である。

柱　穴　浅い柱穴状の掘り込みが５個掘られていた。ここでは小穴と呼称して規模の報告をする。規模は、小穴１が径28cm深さは８cmである。小穴２が径43cm深さ14cm、小穴３が径26cm深さ26cm、小穴４が長径78cm短径54cm深さ21cm、小穴５が径28cm深さ８cmである。

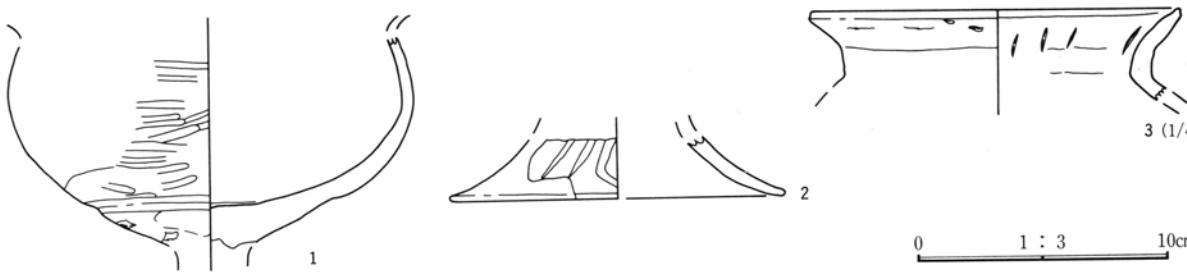
遺　物　床面よりかなり高い位置から出土しているが、時期的にほぼ同じであり、この住居に伴う遺物と思われる。

所　見　埋没土中に多くのロームブロックを含むことから居館を建設するときに、埋められた住居の可能性も少し考えられる。

出土遺物から、５世紀前半の住居と考えられる。



第37図　15号住居跡



第38図　15号住居跡出土遺物

15号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
38-1 35	土師器 台付埦	床面＋27 底部完形 胴部1/5	口　— 高　— 底　—	①１㎜前後の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	外面ナデにより器表面密。底部わずかにヘラ削り。 内面ナデにより器表面密。器表面全体に多くの砂粒が目だつ。
38-2	土師器 高坏	覆土 小破片	口　— 高(13.2) 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	脚下端部、横ナデ後ヘラナデ。
38-3 35	土師器 甕	床面＋27 口縁4/5 肩部1/10	口 19.2 高 4.3 底　—	①１㎜内外の砂粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③褐色	口縁部内側にヘラの圧痕、口縁部横ナデ。 全体に器表面密。

16号住居（第39・40図　PL.5・35）

位　置　11T-２・３グリッド

重　複　同じ古墳時代後期の12号住居と重複しており12号住居よりはるかに小さな本住居が12号住居のほぼ中央部分を床下部分深くまで掘り込んでいる。３軒の新旧関係は11号住居→12号住居→16号住居となっている。

形　状　南北方向にやや長い長方形を呈している。規模は東西方向が2.7m、南北方向は竈付近で3.4mである。

面　積　7.54㎡　　**方　位**　N-22°-W

床　面　重複している外側の12号住居遺構確認面から120cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で、竈手前部分が踏み固められて少し硬化していた。竈手前部分には少量の焼土が残っていた。

埋没土　最上層にAs-B軽石粒を多量に含む層が残っていた。他の埋没土は少量の灰白色軽石粒と黄褐色砂質土を含む黒褐色土で埋まっていた。

竈　　東壁の南寄りに竈が造られていた。両袖と燃焼部の大部分が床面上に位置しており、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んで造られており、煙道は垂直に近いような急な角度で立ち上がっていた。右袖は壁面から52cm、左袖は壁面から58cm残存していた。燃焼部幅37cm、煙道部方向94cmである。竈内から多くの焼土粒が出土した。また燃焼部から煙道部にかけての壁面が焼けて焼土化していた。燃焼部断面調査の結果両袖部分内側が強く焼土化していた。

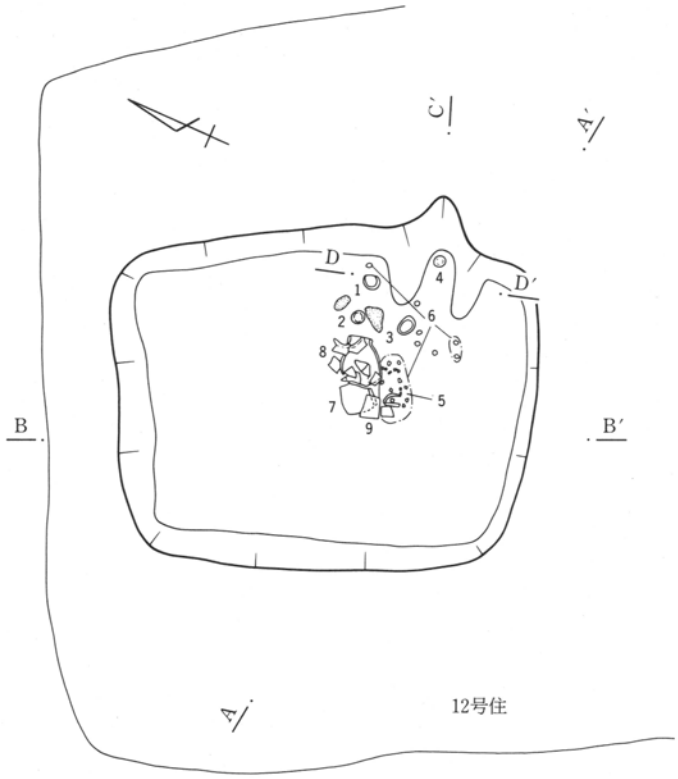
周　溝　掘られていなかった。

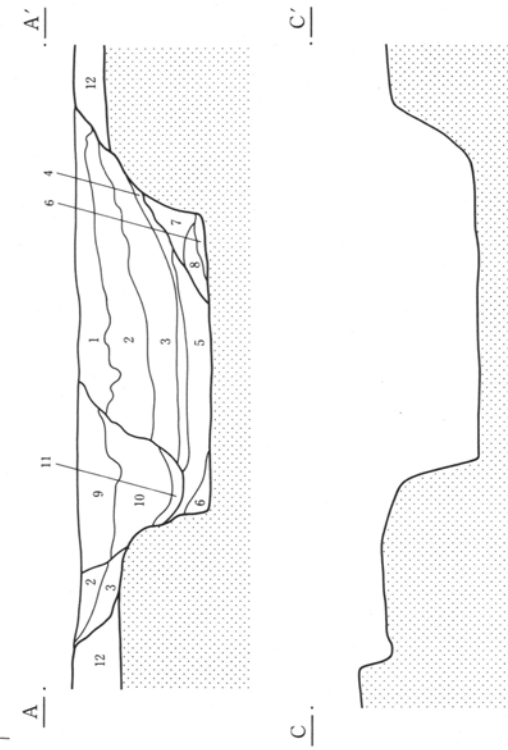
柱　穴　掘られていなかった。

遺　物　床面からやや浮いた状態ではあるが、竈手前からまとまって出土している。つぶれた状態で出土した第39図-８の壺は復元した結果完形品であった。また２・３・４の坏は完形品で出土している。９の須恵器甕の破片は時期が古すぎるために、再利用品として住居の中に持ち込まれたものと思われる。

所　見　12号住居覆土を掘り込んでつくられているためか、深さが120cmとこの遺跡の中で最も深く掘り込まれていた。

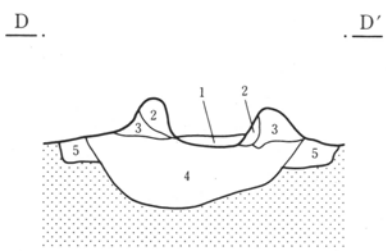
出土遺物から、７世紀前半の住居と考えられる。





16号住居
1．灰褐色土　多くのAs-Bを含む。
2．黒褐色土　少量の灰白色軽石粒を含む、粘性の強い層。
3．灰褐色土　少量の灰白色軽石粒と黄褐色砂質土を含む。
4．灰褐色土　３層に近いが鉄分を多く含む。
5．灰褐色土　少量の灰白色粒と炭化物を含む。
6．褐色土　鉄分が多く凝縮している固い層。
7．黄褐色土　多くの鉄分と小砂利を含む。
8．灰褐色土　少量の小砂利と炭化物と焼土粒を含む。
9．暗褐色土　やや砂質である。（土坑覆土）
10．暗褐色土　黄褐色土をブロック状に含む。（土坑覆土）
11．暗褐色土　多くの黄褐色土を含む。（土坑覆土）
12．12号住居跡覆土

0　1：60　3 m

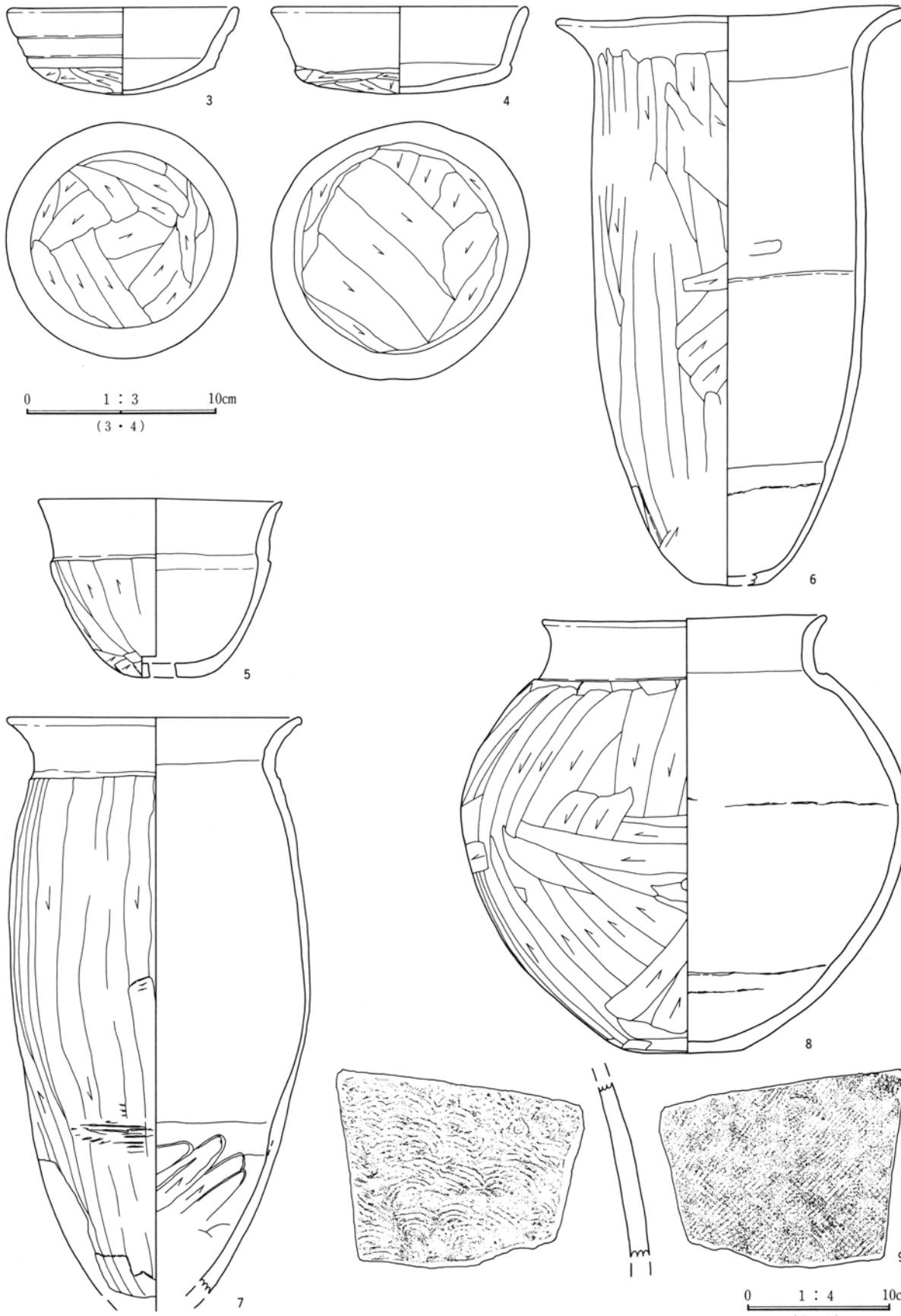


カマド
1．暗褐色土　炭・焼土・灰の混入した層。
2．暗茶褐色土　多くの焼土粒を含む。
3．灰褐色土　少量の白色鉱物と酸化鉄を斑点状に含む。
4．灰褐色土　多くの黄褐色土のブロックを含む。
5．灰白色土　地山の層、砂質で酸化鉄を含む。

0　1：30　1 m

0　1：3　10cm

第39図　16号住居跡・出土遺物（１）



第40図　16号住居跡出土遺物（２）

16号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
39-1 35	土師器 坏	床直 口縁4/5 底部完形	口 11.4 高　4.7 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③表面黒色　断面橙色	口縁部横ナデ。底部外面ヘラ削り、削りは浅く削りの単位不明瞭。表面の黒色は吸炭による。
39-2 35	土師器 坏	床直 完形	口 11.2 高　4.5 底　—	①密、0.5㎜前後の白色粒をわずかに含む。②酸化焔 硬質 ③表面黒色　断面橙色	口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。底面ヘラ削り。内外面吸炭による黒色、外面に少し粘土付着。
40-3 35	土師器 坏	床直 完形	口 12.0 高　4.5 底　—	①１㎜以下の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③表面黒褐色　断面橙色	底部ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。
40-4 35	土師器 坏	カマド 完形	口 13.4 高　4.6 底 11.4	①１㎜以下の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。底面幅の広いヘラ削り。砂粒の移動は少ない。全体に歪んでいる。
40-5 35	土師器 甑	床面＋25 12住覆土 4/5	口 17.0 高 12.5 底　5.6	①１㎜以下の砂粒と赤色粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	底部～胴部外面ヘラ削り、砂粒の移動は少ないが、多くの砂粒が目だつ。内面ナデにて器表面密。 全体に丁寧な作りである。
40-6 35	土師器 甕	床面＋25 12住覆土 4/5底1/3	口 24.5 高 40.5 底 (6.0)	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙　黄灰色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。多量の砂粒が浮き出して、器表面が非常にあらい。胴部内面ナデにて器表面密。
40-7 35	土師器 甕	床面＋２ 口～胴4/5 下半1/4	口 20.5 高　— 底　—	①１～２㎜の砂粒を少量、１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色一部黒色	胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動は少ない。 胴部内側下半に接合痕。
40-8 35	土師器 甕	床面＋３ ほぼ完形	口 19.8 高 30.2 底　8.2	①多くの１㎜以下の砂粒と輝石を含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラナデ、胴部外面ヘラナデ。砂粒は目だつが、砂粒の移動は少ない。胴部内面に２ケ所の輪積痕が残る。
40-9	須恵器 大甕	床面＋34 破片	口　— 高　— 底　—	①１㎜以下の白色粒を多く含む。 ②還元焔 硬質 ③黄灰色	外面格子状叩き。内面青海波文。いずれも浅くて弱い文様である。

第２節　竪穴状遺構

１号竪穴状遺構（第41図　PL.5）

位　置　14A・B－４グリッド

概　要　残りが悪く、床面と思われる面が残っていたのはわずかな部分であった。そのために遺構の全体を知ることが出来なかった。図示した形は確認できた範囲であり、正確な形は不明である。遺構中央部に焼けて焼土化している部分があり、炉の一部と思われる。おそらく住居であったものと思われるが、残りが悪いために調査段階で１号竪穴状遺構として扱った。

重　複　なし

形　状　残りが悪く明らかでないが、南北方向にやや長い角の丸い長方形を呈している。規模はいずれも中央付近で計測した。東西方向が2.85m、南北方向が3.12mである。

面　積　7.48㎡　　**方　位**　N-18°-W

埋没土　ほとんど残っていなかった。

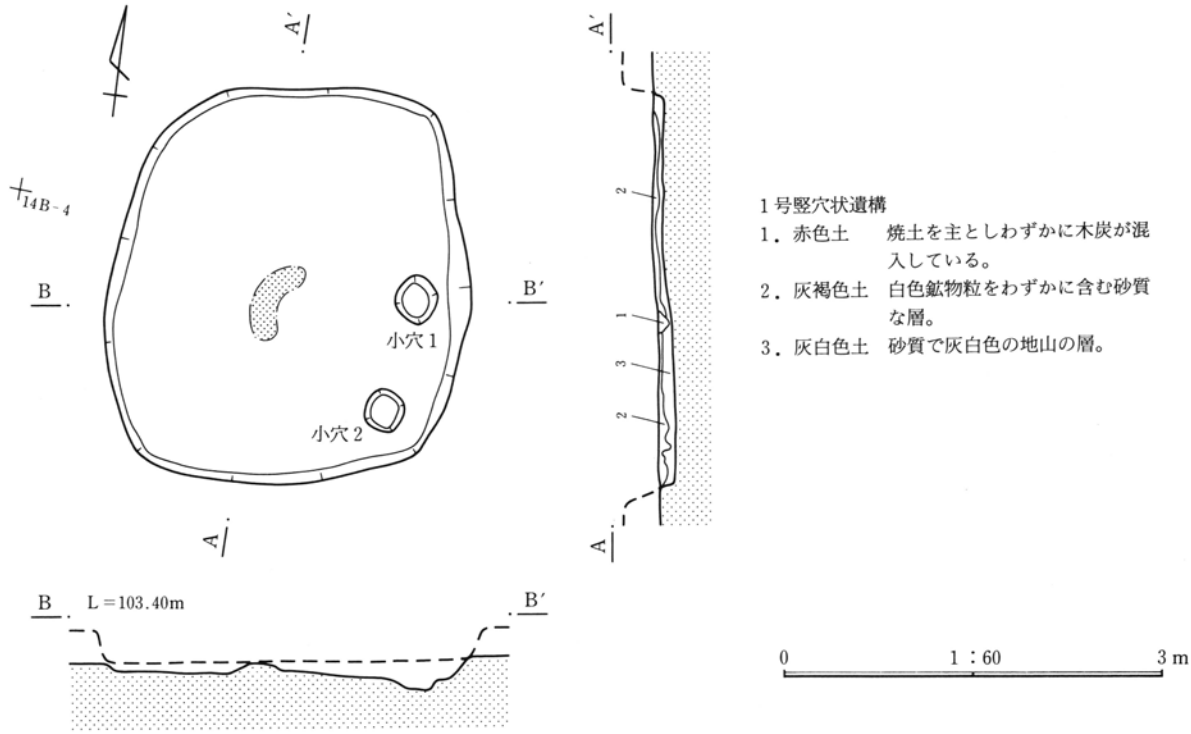
炉　遺構中央部にやや三ケ月形に焼けて焼土化している部分があり、炉の一部と思われる。規模は長径65cm短径22cmである。

周　溝　掘られていなかった。

柱　穴　小穴が２個掘られていた。柱穴は掘られていなかった。小穴１は径32cm深さ24cm、小穴２は径28cm深さ25cmである。

遺　物　出土していない。

所　見　推定であるが、住居の可能性が大きく、他の炉を持つ住居例から４世紀前半の住居と考えたい。



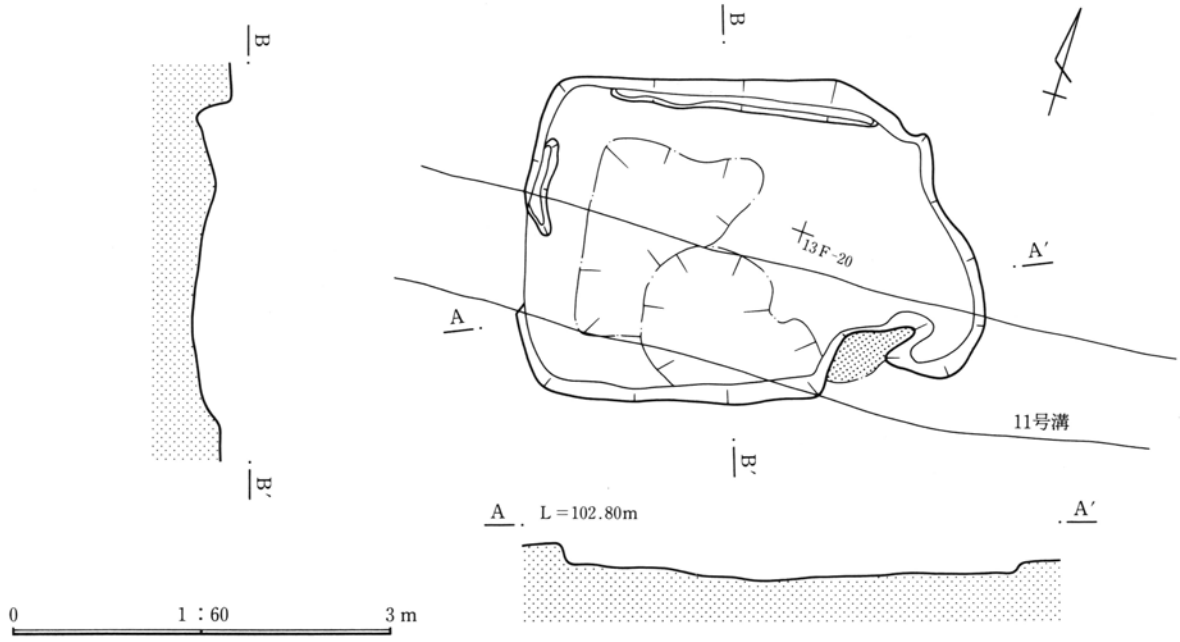
第41図　１号竪穴状遺構

２号竪穴状遺構（第42図　PL.6）

位　置　13E・F-19・20グリッド

概　要　１号竪穴状遺構よりさらに残りが悪く、床面と思われる面は残っていなかった。掘り方調査により遺構の範囲を調査し、北側と西側と南側部分の範囲は確認できたが、東側は明らかでなかった。図示した形は確認できた範囲であり、正確な形は不明である。このような状況から、調査段階で２号竪穴状遺構として扱った。

重　複　11号溝と重複しており、床下部分まで当遺



第42図　２号竪穴状遺構

構は掘り込まれていた。

形　状　東西方向に長い長方形を呈していたものと思われる。規模は東西方向が約3.5m、南北方向が約2.5mである。

面　積　7.90㎡　　**方　位**　N-15°-W

炉　　南東コーナーに近い南壁面に、焼けて焼土化している部分があり、炉の可能性もあるが、位置がおかしいために不明である。

周　溝　北壁面の大部分と西壁面の一部に掘られていた。規模は幅10～15cm深さ５cm前後であった。

柱　穴　掘られていなかった。

遺　物　７点の破片が出土しており、３点は古墳時代中期の壺の破片と思われる。

所　見　推定であるが住居の可能性が大きく、出土遺物から、４世紀前半の住居と考えたい。

３号竪穴状遺構（第43図　PL.43）

位　置　11S-２・３グリッド

概　要　15号住居北に位置し、上面の多くは削られて北側は埋没谷に削られていた。このように非常に残りの悪い状態であった。床面と思われる面も残っていなかった。掘り方調査により遺構の範囲を調査したが、図示したように西側の壁面が不自然であり、住居規模が極めて小さかった。住居としては疑問であるために竪穴状遺構として扱った。

重　複　埋没谷と重複しており、北側を掘り込まれている。

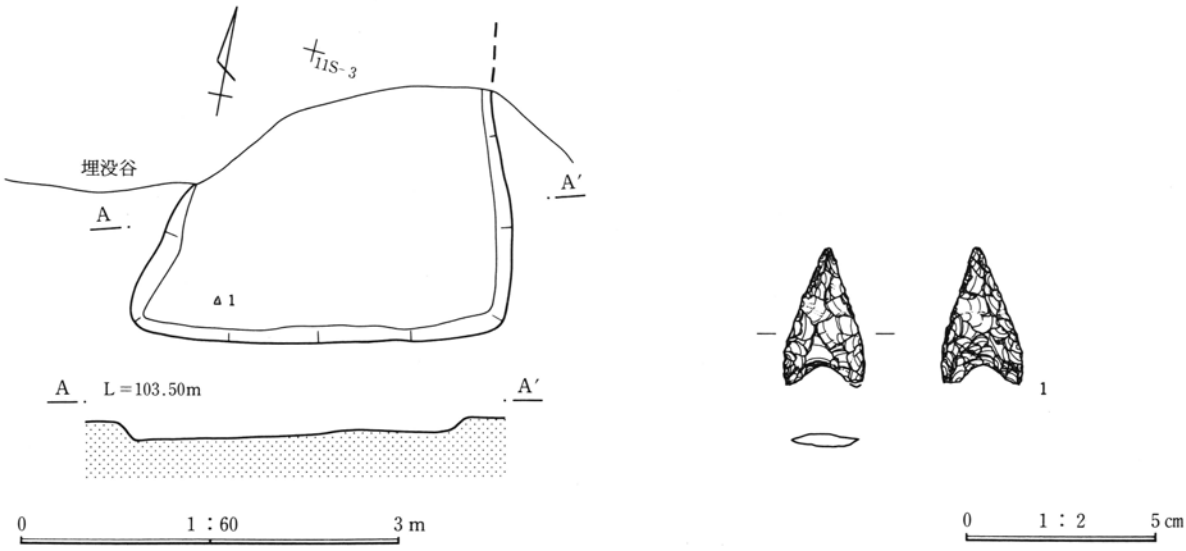
形　状　不明。規模は東西方向が約3.0m、南北方向は不明である。

面　積　不明　　**方　位**　N-13°-W

炉・周溝・柱穴　いずれとも掘られていなかった。

遺　物　石鏃が１点出土している。

所　見　時期は不明である。



第43図　３号竪穴状遺構・出土遺物

３号竪穴状遺構出土遺物観察表

挿図番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
43-1 43	石鏃	完形	黒色安山岩	3.6　2.1　0.3　2.4	完形品。	床面＋6.5

第３節　溝

南調査区全体から11条の溝が検出された。９・10号溝は居館の堀と深く関係しほぼ時期も同じ古墳時代中期のものであるが、他の９条はそれ以降の時期と思われる。

１号溝（第44・45図　PL.6）

１号溝は南調査区西端に位置し13C～H－７グリッドに属する。北から南方向にほぼ直線で南下しやがて南東方向に曲がり、さらに南東方向に延びている。溝中央部分で覆土中央付近に多くのAs－B軽石粒を多く含む７・８号溝と重複しており、この７・８号溝が大部分埋まった段階で覆土上面に１号溝は掘られていた。溝底部は北側が高く南に向かって低くなっている。溝の形状は幅の狭いU字状を呈している。

規模は長さ31.6m・幅１m前後・深さは0.1～0.2mであった。

出土遺物は奈良時代の須恵器を中心とし、少量の土師器坏を含む。また碗を中心とした10個の青磁が出土している。いずれも中国の竜泉窯を中心とした製品であり、時期は13～14世紀の頃である。このことからこの溝は中世段階に存在していたものと思われる。

この青磁の特色や産地及び製作年代等については、本年の５月に当事業団を訪れた、陝西省考古学研究所　歴史学碩士　王　小蒙氏に青磁を見ていただき、多くのご教示を得たその成果である。器形や産地また製作年代等については、他の土器と同様に一覧表で表示した。

なお青磁は小さな破片が多いために、実測図ではなく、微妙な色の変化等をも詳しく伝えられるカラー写真を掲載した。（巻頭カラー）

７号溝（第44図　PL.7）

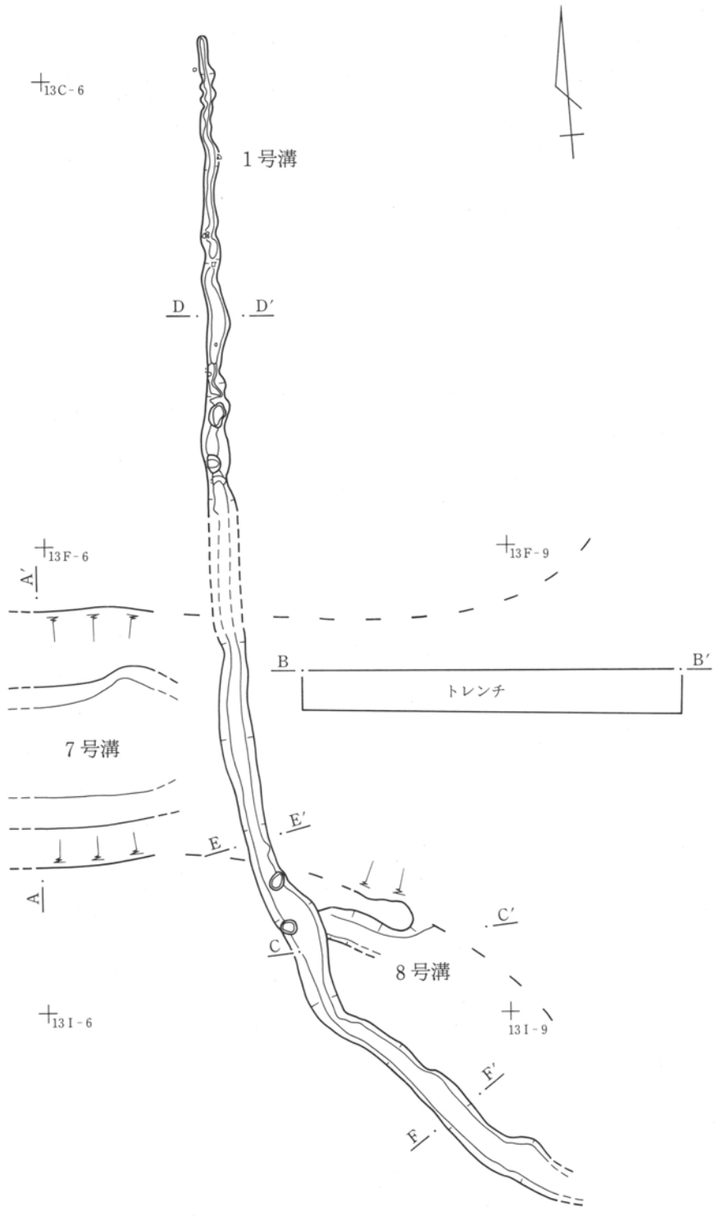
７号溝は南調査区西端に位置し13F～H－６グリッドに属する。埋没谷まで溝がつながっていることは確認していないが、溝幅8.3m深さ6.2mと規模がおおきいこと、さらに埋没谷とほぼ同じ高さの位置に青紫の灰層の下にAs－B軽石が堆積していること等から埋没谷とほぼ同じころ存在し、一連の谷あるいは溝として機能していたものと考えられる。しかし埋没谷と大きく異なるのは、溝の深さとAs－B軽石の堆積していた位置の違いである。近接する埋没谷の底部より７号溝の底部は１mも深く掘られている。（セクション図AとB参照）また埋没谷では青紫の灰層の下にAs－B軽石が谷底に堆積しているのに対し７号溝ではほぼ埋まりかけた覆土上面に堆積していたことである。これらの事から７号溝と埋没谷が同じ時期に機能していたかは疑問である。

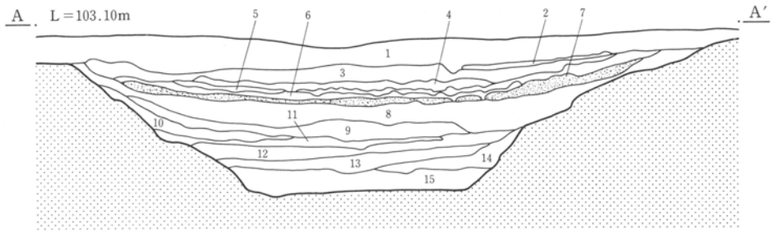
出土遺物は全くない。この溝は平安時代以前であるが、どの時期から存在したのか不明である。

８号溝（第44図）

８号溝は南調査区西端に位置し13H－８グリッドに属する。東側は埋没谷に接している。土層断面で観察すると、埋没谷より古いことが明らかであり、覆土中にはAs－B軽石は全く認められない。

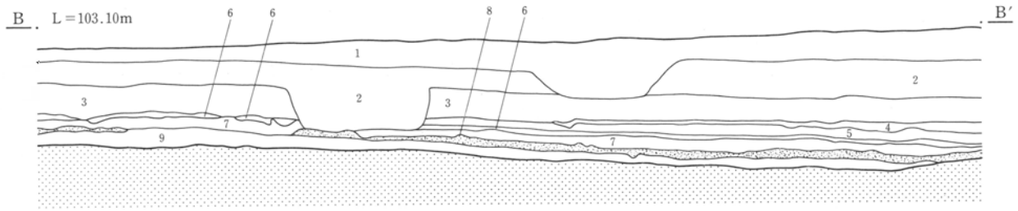
出土遺物は古墳時代の須恵器の小破片が出土しているが時期決定はできない。この溝は平安時代以前であるが、７号溝同様にどの時期から存在したのか不明である。





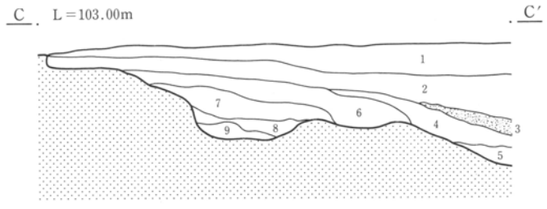
A-A′

1．暗褐色土　耕作土。少量の白色軽石粒を含む。
2．灰色砂層　流れ込みによる多くのAs-Bを含む。
3．暗褐色土　少量の白色軽石粒と黄褐色土を含む。
4．灰褐色砂質土　多くのAs-Bと少量の暗褐色土を含む。
5．黒褐色土　多くのAs-Bと少量の桃紫色のAs-Bに伴う灰を含む。
6．青紫色層　As-Bに伴う灰層、桃色と青色あり。
7．灰色砂層　As-Bを主とした層。
8．暗褐色土　少量の黄褐色土を含む砂質土。
9．灰褐色土　少量の黄褐色土と砂を含むやや粘質な層。
10．暗褐色土　少量の黄褐色土と砂と小礫を部分的に多く含む。
11．灰褐色土　少量の黄褐色土とやや多くの砂と小礫を含む。
12．暗灰褐色土　少量の白色軽石粒と黄褐色土を含む粘質土。
13．灰褐色土　少量の砂と砂礫を含む粘質土。
14．暗褐色土　少量の砂と砂礫を含む粘質土。
15．灰色土　砂・小礫・粘質土の細い層をいくつも含む。



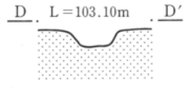
B-B′

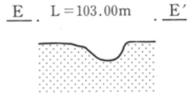
1．暗褐色土　耕作土。少量の白色軽石粒を含む。
2．暗褐色土　少量の白色軽石粒と黄褐色土を含む。
3．灰褐色砂質土　多くのAs-Bと少量の暗褐色土を含む。
4．暗褐色土　多くの砂粒を含む。
5．黒褐色土　黒色と褐色の砂層が厚さ5㎜で4層ほど交互に堆積している。
6．黒褐色土　多くのAs-Bと少量の桃紫色のAs-Bに伴う灰を含む。
7．青紫色層　青紫色と桃色の火山灰がブロック状に入り、黒色土とあずき色の火山灰と軽石を含む。
8．灰色砂層　As-Bを主とした層。
9．黒色粘質土

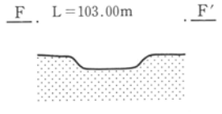


C-C′

1．暗褐色土　耕作土。少量の白色軽石粒を含む。
2．暗褐色土　1層に近いが、やや黒色が濃い。
3．灰色砂層　As-Bを主とした層。
4．黒褐色土　少量の1㎝前後の白色軽石粒を含む。
5．黒褐色土　多くの地山の灰褐色粒を含む。
6．暗褐色土　少量の白色軽石粒と多くの砂を含む。
7．暗褐色土　部分的に多くの小石と砂利を含む。
8．黒褐色土　多くの砂礫と地山の暗黄褐色土を含む。
9．褐色土　多くの地山の暗黄褐色土を含む。

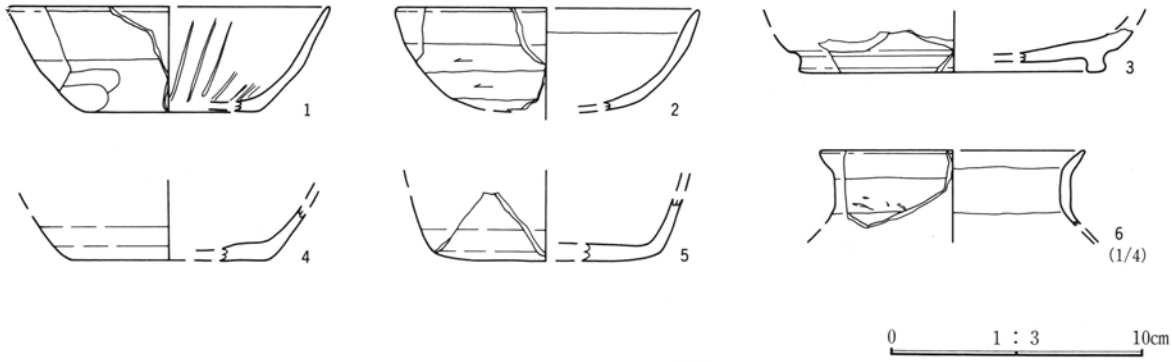






0　1：80　4 m

第44図　1・7・8号溝



第45図　１号溝出土遺物

１号溝出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
45-1	土師器 坏	覆土 小破片	口(12.7) 高 (4.2) 底 (6.8)	①密、0.5mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい黄褐色	底部外面と口縁部下半の器表面あれている。 内面に多くの放射状暗文。
45-2	土師器 坏	13D・E-7 グリッド 小破片	口(12.0) 高 — 底 —	①１mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい褐色	底部ヘラ削り。体部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、 内面に暗文なし。
45-3	土師器 坏	13D・E-7 グリッド 小破片	口 — 高 — 底(12.0)	①１mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	器表面全体があれていて整形痕残っていない。 付高台の坏である。
45-4	土師器 坏	13D・E-7 グリッド 小破片	口 — 高 — 底 (8.0)	①密、表面に多くの気泡が目だつ。 ②酸化焔 硬質 ③灰色	表面全体が摩耗しており、整形方法不明。 体部下端にヘラ削りと思われる整形痕あり。
45-5	須恵器 坏	13D・E-7 グリッド 小破片	口 — 高 — 底 (9.0)	①密 ②還元焔 硬質 ③灰色	底面右回転ヘラ削り。
45-6	土師器 甕	13D・E-7 グリッド 小破片	口(14.0) 高 — 底 —	①密 ②酸化焔 硬質 ③赤褐色	肩部ヘラ削り。口縁部横ナデ。

遺物番号	ＰＬ	種別	器種	産　地	時　期	そ の 他
7	巻頭カラー	青磁	不明	浙江省竜泉窯系	北宋晩期～南宋初期・竜泉窯初期(11世紀後半～12世紀前半)	薄釉
8	〃	〃	〃	〃	〃	〃
9	〃	〃	〃	〃	〃	〃
10	〃	〃	〃	〃	〃	〃
11	〃	〃	〃	〃	〃	〃
12	〃	〃	碗	〃	〃	〃
13	〃	〃	〃	〃	〃	〃
14	〃	〃	〃	〃	南宋末～元初期竜泉窯盛期（13世紀中頃）	厚釉・蓮弁紋
15	〃	〃	〃	〃	〃	〃
16	〃	〃	〃	〃	〃	〃
17	〃	〃	〃	〃	〃	〃

２号溝（第46図　PL.6）

２号溝は南調査区北西に位置し10D・E-10・11グリッドに属する。南西方向にやや傾いているが、ほぼ南北方向に掘られている。東約１ｍに３号溝がほぼ同じ方向に平行して掘られており、両溝とも北と南方向にさらに延びている。溝底部は北側が高く南に向かって低くなっている。覆土の観察から溝底部に砂や砂利が含まれていないことなどにより、水が流れた様子は示していない。溝の形状は幅の狭いＵ字状を呈し底部はほぼ平になっている。

規模は長さ6.7m、幅1.8m、深さ1.1mであった。

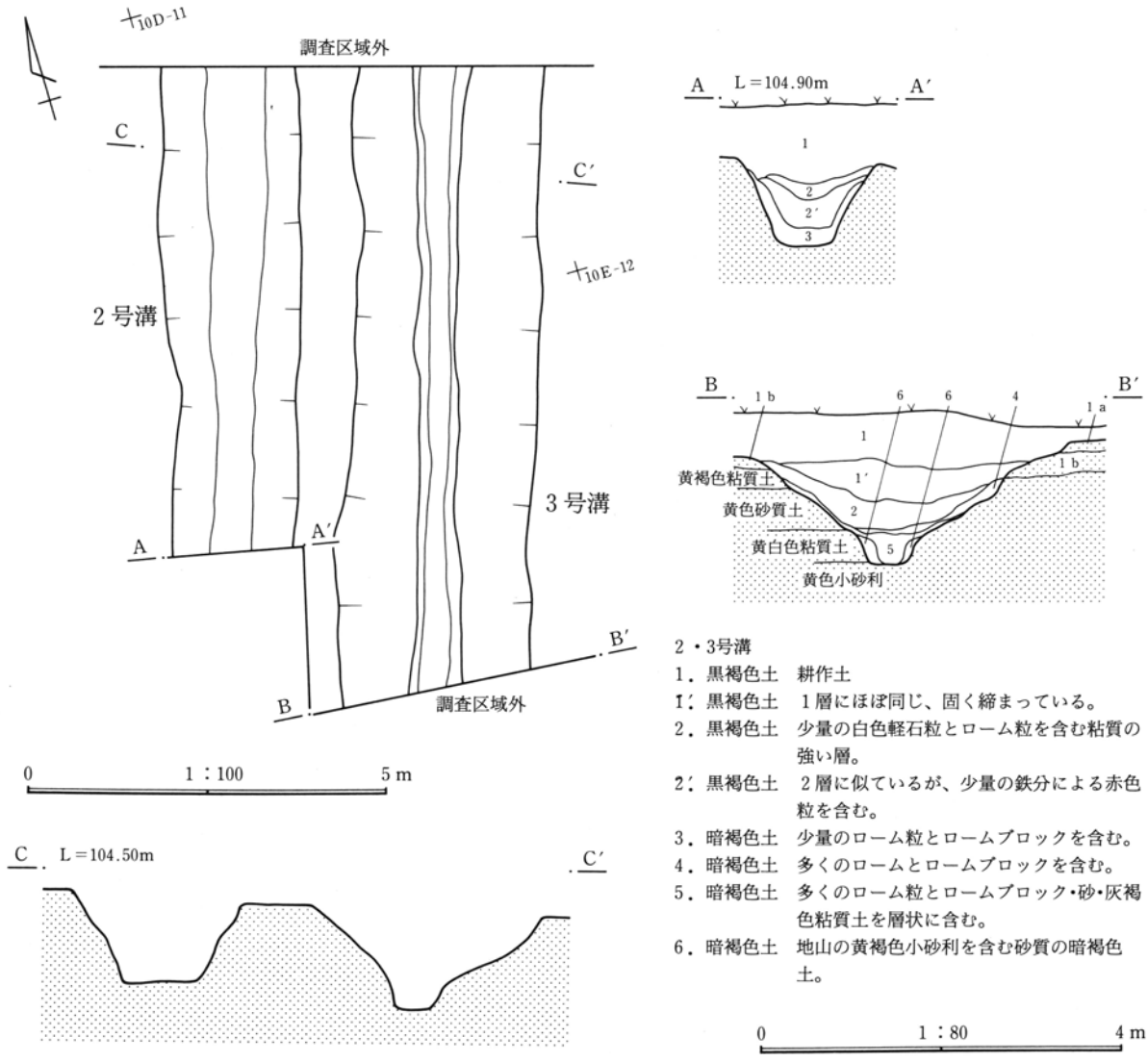
出土遺物は古墳時代の坏と甕および平安時代の甕の小破片が３片出土している。

３号溝（第46図　PL.6）

３号溝は南調査区北西に位置し10D・E-11グリッドに属する。南西方向にやや傾いているが、ほぼ南北方向に掘られている。西約１ｍに２号溝がほぼ同じ方向に平行して掘られており、両溝とも北と南方向にさらに延びている。溝底部は北側が高く南に向かって低くなっている。覆土の観察から溝底部に砂や砂利が含まれていることなどにより、水が流れた様子を示している。溝の形状は浅いＵ字状を呈し底部中央が一段と深く掘られている。

規模は長さ8.7m、幅2.6m、深さ1.2mであった。

出土遺物はなかった。



第46図　２・３号溝

4号溝（第48図　PL.6）

4号溝は南調査区北西に位置し10E-13～17グリッドに属する。調査された範囲では東西方向に掘られていたが、東側で南に方向を変えているようである。西端はさらに延びることなく終わっている。溝底部は西側が高く東に向かって低くなっている。覆土の観察から水路として水が流れた様子は示していないため水路ではなく、区画を目的にした溝と思われる。4号溝西側部分で5号溝とほぼ直行しており、重複部分には1号土坑が掘られていた。土層観察面から4号溝覆土がはじめに1号土坑を埋めておりその上を5号溝の覆土が埋めている。そのために1号土坑→4号溝→5号溝ということになる。両方の溝が機能している段階にこの土坑が掘られた事を示している。しかし土層観察部分が土坑に覆土部分を主としているため、この観察結果だけで充分明らかであるとは言えない。

溝の形状は浅いU字状を呈し西側では底部中央が一段深く掘られている。しかし直行する5号溝の底部中央ほど深く掘ってはいない。

規模は長さ19m、幅1.2～2.4m、深さ0.55～0.65mであった。

出土遺物はなかった。

5号溝（第47・48図　PL.6・43）

5号溝は南調査区北西に位置し10E・F-14グリッドに属する。調査された範囲では南北方向に掘られていたが、南端で東に屈曲しているようである。北は少し浅くなっているがさらに延びている。溝底部は北側が高く南に向かって低くなっている。覆土の観察から水路として水が流れた様子は示していないため水路ではなく、区画を目的にした溝と思われる。5号溝北側部分で4号溝とほぼ直行しており、重複部分には1号土坑が掘られていた。これらの4・5号溝と1号土坑との関係は4号溝の説明で触れた。

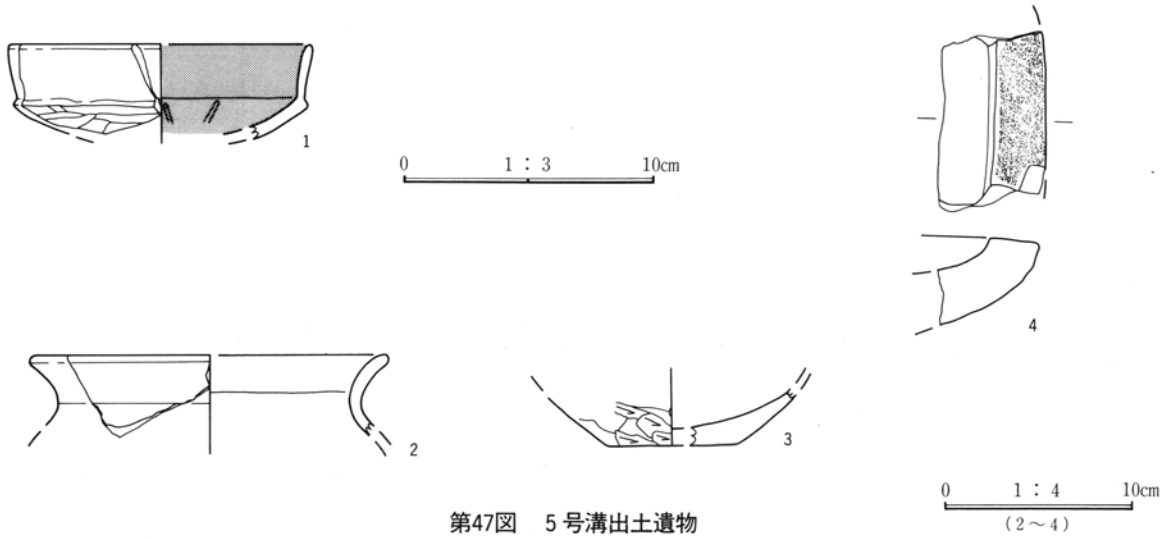
溝の形状は浅いU字状を呈し底部中央が一段深く掘られている。

重複関係や平面形、また溝の深さがほぼ近いこと等から4・5号溝は溝の断面形状がやや異なるが同じ時期に機能していた可能性が高い。

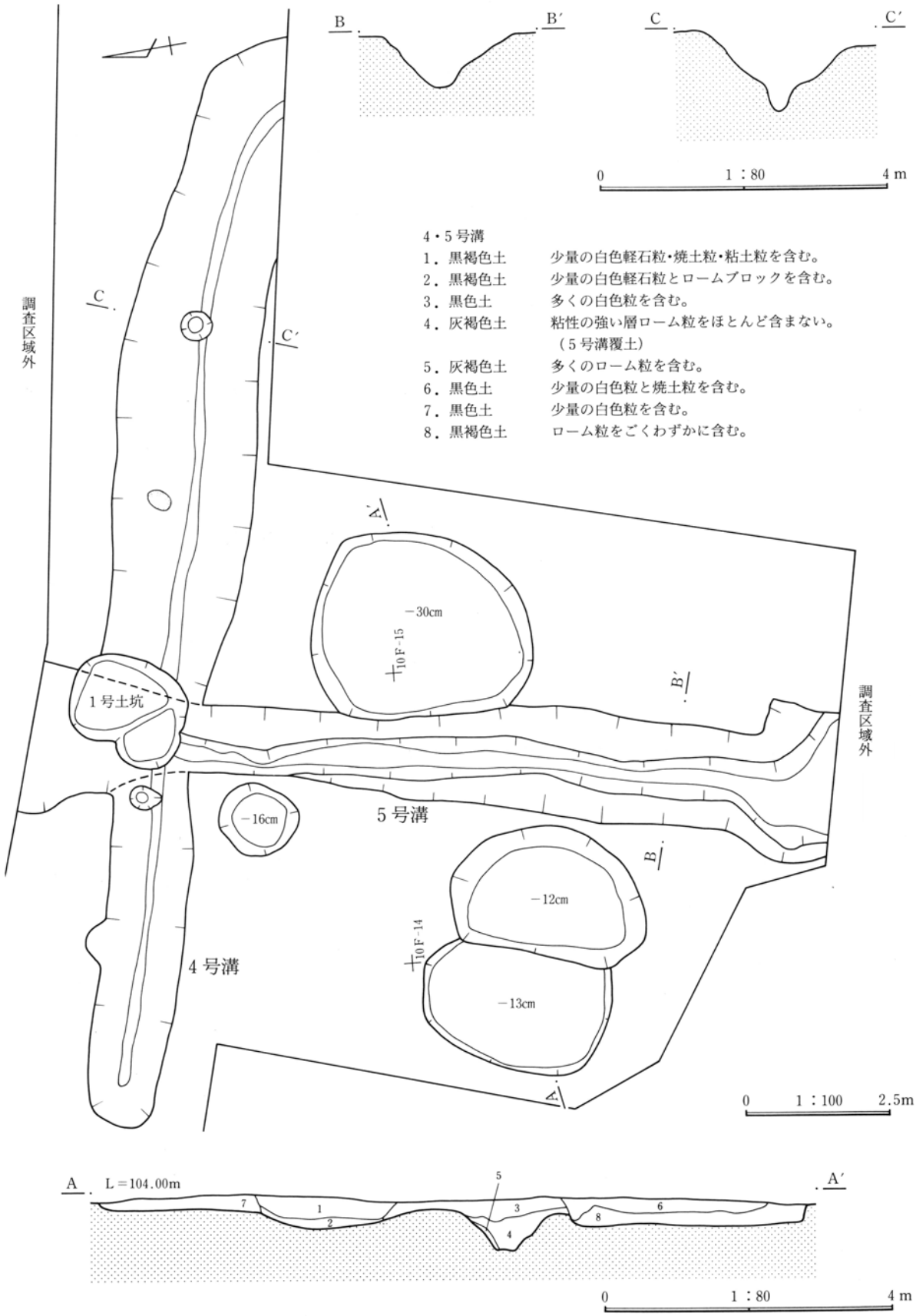
規模は長さ13.9m、幅1.2～1.7m、深さ0.60～0.66mであった。

出土遺物は5～6世紀頃の坏や甕の小破片3個と抹茶臼の破片が出土している。この溝の時代を示しているとは思えない。

5号溝の東西に浅い土坑状の掘り込みが4ヶ所確認された。時期としては5号溝より新しいが、明らかな遺構とはならなかった。掘り込の深さは数字で、また5号溝とともに3個の掘り込の土層断面で表示した。



第47図　5号溝出土遺物


B
B′
C
C′
0
1：80
4 m
4・5号溝
1．黒褐色土　少量の白色軽石粒・焼土粒・粘土粒を含む。
2．黒褐色土　少量の白色軽石粒とロームブロックを含む。
3．黒色土　多くの白色粒を含む。
4．灰褐色土　粘性の強い層ローム粒をほとんど含まない。（５号溝覆土）
5．灰褐色土　多くのローム粒を含む。
6．黒色土　少量の白色粒と焼土粒を含む。
7．黒色土　少量の白色粒を含む。
8．黒褐色土　ローム粒をごくわずかに含む。
調査区域外
A
A′
−30cm
10F-15
B′
1号土坑
調査区域外
−16cm
5号溝
B
−12cm
10F-14
4号溝
−13cm
0
1：100
2.5m
A
L＝104.00m
A′
0
1：80
4 m

第48図　４・５号溝

5号溝出土遺物観察表

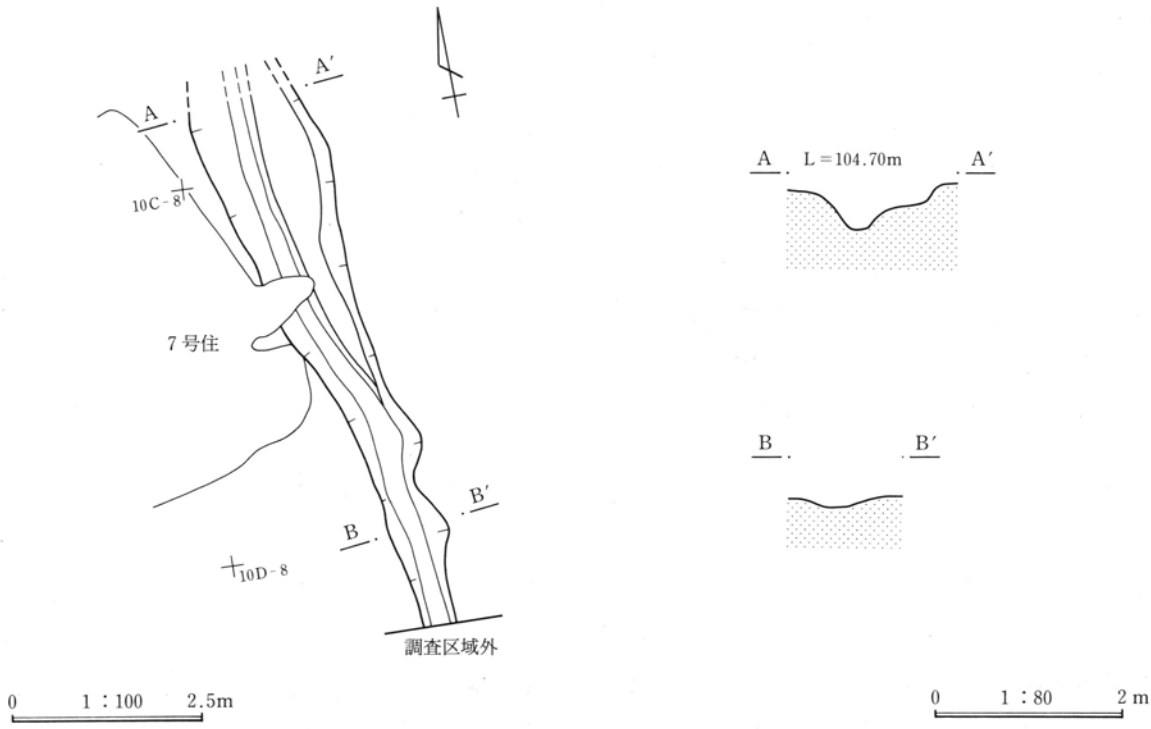
挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
47-1	土師器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 高 — 底 —	①密、1㎜以下の赤褐色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③外面黄褐色　内面黒色	底部外面ヘラナデにより器表面密。内側底面に放射状ヘラ磨き。内面吸炭による黒色。
47-2	土師器 甕	覆土 小破片	口(19.0) 高 — 底 —	①密、多くの輝石を含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。
47-3	土師器 甕	覆土 破片	口 — 高 — 底 (7.0)	①1㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面にぶい橙色 内面にぶい黄橙色	内面ナデにて器表面非常に密。胴部と底部外面ヘラナデ。

挿図番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
47-4 43	茶臼	下臼受皿部小破片	粗粒輝石安山岩	9.6　5.3　4.7　255	表面全体良く磨かれている。工具痕全く残っていない。茶臼の小破片である。	覆土

6号溝（第49図　PL.6）

6号溝は南調査区北西に位置し10C-8グリッドに属する。南東方向にやや傾いているが、ほぼ南北方向に掘れている。西に古墳時代の7号住居と一部重複しており、7号住居の竈により溝の覆土上面の一部が掘り込まれていた。溝底部は北側が高く南に向かって低くなっている。覆土は下半にしまりのある黒褐色土が、上半に砂利層が部分的に認められた。規模は長さ7.4m、幅0.45～1.45m、深さ0.14～0.43mであった。

遺物は全く出土していない。



第49図　6号溝

９・10号溝（第50～53図　PL.7・８）

９・10号溝は居館跡の東側に位置する大きな溝である。10号溝は、居館東側の堀の外で９号溝と合流する。９号溝は10号溝より幅が広く深さも深く造られている。両溝の覆土中には、浅間山噴出の As-C を含んでいる。含む量は10号溝が多く９号溝は少ない。９号溝はその上に榛名山噴出の Hr-FA を多く含んでいるが、10号溝には Hr-FA を含む覆土は堆積していない。10号溝は居館の堀とその内側に平行して掘られている柵列と重複し、居館の堀と柵列により掘り込まれている。つまり居館堀と柵列より古いことを示している。９号溝は居館の堀と柵列を避けてほぼ平行に造られていることから居館を意識して掘られている。９号溝からは、居館の溝とほぼ同じ時期の遺物を多く出土しているが、10号溝からは出土していない。９号溝は北端で西と東の２方向に分かれる。東方向の溝は９号溝本体と幅と深さ及び溝底部の掘り方が共通している。西側の溝は幅がやや狭く、10号溝の上流に向かって行くようである。９号溝北端で西と東の２方向に分かれる所で、14号住居と重複しており、９号溝が14号住居を掘込んでいる。これらの事実から、９号溝は10号溝より新しい。おそらく居館を造る時に居館内に流れていた10号溝を居館の外に迂回させるために、居館の堀と平行させて９号溝は掘られたものと思われる。このとき９号溝の掘られる所に位置していた14号住居は壊された。10号溝は居館を造るときに、柵列や居館の堀により掘り込まれ、溝の機能は停止しており、埋められていたものと思われる。それらの溝や柵列が方形を基本として計画的につくられ、居館ができあがった。その後北西の大きな谷が形成されるようになり、９・10号溝や居館の堀の北西部分が削られることになったものと思われる。これらのことから新旧関係は以下のようである。10号溝・14号住居（古墳前期）→９号溝・柵列・居館堀（古墳前期）→谷（浅間山噴出の As-B を溝の底に持つ谷・埋没段階は平安時代11世紀）。

９号溝（第50～53図　PL.7・36・37）

概　要　９号溝はグリッド11O～Q-５に属する。溝の下端と等高線から、水の流れを復元してみたのが第50図である。９号溝は10号溝より幅が広く、水の流路も少し変化している。特に10号溝と合流する地点では、複数の流路があり、土層断面の観察から、西の流路が新しいことを示している。おそらく居館を造るときに居館に平行して外側に新しく掘り直した９号溝が、使われてゆく中で古い段階の10号溝の流路と合流して流れるようになったものと考えられる。

規　模　幅は３～５ｍで10号溝と合流している地点で６ｍ前後となっている。深さは50～70㎝である。長さは現状で49ｍである。

埋没土　覆土下部に浅間山噴出の As-C を、その上部に榛名山噴出の Hr-FA を多く含んでいる。

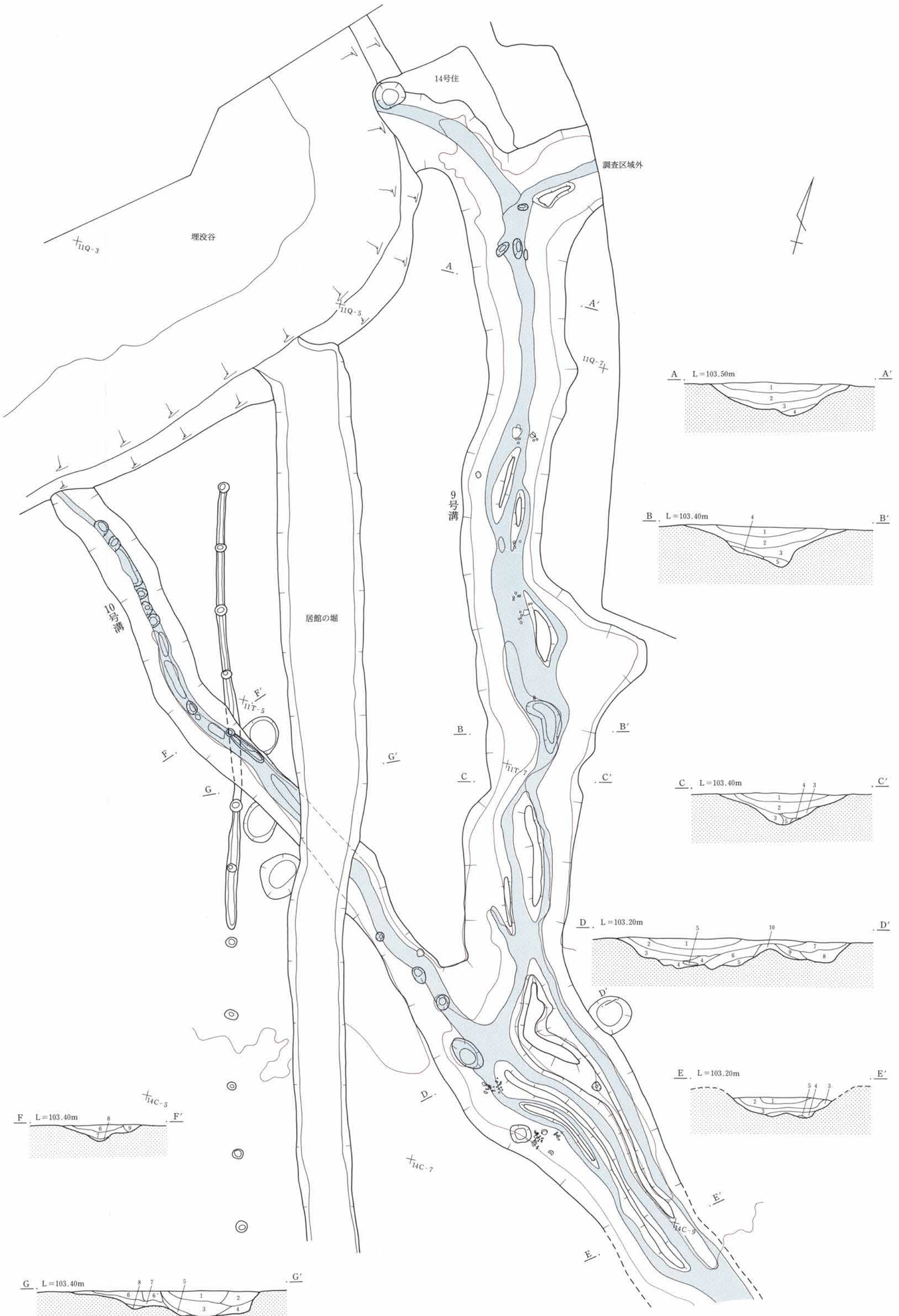
遺　物　溝の中央部付近と、９・10号溝の合流付近から多く出土している。合流している地点では10号溝の旧流路を利用していると思われるために、一部は10号溝の遺物が含まれる可能性もある。しかし９号溝と重複していない部分から遺物は全く出土していないことや、先に述べたように合流地点から南は新しい９号溝として機能しているために、出土遺物は９号溝に属するものと考えている。

10号溝（第50図　PL.7）

概　要　居館内の北東コーナー部分を流れグリッド11S-３～５に属する。先に述べたように、居館を造る段階で使用されなくなり溝の上に柵列や居館の溝が掘られている。この溝は地形の等高線に添って高い北西方向から低い南東方向に流れる自然の水路であったものと思われる。

規　模　幅は1.5ｍ前後で、深さは40㎝前後である。長さは９号溝と重複した地点まで26ｍである。

埋没土　As-C を多く含む。　**遺物**　無し。



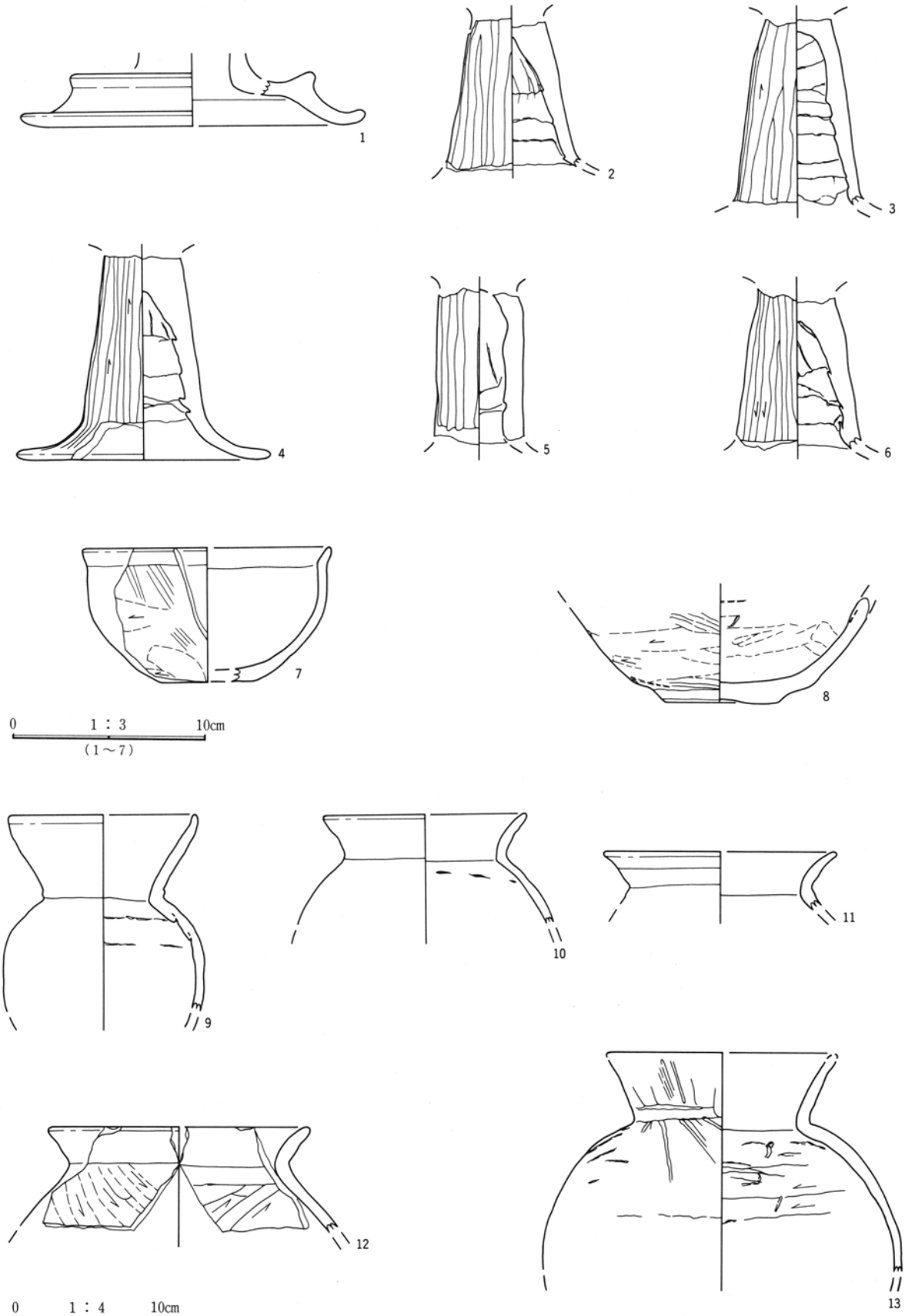
9号溝（A～E）

1．暗褐色土　多くの Hr-FA を含む。（遺物が出土する層）
2．黒色土　多くの地山の土と少量の炭化物を含む。（遺物が出土する層）
3．暗褐色土　少量の地山の土を含む。
4．灰褐色土　少量の地山の土を含む。
5．灰褐色土　少量の砂利を含む。
6．灰褐色土　少量の地山の土を含む。
7．茶褐色土　少量の Hr-FA を含む。
8．灰褐色土　少量の地山の土を含む。
9．茶褐色土　多くの地山の土を含む。
10．灰褐色土　少量の地山の土を含む。

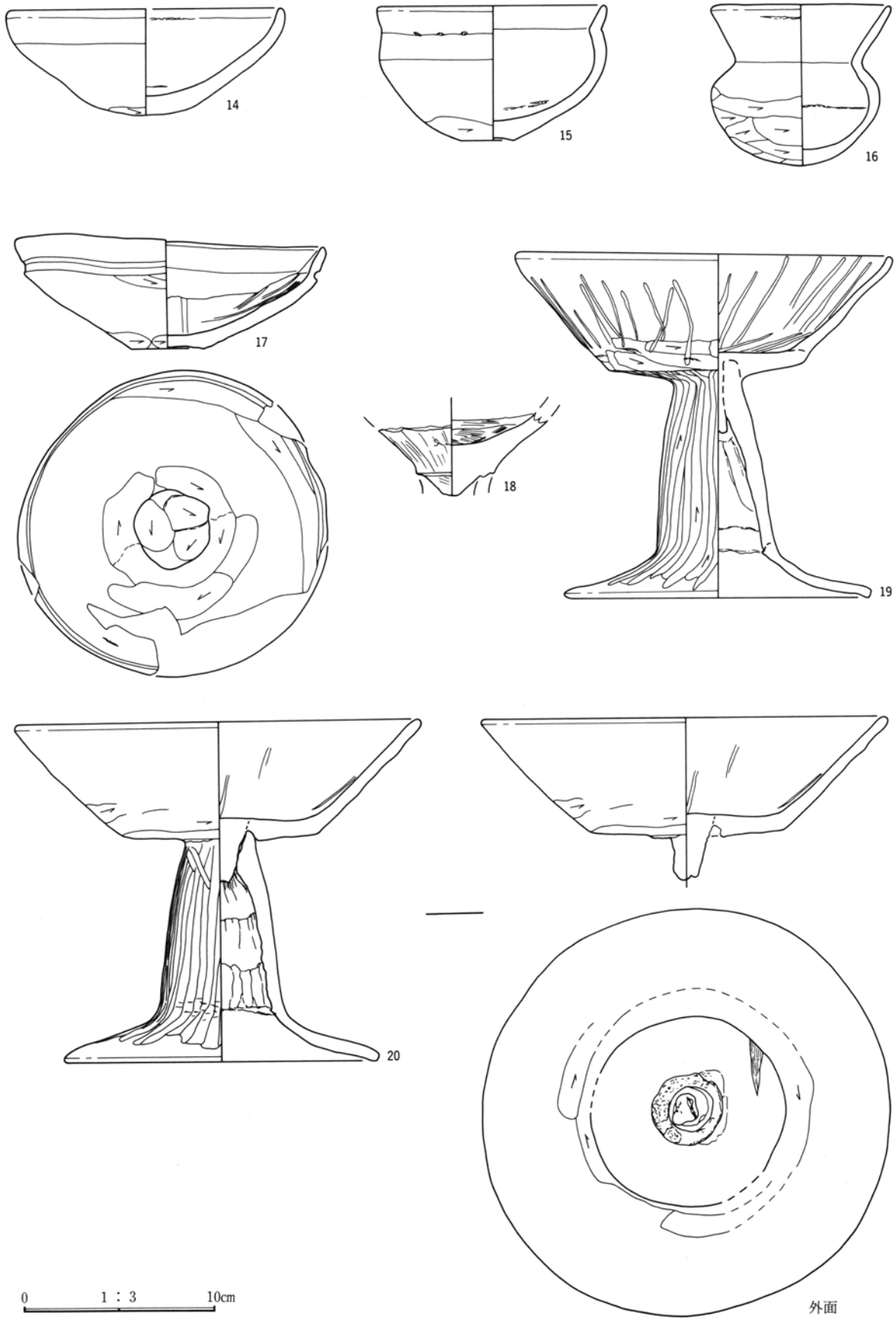
10号溝　（F・G）

1．茶褐色土　多くの Hr-FA を含む。
2．暗褐色土　少量の Hr-FA を含む。
3．黒褐色土　多くの As-C と少量の地山をブロック状に含む。
4．暗褐色土　少量の地山をブロック状に含む。
5．暗褐色土　多くの地山をブロック状に含む。
6．黒褐色土　多くの As-C を含む。
6：黒褐色土　6層より少量の As-C を含む。
7．暗褐色土　少量の地山の土を含む。
8．暗褐色土　多くの地山の土をブロック状に含む。
9．暗褐色土　やや軟質な層。（館跡柵列の溝覆土）

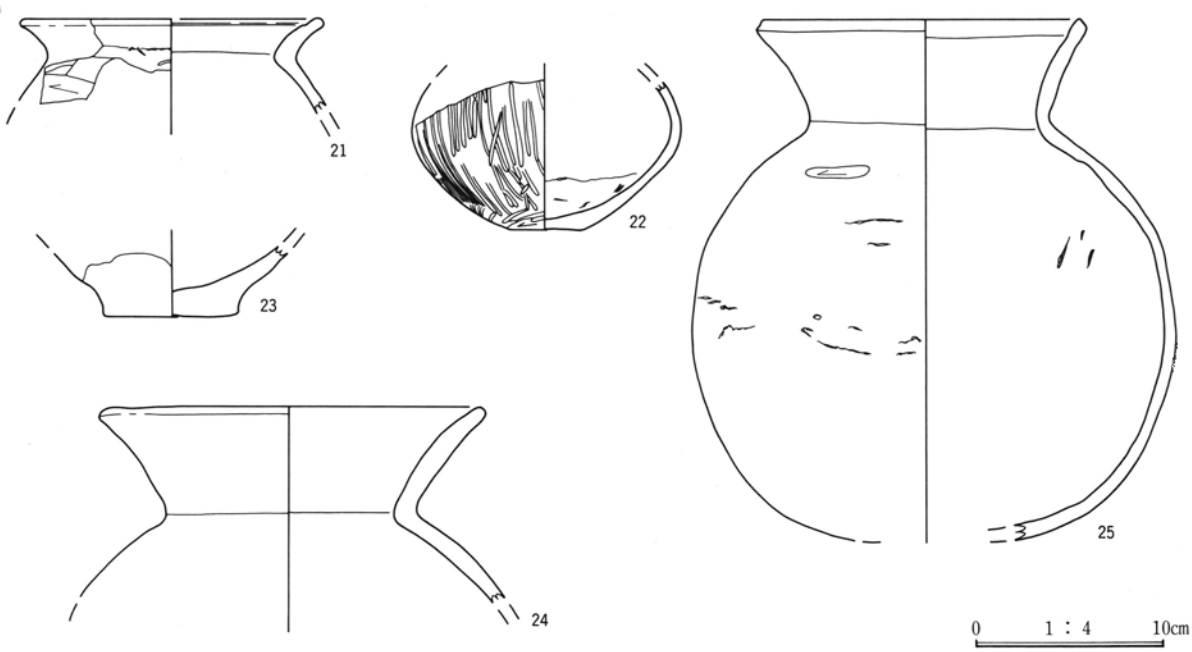
第50図　9・10号溝



第51図　９号溝出土遺物（１）



第52図　９号溝出土遺物（２）



第53図　９号溝出土遺物（３）

９号溝出土遺物観察表

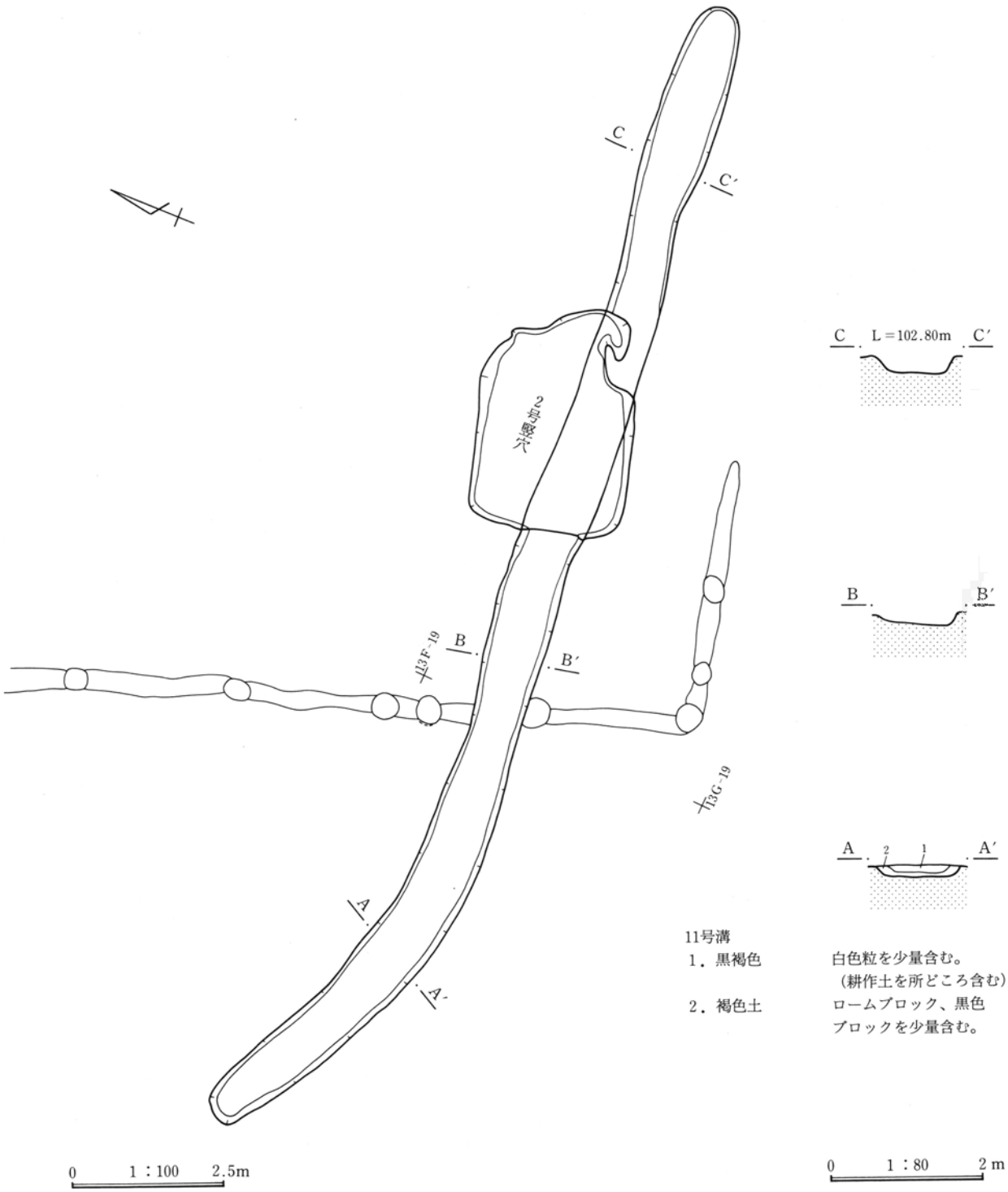
挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
51-1	土師器 高坏	11Q-6 グリッド 小破片	口 — 高 — 底(17.8)	①１㎜以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	内外面ナデにて器表面密。有段脚高坏の脚部小破片と思われる。
51-2 36	土師器 高坏	床面＋41 図示部分 ほぼ完形	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	筒外面ヘラナデ、内面下半３段の輪積痕、上半は棒状工具を用いた縦方向の整形。 坏部との接合は柄穴式ではないと思われる。
51-3 36	土師器 高坏	床面＋47 図示部分 ほぼ完形	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	筒部外面ヘラナデ。内面に多くの輪積痕が残る。 坏部との接合は柄穴式ではないと思われる。
51-4 36	土師器 高坏	床面＋53 筒部完形 下部1/5	口 — 高 — 底(13.2)	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	筒外面～下端部ヘラナデ。筒内面３段の輪積痕、上端縦方向ナデ。
51-5 36	土師器 高坏	床面＋53 図示部分 完形	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	筒外面ヘラナデ。坏との接合部付近で狭くなっている。筒内面下部２段の輪積痕、上部は縦方向ナデ。 細い筒状を呈しており、出土例は少ない。
51-6 36	土師器 高坏	床面＋37 図示部分 ほぼ完形	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	筒外面ヘラナデ、内面下半３段の輪積痕、上半は棒状工具を用いた縦方向の整形。 坏部との接合は柄穴式ではないと思われる。
51-7	土師器 埦	14B-7 グリッド 小破片	口 12.7 高 — 底 —	①密、１㎜以下の赤色粒と白色粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③赤褐色	底部外面及び体部外面ヘラナデ、部分的にヘラ磨き。器表面密。内面ナデにて器表面密。 全体に赤を強く意識した坏である。
51-8	土師器 鉢	床面＋50 胴下半1/3 底部完形	口 — 高 — 底　8.1	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明褐灰色	底部はドーナツ状で中央部が凹状を呈する。 胴部外面ナデ、一部ヘラ磨き。内面ナデ。
51-9 36	土師器 壺	床面＋50 口縁1/3 胴上部1/4	口(13.0) 高 — 底 —	①１㎜前後の砂粒を多く、１～２㎜の赤色粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	胴部外面～口縁部ナデにて器表面密。胴部内面に大きな輪積痕が残る。
51-10	土師器 甕	床面＋47 口縁1/10 胴上半1/2	口(14.0) 高 — 底 —	①密、１㎜前後の砂粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ナデにて器表面密。内面に輪積痕が残る。

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
51-11	土師器 甕	14C-7 口縁1/3	口 16.0 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	口縁部内外面横ナデにて器表面密。口縁部中央やや肉厚となっている。
51-12	土師器 甕	床面＋41 小破片	口(18.0) 高 — 底 —	①１～３㎜の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	肩部全面指等によるナデ。内面胴部ヘラ等による強いナデ。多くの砂粒が目だつ。
51-13 36	土師器 甕	床面＋43 口縁1/10 胴上1/2	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の赤色粒を多量含む、１㎜以下の砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質③外黒色　内明赤褐色	胴部外面ナデ、内面部分的にヘラ削り、他ナデ。口縁部横ナデ。胴部内面に輪積痕が残る。
52-14 37	土師器 坏	床面＋41 1/3	口(14.6) 高 5.5 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く、１～２㎜の赤色粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	底部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。
52-15 37	土師器 埦	床面＋22 口1/2体 2/3底部完	口 12.0 高 7.0 底 2.8	①１㎜前後の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	口縁部横ナデ、内面ナデ。体部外面ナデ、多くの砂粒が目だつ。体部下端ヘラナデ、底面ナデ、平底を持つ小さな坏である。
52-16 37	土師器 坩	床面＋41 4/5	口 9.4 高 8.4 底 —	①１㎜前後のやや大きな砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③橙色	口縁部横ナデ、底部ヘラ削り。体部内側中段に接合痕あり。
52-17 37	土師器 坏	床面＋41 口縁2/3 底部完形	口 16.3 高 6.0 底 3.8	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	底部外面と体部下端手持ちヘラ削り、内面ほぼ全面にわたりヘラ磨きがあるが残りが悪い。
52-18 36	土師器 高坏	床面＋27 小破片	口 — 高 — 底 —	①密、１㎜以下の白色粒を多く、１～２㎜の赤色粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	坏部外面刷毛目、内面も刷毛目と思われる。坏底部に筒状の脚との接合用の凸状部が残る。
52-19 37	土師器 高坏	床面＋43 口縁一部 欠他完形	口 19.6 高 18.0 底 16.0	①１㎜内外の砂粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	坏内面刷毛による整形痕が残る。その後下部と上部の２段に放射状ヘラ磨き。脚内面に輪積痕が残る。残りが悪いが赤色塗料の可能性あり。
52-20 36	土師器 高坏	床面＋42 坏部2/3 脚部完形	口 21.1 高 17.5 底 16.3	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	脚筒部内面に３段の輪積痕、脚外面ヘラ磨き。坏外面体部下端ヘラ削り。坏底部外面ヘラナデ。柄穴式に坏と脚を接合しており、きれいにはずれる。
53-21	土師器 甕	床面＋42 小破片	口(16.0) 高 — 底 —	①１㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい褐色	肩部ヘラ削り。頸部にヘラの工具痕あり。内面ナデにて器表面密。
53-22 37	土師器 壺	床面＋40 体部上1/2 下半完形	口 — 高 — 底 3.7	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③赤褐色	底部外面ほぼ水平、やや凹状、体部外面密なヘラ磨き。内面ナデにて器表面密。内面体部下半に輪積痕あり。
53-23 37	土師器 甕	床面＋22 底部のみ 完形	口 — 高 — 底 7.2	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい赤褐色	底部外面ヘラ削り、底部中央がわずかに凹状になっている。内外面とも内面ナデにより器表面密。
53-24 37	土師器 甕	床面＋43 口縁4/5 肩部1/5	口 20.4 高 — 底 —	①密、多くの輝石粒を含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	肩部ナデ、口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。ヘラや刷毛等の整形痕は残っていない。肩部内面に指頭圧痕等の凹凸わずかにある。
53-25 37	土師器 甕	床面＋43 口縁9/10 胴部1/2	口 17.5 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ナデ、工具等用いた整形痕全く確認できない。口唇部は平。内面ナデにて器表面密。

11号溝（第54図　PL.9）

11号溝は居館の堀の内部に位置し13F-17～20・14F-１グリッドに属する。ほぼ東西方向に長い溝であり、中央部で柵列と、さらに東側で２号竪穴状遺構と重複しており、11号溝が最も新しく、両遺構を掘り込んでいる。

規模は長さ21m、幅0.76～１m、深さ0.22mである。遺物は全く出土していない。この溝は古墳時代中期以降であるが、どの時期に存在したのかは不明。



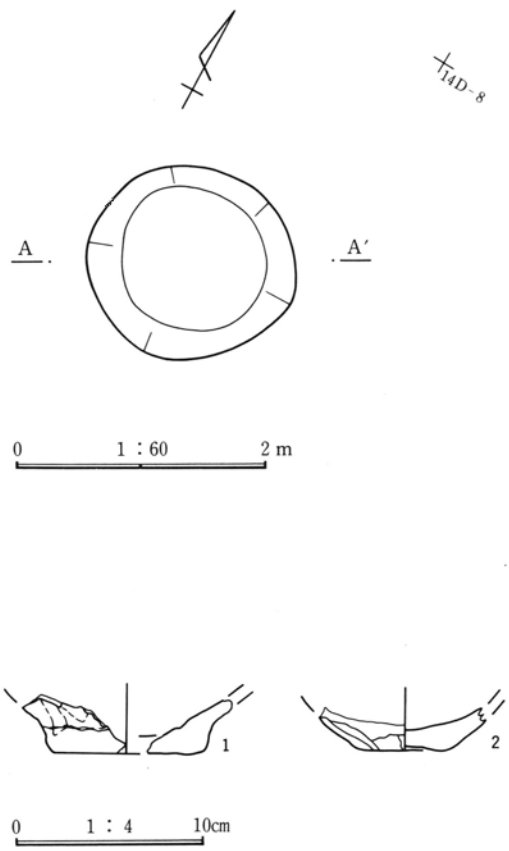
第54図　11号溝

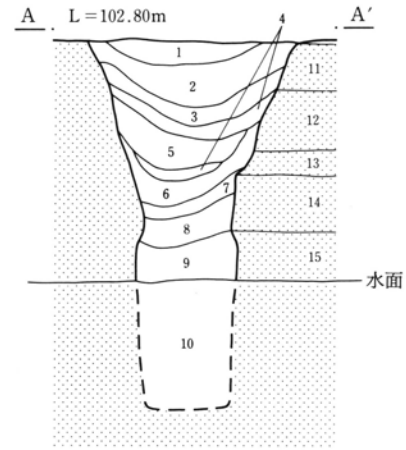
第４節　井戸

井戸は３基検出された。いずれも居館の堀の外に位置するが、居館の堀に近接している。

１号井戸（第55図　PL.9）

１号井戸は14D-７グリッドで居館の堀東南コーナー部分に近く、東溝南端から約３ｍ東に掘られていた。覆土中に古墳時代中期の住居覆土に近い黒色土を含むことや、覆土中から出土した甕底部の破片から古墳時代中期に使われていた可能性が高い。形は上面が広く底面に向かい次第につぼまり、円筒状になっている。規模は上面で長軸1.65m、短軸1.5m、深さは湧水のために完掘できなかったがピンポールによる調査で確認面から2.9mで堅い面となっていた。底面はほぼ円形で径70cmである。湧水帯は標高100.80m前後であり、他の２・３号井戸の湧水帯が標高101.20m前後であるために約40cmほど低くなっている。出土遺物は甕の底部２個と頸部の小破片１点であり、時期は５世紀代と思われる。





１号井戸

1．黒褐色土　少量の白色軽石粒と黄褐色土粒を含む。
2．黒褐色土　少量の白色軽石粒と灰褐色土のブロック（３cm前後）を少量含む。
3．黒褐色土　２層にやや近い、黒色土を帯状に含む。
4．黒褐色土　地山の黄褐色土と灰褐色土を多量に含む。
5．灰褐色土　黒色土・黒褐色土と灰褐色土のブロック（１～５cm）の混入層。
6．暗灰褐色土　地山の暗灰褐色土をブロック状に多量に含む。
7．黒色土　軟質の層である。少量の暗灰褐色土を含む。
8．暗灰褐色土　多くの黒色土を混入している。全体に砂質。
9．暗褐色土　多くの暗褐色土を含む。
10．暗黄褐色土　多くの地山の黄褐色土を含む。
11．暗灰褐色粘質土
12．暗灰茶褐色土　固く、砂礫（２～５cm）を多く含む。
13．灰褐色砂層
14．暗灰茶褐色砂層　１mm以下の砂層。
15．白灰色砂層　１mm以下の砂層。

第55図　１号井戸・出土遺物

１号井戸出土遺物観察表

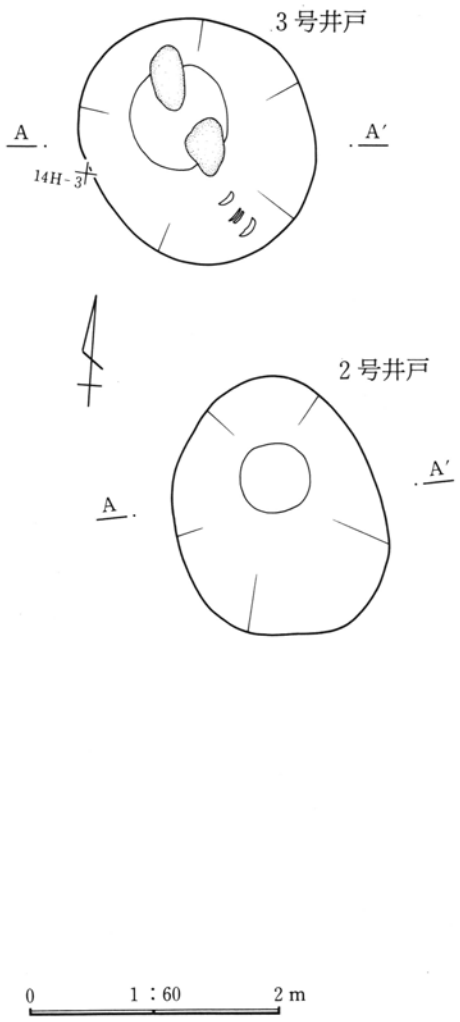
挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
55-1	土師器 甕	覆土 小破片	口　― 高　― 底　8.0	①１mm以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔　硬質 ③外面にぶい橙色　内面黒褐色	底部内外面ナデ。底部外面ドーナツ状を呈し、中央部が凹状になっている。胴部外面ヘラナデ。 底部内外面ナデ。
55-2	土師器 甕	覆土 小破片	口　― 高　― 底　5.0	①１mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔　硬質 ③にぶい橙色	底部外面ドーナツ状を呈し中央部が凹状になっている。胴部外面ヘラナデ。

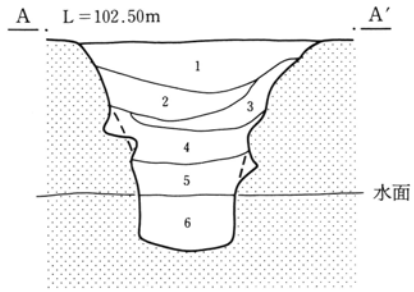
２号井戸（第56図　PL.9）

２号井戸は14H-３グリッドで居館南堀中央部の張り出し部分の東に近接している。堀から約５m南に掘られていた。覆土中に古墳時代中期の住居覆土に近い色の土を含むことから古墳時代中期に使われていた可能性がある。形は上面が広く底面に向かい次第につぼまり、円筒状になっている。規模は上面で長軸2.0m、短軸1.75m、深さは1.45mである。底面はほぼ円形で径50cmである。湧水は標高101.20mである。出土遺物は甕の胴部と思われる小破片１点であり、時期は不明である。

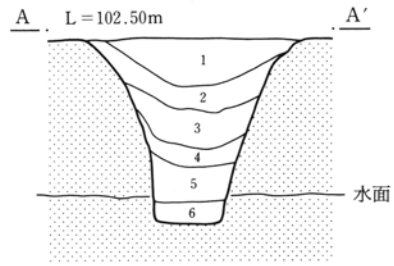
３号井戸（第56図　PL.9）

３号井戸は14G-３グリッドで２号井戸の北１mに近接している。居館南堀中央部の張り出し部分の東で、溝から約４m南に掘られていた。覆土中に古墳時代中期の住居覆土に近い色の土を含むことから古墳時代中期に使われていた可能性がある。形は上面が広く底面に向かい次第につぼまり、円筒状になっている。規模は上面で長軸2.0m、短軸1.8m、深さは1.65mである。底面はほぼ円形で径70cmである。湧水帯は標高101.20m前後である。出土遺物は甕の口縁部と思われる小破片１点であり時期は不明である。





３号井戸
1．黒褐色土　少量の白色軽石粒を含む。
2．暗褐色土　灰茶褐色土粒と小ブロックを多く含む。
3．暗褐色土　灰褐色土粒と小ブロックを多く含む。
4．黒色土　少量の灰褐色粘質土を含む。
5．暗茶褐色土　茶褐色粘質土粒と小ブロックを多く含む。
6．暗褐色土　暗褐色土を主とする層。



２号井戸
1．黒褐色土　少量の白色軽石粒を含む。
2．暗褐色土　灰褐色粒を多量に含む。全体に粘性あり。
3．黒色土　１層に近いが１層より黒色が強い少量の灰褐色土を含む。
4．暗褐色土　灰褐色粒を主とし、少量の暗褐色土粒を含む。
5．褐色土　少量の灰褐色土粒を含む。
6．暗褐色土　暗褐色土を主とする層。

第56図　２・３号井戸

第５節　土坑

土坑について（第57図～64図　PL.10～15）

南調査区から、47個の土坑が発掘された。土坑番号は51号まであるが、7・25・27・44号土坑としたものは、形や深さが不自然であるため報告から外して欠番とした。掘られていた場所は、大部分が居館跡の中と南と東側であった。大きさは１m前後で深さは30cm前後が多い。形は大きく分けて楕円形を含めた円形と長方形に分けられる。時期の明らか、あるいは推定できる古代の土坑はほとんどが円形を基本としている。他の遺跡調査例から長方形を基本としている土坑は近世以降のものが多いために、長方形に掘られたものの多くは、近世以降であると考えられる。円形で一定の深さを持っているものは、２・３・４・６・28・33・36・43の８個でありいずれとも古代の時期に掘られたものと思われる。そのことは土坑の中から出土した遺物と覆土中に残された、浅間山噴出の軽石であるAs-Cや榛名山噴出の軽石であるHr-FAの存在から考えられる。個々の土坑の大きさや形態また出土位置等の情報は、表にまとめて示した。

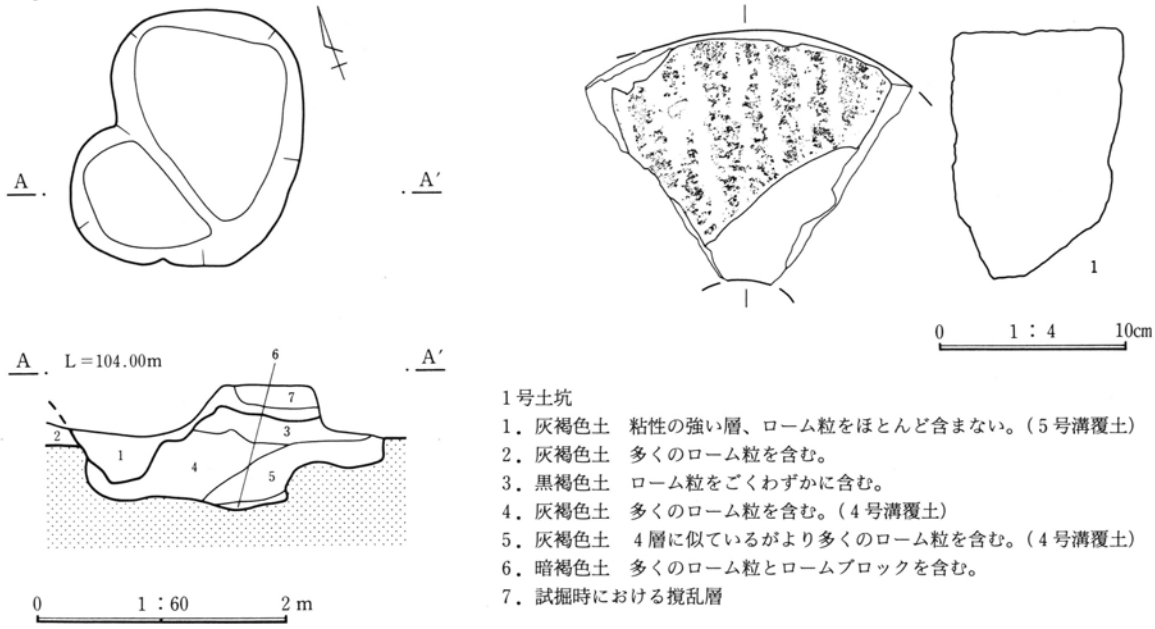
１号土坑（第57図　PL.10・43）

１号土坑は南調査区北西に位置し10E-14グリッドに属する。東西方向に掘られている４号溝と南北方向に掘られている５号溝とほぼ直行している重複部分に、この１号土坑が掘られていた。土層観察面から４号溝覆土がはじめに１号土坑を埋めておりその上を５号溝の覆土が埋めている。そのために１号土坑→４号溝→５号溝ということになる。両方の溝が機能している段階にこの土坑は埋まりきっていない事を示している。しかし土層観察部分が土坑の覆土部分を主としているため、この観察結果だけで充分明らかであるとは言えない。

土坑は北東と南西の２個が切りあっているようにも見えるが土層観察の結果では明らかでない。この土坑は２本の溝より深く掘り込まれている。

規模は長軸2.1m、短軸1.6m、深さは土坑が溝の底面付近で確認されているため溝の確認面から計って１mであった。

出土遺物は石臼の破片が出土している。



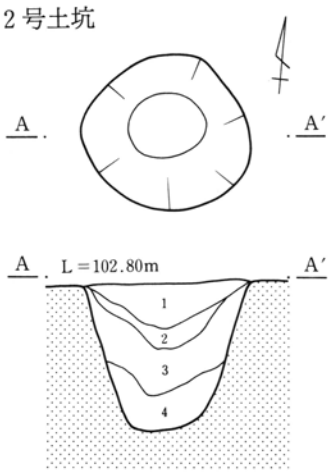
１号土坑
1．灰褐色土　粘性の強い層、ローム粒をほとんど含まない。（５号溝覆土）
2．灰褐色土　多くのローム粒を含む。
3．黒褐色土　ローム粒をごくわずかに含む。
4．灰褐色土　多くのローム粒を含む。（４号溝覆土）
5．灰褐色土　４層に似ているがより多くのローム粒を含む。（４号溝覆土）
6．暗褐色土　多くのローム粒とロームブロックを含む。
7．試掘時における撹乱層

第57図　１号土坑・出土遺物

１号土坑出土遺物観察表

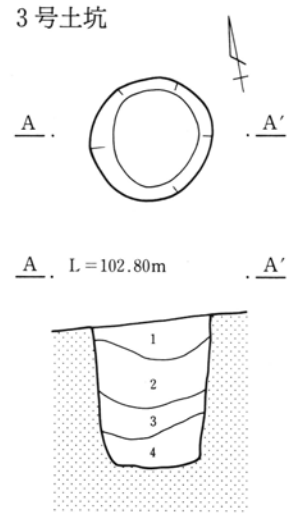
挿図番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計 測 値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
57-1 43	石臼	1/6	粗粒輝石 安山岩	—　—　9.1　2240	粉挽き臼の下臼である。臼の目は丁寧に刻まれている。	床面-19

２号土坑



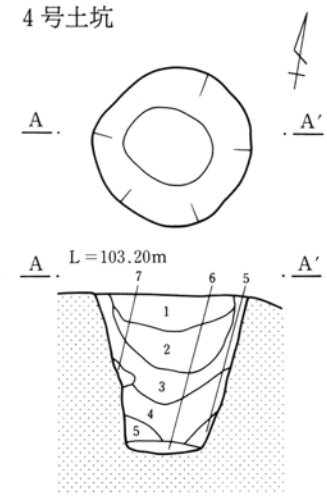
２号土坑
1．褐色土　灰茶色粘土ブロックと白色軽石粒（As-B）を少量含む。
2．黒色土　わずかに灰茶色粘土粒と白色軽石粒（As-B）を少量含む。
3．褐色土　灰茶色粘土ブロックを含む。粘性が強い。
4．黒褐色土　わずかに灰茶褐色土ブロックを含む。粘性が強い。

３号土坑



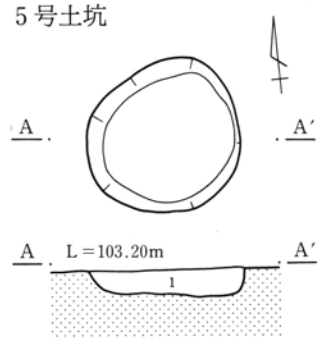
３号土坑
1．黒褐色土　多くの白色軽石粒（As-B）と少量のローム粒を含むザラザラした層。
2．暗茶褐色土　多くのロームブロックを含む。
3．黒色土　わずかに灰茶褐色粘土粒を含む。
4．褐色土　灰茶褐色粘土粒を含むややざらついた層。

４号土坑



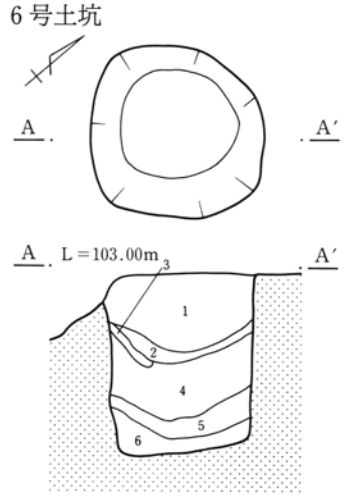
４号土坑
1．茶褐色土　Hr-FA をわずかに含む。
2．黒褐色土　Hr-FA と白色軽石粒をわずかに含む。
3．黒褐色土　軽石粒ほとんど含まず、少量のロームブロックを含む。
4．褐色土　多くのローム粒とロームブロックを含む。
5．褐色土　多くのローム粒を含む。
6．暗褐色土　粘性を持つ、一部に赤褐色土を含む。
7．黄褐色土　ロームブロック

５号土坑



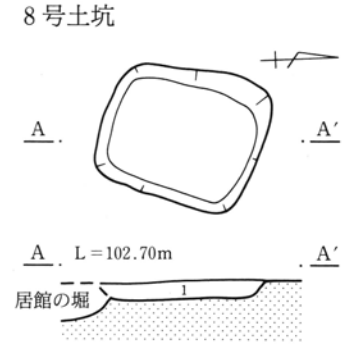
５号土坑
1．茶褐色土　0.1～１cmのロームブロックを含む。

６号土坑



６号土坑
1．茶褐色土　やや砂質である。少量の As-B を含む。
2．灰茶褐色土　As-B の軽石とわずかな灰を含む。
3．黒色土　粘性の強い層。
4．暗茶褐色土　少量のロームブロックを含む。砂質の酸化土を含む。
5．黄褐色土　多くのローム粒とロームブロックを含む。
6．暗褐色土　粘性の強い層である。

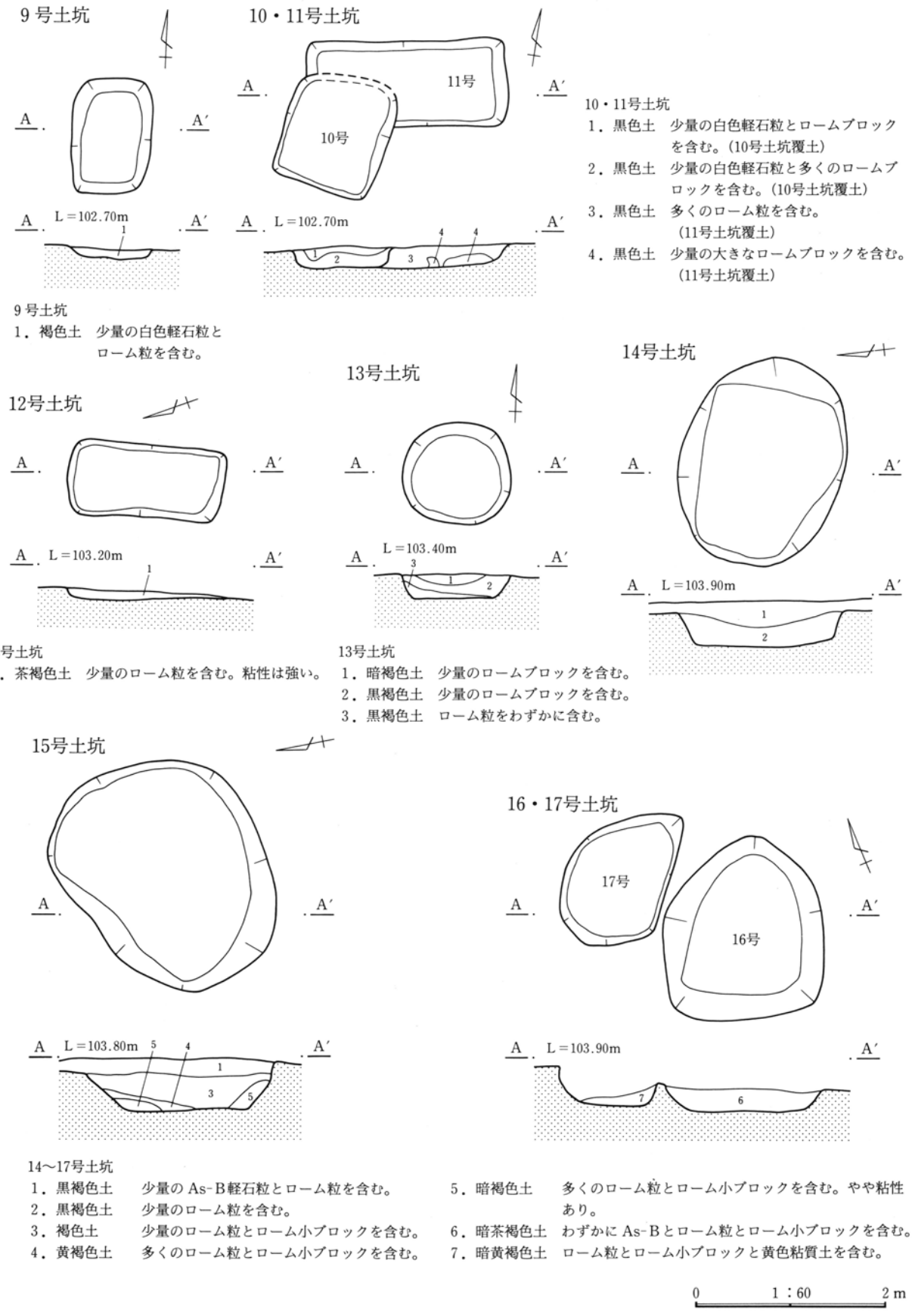
８号土坑



８号土坑
1．黒色土　少量の白色軽石粒とロームブロックを含む。

0　1：60　2 m

第58図　２～６・８号土坑



9号土坑
1．褐色土　少量の白色軽石粒とローム粒を含む。

10・11号土坑
1．黒色土　少量の白色軽石粒とロームブロックを含む。（10号土坑覆土）
2．黒色土　少量の白色軽石粒と多くのロームブロックを含む。（10号土坑覆土）
3．黒色土　多くのローム粒を含む。（11号土坑覆土）
4．黒色土　少量の大きなロームブロックを含む。（11号土坑覆土）

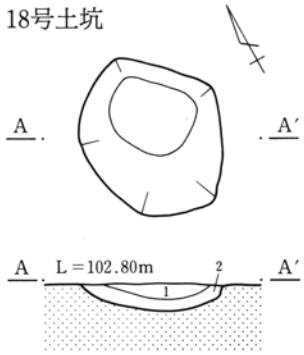
12号土坑
1．茶褐色土　少量のローム粒を含む。粘性は強い。

13号土坑
1．暗褐色土　少量のロームブロックを含む。
2．黒褐色土　少量のロームブロックを含む。
3．黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。

14～17号土坑
1．黒褐色土　少量のAs-B軽石粒とローム粒を含む。
2．黒褐色土　少量のローム粒を含む。
3．褐色土　少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
4．黄褐色土　多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
5．暗褐色土　多くのローム粒とローム小ブロックを含む。やや粘性あり。
6．暗茶褐色土　わずかにAs-Bとローム粒とローム小ブロックを含む。
7．暗黄褐色土　ローム粒とローム小ブロックと黄色粘質土を含む。

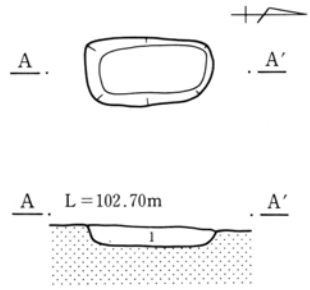
第59図　9～17号土坑

18号土坑



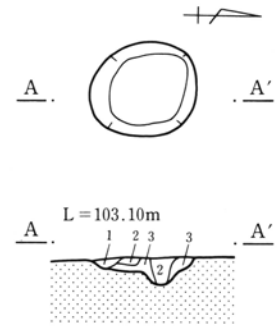
18号土坑
1．褐色土　少量の白色軽石粒を含む。
2．灰褐色土　少量のロームブロックを含む。

19号土坑



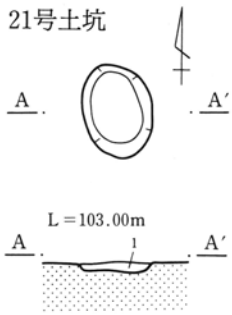
19号土坑
1．黒色土　少量の Hr-FA を含む。

20号土坑



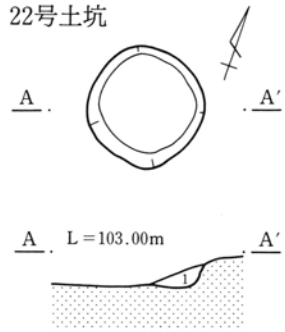
20号土坑
1．黒褐色土　少量の Hr-FA を含む。
2．茶褐色土　多くの Hr-FA を含む。
3．褐色土　わずかに Hr-FA を含む。

21号土坑



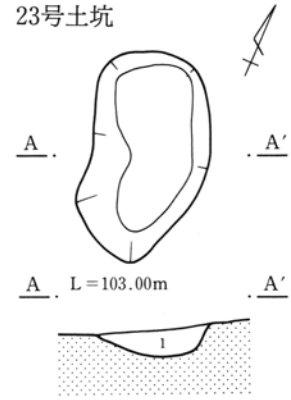
21号土坑
1．黒褐色土　少量のローム粒を含む。

22号土坑



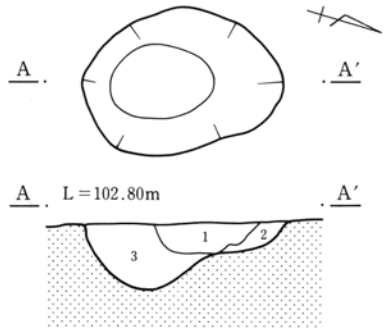
22号土坑
1．黒褐色土　少量のローム粒と白色鉱物粒を含む。

23号土坑



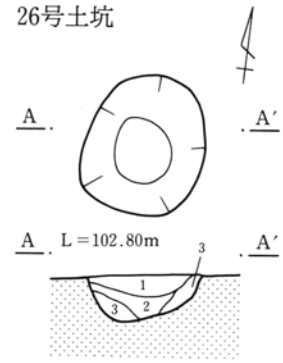
23号土坑
1．暗黄褐色土　粘性を持つ層である。

24号土坑



24号土坑
1．黒褐色土　少量の Hr-FA を含む。全体として砂質土。
2．黒褐色土　多くの白色鉱物粒を含む。全体に砂質土。
3．茶褐色土　少量の白色鉱物粒を含む。

26号土坑

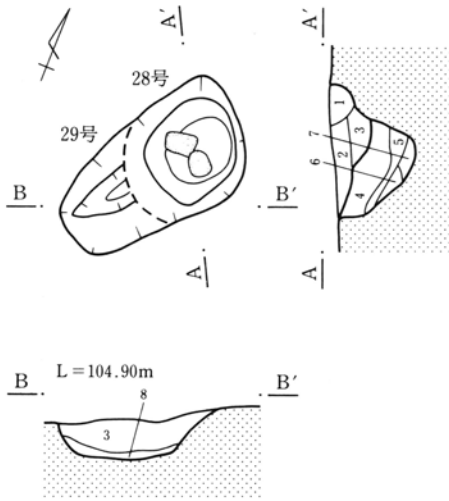


26号土坑
1．黒褐色土　多くの白色鉱物粒を含む。
2．褐色土　少量の白色鉱物粒を含む。
3．黄褐色土　粘性の強い層である。

0　1：60　2 m

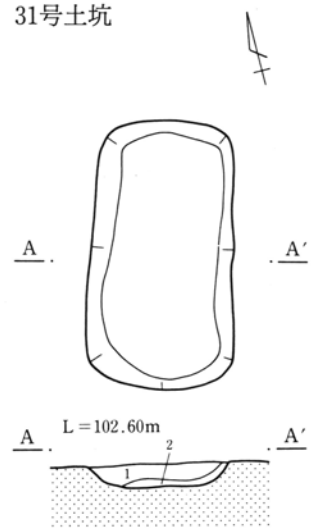
第60図　18～24・26号土坑

28・29号土坑

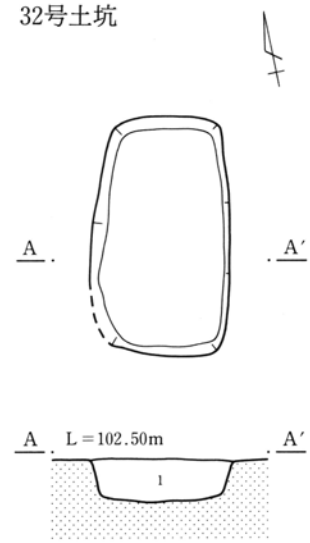


28・29号土坑
1．茶褐色土　（撹乱層）
2．黒褐色土　Hr-FA をわずかに含む。(29号土坑覆土)
3．黒褐色土　Hr-FA と木炭をわずかに含む。(29号土坑覆土)
4．黒色土　ロームブロックと木炭を含む軟らかい層。
5．黄褐色土　多くのロームブロックを含む層。
6．黒色土　ローム粒をわずかに含む。
7．褐色土　焼土とロームブロックの混在層。
8．暗茶褐色土　ロームブロックを少量含むやや粘性のある層。

31号土坑

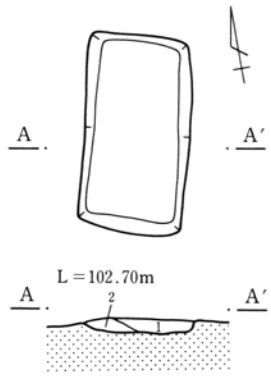


32号土坑



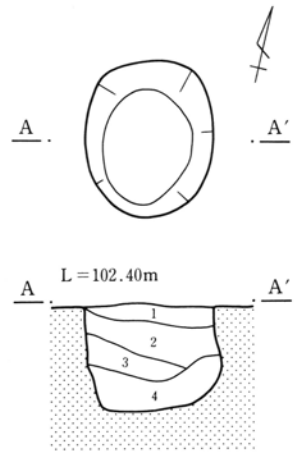
31・32号土坑
1．褐色土　少量の白色軽石粒を含む。
2．褐色土　少量の灰色粘土ブロック含む。

30号土坑



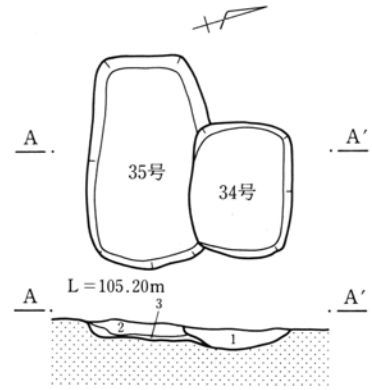
30号土坑
1．黒褐色土　少量の白色軽石粒を含む。
2．黒褐色土　少量の焼土粒と白色軽石粒を含む。

33号土坑



33号土坑
1．灰茶褐色土　多くの灰褐色粘土粒を含む。
2．灰茶褐色土　少量の灰褐色粘土粒を含む。
3．暗茶褐色土　少量の灰褐色粘土を小ブロック状に含む。
4．暗茶褐色土　多くの灰褐色粘土を含む。粘性あり。

34・35号土坑

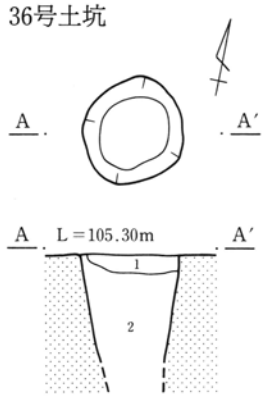


34・35号土坑
1．褐色土　多くのローム粒とロームブロックを含む。(34号土坑覆土)
2．褐色土　少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
3．褐色土　多くのロームブロックを含む。

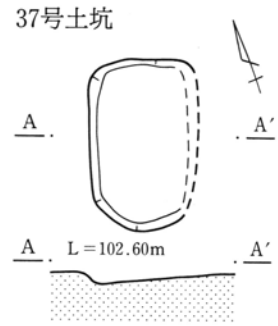
0　1：60　2 m

第61図　28～35号土坑

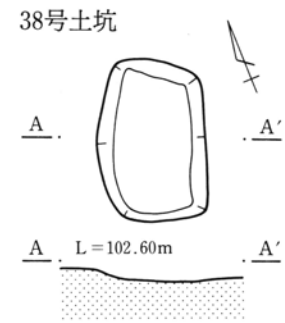
36号土坑



37号土坑

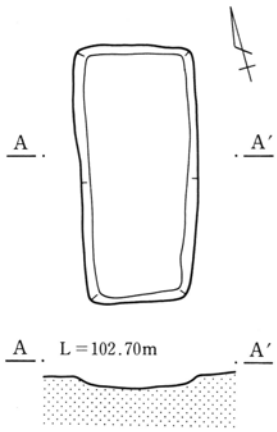


38号土坑

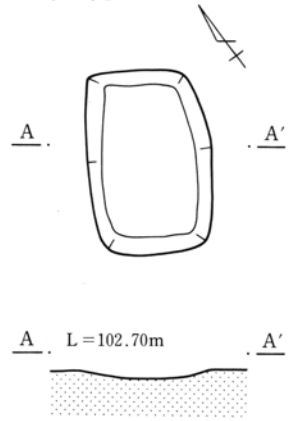


36号土坑
1．黒褐色土　少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
2．暗褐色土　少量のロームと黒色小ブロックを含む。

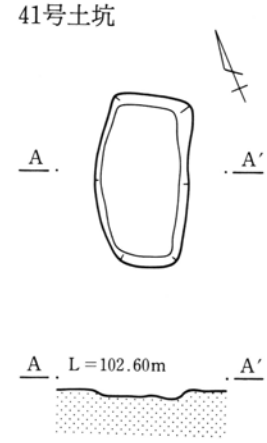
39号土坑



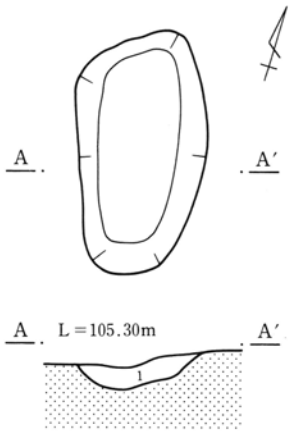
40号土坑



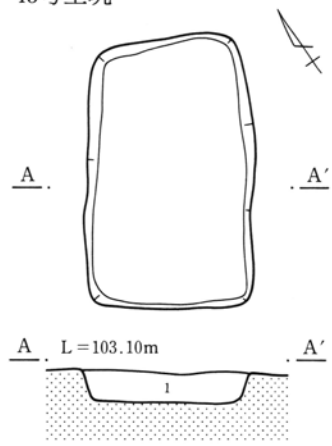
41号土坑



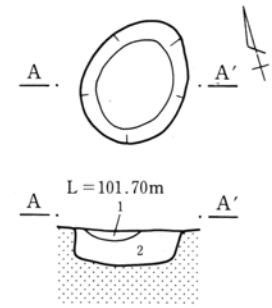
42号土坑



45号土坑



51号土坑



42号土坑
1．黒色土　少量の白色鉱物粒を含む。

45号土坑
1．黒褐色土　暗灰褐色土小ブロック（0.5～1㎝）と黒色土小ブロック（1㎝内外）を含む。

51号土坑
1．黒褐色土　粘性が強く、少量の軽石粒と砂礫を含む。
2．黒褐色土　1層に近いが黒色が弱く、軽石粒がやや多い。

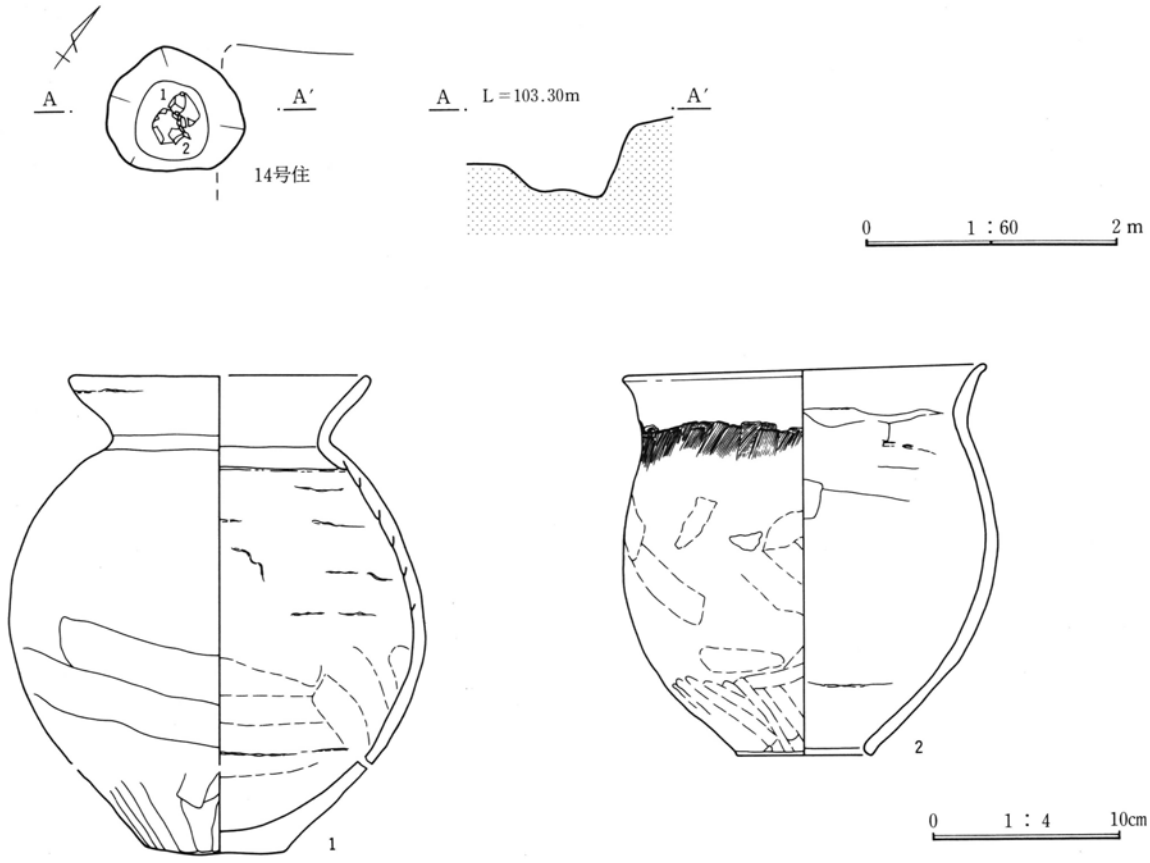
0　1：60　2 m

第62図　36～42・45・51号土坑

43号土坑（第63図　PL.15・37）

43号土坑は９号溝が北端で東西に別れた西側の溝を掘り込んで造られていた。同じ場所に14号住居が造られており、土層観察から新旧関係は14号住居→９号溝→43号土坑である。土坑の中から甕と完形の甑が出土している。14号住居の貯蔵穴の可能性も考えられるが、土層観察の結果明らかに住居より新しいと思われるために、43号土坑として扱った。

規模は長軸1.08m、短軸0.98m、深さは59cmであった。



第63図　43号土坑・出土遺物

43号土坑出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
63-1 37	土師器 甕	床面＋10 口1/4胴 1/3底完	口(16.0) 高(25.2) 底 (7.4)	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色　褐色　黒色	底部外面ナデ。体部下端へラナデ。胴部外面ナデで器表面密、胴部内面に多くの輪積痕とナデ。胴部下半部分で接点はなく図上復元。
63-2 37	土師器 甑	床面＋10 ほぼ完形	口 19.2 高 20.7 底　7.0	①１㎜以下の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色　外面一部黒色	胴部外面ナデ。頸部目の細い刷毛目。内面ナデ、輪積痕が少し残る。

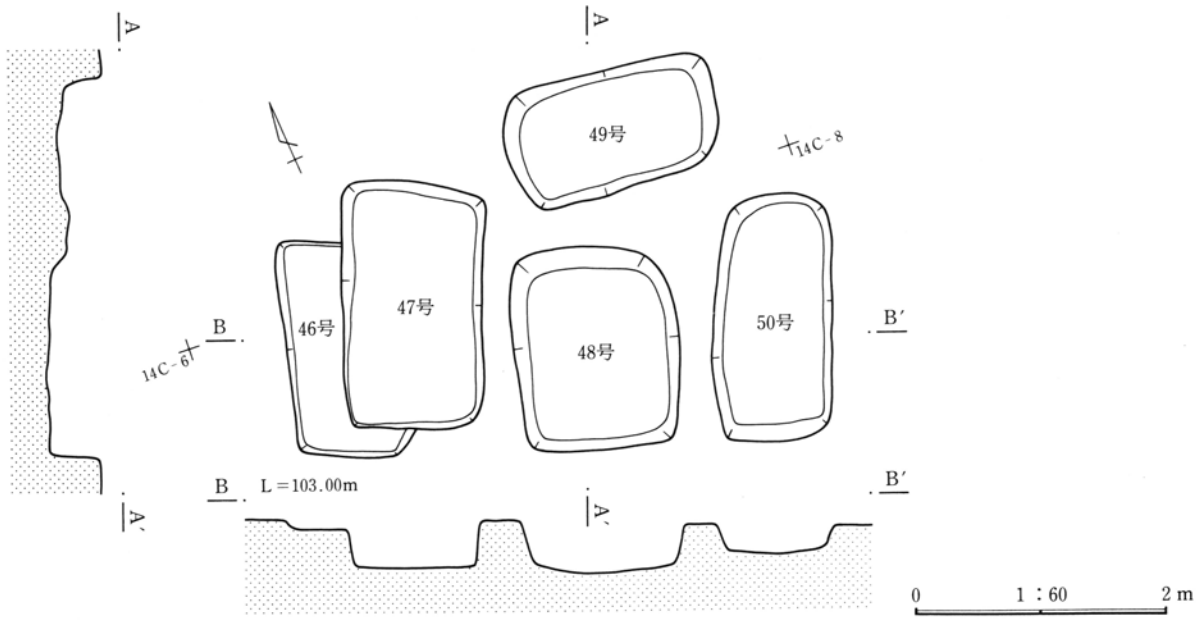
46～50号土坑（第64図　PL.15）

この５個の土坑は、近接し形も同じような長方形を呈している。覆土は、住居や９・10号溝を埋めている黒色土を全く含まずに、覆土中全体に暗褐色土のブロックを含んでおり、人為的に埋められた可能性が高い。出土遺物等はまったくなく、時期を決めることはできないが、覆土の中の土の特色から古代より新しい時期のものと思われる。

規模は一覧表に記載した。

荒砥荒子遺跡土坑一覧表

土坑番号	グリッド	形　態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	長軸方位	時　期	備　　考
1号土坑	10D・E-14	楕円形	2.00	1.50	0.86	N -31°- E	中世？	石臼の破片を出土。
2号土坑	13B-20	円　形	1.35	1.25	1.20	—		As-Bを覆土中に含む。
3号土坑	14B-1	円　形	1.00	0.97	1.23	—		As-Bを覆土中に含む。
4号土坑	14A・B-5	円　形	1.23	1.20	1.28	—	古墳？	古墳時代の土器1片出土。
5号土坑	14A-4	円　形	1.25	1.15	0.25	—		
6号土坑	14A-8	円　形	1.38	1.34	1.45	—	平安？	As-Bを覆土上面に含む。
8号土坑	14E-4	長方形	1.30	1.08	0.13	N -20°- E		
9号土坑	14E-4	長方形	1.22	0.86	0.07	N - 0°- E		
10号土坑	14E・F-3	方　形	1.25	1.10	0.25	—		
11号土坑	14E-3	長方形	2.10	0.90	0.24	N -75°- E		
12号土坑	14B-5	長方形	1.64	0.78	0.13	N -11°- E		
13号土坑	11T-3・4	円　形	1.15	1.05	0.26	—		
14号土坑	11H-1	楕円形	2.20	1.70	0.65	N -115°- E		As-Bを覆土中に含む。
15号土坑	11G-1	楕円形	2.56	2.00	0.55	N -58°- E		As-Bを覆土中に含む。
16号土坑	11F・G-1	楕円形	1.94	1.70	0.45	N -25°- E		
17号土坑	11F-1	楕円形	1.30	1.10	0.45	N -39°- E		
18号土坑	14D-7	円　形	1.22	1.20	0.20	—		
19号土坑	14D・E-3	長方形	1.00	0.55	0.15	N - 0°- E		Hr-FA を覆土中に含む。
20号土坑	14B-4	円　形	0.85	0.85	0.15	—		Hr-FA を覆土中に含む。
21号土坑	14B-4	楕円形	0.76	0.55	0.10	N -163°- E		
22号土坑	14B-4	円　形	0.97	0.94	0.21	—		
23号土坑	14B-3	長方形	0.85	0.47	0.23	N -168°- E		
24号土坑	13E-19	楕円形	1.60	1.09	0.60	N -143°- E	古墳？	Hr-FA を覆土中に含む。
26号土坑	13G・F-18	楕円形	1.10	0.94	0.35	N -12°- E		
28号土坑	14A-1	円　形	1.00	0.96	0.83	N -33°- E		Hr-FA を覆土中に含む。
29号土坑	14A-1	楕円形	-	0.75	0.48	N -33°- E		
30号土坑	14G-5	長方形	1.56	0.85	0.10	N -16°- E		
31号土坑	14G-3・4	長方形	2.15	1.15	0.20	N -19°- E		
32号土坑	14G-3	長方形	1.88	1.08	0.35	N -10°- E		
33号土坑	14I-3	円　形	1.20	1.08	0.87	—	古墳？	古墳時代の土器5片を出土。
34号土坑	14F-3・4	長方形	1.02	0.75	0.21	N -80°- E		
35号土坑	14F-3・4	長方形	1.70	0.85	0.16	N -85°- E		
36号土坑	13G・H-20	円　形	0.90	0.70	1.36	—	古墳？	古墳時代の甕底部破片出土。
37号土坑	14F・G-6	長方形	1.40	0.90	0.15	N -24°- E		覆土は淡褐色土で灰褐色粘土粒を含む。
38号土坑	14G-6	長方形	1.30	0.86	0.10	N -23°- E		覆土は黒褐色土。少量の灰褐色粘土を含む。
39号土坑	14F-5・6	長方形	2.06	0.96	0.10	N -16°- E		
40号土坑	14G-5	長方形	1.48	1.00	0.04	N -35°- E		
41号土坑	14H-4・5	長方形	1.35	0.75	0.08	N -25°- E		
42号土坑	14E-5・6	長方形	1.84	1.02	0.25	N -169°- E		
43号土坑	11O-4・5	円　形	1.08	0.98	0.59	—	5C前	14号住居と重複。
45号土坑	11T・14A-8	長方形	2.15	1.35	0.28	N -31°- E		
46号土坑	14B・C-7	長方形	1.65	-	-	N -17°- E		
47号土坑	14B・C-7	長方形	1.94	1.10	0.10	N -24°- E		
48号土坑	14C-7	長方形	1.60	1.32	0.46	N -12°- E		
49号土坑	14B-7	長方形	1.70	0.94	0.34	N -97°- E		
50号土坑	14C-7	長方形	1.98	0.94	0.25	N -22°- E		
51号土坑	16B-13	円　形	0.90	0.90	0.31	—		



第64図　46～50号土坑

第６節　埋没谷（第65図　PL.16～19・37）

居館は、北西部分を大きな谷により、削り取られている。この大きな谷は居館に接した部分から谷の中央に向かい幅10～12mほど発掘しているが、対岸までを含めた全体は発掘していない。そのために谷の全体像を知ることはできなかったが、谷の幅と範囲を知るためにトレンチ調査を実施した。調査の結果幅約30m深さ約1.6mと大きなものであった。谷の底部はほぼ平であり、蛇行している長い１本の溝と南端に短い２本の溝が確認された。

谷は居館の西側から南南東方向に流れを変えている。北側は９・10号溝と接する付近から北に方向を変えている。北調査区内の東部分に谷の一部があらわれているためこの部分が谷の西岸である可能性が考えられる。東岸については不明である。現在東に流れている河川と北調査区付近で合流していることも考えられる。

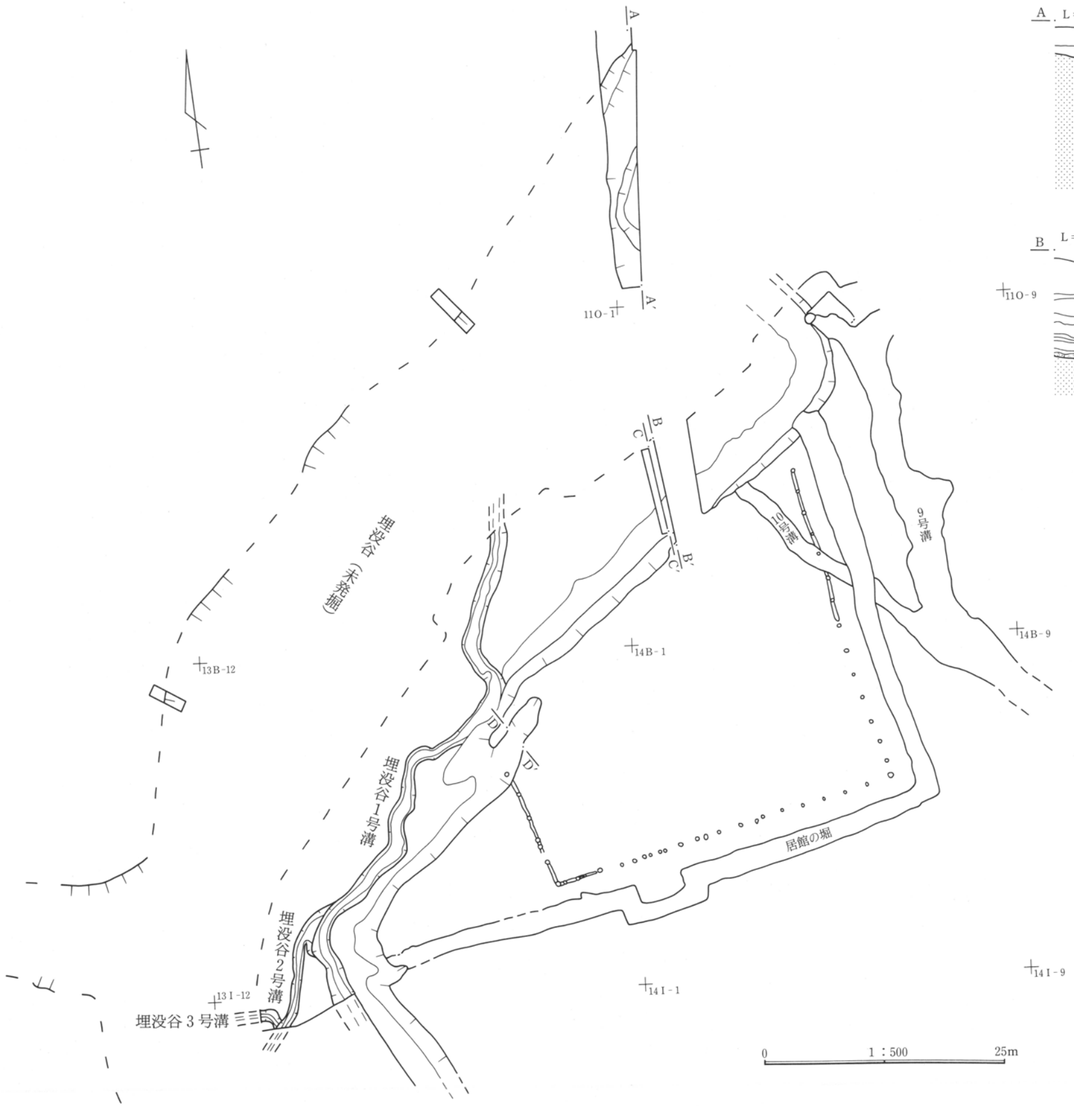
調査した谷の底面にはほぼ全面にわたり、浅間山噴出のＢテフラ（As-B）が、堆積しており、軽石の層が10cm前後、その上を暗紫色の灰層を中心とした層が覆っていた。この谷は浅間山噴出のＢテフラが降下した段階では、水田として使われていた可能性も考えられた。しかし水田に伴う畔や足跡等は確認出来なかったため、水田としては利用されていなかったようである。浅間山噴出のＢテフラ降下後谷は次第に埋まっていったようである。

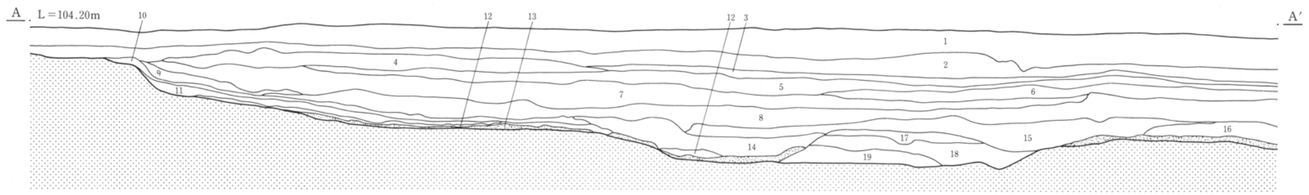
谷の底部はほぼ平であり、３本の溝が確認された。南北方向に長い溝を埋没谷１号溝、南に短い溝を北方向から埋没谷２・３号溝と呼称する。

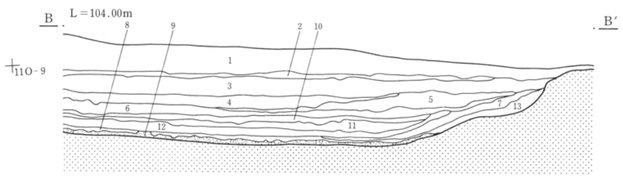
埋没谷１号溝は北東方向から南西方向へ、そして谷と同様に居館の堀と交差する付近で北西方向から南東方向へ流れを変えている。北と南での溝底の標高差は約20cmあり南が低くなっている。規模は幅が1.5m前後、深さ20～40cmであり、幅と深さは北が大きく、深さも深い。

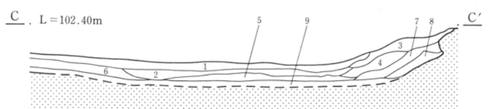
埋没谷２号溝は埋没谷１号溝とは逆に南から北に向かい低くなり、埋没谷１号溝に流れこんでいる。溝の底部は北１号溝より約20cmほど高くなっている。幅は90cm前後深さ10cm前後である。

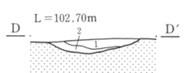
埋没谷３号溝は谷調査区の南西コーナー部分にわずかに、確認された。埋没谷２号溝に西方向から流れ込んでいる溝である。溝の底部は北２号溝より約10cmほど高くなっている。幅は１m前後、深さ５cm前後である。

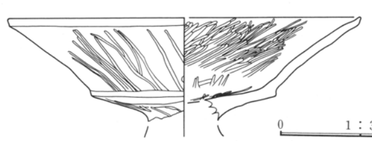












A-A′

1．褐色土　耕作土
2．茶褐色土　鉄分の沈着が認められる。
3．茶褐色砂質土
4．茶褐色砂質土　細い層状に砂礫と砂が堆積している。
5．灰褐色砂質土
6．赤褐色土　酸化鉄を含む。粒のあらい層。
7．灰褐色砂質土
8．灰色砂層
9．灰色砂層　砂質土で細かい層状に堆積。
10．黒色土　As-Bを含む黒色土、粘性あり。
11．黒褐色土　As-Bを多量に含んだ層。
12．暗紫色土層　As-Bに伴う灰を多く含む層。
13．As-B層　浅間Bテフラ
14．灰色砂質土
15．灰褐色砂質土
16．灰褐色砂質土　As-Bを混入している。
17．灰黒色土　As-Bを混入している。
18．黒色粘質土
19．灰褐色粘質土　黄色砂をブロック状に含む。

B-B′

1．褐色土　耕作土
2．茶褐色土　鉄分の沈着が認められる。
3．茶褐色砂質土
4．灰褐色砂質土
5．灰茶色砂質土
6．灰色砂層
7．暗褐色土　As-Bを多量に含んだ層。
8．暗紫色土層　As-Bに伴う灰を多く含む層。
9．As-B層　浅間Bテフラ
10．灰褐色土　粘土層が主で砂層が薄く入る。
11．茶褐色砂層　粘土層が薄く入る。
12．灰色粘質土　ヨシの根が酸化鉄を集めて固まったものが多く含まれる。
13．黒色粘質土　ヨシの根が酸化鉄を集めて固まったものが多く含まれる。

C-C′

1．黒色粘質土　軽石をごくわずかに含む。
2．暗灰褐色粘質土
3．黒褐色土　やや粘質、As-CとHr-FAを少量含む。（古墳時代中期の高坏破片がこの層から出土）
4．黒褐色土　3層に類似するがさらに粘性は強く、軽石は極めて少ない。（古墳時代中期の高坏の破片がこの層から出土）
5．黄褐色土　地山の微粒層、ラミナあり。
6．暗灰褐色砂層　地山粒子（黄褐色）を含む。（古墳時代後期の坏がこの層から出土）
7．暗黄灰褐色土　暗黄褐色土の地山ブロック（15～20cm）を多く含む。
8．黒褐色土　3層に類するがやや黒色味が強い。
9．砂礫層　3～4cm大の円礫から砂までを含み、砂礫層は極めて固くしまっている。

D-D′

1．暗褐色土　多くのAs-Bと灰を多く含む。
2．黒褐色土　少量のローム粒と灰褐色粘土ブロックを含む。

埋没谷出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
65-1 37	土師器 高坏	B谷B下 坏部1/4	口 21.8 高 — 底 —	①密、0.5mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	坏部外面ヘラ磨き、内面は全体にわたり密なヘラ磨き、磨きは底部内面まである。5世紀の高坏であるが、11世紀平安時代の谷に伴う遺物である。

第65図　埋没谷・出土遺物

第７節　支用１号（南端調査部分）

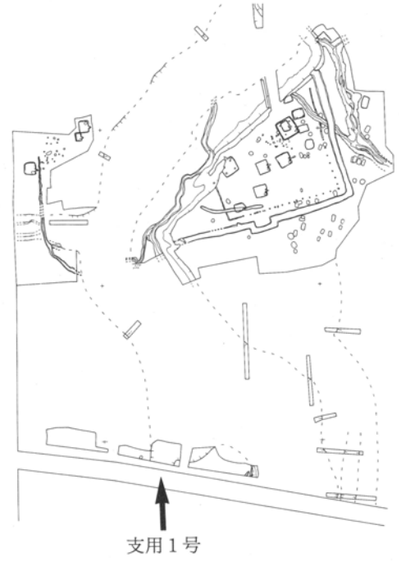
（第66図　PL.20）

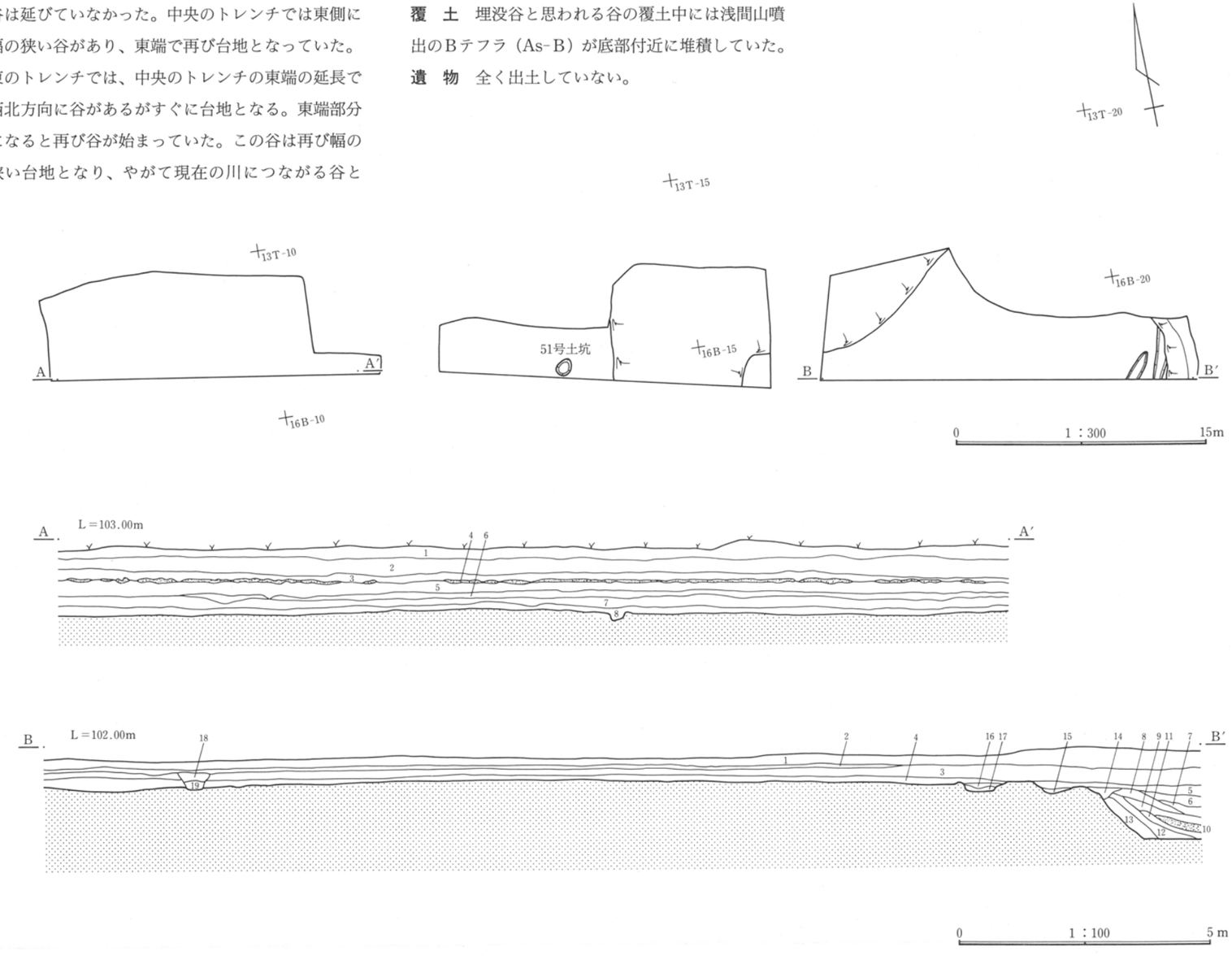
概　要　南調査区の南端部分である。東西方向の用水路（支用１号）が造られることと、埋没谷の走行方向と深さを調べるために、３本のトレンチによる調査を行った。その結果西側のトレンチには、埋没谷は延びていなかった。中央のトレンチでは東側に幅の狭い谷があり、東端で再び台地となっていた。東のトレンチでは、中央のトレンチの東端の延長で西北方向に谷があるがすぐに台地となる。東端部分になると再び谷が始まっていた。この谷は再び幅の狭い台地となり、やがて現在の川につながる谷となっているようである。このように居館付近で幅約30mほどの巨大な埋没谷は、この場所になると幅の狭い幾つかの谷に分離されているようである。この地区からは埋没谷と思われる谷の他は、土坑が１個、他は溝状の浅い掘り込が確認されただけであった。

規　模　溝の深さは台地部分から約110cmであった。

覆　土　埋没谷と思われる谷の覆土中には浅間山噴出のＢテフラ（As-Ｂ）が底部付近に堆積していた。

遺　物　全く出土していない。





支用１号
A-A′

1．水田耕作土
2．暗褐色土　赤褐色土を斑点状に多く含む。
3．暗褐色土　少量の As-Ｂを混入している。
4．As-Ｂ層　平均の堆積の厚さは４cm前後、上位にピンク系の灰を一部で確認できる。
5．茶褐色土　小ロームブロックと角閃石安山岩の軽石粒を10㎡あたり10個程度含む。
6．黒褐色土　砂粒を混入、角閃石安山岩の軽石の大きさは直径0.3～２cmである。部分的に粘性の強い部分と砂質の所がある。
7．黒色土　粘性が強い少量の角閃石安山岩の軽石を含む。
8．褐色土　粘性が強く、砂粒等は含まない。

B-B′

1．水田耕作土
2．暗灰赤褐色土　鉄分を多く含む層。水田の床土。
3．暗褐色土　粒子密、赤褐色土を斑点状に含む。
4．暗黒灰色　少量の軽石粒を含む。
5．暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。
6．暗灰褐色土　少量の砂粒を含む。
7．暗褐色砂質土　細かな砂粒を含む。
8．黒灰色砂質土　細かな砂粒を含む。
9．黒灰色砂質土　多くの As-Ｂを含む。
10．As-Ｂ層
11．黒色土　やや粘質、少量の砂礫を含む。
12．黒色土　ローム粒を含む。
13．黒灰褐色土　直径１～２cmのロームブロックを多く含む。
14．暗灰褐色砂層　ローム粒と砂を含む。（小溝覆土）
15．暗灰褐色砂層　多くのローム粒と砂粒を含む。
16．暗灰褐色砂質土　多くのローム粒と砂粒を含む。（小溝覆土）
17．暗赤灰褐色土　固い底部に細砂と小礫を含む。（小溝覆土）
18．暗灰褐色土　少量のローム小ブロックを含む。（小溝覆土）
19．暗褐色土　少量の褐色土を含む。（小溝覆土）

第66図　支用１号（南端調査部分）

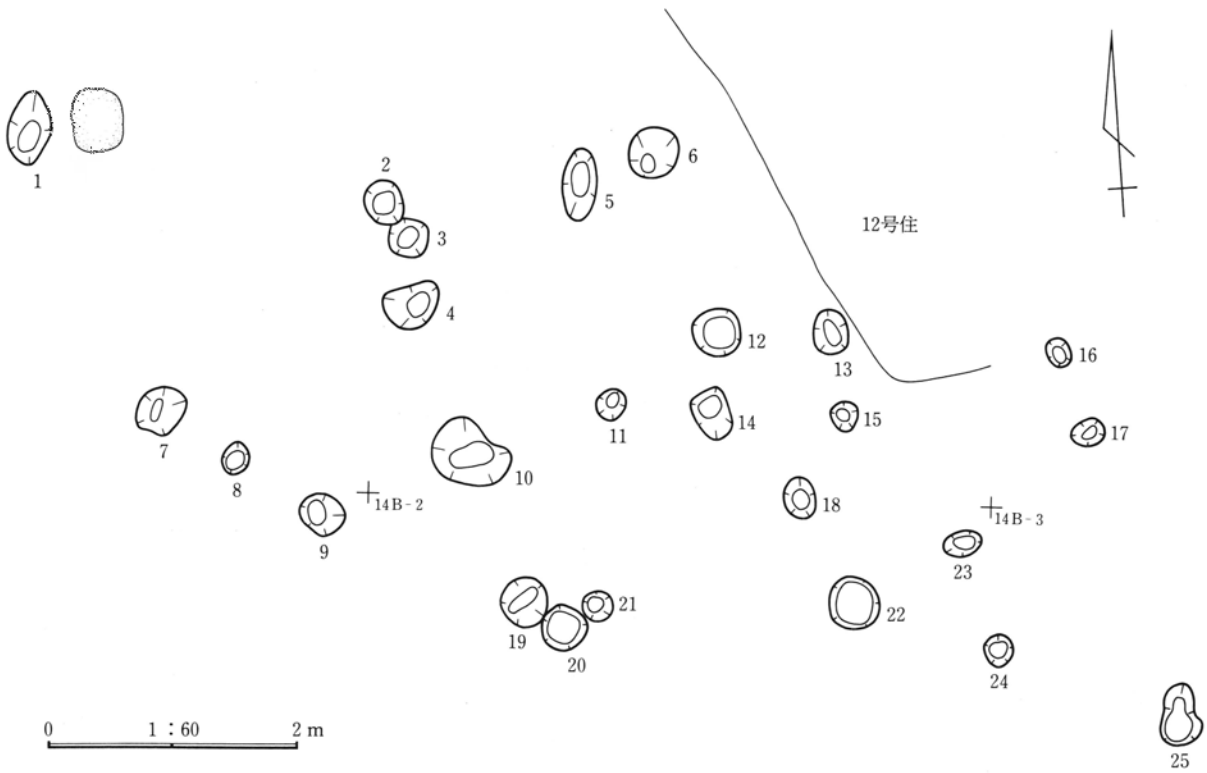
第８節　小穴群

南調査区の中で小穴がまとまって確認された地区が３ヶ所あった。しかしいずれの箇所とも、掘立柱建物跡としては確認できなかった。また遺構の時期も不明である。

最も多かった地区は、居館の堀張り出し部分の外側付近であるが、この広い地区は第１・２小穴群とし、図面を全体図に掲載するだけとした。

第１小穴群（第67図　PL.19）

12号住居南西部付近で14A-２グリッドを中心とする地区にも、多く確認された。この地区を第１小穴群と呼称する。小穴の大きさは幅30cm前後で深さは25cm前後である。

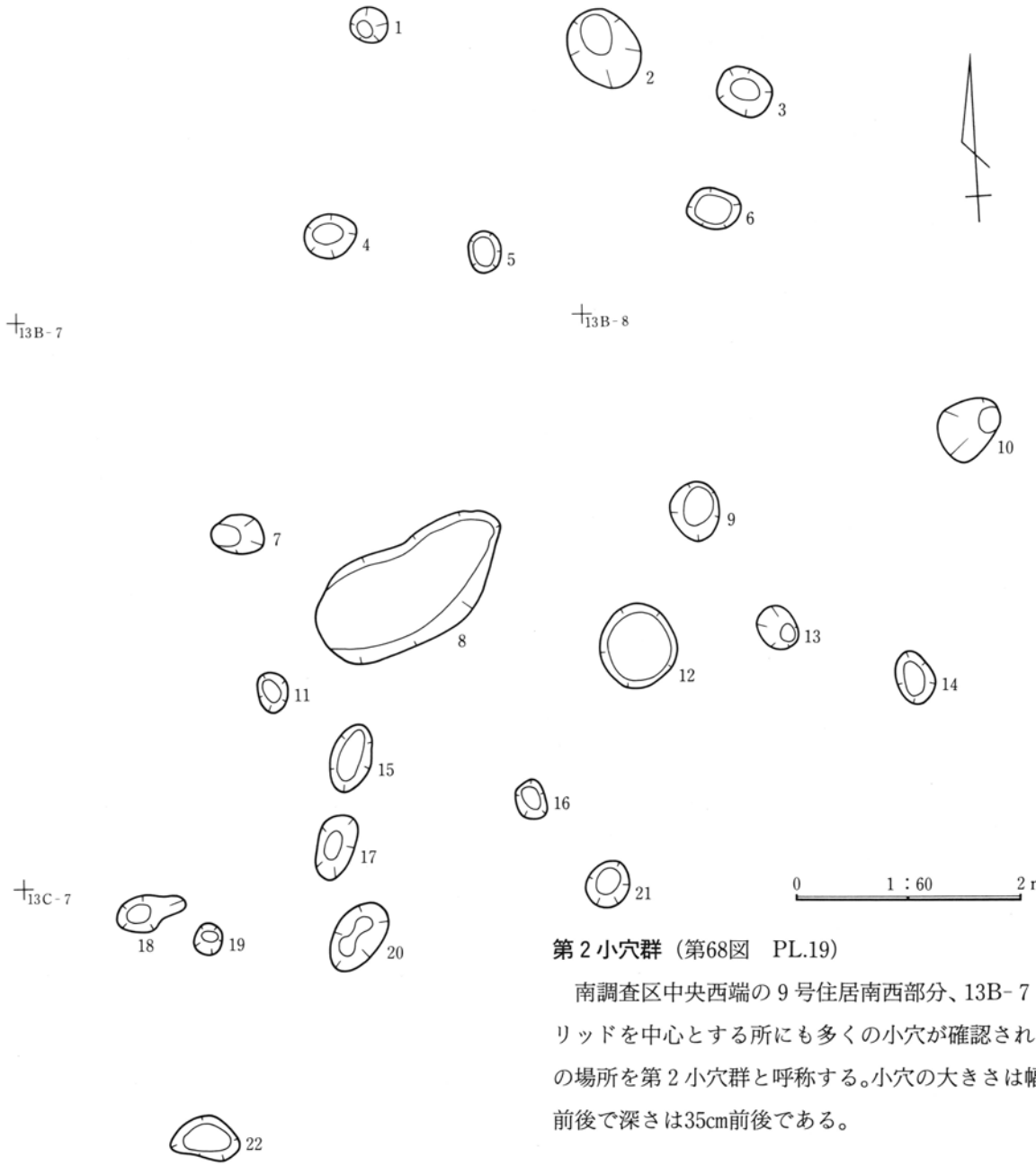


第67図　第１小穴群

第１小穴群一覧表

小穴番号	グリッド	形　態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
１小穴	14A－１	楕円形	0.60	0.35	0.19
２小穴	14A－２	円形	0.34	0.32	0.31
３小穴	14A－２	円形	0.32	0.30	0.29
４小穴	14A－２	楕円形	0.45	0.34	0.41
５小穴	14A－２	楕円形	0.56	0.28	0.43
６小穴	14A－２	円形	0.40	0.40	0.43
７小穴	14A－１	円形	0.40	0.38	0.41
８小穴	14A－１	円形	0.25	0.22	0.23
９小穴	14B－１	円形	0.36	0.32	0.32
10小穴	14A－２	楕円形	0.60	0.45	0.42
11小穴	14A－２	円形	0.25	0.25	0.30
12小穴	14A－２	円形	0.40	0.35	0.21
13小穴	14A－２	円形	0.30	0.28	0.41

小穴番号	グリッド	形　態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
14小穴	14A－２	円形	0.40	0.30	0.22
15小穴	14A－２	円形	0.24	0.22	0.16
16小穴	14A－３	楕円形	0.25	0.18	0.10
17小穴	14A－３	円形	0.28	0.22	0.23
18小穴	14A・B-２	楕円形	0.34	0.25	0.16
19小穴	14B－２	円形	0.40	0.38	0.24
20小穴	14B－２	円形	0.35	0.35	0.09
21小穴	14B－２	円形	0.25	0.25	0.09
22小穴	14B－２	円形	0.40	0.40	0.20
23小穴	14B－２	円形	0.30	0.22	0.09
24小穴	14B－３	円形	0.28	0.24	0.11
25小穴	14B－３	楕円形	0.50	0.24	0.22



第68図　第２小穴群

第２小穴群（第68図　PL.19）

南調査区中央西端の９号住居南西部分、13B-７・８グリッドを中心とする所にも多くの小穴が確認された。この場所を第２小穴群と呼称する。小穴の大きさは幅40cm前後で深さは35cm前後である。

第２小穴群一覧表

小穴番号	グリッド	形　態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
１小穴	13A－７	円形	0.35	0.32	0.18
２小穴	13A－８	楕円形	0.72	0.60	0.35
３小穴	13A－８	円形	0.50	0.38	0.32
４小穴	13A－７	円形	0.48	0.40	0.25
５小穴	13A－７	円形	0.40	0.30	0.14
６小穴	13A－８	円形	0.46	0.35	0.12
７小穴	13B－７	円形	0.48	0.35	0.02
８小穴	13B－７	楕円形	1.90	0.85	0.28
９小穴	13B－８	円形	0.55	0.48	1.12
10小穴	13B－８	楕円形	0.58	0.48	0.30
11小穴	13B－７	円形	0.34	0.28	0.23

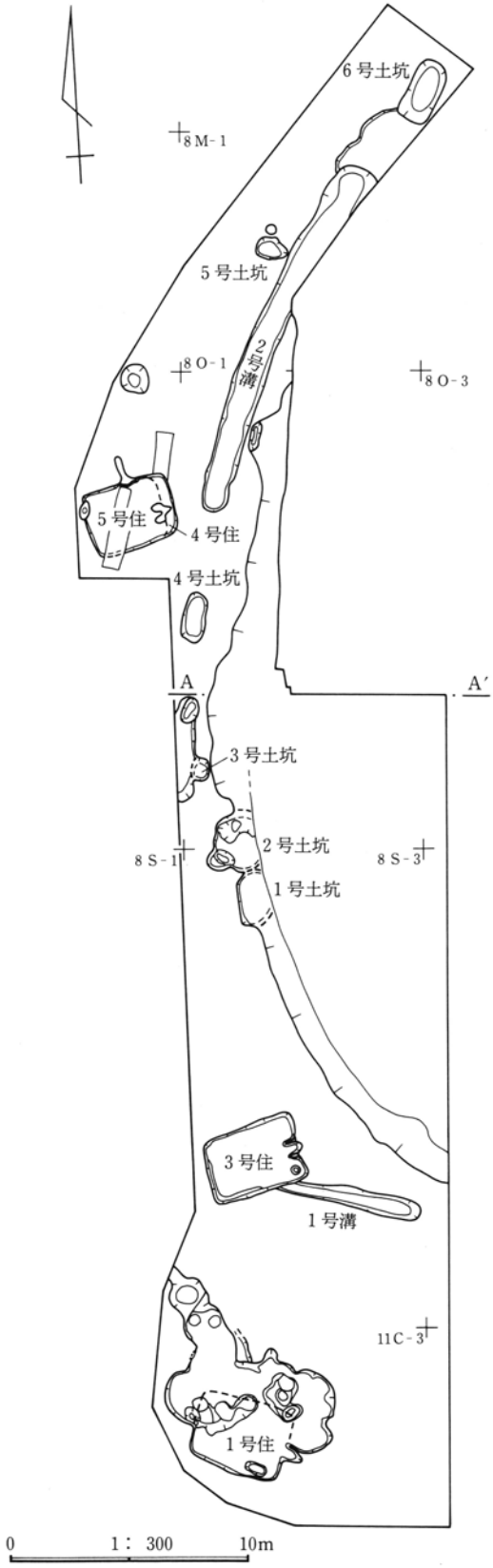
小穴番号	グリッド	形　態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
12小穴	13B－８	円形	0.75	0.65	0.23
13小穴	13B－８	円形	0.40	0.35	0.87
14小穴	13B－８	楕円形	0.46	0.35	0.29
15小穴	13B－７	楕円形	0.60	0.35	0.28
16小穴	13B－７	円形	0.35	0.28	0.17
17小穴	13B－７	楕円形	0.60	0.32	0.32
18小穴	13C－７	楕円形	0.64	0.15	0.33
19小穴	13C－７	円形	0.28	0.25	0.30
20小穴	13C－７	楕円形	0.68	0.45	0.36
21小穴	13B・C－８	円形	0.44	0.38	0.15
22小穴	13C－７	楕円形	0.60	0.35	0.19

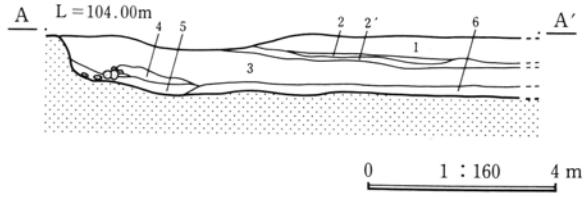
第９節　北調査区（第69図　PL.21・22）

７－１工区の南側部分（南調査区と呼称）を事業団で調査を進めていく中で、県教育委員会が７－１工区の北側の遺構確認調査（試掘調査）を行った。その結果住居をはじめ土坑や溝等の存在が確認された。そこで事業団は居館をはじめとした南調査区を、県教育委員会がこの北側部分（北調査区と呼称）を担当し発掘調査を実施した。調査面積は約657㎡である。遺跡としては、同一と考え今回の報告書で一緒に報告する。ただし調査主体が異なり、遺構番号の呼称が重複しているために、北調査区は、南調査区と切り離してこの第９節で一括して報告する。

検出された遺構

竪穴住居が４軒調査されている。古墳時代後期の住居３軒（３・４・５号住居）、平安時代の住居１軒（１号住居）である。土坑は６個調査されており、１・２・６号土坑が出土遺物や覆土の特徴から古代に属する可能性が高い。溝は２条確認されている。１号溝は浅く出土遺物もなく時期不明である。２号溝は覆土の特色や出土遺物から古代の可能性が高い。調査区東側に大きな谷の縁がある。トレンチ調査の結果、覆土中央に浅間山噴出の軽石と灰（As-B）が多く残っていた。南側の大きな埋没谷の一部ではないかと考えられる。





北調査区　A-A′
1．褐色土　砂層を含む。
2．As-B層　As-Bに伴う灰を主とした層。
2′．As-B層　As-Bの軽石粒を主とした層。
3．暗褐色土　暗褐色粘質土を主とした層。
この層中に少量の遺物を含む。
4．褐色土　ロームを主とした層。
5．暗褐色土
6．砂層

第69図　北調査区

(1)　北調査区住居跡

北１号住居（第70図　PL.22・38）

位　置　11C・D－１グリッド

概　要　北側半分は、床下部分まで撹乱されており残っていなかった。調査時点において本住居北側に２号住居を想定したが、住居ではなかったために、２号住居は欠番となっている。

形　状　東西方向に長い長方形を呈している。規模は東西方向3.8m、南北方向は不明である。

面　積　不明　　**方　位**　N－24°－E

床　面　遺構確認面から15cm前後掘り込んで床面となる。床面は平坦でなく、竈周辺が南西の壁面付近の床面より10cmほど低くなっている。踏み固められて硬化した床面は確認できなかった。

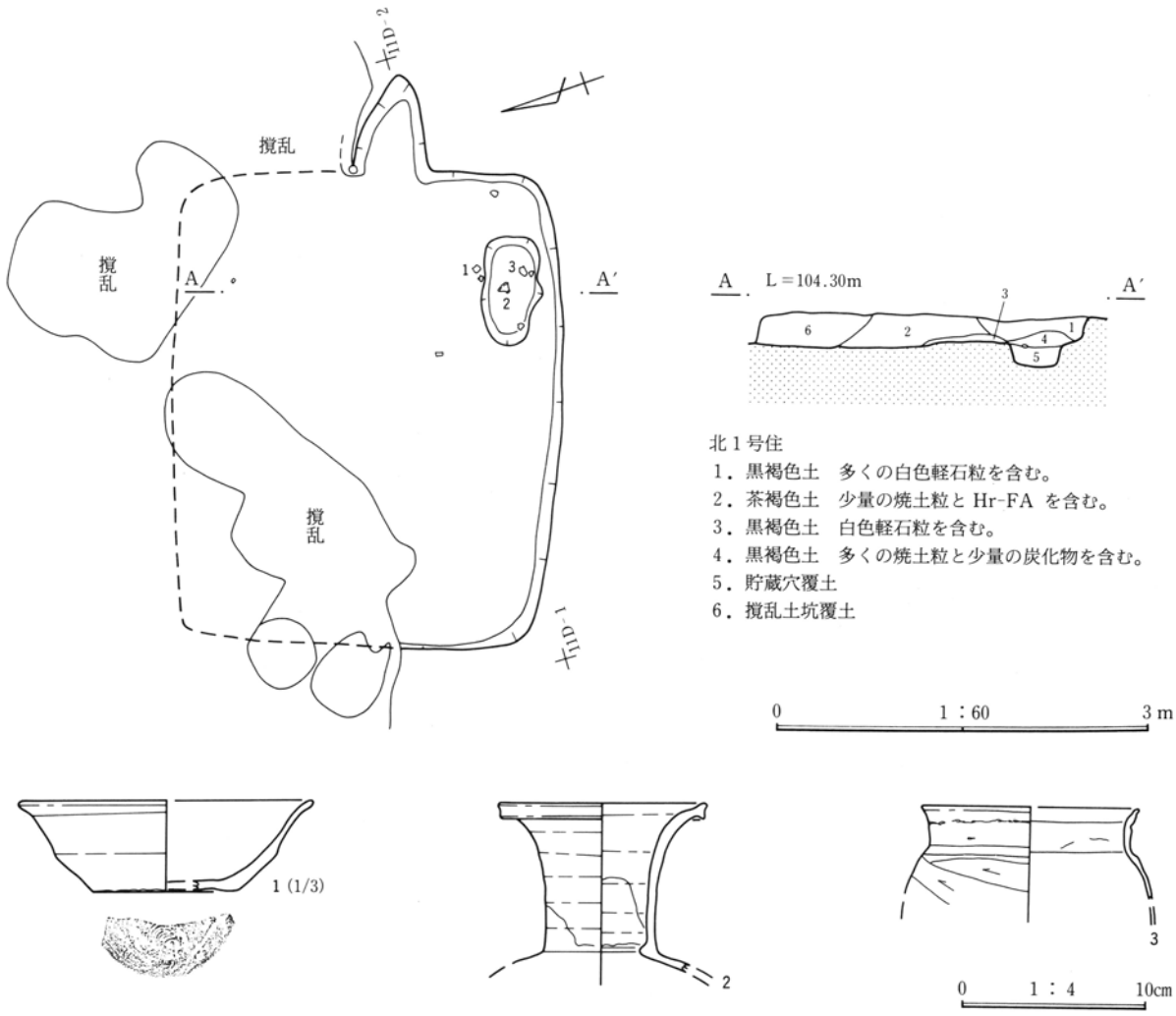
竈　東壁面を掘り込んで作られており、床面上に袖は作られていなかった。規模は、燃焼部幅58cm、煙道部方向84cmである。竈内から少量の焼土粒が出土した。

周溝・柱穴は掘られていなかった。

貯蔵穴　竈に近い南東コーナー部分に、南北方向に長い楕円形の浅い貯蔵穴が掘られていた。規模は長軸方向85cm、短軸方向45cm、深さ14cmである。

遺　物　貯蔵穴の中から灰釉陶器の瓶の口縁部や土師器小型甕の口縁部等が出土している。

所　見　出土遺物から、９世紀後半の住居と考えられる。



第70図　北１号住居跡・出土遺物

北１号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
70-1	須恵器 坏	床面＋５ 1/4	口(11.8) 高　3.6 底 (6.0)	①１㎜前後の赤色粒を少量含む。 ②還元焔 硬質 ③灰色	底面右回転糸切り痕。
70-2 38	灰釉陶器 長頸壺	貯蔵穴内 口縁1/2 頸部1/3	口(11.2) 高　— 底　—	①密 ②還元焔 硬質 ③灰白色	胴部と頸部との接合は丁寧である。 口縁部内側上端と外面頸部下端～肩部に灰釉。
70-3 38	土師器 小型甕	貯蔵穴内 図示部分 1/3	口(11.7) 高　— 底　—	①密、0.5㎜以下の砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部中段に輪積痕。 内面ナデにて器表面密。

北３号住居（第71～73図　PL.23・38）

位　置　11A-１グリッド

概　要　南東コーナー部分で北１号溝と重複しており、北１号溝が本住居の覆土上面を掘り込んでいる。住居は掘り込が深く残りが良好であった。

形　状　東西方向に長い長方形を呈している。規模は、東西方向4.0m、南北方向2.9mである。

面　積　11.19m²　　**方　位**　N-17°-W

床　面　遺構確認面から40cm前後掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦であった。

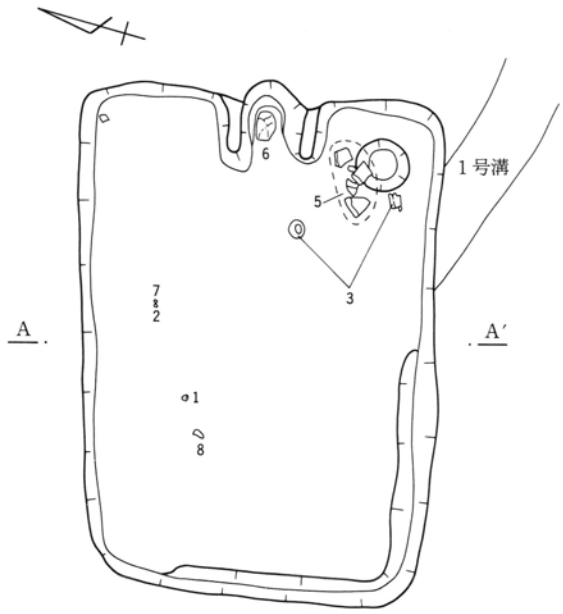
竈　　東壁面を掘り込んで作られており、両袖と燃焼部の大部分は床面上に位置する。燃焼部中央に小型の甕が口縁部を下にして伏せた状態で出土した。出土位置や甕の高さから、支脚として使われていた可能性が考えられる。しかしこの甕に強く火を受けたような痕跡は認められない。燃焼部両壁面内側が強い火を受けて焼土化していた。規模は右袖が壁面から42cm、左袖が壁面から54cm残存していた。燃焼部幅約42cm、煙道部方向73cmである。竈内から多くの焼土粒が出土した。

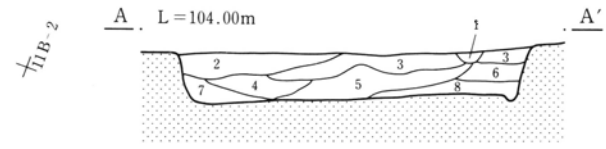
周溝・柱穴は掘られていなかった。

貯蔵穴　竈の右側にほぼ円形の貯蔵穴が掘られていた。規模は直径43cm、深さ19cmである。

遺　物　貯蔵穴付近から甕が、割れた状態で出土した。

所　見　出土遺物から、６世紀後半の住居と考えられる。

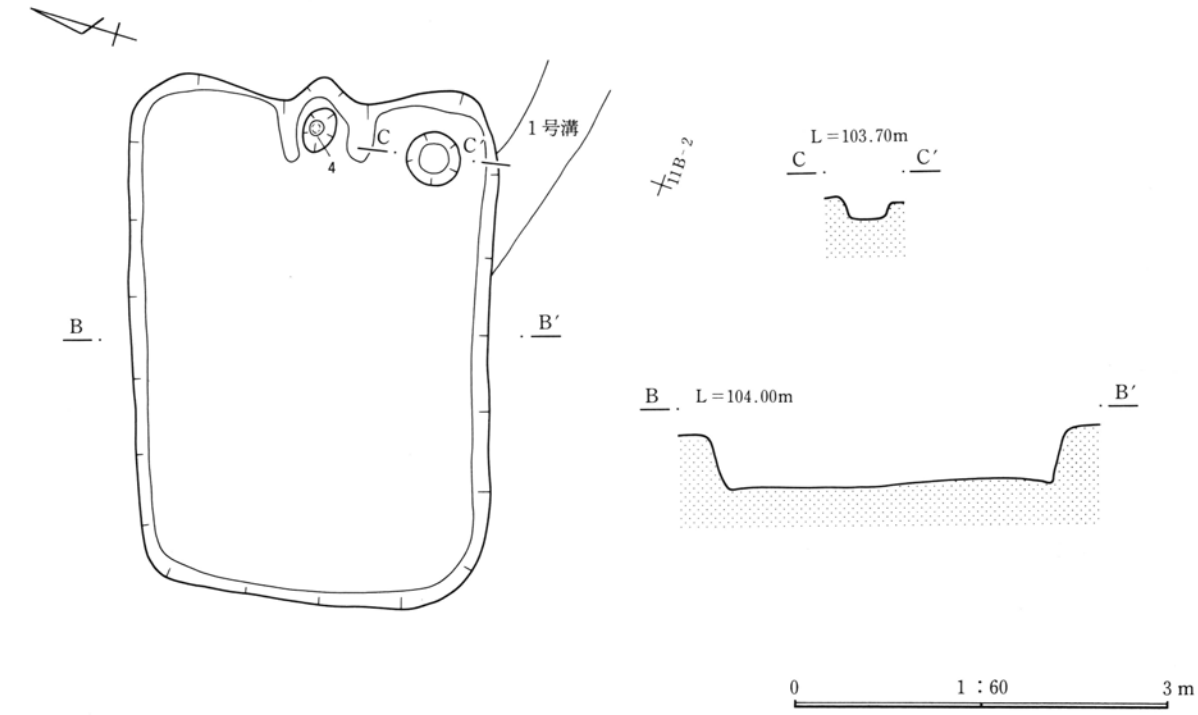


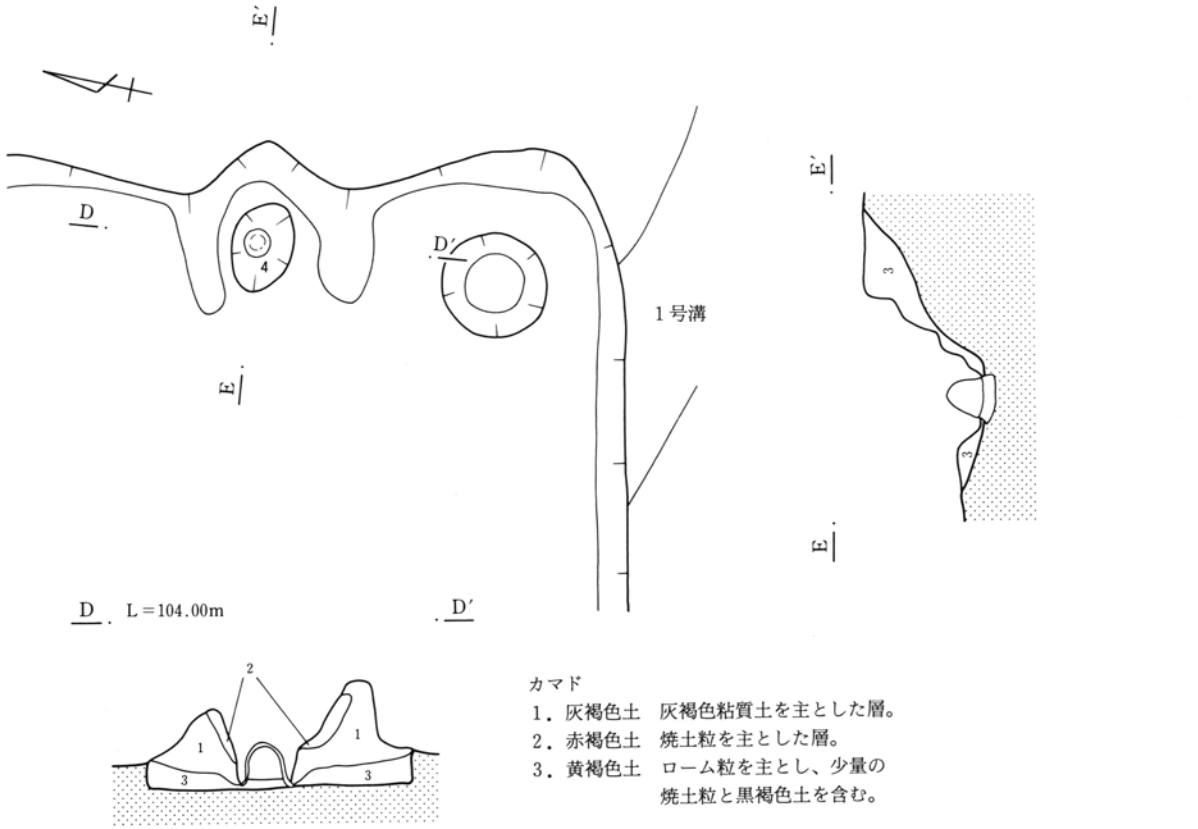


北３号住
1．褐色土　固い砂粒を多く含む。１号溝の覆土。
2．褐色土　Hr-FA を含む。
3．褐色土　Hr-FA を含む。明褐色のブロックを含む。
4．褐色土　Hr-FA を含む。軽石の大きさは直径1.3㎜ 。
5．明褐色土　明褐色のブロックを多量に含む。
6．褐色土　砂粒は密で軟質。
7．褐色土　砂粒は密で軟質。粘性あり。
8．褐色土　砂粒は密で軟質。粘性あり。明褐色のブロックを含む。

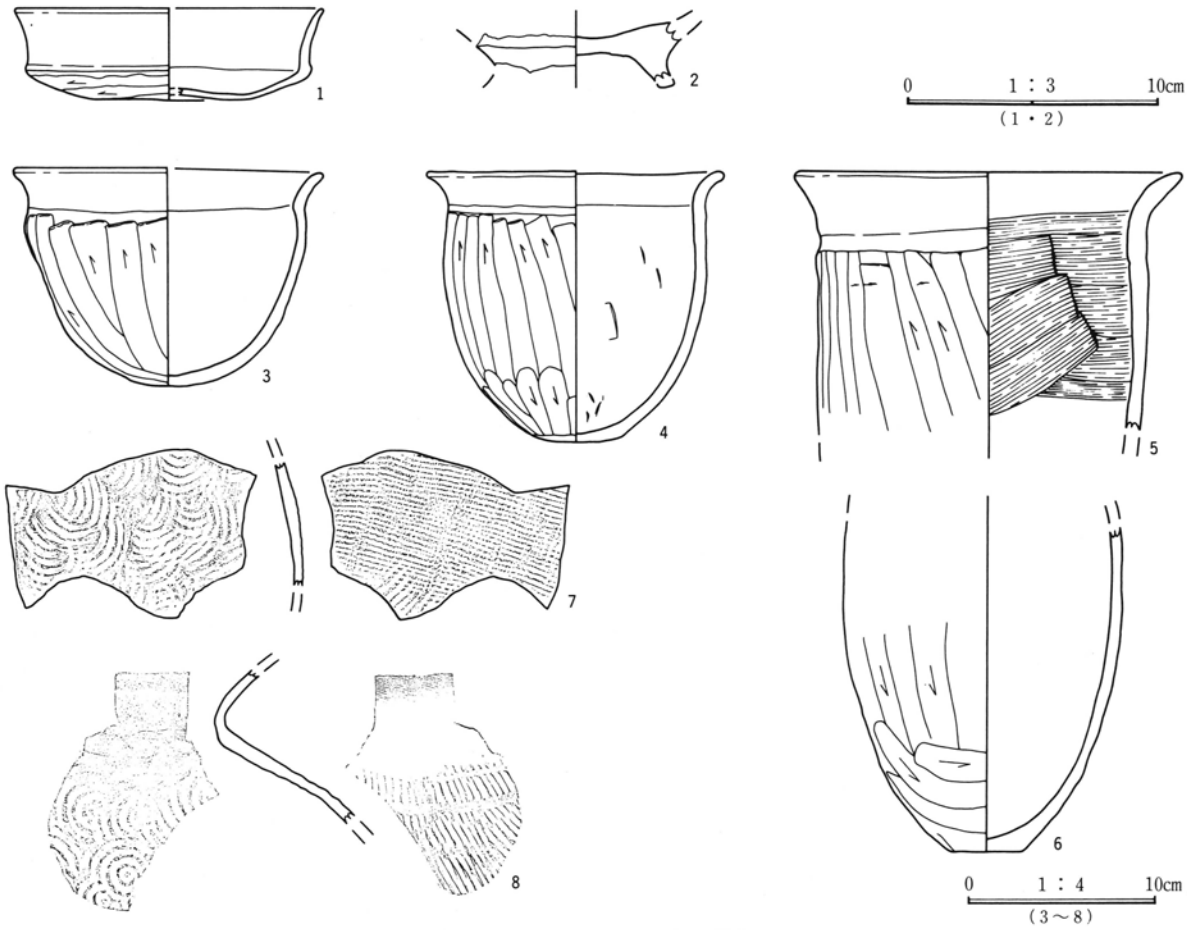
0　1：60　3 m

第71図　北３号住居跡（１）





第72図　北３号住居跡（２）



第73図　北３号住居跡出土遺物

北３号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
73-1 38	土師器 坏	床面＋45 1/3	口(12.2) 高　3.6 底　—	①密、0.5㎜前後の赤色粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ヘラ削り。胎土が粉状のために削りの単位不明瞭。胎土が粉状で手に付着する。
73-2	土師器 埦	床面＋37 図示部分 ほぼ残存	口　— 高　— 底　—	①１㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③赤褐色	高台部内側右回転糸切り痕がわずかに残る。 高台付埦の底部と高台部の破片である。
73-3 38	土師器 小型甕	床面＋８ 口2/5 胴～底4/5	口(16.4) 高　— 底　—	①粗、１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい褐色	底部～胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し目だつ。内面ナデにて器表面密。
73-4 38	土師器 小型甕	カマド 完形	口 15.8 高 14.3 底　—	①１～２㎜の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	底部外面～胴部外面ヘラナデで砂粒が多く目だつが、移動は少ない。内面ナデにて器表面密。
73-5 38	土師器 甕	床面＋10 口縁部1/2 胴上部2/3	口 20.0 高　— 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色　にぶい褐色	胴部外面ヘラ削り。頸部～口縁部横ナデ。 胴部内面ヘラによる横ナデ。
73-6 38	土師器 甕	床面＋13 胴下半4/5 底部完形	口　— 高　— 底　3.9	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	底部外面と胴部外面ヘラ削り。器表面全体があれている。内面ナデにて器表面密。
73-7	須恵器 大甕	床面＋37 破片	口　— 高　— 底　—	①密 ②還元焔 硬質 ③表面灰色　断面にぶい赤褐色	内面青海波文。外面格子状叩き目が深く、明瞭である。
73-8	須恵器 甕	床面＋40 小破片	口　— 高　— 底　—	①密 ②還元焔 硬質 ③表面褐灰色　断面灰褐色	頸部細かい波状文。肩部外面平行叩き。内面青海波文。

北４号住居（第74図　PL.23・24）

位　置　7P-20グリッド

概　要　一軒の住居として調査をすすめていくと、東壁面に近い覆土中に多くの粘土と暗褐色土さらに多くの坏や甕がまとまって出土した。竈の様相を強く示している。それらの暗褐色土や土器は最初に想定した住居の覆土を掘り込んでいるが床面や壁面を掘り込んではいない。東側に延びる煙道の下や煙道の東は明らかに別の住居の覆土となっており、多くの土器や竈手前の焼土粒も覆土中となっていた。これらのことより、旧住居の覆土中に別の住居が作られていた可能性が非常に高い。住居調査時においては、一軒の住居としたが整理段階で２軒重複として扱い新しい時期の住居を北５号住居とする。

撹乱土坑により住居中央部分では床下部分まで、北東コーナー部分では床面近くまで撹乱を受けていた。

形　状　東西方向に長い長方形を呈している。規模は東西方向3.7m、南北方向2.75mである。

面　積　9.58m²　　**方　位**　N-10°-W

床　面　遺構確認面から20cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で、踏み固められて硬化した床面は確認できなかった。

竈　　北壁面中央部に多くの焼土が残っており、この部分に作られていた。残りが悪く、袖部の大部分は削られて残っていなかった。煙道部も少量の焼土粒が残っている程度であった。後に作られた北５号住居により袖部分は削り取られたものと思われる。

周　溝　掘られていなかった。

柱　穴　掘られていなかった。

貯蔵穴　掘られていなかった。

遺　物　２軒重複であり、重複範囲が明らかでないために２軒の住居範囲の区別は出来ない。出土状態から見て大部分の遺物は北５号住居に所属するものと思われる。

所　見　時期は覆土の特徴と北５号住居とほとんど同じ床面や住居範囲を使用していること等から、北５号住居に先行するが近い時期の６世紀後半と考えたい。

北５号住居（第74～76図　PL.24・25・38・43）

位　置　7P-20グリッド

概　要　北４号住居で述べたように、住居調査時においては、一軒の住居とした。しかし北４号住居覆土中に本北５号住居の竈が作られていたために、整理段階で２軒重複として扱い、新しい本住居を北５号住居とした。住居範囲は残念ながら確認できないが、本住居が北４号住居の壁面に近い東側部分以外の大部分を掘り込んで作られていたと考えられる。

形　状　東西方向に長い長方形を呈している。規模は不明であるが、北４号住居と大部分が重複していると考え、東西方向3.2m、南北方向2.75mを想定している。

面　積　不明　　**方　位**　N-10°-W

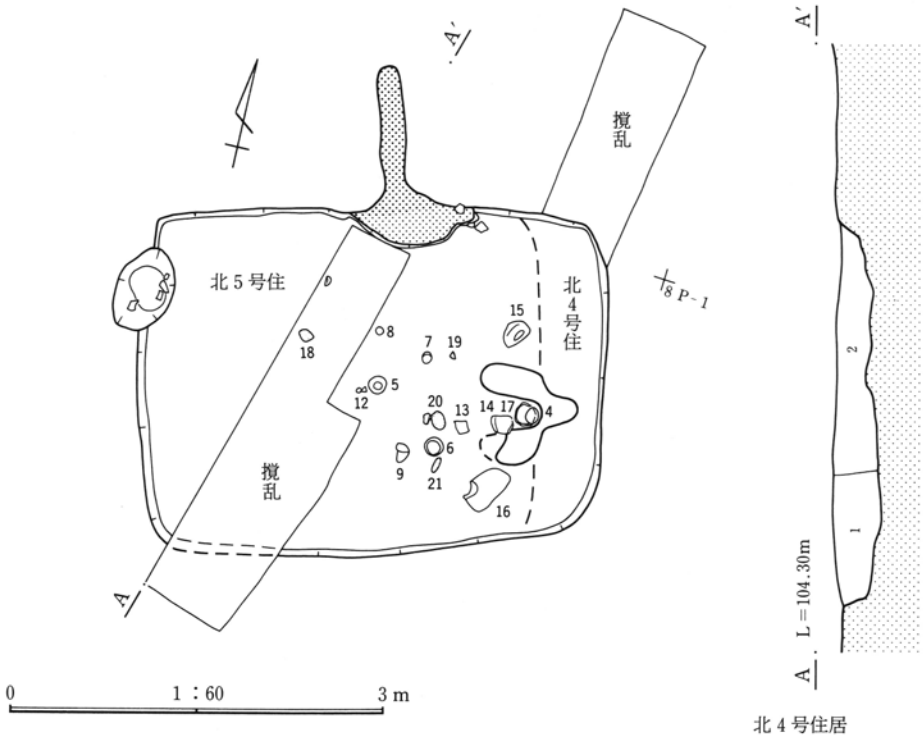
床　面　遺構確認面から20cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で、踏み固められて硬化した床面は確認できなかった。

竈　　北４号住居の覆土を掘り込んで東壁面中央部やや南寄りに作られていた。住居の覆土を掘り込んで作られていたために、あらたに多くの黄褐色粘土を持ち込んで竈が作られていた。煙道部の粘土の下に北４号住居の覆土が残っており、２軒の重複状態が良く観察出来た。持ち込まれた粘土の状態から竈の規模は、右袖で30cm、左袖で52cm残存していた。燃焼部幅40cm、煙道部方向75cmである。竈内から多くの焼土粒が出土した。また壁面の一部が焼土化していた。竈内中央部に、胴部の約半分と口縁部を欠いた甕が残っており、その中にほぼ完形の坏が蓋をかぶせるような状態で乗せられていた。竈の手前には多くの焼土粒が散乱していた。

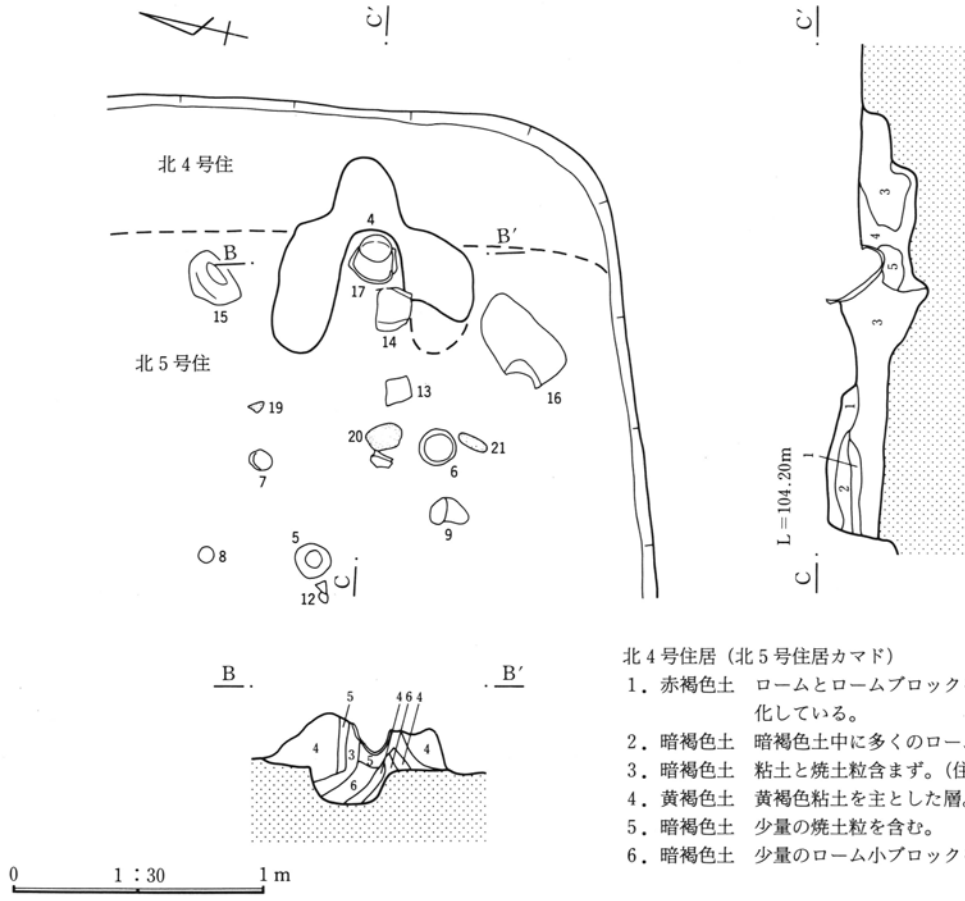
周溝・柱穴・貯蔵穴は掘られていなかった。

遺　物　２軒重複であり、重複範囲が明らかでないために２軒の区別は出来ない。出土状態から見て大部分の遺物は本北５号住居に所属するものと思われる。竈周辺に完形に近い坏や甑また大小の多くの甕等が出土した。

所　見　出土遺物から、６世紀後半の住居と考えられる。

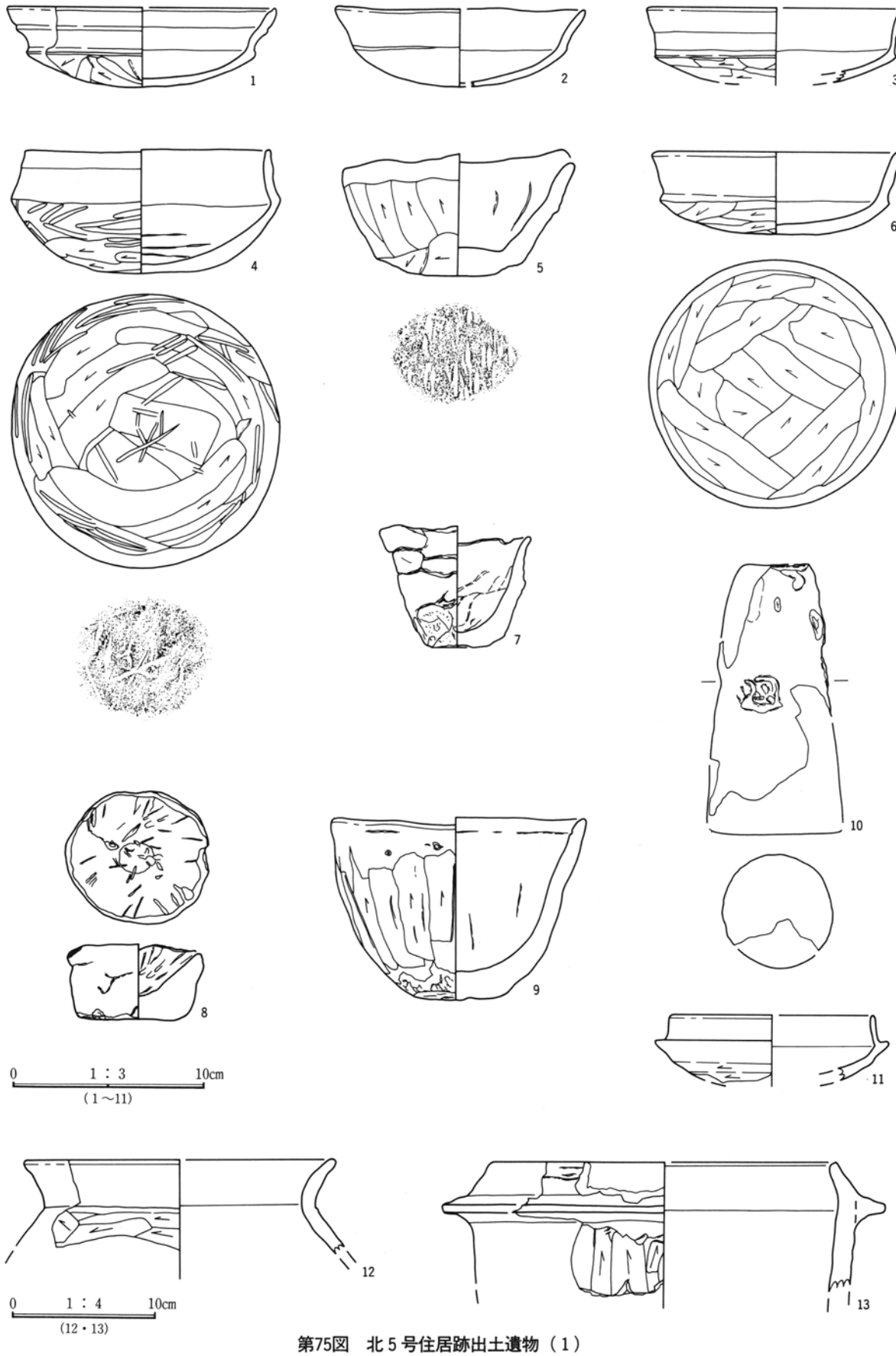


北４号住居
１．黒褐色土　少量のロームブロックを含む。
２．撹乱層

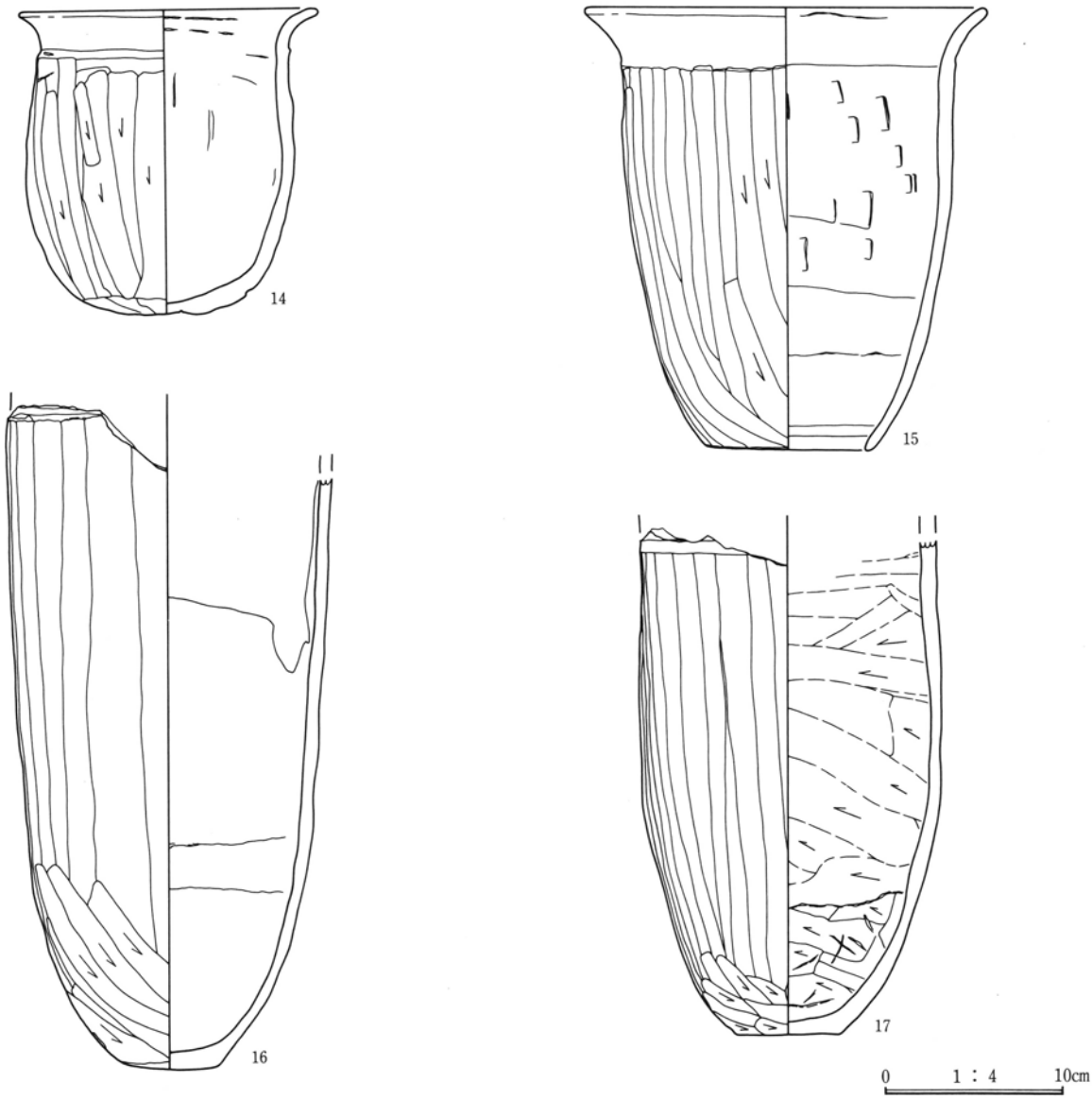


北４号住居（北５号住居カマド）
１．赤褐色土　ロームとロームブロックを主とし、全体に焼土化している。
２．暗褐色土　暗褐色土中に多くのローム小ブロックを含む。
３．暗褐色土　粘土と焼土粒含まず。（住居覆土と同じ土）
４．黄褐色土　黄褐色粘土を主とした層。
５．暗褐色土　少量の焼土粒を含む。
６．暗褐色土　少量のローム小ブロックを含む。

第74図　北４・５号住居跡



第75図　北５号住居跡出土遺物（１）



第76図　北５号住居跡出土遺物（２）

北５号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
75-1 38	土師器 坏	覆土 口縁1/5 底部1/3	口(14.0) 高　4.1 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面黒褐色　内面赤褐色	底部外面ヘラ削り。砂粒は小さく砂粒の移動は少ない。口縁中段に段を持つ。
75-2 38	土師器 坏	覆土 1/3	口(13.0) 高　4.0 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③橙色	器表面全体があれており、整形方法不明。
75-3	土師器 坏	カマド付近 1/6	口 13.4 高 (3.8) 底 13.0	①１㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面黒褐色　断面灰色	口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。底部ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。表面の黒褐色は吸炭による。
75-4 38	土師器 坏	床面＋16 口縁4/5 他完形	口 12.2 高　6.3 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい褐色	底部外面ヘラ削り。中央部に木葉痕が残る。底部周辺ヘラ磨き。内面ヘラ状工具で横ナデ。
75-5 38	土師器 坏	床面＋15 完形	口 11.9 高　6.3 底　4.5	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面明赤褐色　内面黒色	底部外面細い棒状圧痕。胴部外面ヘラ削り。内面ナデにて器表面密。甕の底部～胴下半部を坏として転用したものか？

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
75-6 38	土師器 坏	床面＋14 完形	口 13.0 高　4.3 底　—	①粗い１～３㎜前後の安山岩粒や長石粒等を多く含む。 ②酸化焰 硬質③橙色	底部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。一部に黒班あり。
75-7 38	土師器 手捏ね	床面＋20 完形	口　7.8 高　6.2 底　2.5	①１㎜以下の砂粒を多く、２㎜前後の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰 硬質③にぶい黄褐色	内外面とも多くの輪積痕を残す。底部外面ヘラ削り。雑な作りである。
75-8 38	土師器 手捏ね	床面＋23 完形	口　7.0 高　3.8 底　5.5	①１㎜以下の砂粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焰 硬質 ③にぶい橙色　外面半分灰褐色	整形にヘラや刷毛等は一切使用していない。 細い棒状の痕跡が内面に多く残っている。
75-9 38	土師器 鉢	床面＋15 ほぼ完形	口 13.2 高　9.4 底　4.8	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰 硬質 ③赤色	口縁部外面～内側底面ナデ。胴部外面指等による縦方向ナデ。器表面がややあれている。 全体に歪んでいる。
75-10 38	土師器 支脚	カマド 3/5	口 (3.5) 高　— 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰 硬質 ③褐灰色	表面全体ナデにより整形されている。 カマドの支脚と思われる。空洞ではない。 軟質であり水で洗うとボロボロになる。
75-11 38	須恵器 坏	北４住付近 小破片	口(10.6) 高　— 底　—	①密、１㎜以下の白色粒を多く含む。②還元焰 硬質 ③灰色	底部外面回転ヘラ削り。
75-12 38	土師器 甕	床面＋２ 小破片	口(21.6) 高　— 底　—	①密、0.5㎜内外の砂粒を含む。 ②酸化焰 硬質 ③にぶい橙色	肩部ヘラ削り。砂粒の移動少なく、器表面のあれ少ない。内面ナデにて器表面密。
75-13 38	土師器 羽釜	床面＋26 小破片	口(26.0) 高　— 底　—	①１㎜前後の砂粒を多量に含む。 ②酸化焰 硬質 ③黒褐色	口縁部横ナデ、一部輪積痕が残る。胴部外面鍔方向へのヘラ削り。全体に雑な作りである。
76-14 38	土師器 小型甕	床面＋16 口縁3/4 他完形	口(16.8) 高 17.1 底　—	①１～３㎜の砂粒を少量、１㎜前後の砂粒を多く含む。②酸化焰 硬質 ③橙色外一部吸炭で褐灰色	底部外面ナデ、一部ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が浮き出てあらい。内面ナデにて器表面密。内側胴部にヘラの工具痕あり。
76-15 38	土師器 甑	床面＋７ 胴下一部 欠他完形	口 22.1 高 24.7 底　9.2	①粗、１～２㎜の砂粒を多く含む。 ②酸化焰 硬質 ③橙色　胴外面一部黒色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が目だち器表面あらい。胴下端内面ヘラ削り。内面ヘラナデで密。 丁寧な作りである。
76-16 38	土師器 甕	床面-７ 図示部分 4/5	口　— 高　— 底　5.0	①１㎜前後の砂粒を多量に含む。 ②酸化焰 硬質 ③表面にぶい橙色 外面一部褐灰色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。多量の砂粒が浮き出て器表面が非常にあらい。内面ナデにて器表面密。
76-17 38	土師器 甕	カマド内 胴下半1/2 下～底完	口　— 高 27.4 底　5.6	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰 硬質 ③外面にぶい橙色　内面明褐色	底部外面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動は多い。内面胴上半ナデ、下半ヘラ削り。 胴部下半内面に接合痕が明瞭に残る。

石番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
18 43	こも編石	一部欠損	粗粒輝石 安山岩	9.8　8.2　4.3　450	欠損している。側面中央部に凹状面があるために、こも編石と思われる。	床面＋28.0
19 43	石	完形	粗粒輝石 安山岩	7.1　5.7　4.2　190	用途不明。	床面＋23.0
20 43	支脚石	完形	粗粒輝石 安山岩	15.3 12.6　9.9 2090	全体に火を受けており一部暗褐色に変色している。	床面＋4.5
21 43	石	完形	粗粒輝石 安山岩	11.5　6.6　5.8　560	用途不明。	床面＋15.5

⑵　北調査区溝

北１号溝（第77図　PL.25）

北１号溝は北調査区南に位置し11A-２グリッドに属する。北１号住居跡と重複しており、本溝が北１号住居跡の覆土上面を掘り込んでいる。浅い溝であり溝底部は西側が高く東に向かって低くなっている。

規模は西側が住居までであるが、長さ6.2m、幅0.5〜0.8m、深さ0.13〜0.20mであった。

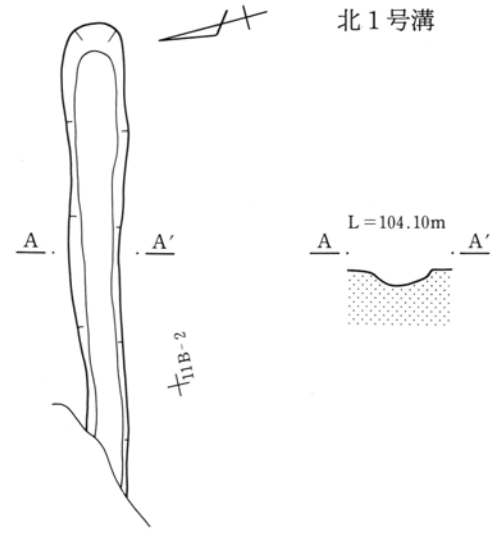
遺物は全く出土していない。時期は不明である。

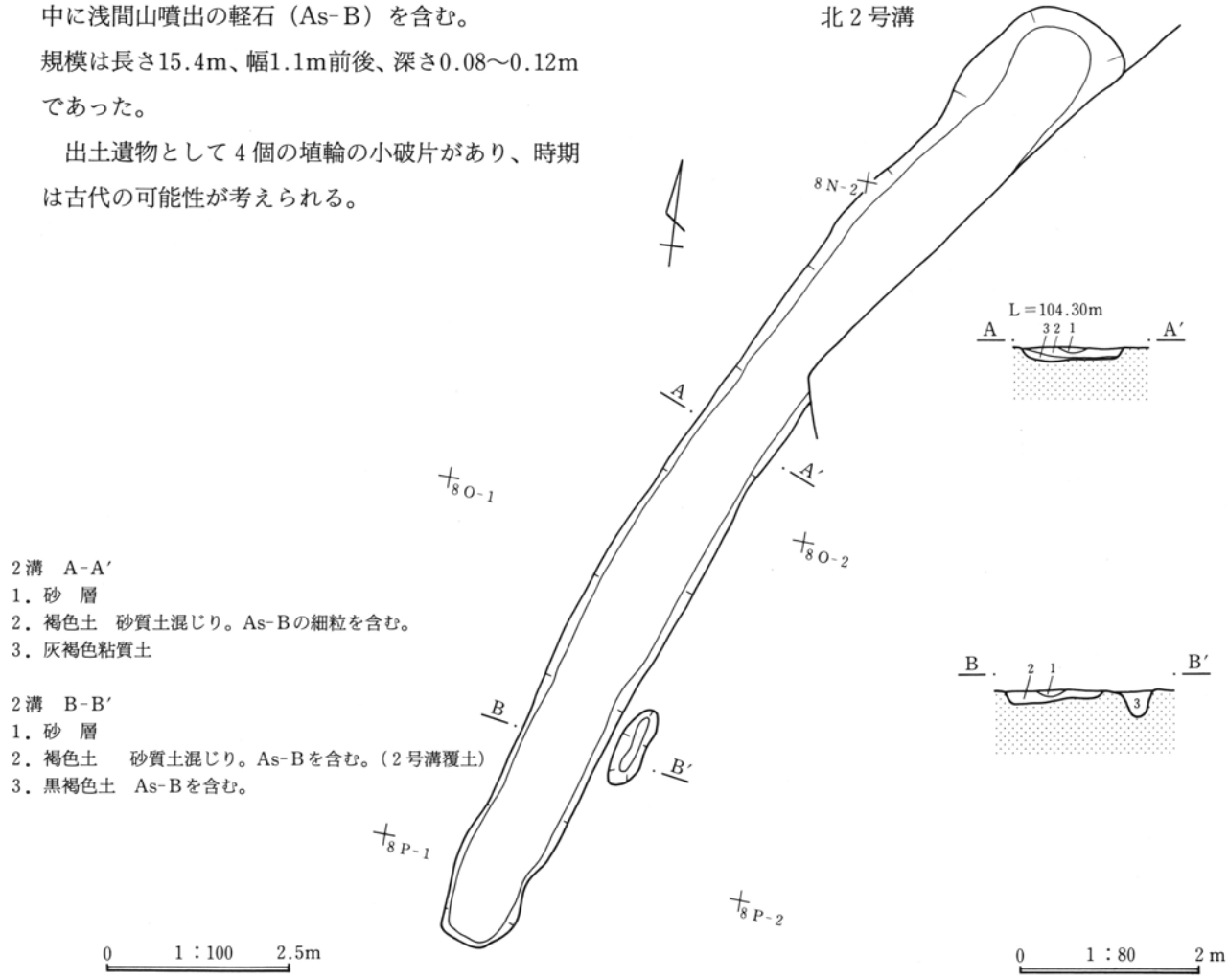
北２号溝（第77・78図　PL.25）

北２号溝は北調査区北に位置し8N・O-１、8M・N-２グリッドに属する。浅い溝であり溝底部は北側が高く南に向かって低くなっている。底面に近い覆土中に浅間山噴出の軽石（As-B）を含む。

規模は長さ15.4m、幅1.1m前後、深さ0.08〜0.12mであった。

出土遺物として４個の埴輪の小破片があり、時期は古代の可能性が考えられる。

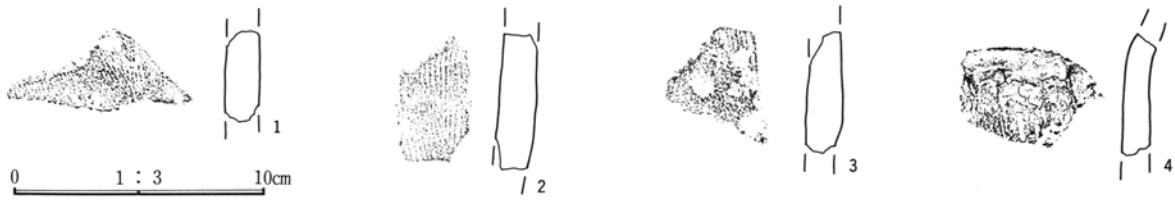




２溝　A-A′
１．砂　層
２．褐色土　砂質土混じり。As-Bの細粒を含む。
３．灰褐色粘質土

２溝　B-B′
１．砂　層
２．褐色土　砂質土混じり。As-Bを含む。（２号溝覆土）
３．黒褐色土　As-Bを含む。

第77図　北１・２号溝



第78図　北２号溝出土遺物

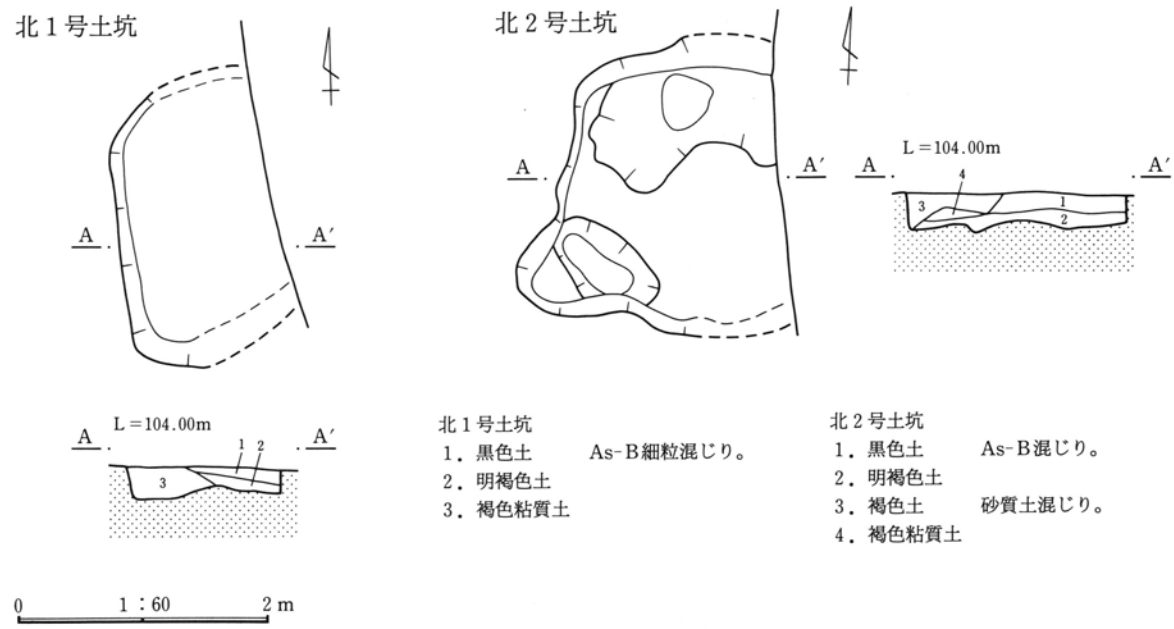
北２号溝出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
78-1 ～4	埴輪	北２溝 小破片	口　— 高　— 底　—	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色　黒褐色	外面縦方向刷毛目。

⑶　北調査区土坑

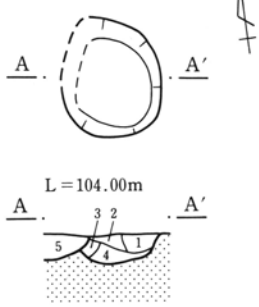
北調査区の土坑について（第79・80図　PL.25・37）

北調査区から、６個の土坑が発掘された。１号と２号土坑は長方形であるが、いずれも東側で谷と重複しており、重複部分の範囲はわからなかった。３号土坑は円形であるが、西側が溝状の掘り込によりやはり重複部分の範囲はわからなかった。４号と６号土坑は、長方形であり全体の大きさが明らかである。５号土坑は不定形な円形に近い。１・２・６号の３土坑から少量ながら遺物が出土している。１号土坑からは、古墳時代６世紀頃の坏、２号土坑からは平安時代11世紀頃の羽釜と土釜、６号土坑からは古墳時代４世紀頃の器台と11世紀頃の土釜と時期不明の羽口が出土している。また同じ１・２・６号の３土坑覆土中に、浅間山噴出の軽石（As-B）（平安時代11世紀）が含まれていた。軽石は時代が特定出来るほど明瞭な堆積ではないが、出土遺物はいずれとも古代の時期であることと併せて考えると、この３個の土坑は古代に属する可能性が高い。土坑のそれぞれの大きさは一覧表で示した。軽石や遺物の出土していない３・４・５の土坑の時期を特定することは出来なかった。



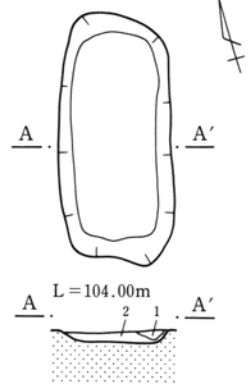
第79図　北１・２号土坑

北３号土坑



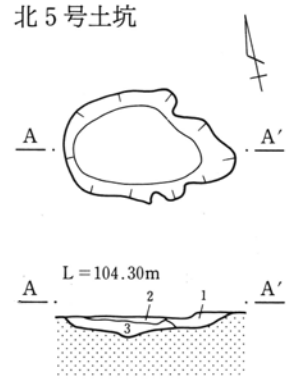
北３号土坑
1．褐色砂質土
2．褐色粘質土　黄褐色土がシミ状に入る。
3．暗褐色粘質土　明褐色土が混入している。
4．褐色粘質土
5．灰褐色粘質土　下部に明黄褐色土のブロックを含む。

北４号土坑



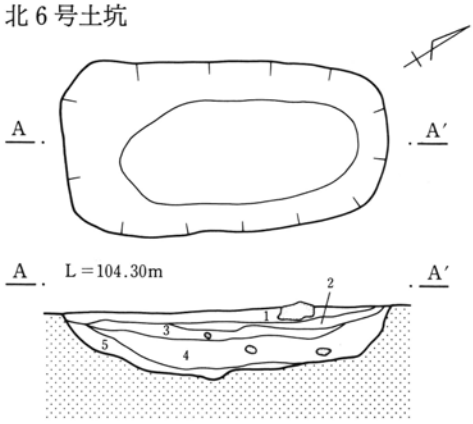
北４号土坑
1．褐色土
2．褐色土　黄褐色土ブロックを多量に含む。

北５号土坑



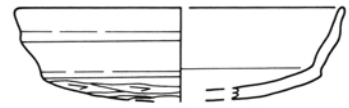
北５号土坑
1．褐色土　焼土、土器片混じり。
2．黒色土　焼土混じり。
3．明褐色土　黄褐色土ブロックを含む。

北６号土坑

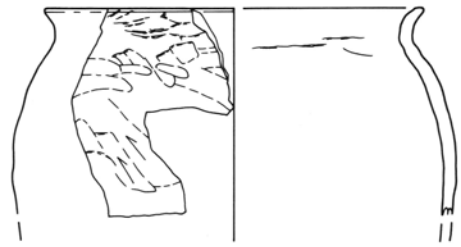


北６号土坑
1．褐色土　炭化物、浅間 As-B を含む。
2．褐色土　炭化物を含む。砂質土混じり。
3．黒色土　粘性があり、土器片を含む。
4．褐色粘質土
5．褐色土　砂質土混じり。

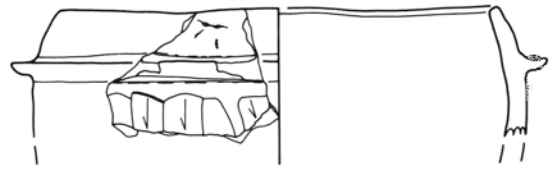
0　1：60　2 m



北１号土坑－１（1/3）

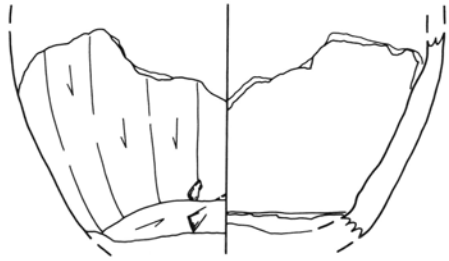


北２号土坑－１（1/4）



北２号土坑－２（1/4）

北６号土坑－１（1/3）



北６号土坑－２（1/4）

北６号土坑－３（1/3）

第80図　北３～６号土坑・北１・２・６号土坑出土遺物

北１号土坑出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
80-1	土師器 坏	覆土 1/5	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。 底部外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。

北２号土坑出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
80-1	土師器 甕	覆土 小破片	口(20.0) 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	胴部外面～口縁外面ヘラナデ。内面ナデにて器表面密。口唇部は削られてほぼ水平。
80-2	土師器 羽釜	覆土 小破片	口(23.0) 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色　褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。鍔は細く横に延びている。雑な作りである。

北６号土坑出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
80-1 37	土師器 器台	覆土 図示部分 4/5	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の黒色砂粒を多量に含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	脚部縦ヘラ磨き、多くの砂粒が目だつ。内面ナデ。 透かし穴３。
80-2	土師器 甕	覆土 破片	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	胴部外面ヘラ削り。内面ナデにて器表面密。 器肉が厚い。
80-3 37	土師器 羽口	覆土 小破片	口 — 高 — 底 —	①１㎜前後の赤色粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③先端黒色 外面灰白色 内面橙色	表面ナデ。胎土中に多くのスサを含む。 先端部分は熱を受けて気泡化している。

北調査区土坑一覧表

土坑番号	グリッド	形態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	長軸方向	時　期	備　　考
１号土坑	８ S-１	—	—	—	0.25	—	古 墳 ?	
２号土坑	８ R･S-１	—	—	—	0.30	—	平 安 ?	
３号土坑	８ R-１	—	—	—	0.25	—		
４号土坑	８ Q-１	長方形	1.90	9.00	0.11	N-16°-E		
５号土坑	８ N-１	不定形	1.35	0.85	0.14	N-75°-W		
６号土坑	８ L-２・３	長方形	2.58	1.35	0.57	N-28°-E	古 代 ?	

第10節　居館

(1) 居館の堀（第81～96図　PL.16・26～28・39～43）

概　要　居館は発掘調査の結果、東北端から西端にかけて全体の約1/2近くが埋没谷により削られて残っていなかった。そのため全体像を知ることは出来なかったが、おそらく次のような規模を持つものであろう。東西の長さは59m＋α、南北の長さは43m＋αで東西方向に長い長方形を呈していたものと思われる。堀の幅は約1.8～3.0mで2.2m前後が多い、深さは18～46cmで32cm前後が多い。場所により深さが少し異なるために、深さを図中に数字で示した。残りの悪い南東コーナー部分と西端部分が浅く幅も狭かった。堀の形状は凹状を呈している。遺構確認面は耕作面より30cm前後であり、遺構全体が少なからず削平されていた。特に南半分における削平がはげしい。方形に区画された堀の南辺ほぼ中央には、南へ2.0m、幅9mの規模を持つ長方形の張り出し部が存在する。この張り出しは直線的ではなく、中央部がやや曲線を描いて外側に張り出している。南北方向の堀は、中央部から少し外側に方向を変えて幅が少し広くなり、すぐに再び直線方向に延びている。北端では谷により削られて残っていないが、堀底部が西側に直角に曲がるような痕跡が観察出来る。この地点で東側の堀は終わっている可能性を指摘出来そうである。南の堀の西端は谷と攪乱により残りが悪く、さらに西に延びるのかあるいは北に直角に曲がるのか不明である。堀の中からは小破片を含めて200個体以上の5世紀代の土器が出土しており、接合の結果92個の土器と2個の石を図示することが出来た。それらの遺物は東側の堀、特に東南隅部分や南側堀の張り出し部周辺および張り出し部東側に多く出土し、他の部分での出土は少ない。

(2) 居館の柵（第81～86図　PL.16・26・27）

概　要　柵は堀に添ってほぼ平行に掘られている布堀と、その中にほぼ等間隔に掘られている柱穴から成りたっている。

規模と構造　柵列は居館の中の堀の内側に、堀と平行して掘られていた。柵列の西側は堀の造りだし部分の西端から約7mの所で、堀と平行しないでほぼ直角に北に向かって掘られている。

柵は東西方向37m、南北方向は東側で33.5mでそこから北はやや低くなり、その先は深い谷となっている。谷までのあいだに約2.5m距離があるために、柱穴が掘られていたなら、確認できるはずであるが掘られていなかった。柵列が西に直角に曲がることも考えられるが、西にも柱穴は掘られていなかった。

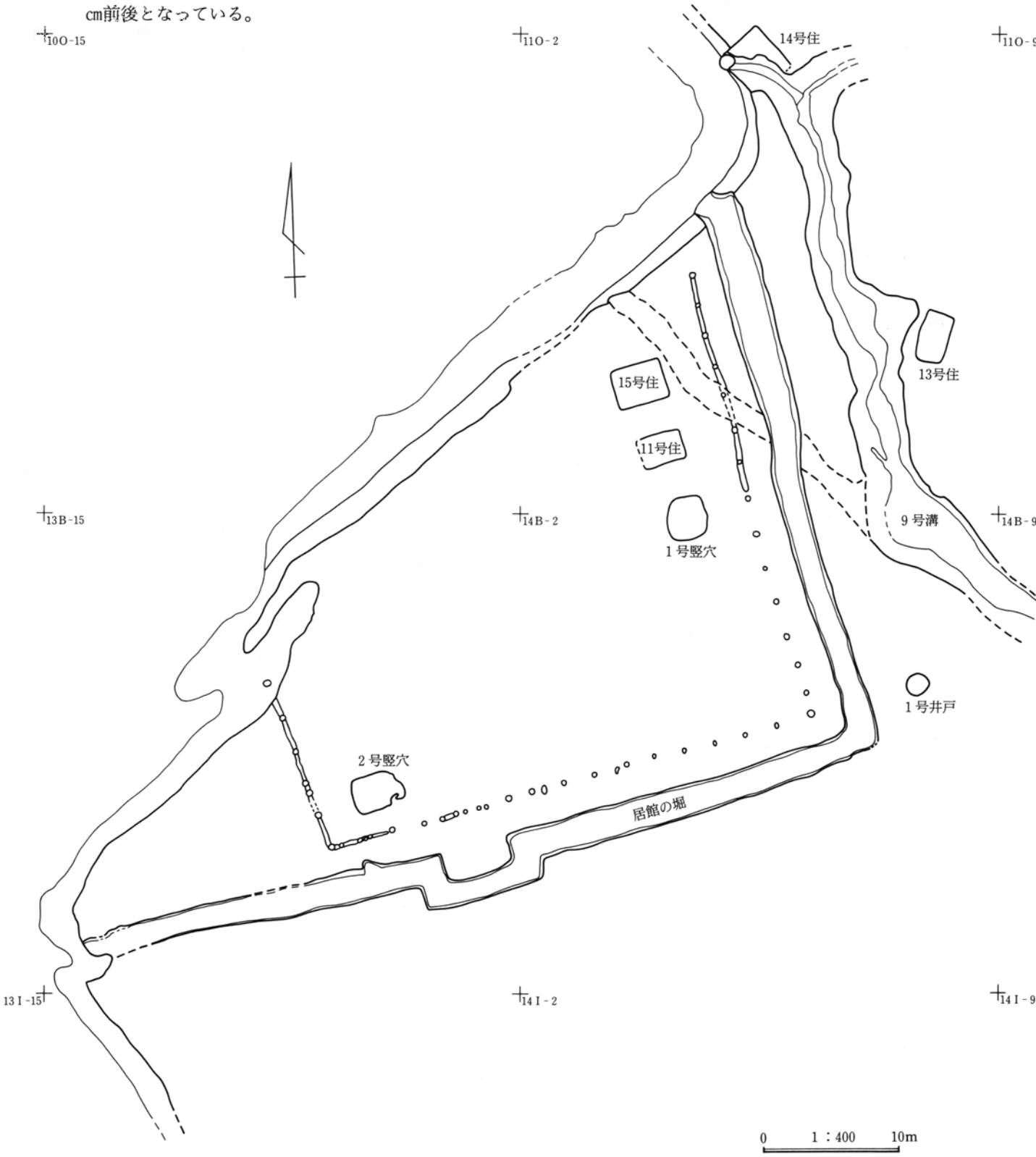
柵は南東部分で上面の多くが削られていたために、その部分の柱穴がやや小さく、掘り方も浅かった。一列に並ぶ柵列の柱穴と柱穴間の距離は多少のばらつきがあるが、2.4mが多く一部に2.3mの所もある。南側中央部に張り出し部を持つ地点の柱穴は、4本掘られており、柱間の距離は中央が1mで西が0.7m東が0.6mとなっており、他の部分より半分以下と狭くなっている。門等の特別な構造が考えられる。

堀と柵列の距離は2.2～2.4mであり、南堀部分で2.4mとやや広く、東堀部分で2.2mと少し狭い傾向を持つ。柵列の柱穴の大きさは、直径28～39cmでばらつきがあるが、残りの良い西柵列部分が最も大きく、平均39cmであり、残りの悪い南東コーナー部分が平均28cmであった。おそらく本来は40cm前後はあったものと思われる。

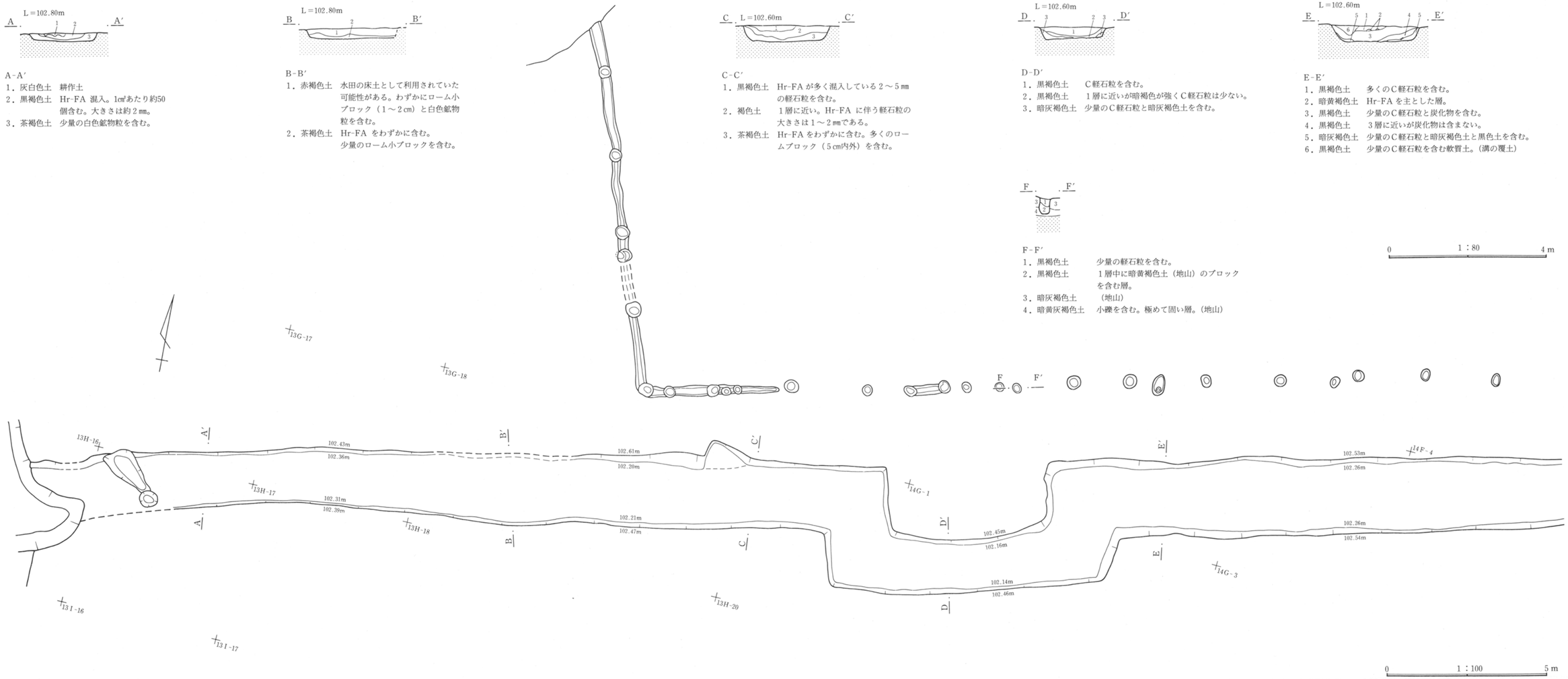
柵列の柱穴の深さは32～93cmでばらつきがあるが、残りの良い西柵列部分が最も深く、平均93cmであり、東柵列部分で平均63cmであった。残りの悪い南東コーナー部分では、平均32cmであった。おそらく本来は0.60m以上と非常に深く掘られていたものと思われる。

この柱穴と柱穴を結ぶ布堀は、東側の柵の北半分

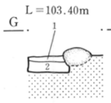
と南側の柵の西端、西側の柵全面に認められた。他の部分は削平の可能性があり、柱穴のみ確認されただけである。布堀の大きさは幅が28cm前後、深さ15cm前後となっている。



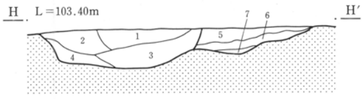
第81図　居館とほぼ同時期の遺構配置図



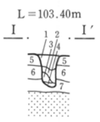
第82図　居館の堀と柵（1）



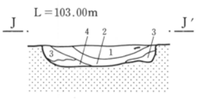
G-G′
1．暗黄褐色土　（地山）
2．暗黄灰褐色土　小石を多量に含む固い層。（地山）



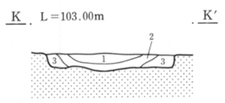
H-H′
1．茶褐色土　多くの Hr-FA を含む。
2．暗褐色土　少量の Hr-FA を含む。
3．黒褐色土　多くの As-C と少量ローム粒を含む。
4．暗褐色土　少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
5．黒褐色土　多くの As-C を含む。
6．暗褐色土　少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
7．暗褐色土　多くのローム粒・ロームブロックを含む粘性の強い層。



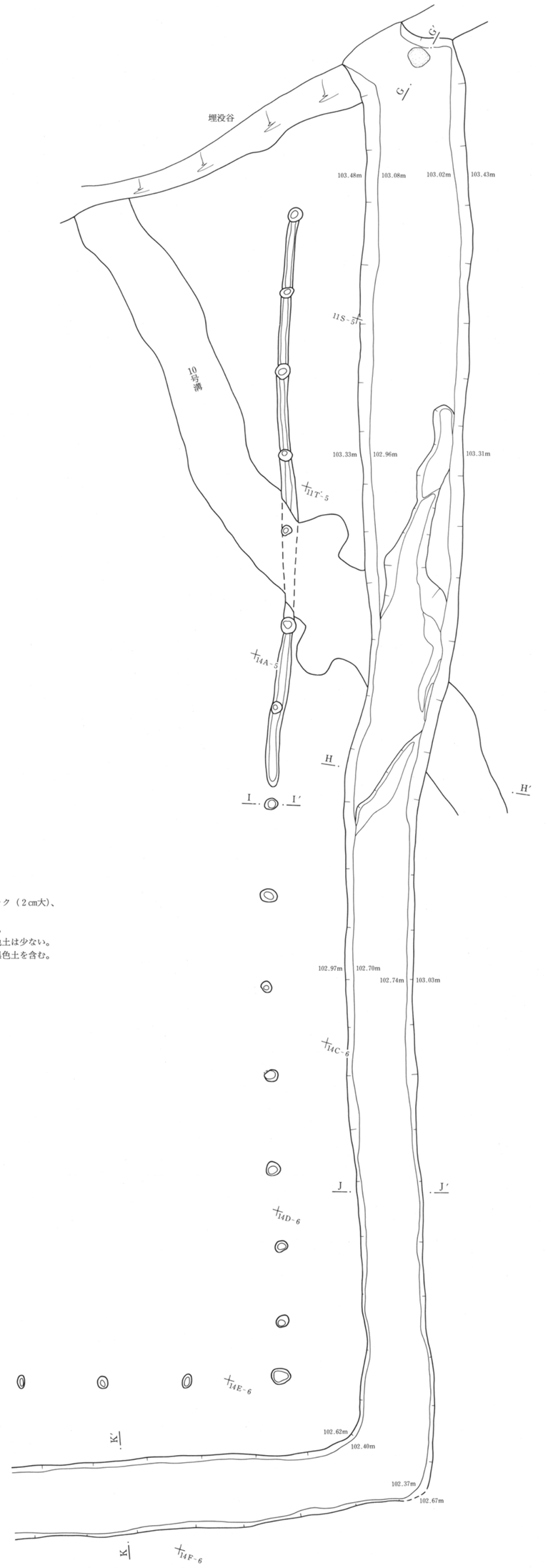
I-I′
1．黒褐色土　多くの As-C を含む。暗褐色の地山ブロック（2cm大）、黒色土ブロックを含む。
2．黒褐色土と暗灰褐色土（地山）の混入土。軽石を少し含む。
3．黒褐色土　黒褐色土と暗灰褐色土の混入層。暗灰褐色土は少ない。
4．暗黄灰褐色土　暗黄灰褐色土（地山）を主とし、少量の黒色土を含む。
5．黒褐色土　軽石粒を含む。（地山）
6．暗灰褐色土　（地山）
7．暗黄灰褐色土　小石を多く含む。極めて固い層。（地山）



J-J′
1．黒褐色土　多くのC軽石粒を含む。
2．黒褐色土　少量のC軽石粒と暗黄灰褐色土の小ブロックを含む。
3．暗灰褐色土　少量のC軽石と暗灰褐色土と黒色土を含む。
4．暗黄灰褐色土　3層を主とし、少量の地山の暗黄灰褐色土を含む。



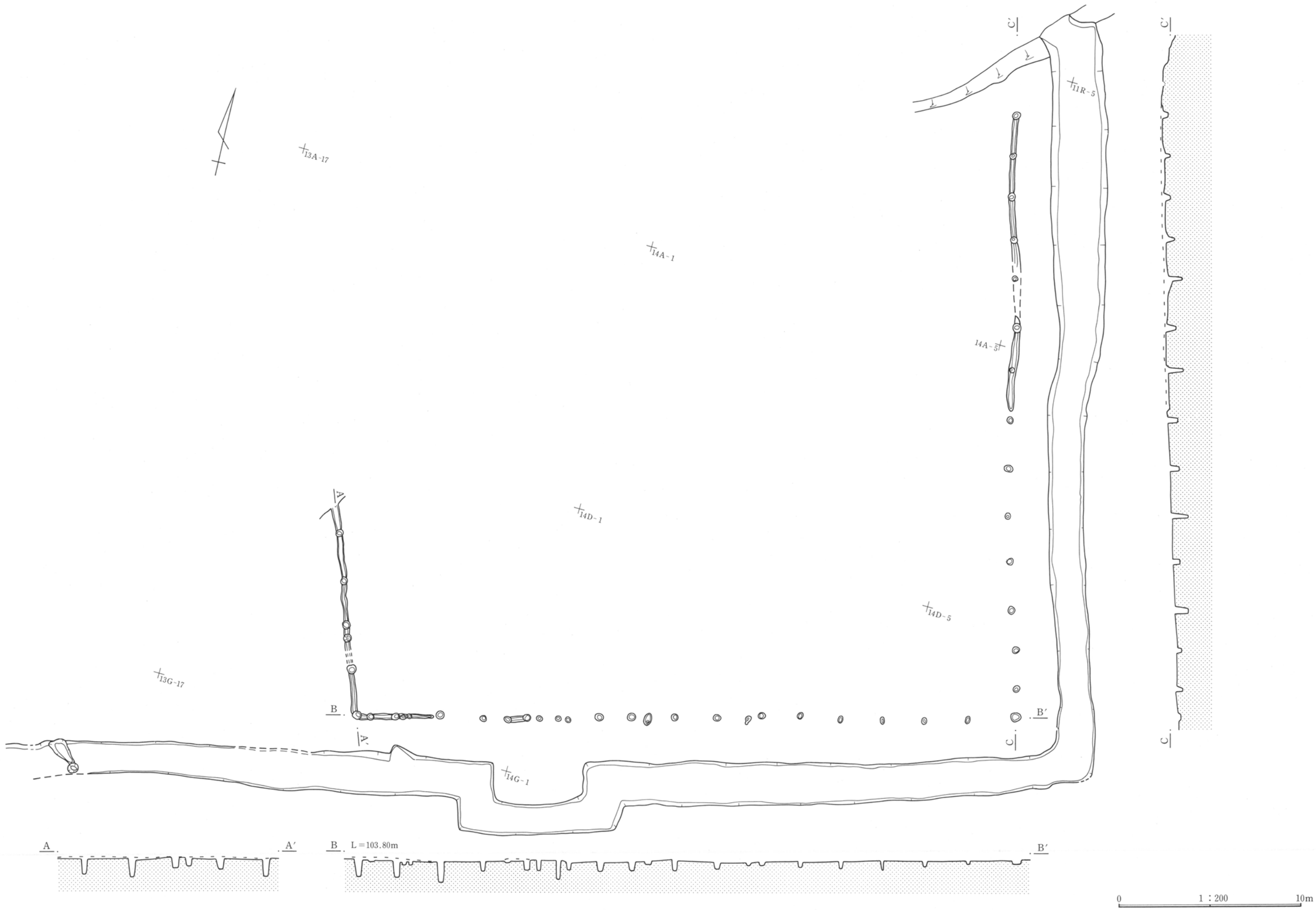
K-K′
1．黒褐色土　多くのC軽石粒を含む。
2．黒褐色土　少量のC軽石粒と暗黄灰褐色土の小ブロックを含む。
3．暗灰褐色土　少量のC軽石粒と暗灰褐色土と黒色土を含む。



0　1：80　4 m

0　1：100　5 m

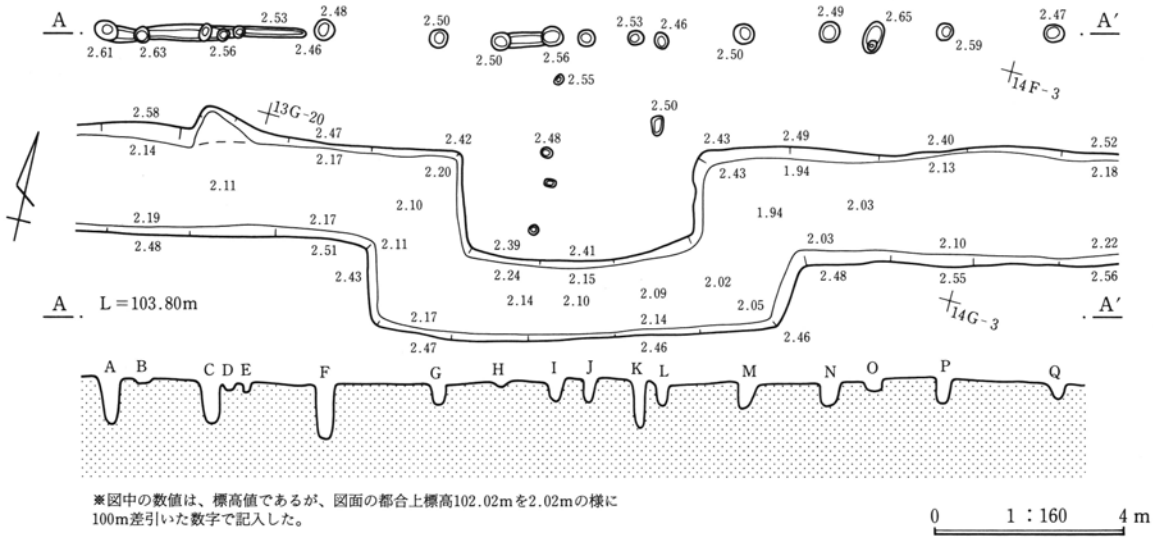
第83図　居館の堀と柵（2）



第84図　居館の堀と柵（全体）

張り出し部分について（第85図　PL.26）

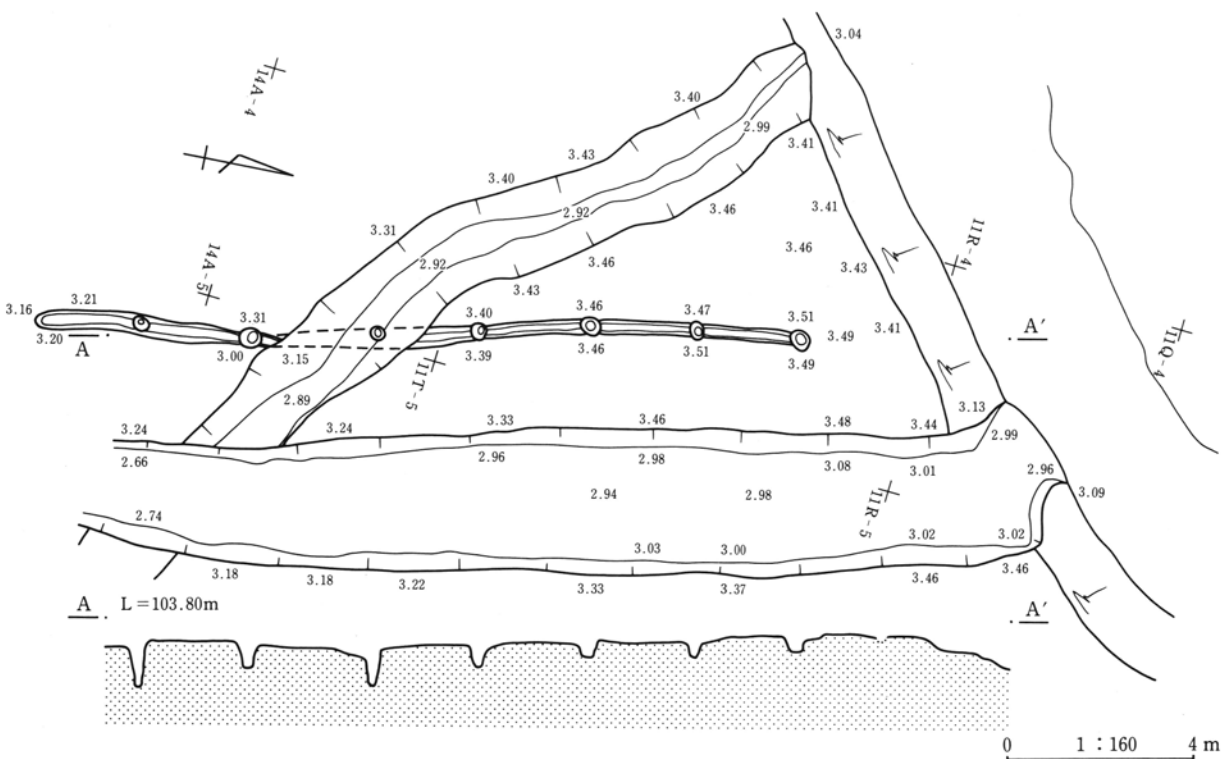
この部分にはおそらく出入りのための門等の設備があったものと思われる。そこで調査段階での詳しい情報を掲載した。図上には標高値を細かく記載した。柵列にAからQまで記号をつけた。B・C・D・H・Oの堀込とH～I間の布堀は浅いことと間隔が不自然であることにより柵列に伴わないと考えられる。



第85図　張り出し部分詳細図

北東端部の柵列について（第86図　PL.27）

先に触れたように、北東端部で柵は埋没谷の手前約2.5mで終了しており、北や東側にも延びていかない。北に浅い柱穴状の掘り込があるが柵にはならない。詳しい検証の資料として、柵のエレベーションほかに、図上には標高値を細かく記載した。



第86図　柵北端部詳細図

⑶　堀と９号溝出土遺物について

（第87～96図　PL.39～43）

堀と柵に囲まれた内側にどのような建物が立てられていたのか明確ではない。現段階で同時存在ではなくても、ほぼ同じ時期に存在していたであろう建物として、竪穴住居２軒と竪穴住居の残骸と考えられる竪穴状遺構２軒の計４軒が考えられるだけである。この中で15号住居覆土中に、ブロック状の埋没土が多く含まれており、居館を造る段階で埋められたことも考えられる。出土遺物も破片として３個掲載できる程度であり、非常に少ない。残りの１軒である11号住居では、このブロックは含まれていないが、住居規模が3.16×2.25mと極めて小さく、出土遺物はわずか１個である。他の竪穴状遺構も残りが非常に悪いことから、掘り込が浅く、規模も１号竪穴状遺構が2.28×3.12m、２号竪穴状遺構が3.5×2.5mと他の住居と比較してけっして大きくはない。竪穴住居以外に掘立柱建物等も考えられるが、柵列の残り具合からみて、建てられていたなら、柱穴は残っていたはずである。それ故掘立柱建物は、なかったと考えられるのである。この４軒の竪穴住居（竪穴状遺構２軒を含む）のためにこの堀や柵が築かれたのであろうか。

この堀に囲まれた遺構は、実際生活の場として使われていたのだろうか。この疑問の一つの答えに、堀と溝から出土した遺物があげられるのではないだろうか。

９号溝からは、中央部と10号溝との合流地点付近から多く出土している。同じ時期の住居のある、13号住居西の溝部分からは出土していない。９号溝により壊されている14号住居付近からは、当然ながら出土していない。

堀からの出土位置は、柵の造られている近くから出土している。南堀では柵の造られていた部分からは出土しているが、柵が北に方向を変えたところから西になると、堀の中からは全く出土しなくなる。出土量が、特に多い場所は、東西方向の堀の造りだし部分から南東コーナー部分にかけてである。特に密集している個所を便宜上Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区に分けて説明する。Ａ区は造りだし周辺、Ｂ区は造りだし部分と南東コーナー部分とのほぼ中間地点、Ｃ区は南東コーナー部分、Ｄ区は南北方向の堀全部を含めている。各区の位置は次のページの図上に記載した。

出土した土器群が堀底部からどのくらいの位置であるかを調べてみると、小さな破片以外で出土状況図に掲載した遺物の90パーセント以上は、堀の床面から10cm以内の高さから出土している。

次に、出土した土器について検討してみる。９号溝と居館の堀から、図示できた土器は117個出土している。第87図で図示した土器は、出土位置の明らかなものに限られる。他に覆土中から出土した土器が17個ある。

最も多く出土しているのは高坏であり40個出土している。次に多いのが甕であり27個出土しており、他の土器は坏・小鉢・坩等である。この組み合わせに一般の竪穴住居と異なる傾向を示しているか、筆者は充分調べていないために明らかでないが、特別な傾向は示していないものと思われる。

また張り出し部分と他の部分で違いが見られることもなさそうである。

次にこれらの土器の時期と、埋没の問題について考えてみる。第90図-10の１点が古墳時代後期の坏であるが、それ以外は全て中期、それも前半の土器である。土器自体に多少の時期差は含まれると思うが、時間幅は少ないものと考えられる。また９号溝と居館の堀から出土している土器の間にも、時期差は基本的に無いと考えている。

土器からは、一定の限られた時間幅の中で使用された土器が、狭い時間幅の中で捨てられ、その後他の時期の土器が混入することなしに、この溝と居館の堀は埋まったことを示しているものと思われる。

遺跡の西に近接してこの時期に続く５世紀後半の荒砥下押切遺跡に大きな集落があるが、その段階の土器は遺跡内より出土していない。遺跡内に再び住居が造られるようになったのは、約100年ほど後に造られた１・２号住居である。

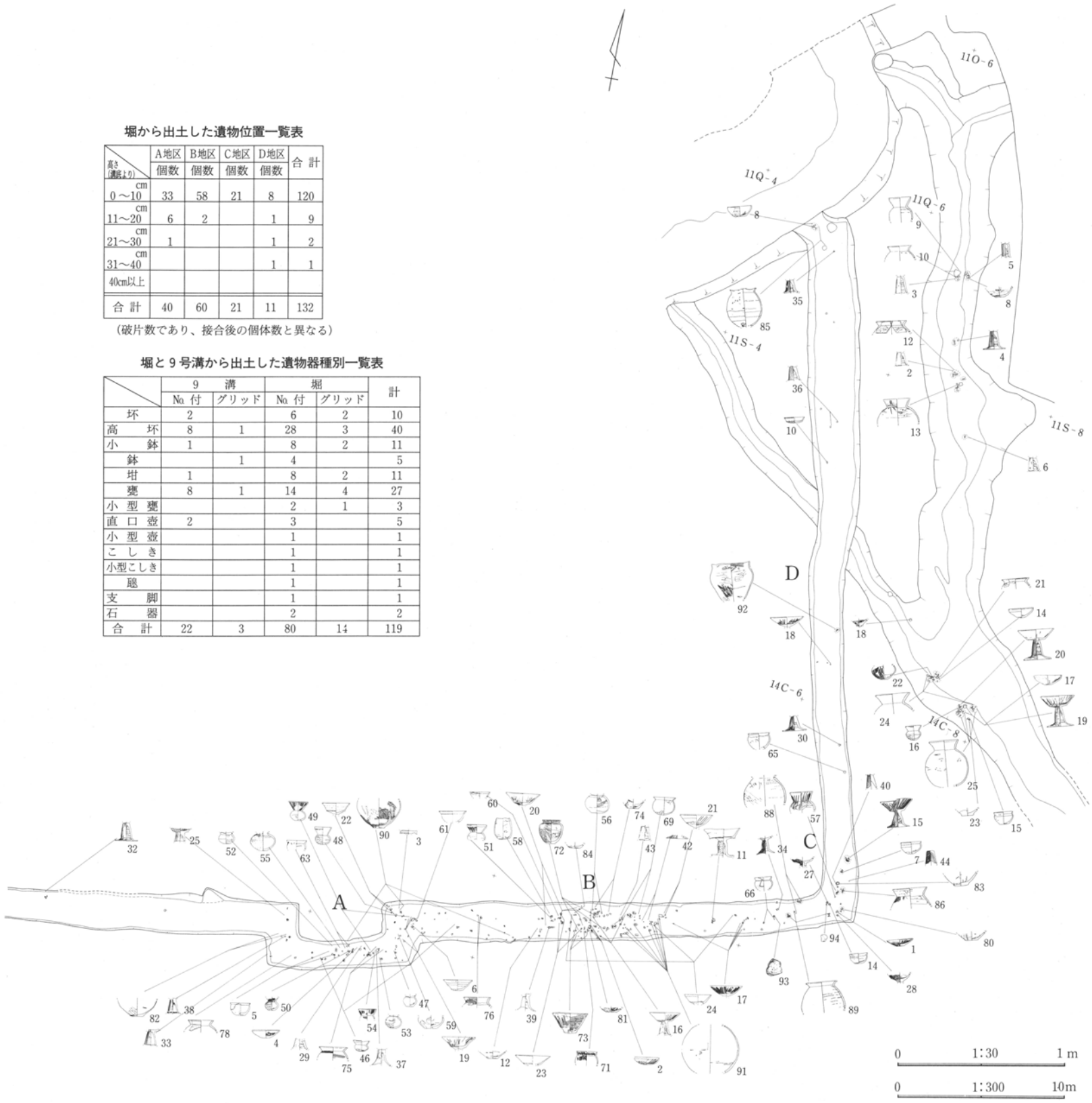
堀から出土した遺物位置一覧表

高さ（溝底より）	A地区 個数	B地区 個数	C地区 個数	D地区 個数	合 計
cm 0～10	33	58	21	8	120
cm 11～20	6	2		1	9
cm 21～30	1			1	2
cm 31～40				1	1
40cm以上					
合 計	40	60	21	11	132

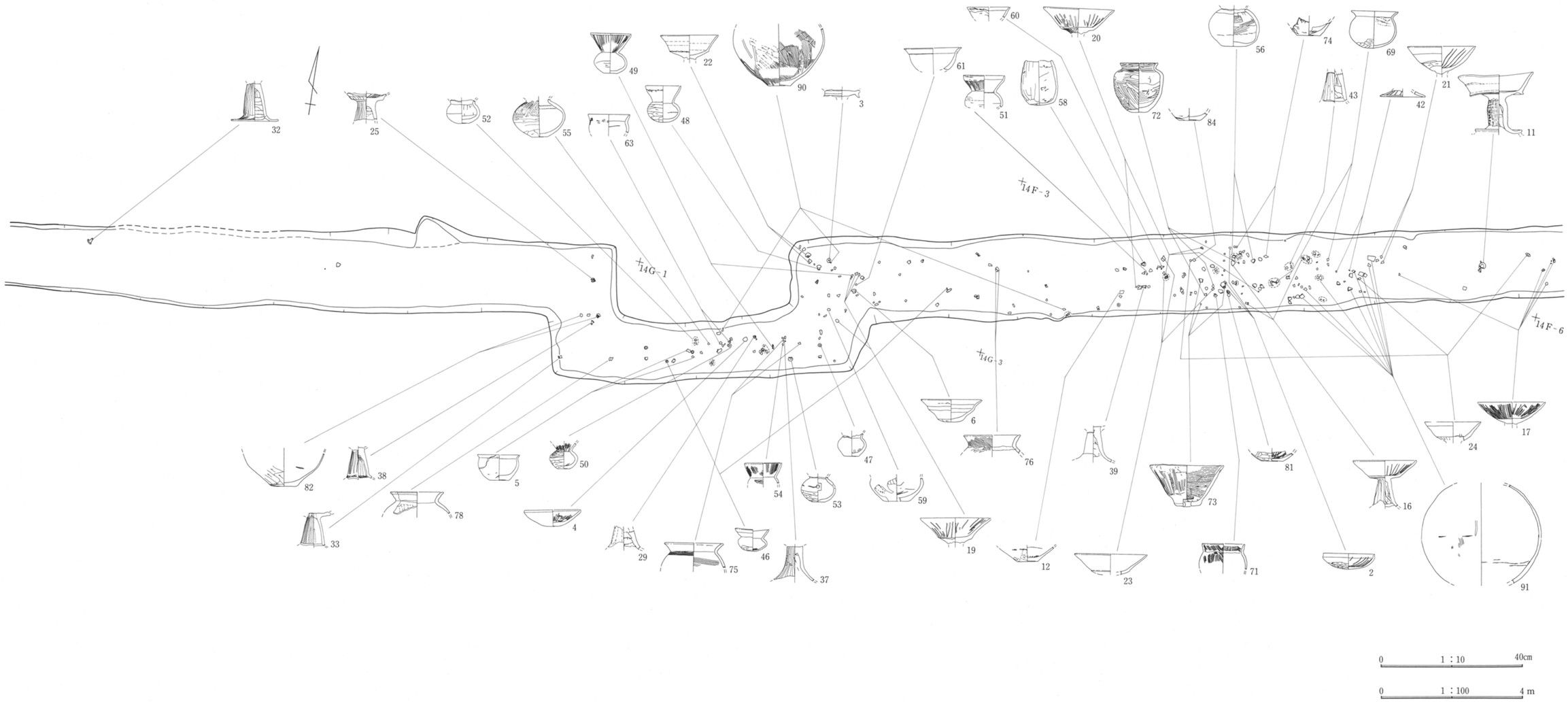
（破片数であり、接合後の個体数と異なる）

堀と９号溝から出土した遺物器種別一覧表

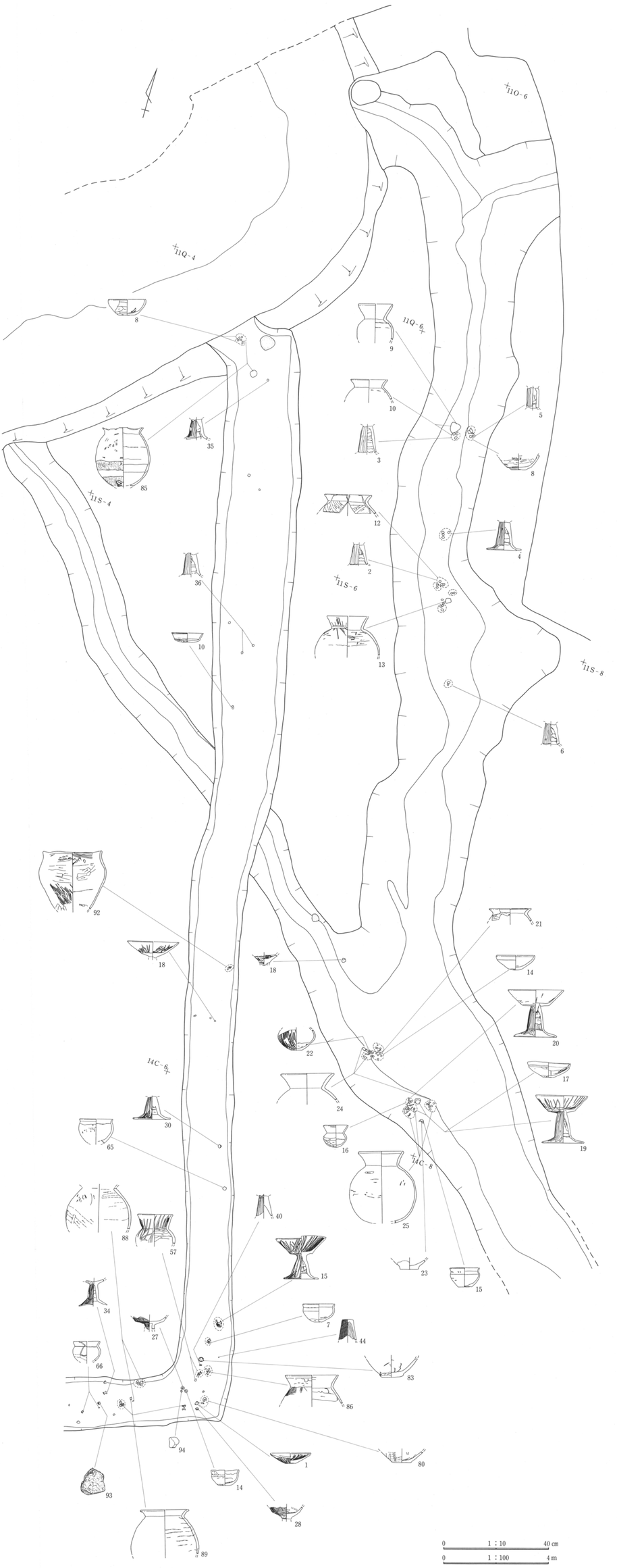
	9 溝 No付	9 溝 グリッド	堀 No付	堀 グリッド	計
坏	2		6	2	10
高 坏	8	1	28	3	40
小 鉢	1		8	2	11
鉢		1	4		5
坩	1		8	2	11
甕	8	1	14	4	27
小 型 甕			2	1	3
直 口 壺	2		3		5
小 型 壺			1		1
こ し き			1		1
小型こしき			1		1
甑			1		1
支 脚			1		1
石 器			2		2
合 計	22	3	80	14	119



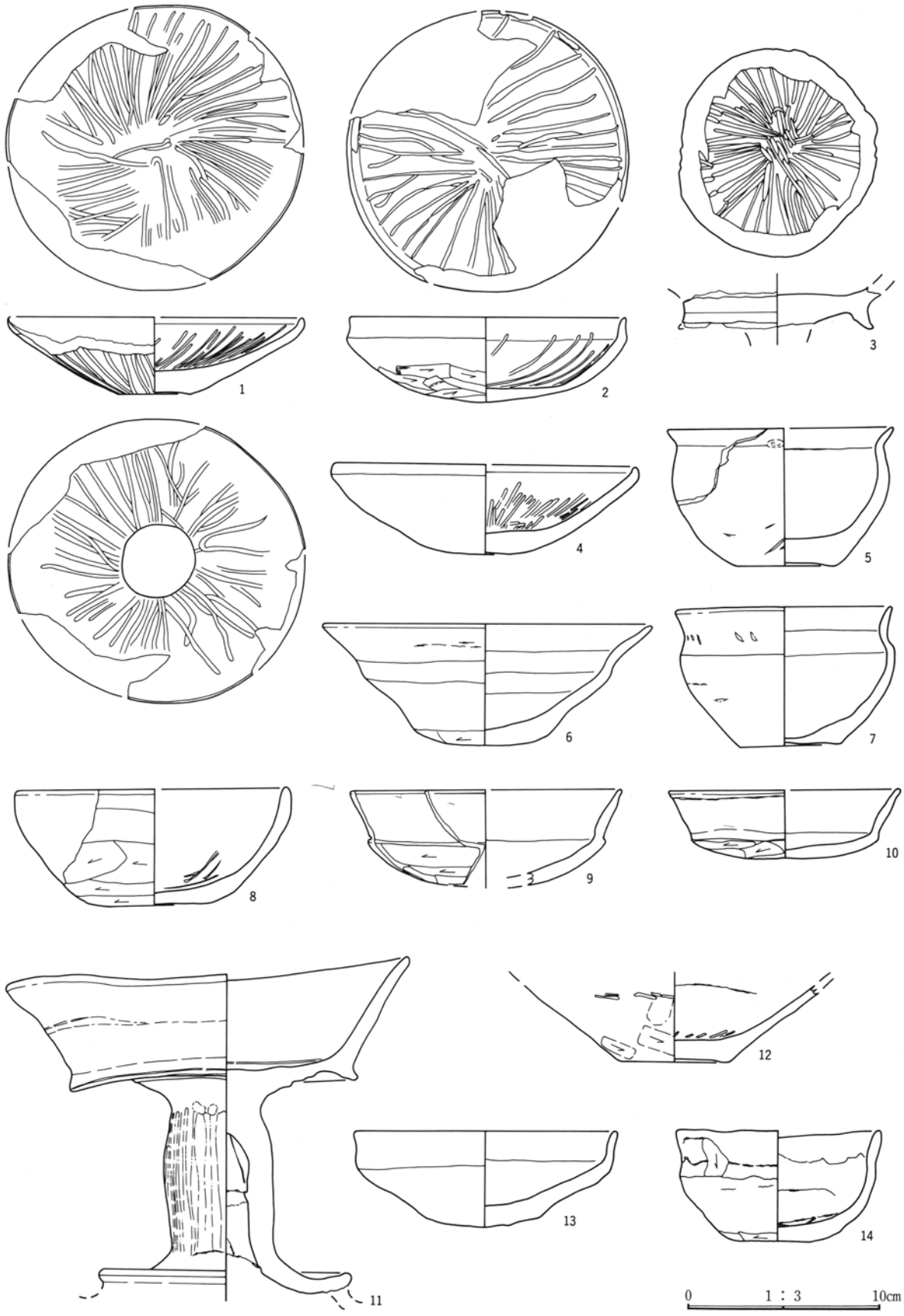
第87図　居館の堀と９号溝出土遺物分布



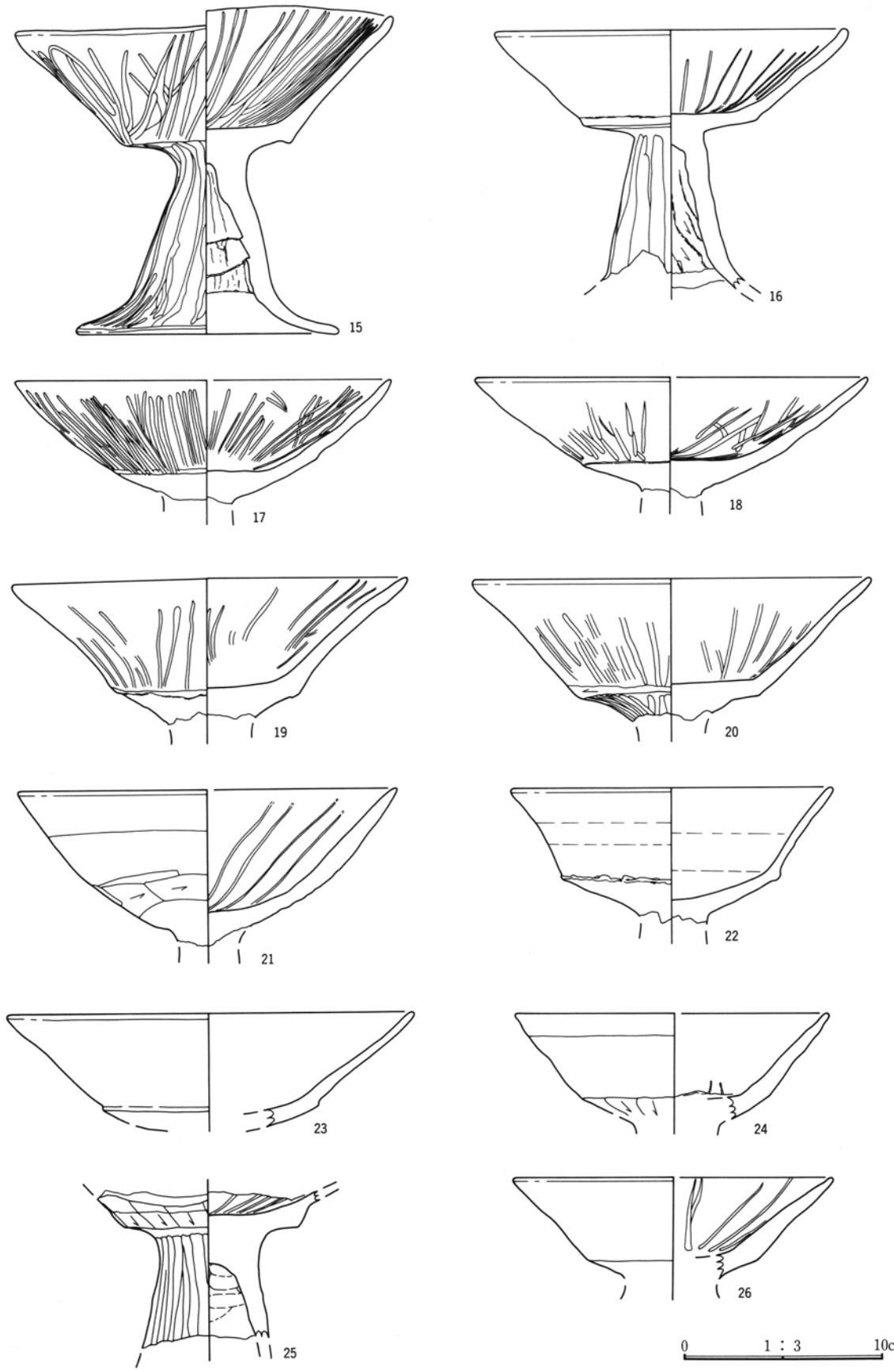
第88図　居館の堀と出土遺物分布（1）



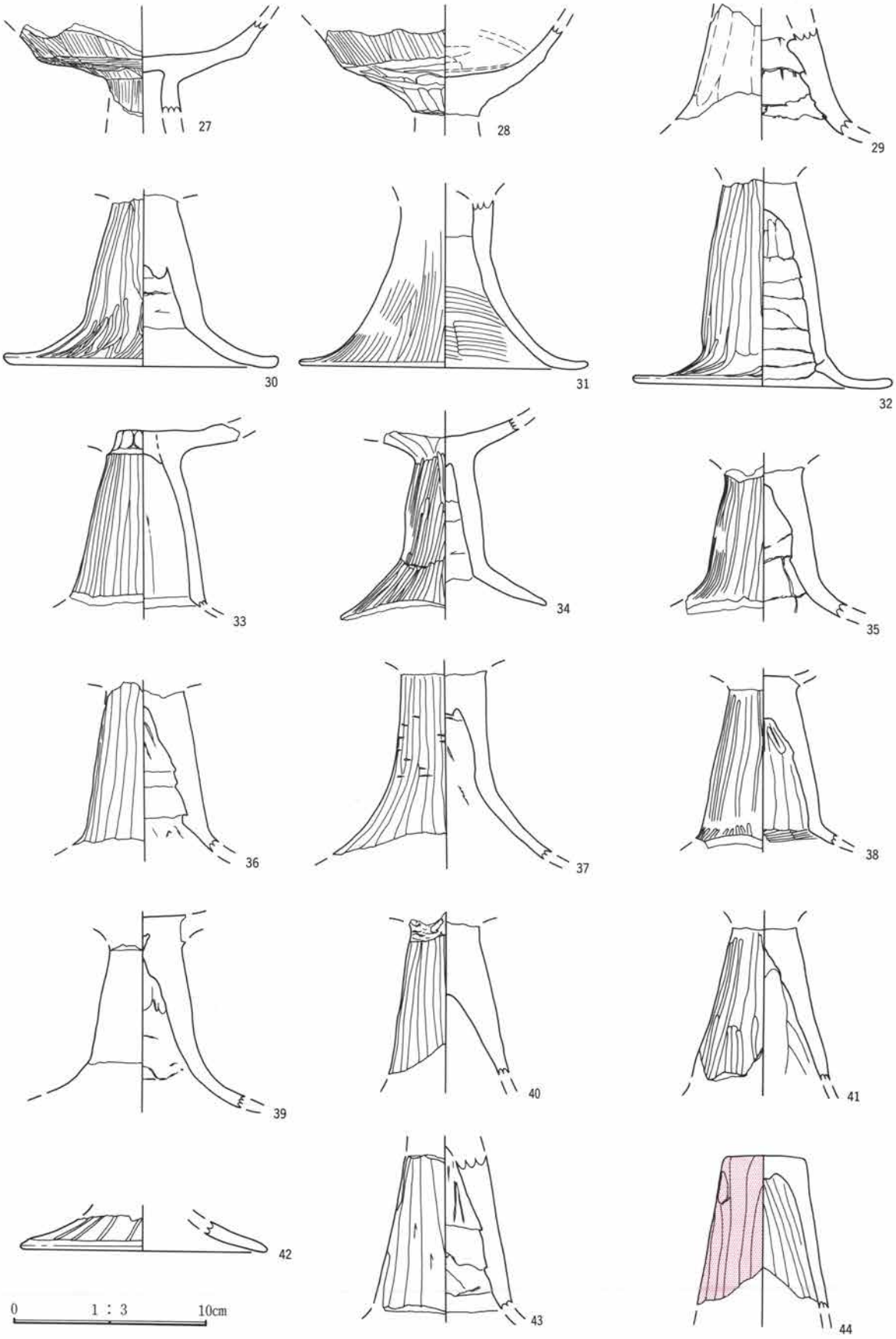
第89図　居館の堀と出土遺物分布（２）



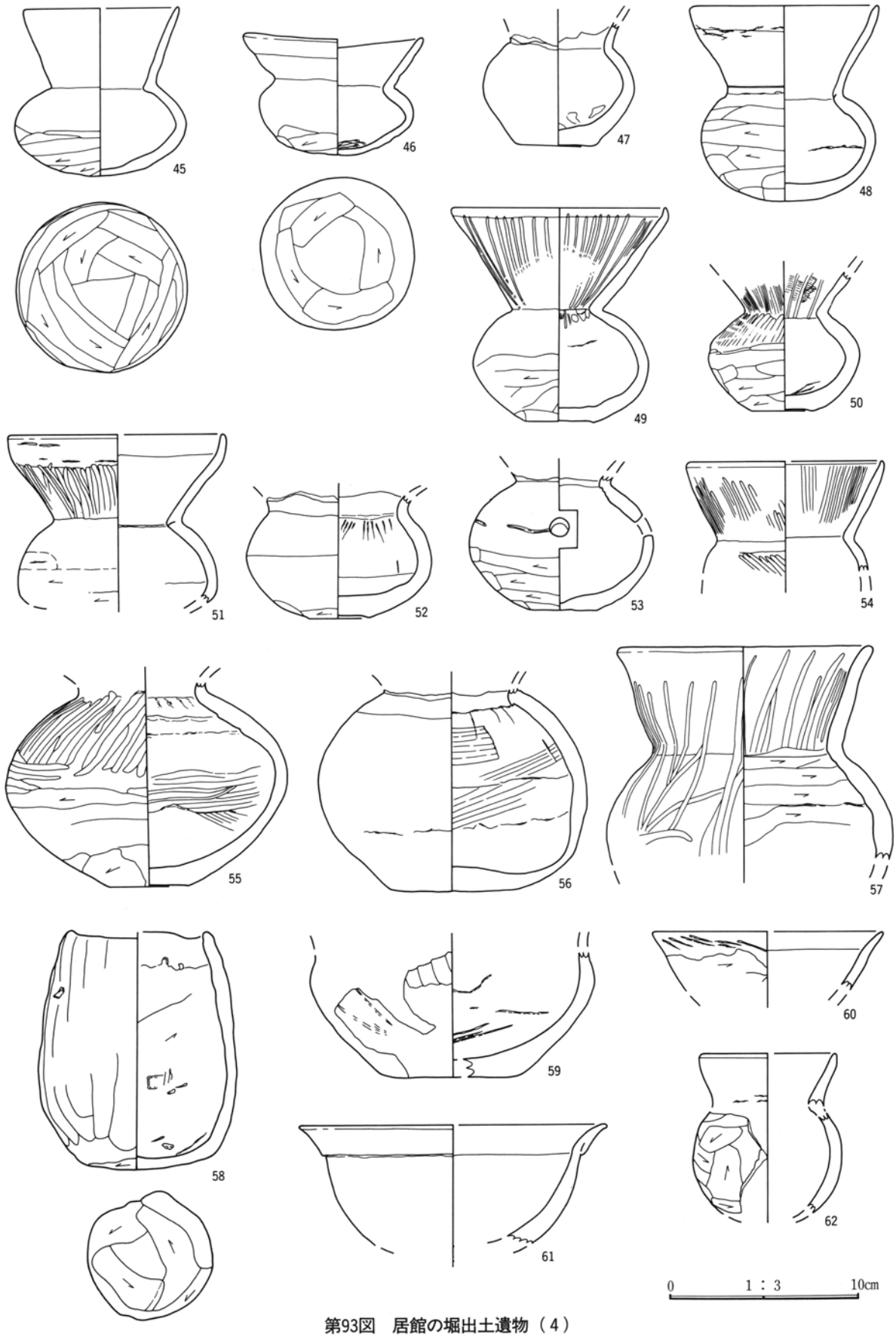
第90図　居館の堀出土遺物（1）



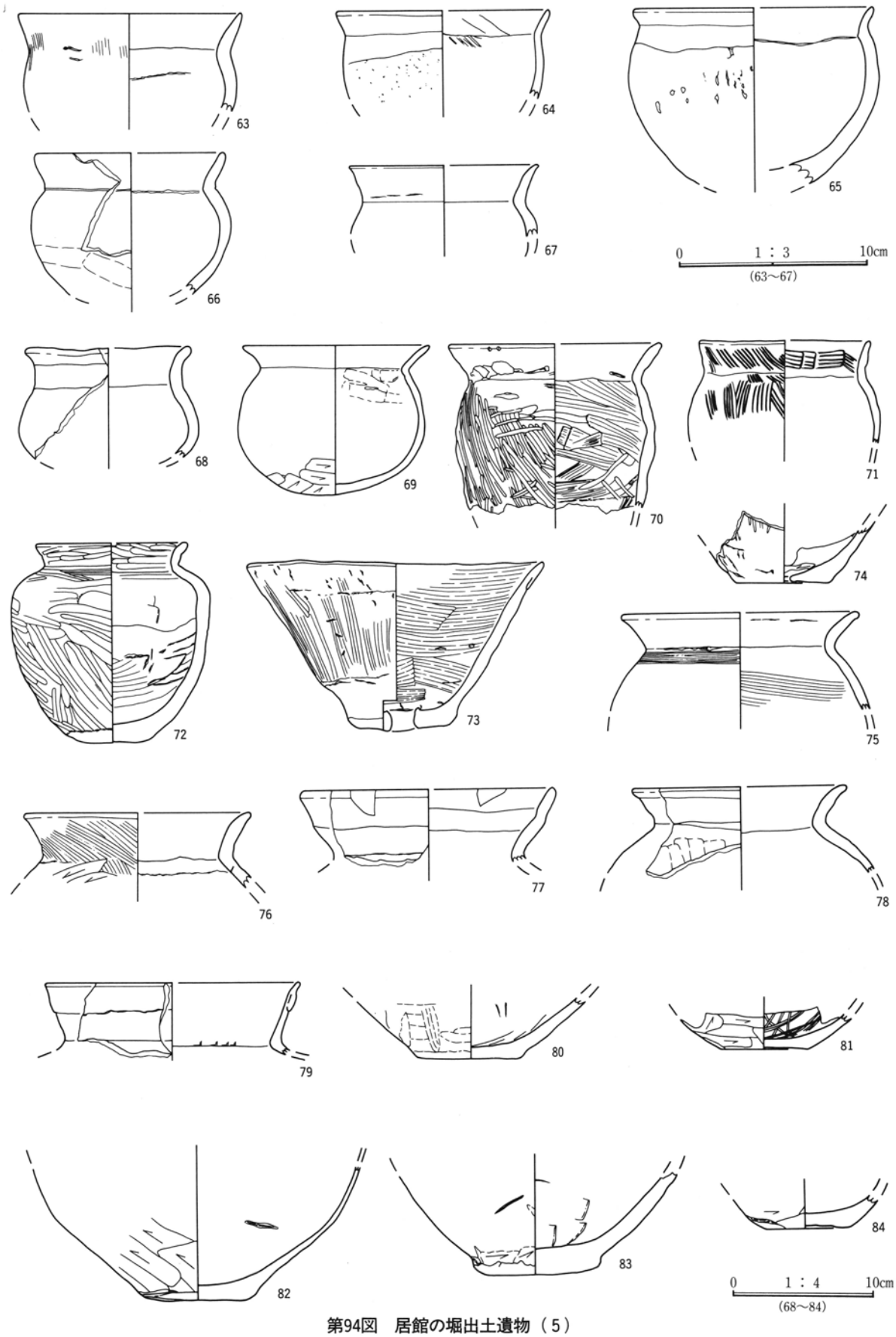
第91図　居館の堀出土遺物（２）



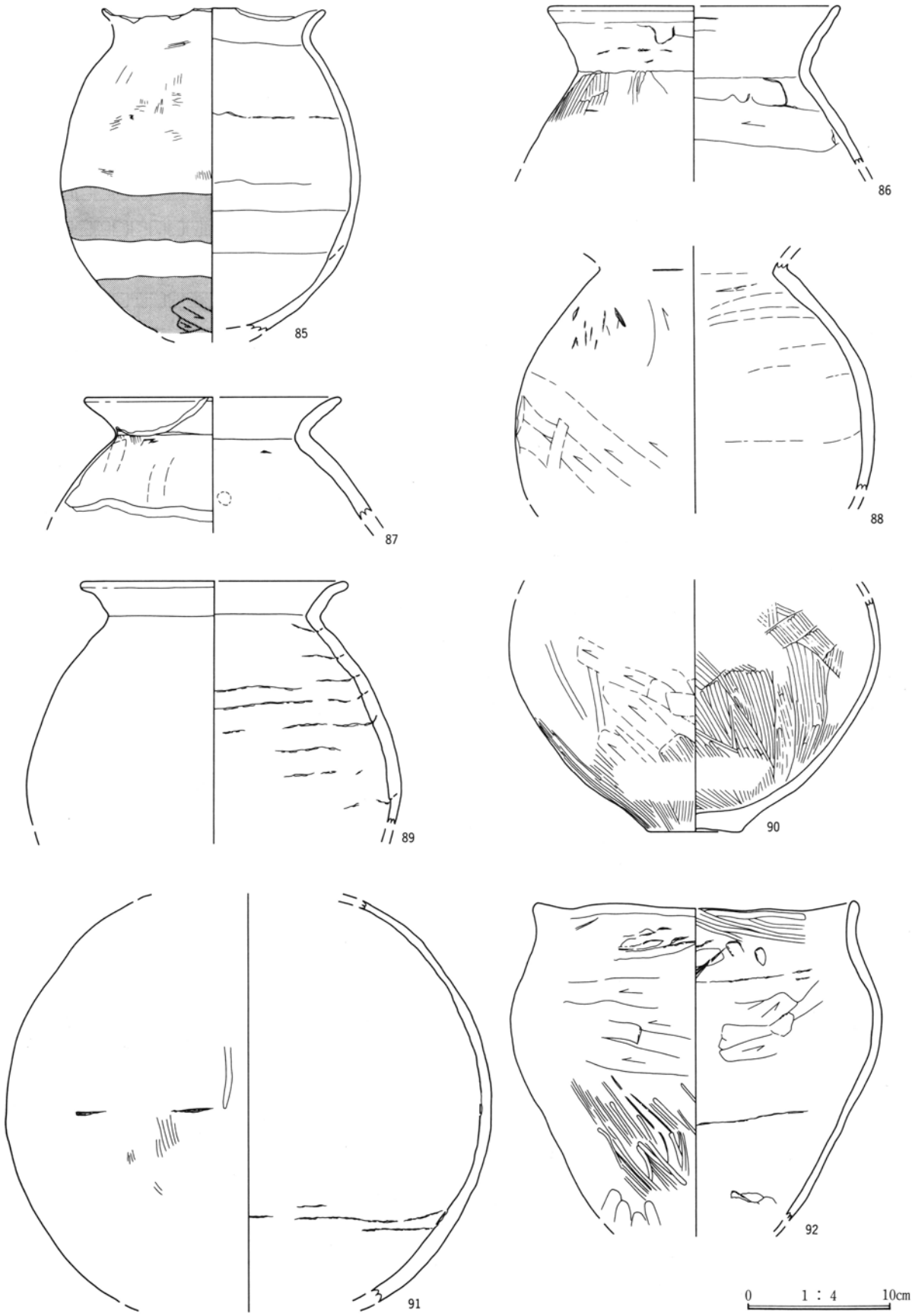
第92図　居館の堀出土遺物（3）



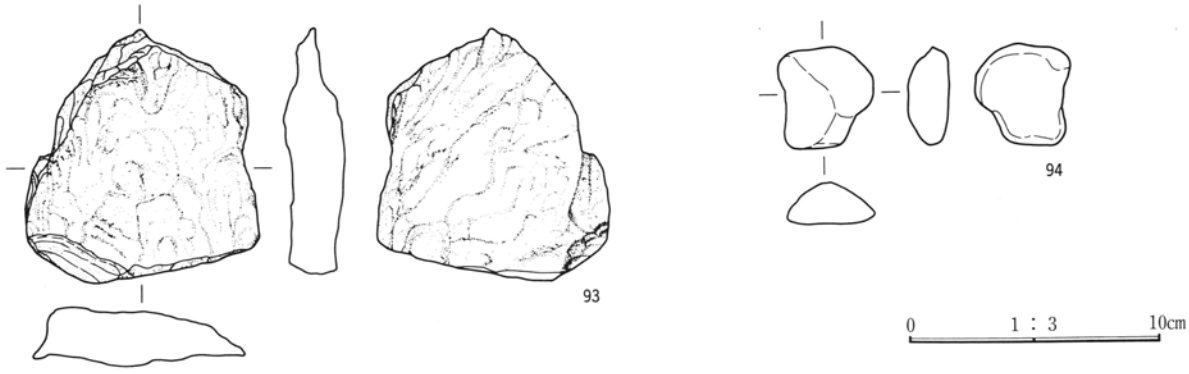
第93図　居館の堀出土遺物（４）



第94図　居館の堀出土遺物（5）



第95図　居館の堀出土遺物（６）



第96図　居館の堀出土遺物（7）

居館の堀出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
90-1 39	土師器 坏	張出南半・ 西半 口一部欠	口(15.4) 高　4.0 底　3.7	①1㎜前後の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	口縁部横ナデ、体部内外面放射状ヘラ磨き。 内側器表面は密であるが、外面はあれて砂粒が目だつ。底面はナデで磨きなし。
90-2 39	土師器 坏	床面＋3 2/3	口 14.2 高　4.4 底　—	①1㎜前後の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。
90-3	土師器 高坏	床面＋2 図示部分 残存	口　— 高　— 底　—	①1㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③褐色	坏内面全面にわたり放射状暗文。 坏部と脚部に段を持つ高坏と思われる。
90-4 39	土師器 坏	床面＋1.5 口縁僅か 底部完形	口(15.6) 高　4.7 底　—	①1㎜以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	底部外面中央が凹状、底部外面ナデ。 底部内面下半部ほぼ全面にわたりヘラ磨き。 口縁部は幅5㎜程しか残っていない。
90-5 39	土師器 椀	床面＋4 口縁1/10 胴部1/6	口(11.2) 高　7.1 底　4.8	①1㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	口縁部横ナデ。胴部内外面ともナデにより器表面密。 底面の一部にヘラナデ。 底部が非常に厚い安定感のある坏である。
90-6 39	土師器 坏	床直 口縁1/2 底部完形	口(17.0) 高　6.5 底　—	①1㎜前後の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	胴部外面刷毛目状の整形痕あり。底部外面ヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。
90-7 39	土師器 椀	床面＋2 ほぼ完形	口 11.2 高　7.2 底　5.2	①1㎜以下の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色　外面黒色	口縁部横ナデ。他表面全面ナデにより器表面密。 ヘラ削りはなし。ほぼ均一のとれる坏である。
90-8 39	土師器 鉢	床面＋3 底部1/2 口縁1/10	口(14.2) 高　5.9 底　—	①粗い、1㎜前後の砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ヘラナデ。胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。底部外面中央がやや凹状を呈している。
90-9 39	土師器 坏	14D-6 小破片	口(14.0) 高　— 底　—	①1㎜以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ヘラ削り。内面ナデにて器表面密。 全体にやや雑な作りである。
90-10 39	土師器 坏	床面＋36 1/3	口 11.9 高　3.5 底　—	①密、0.5㎜前後の赤色粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ヘラ削り、胎土が粉状のため、削りの単位不明瞭。胎土が粉状で手に付着する。
90-11 39	土師器 高坏	床直 図示部分 完形	口 21.0 高　— 底　—	①粗、1～2㎜の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	脚下端部ナデ。筒部ヘラナデではないがわずかに縦方向の整形痕、筒内面上半指ナデ、下半輪積痕、坏部横ナデ。坏内面に多くの砂粒が目だつ。
90-12	土師器 鉢	床面＋5.5 1/2	口　— 高　— 底 (5.6)	①1㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	底部外面ヘラ削り、中央部がやや凹状になっている。 胴部外面ナデ、内面ナデ。
90-13 39	土師器 坏	張出南半 口縁1/2 底部完形	口(13.6) 高　— 底　—	①1～3㎜の砂粒を少量、1㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質　③明赤褐色	底部外面ナデ。口縁部横ナデ、内側器表面あれており整形方法不明。皿状の浅い坏の初源段階の製品か?
90-14 39	土師器 坏	床面＋1.5 完形	口 10.5 高　5.6 底　4.0	①1㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③灰色	体部下端ヘラ削り。口縁部に輪積痕が残る。体部下端以外雑なつくりである。全体に歪んでいる。

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
91-15 39	土師器 高坏	床面＋８ ほぼ完形	口 18.9 高 15.6 底 13.1	①密、１㎜以下の赤色粒と白色粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③暗赤褐色	脚部外面、坏部内外面ヘラ磨きその部分がより赤色となり、光沢を持つ。筒内面に輪積痕。わずかに黒色部分があるが、全体に赤色の高坏である。
91-16 39	土師器 高坏	床面＋２ 図示部分 4/5	口 17.7 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	脚部外面ヘラナデ、内面棒状工具による縦方向の整形痕。坏部内面放射状ヘラ磨き。
91-17 40	土師器 高坏	床直 口縁1/3 底部完形	口 (8.8) 高 — 底 —	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	口縁部内外面ほぼ全面にわたり濃密なヘラ磨き。底部内面ナデ、外面ナデにて器表面密。 口縁部と坏底部との境の段は浅くて弱い。
91-18 40	土師器 高坏	床面＋７ 口縁2/5 底部完形	口 19.7 高 — 底 —	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③赤褐色	坏部内外面乱雑なヘラ磨き、脚が細く坏との接合面は小さい。全体に無骨なつくりである。底部中央が特に厚い。
91-19 39	土師器 高坏	床直 2/3	口 19.8 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③赤色	坏底部外面ナデ。口縁部内外面放射状ヘラ磨き。脚部との接合は柄穴式ではないと思われる。 底部の器肉は厚くなっている。
91-20 39	土師器 高坏	床直 図示部分 4/5	口 20.0 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	口縁部上半以外の器表面の多くにヘラ磨き。 底部外面の器肉が特に厚くなっている。
91-21 40	土師器 高坏	床面＋1.5 坏部1/3	口(19.0) 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	底部外面ヘラ削り。内面に放射状のヘラ磨き。
91-22 40	土師器 高坏	床面＋７ 口縁3/5 底部4/5	口 16.0 高 — 底 10.9	①砂粒をほとんど含んでいない。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	坏底部外面ナデ、口縁部と底部との境に粘土紐を貼りつけた様な凸帯あり。胎土が粉状を呈している。
91-23 40	土師器 高坏	床面＋2.5 図示部分 4/5	口 20.4 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まない固い胎土。②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	内外面横ナデより器表面密。その他の整形方法不明。
91-24 40	土師器 高坏	床直 1/2	口(15.6) 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	底部外面ヘラナデ。口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。口径が小さく、脚部の径も小さい高坏と思われる。
91-25 40	土師器 高坏	床面＋５ 張出図示 部ほぼ完	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	脚外面ヘラナデ、内面指によるナデ。坏底面ヘラナデ、坏内側底面全面にわたり放射状磨き。 頸部が特に太い。
91-26	土師器 高坏	14F-６ 小破片	口 16.0 高 — 底 —	①密、１㎜以下の白色粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	坏外面縦方向のナデ。内面横方向のナデ後放射状のヘラ磨き。
92-27	土師器 高坏	床面＋1.5 坏底部完 他破片	口 — 高 — 底 —	①１㎜前後の砂粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	外面刷毛目、内面ナデ。平らな坏底部と口縁部との接合面で割れている。
92-28	土師器 高坏	床直 図示部分 ほぼ残存	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	坏底部外面ヘラ磨き。口縁部外面刷毛目。内面やや雑なナデ。
92-29	土師器 高坏	床面＋13 図示部分 ほぼ残存	口 — 高 — 底 —	①密、１㎜前後の白色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	筒部外面縦方向のナデ。内面に輪積痕。 輪積の接合部分から割れている。
92-30 40	土師器 高坏	床面＋23 脚部	口 — 高 — 底 14.2	①１～２㎜の赤色粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	脚筒部は輪積後、内面をヘラ削り。内側中央部の凸は削り残し部分。脚外面丁寧なヘラ磨き。
92-31 40	土師器 高坏	14D-６ 14E-６ 4/5	口 — 高 — 底 14.8	①１㎜前後の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい褐色	脚内外面に刷毛目。下端は横ナデの後で刷毛による整形を行っている。
92-32 40	土師器 高坏	床面＋12 筒部完形 下端4/5	口 — 高 — 底 13.2	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色　明黄褐色	筒部外面～下端部ヘラナデ。筒内面下半７段の輪積痕、上半は縦方向のナデ。
92-33 40	土師器 高坏	床面＋22 図示部分 ほぼ完形	口 — 高 — 底 —	①１㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	筒内面ヘラ削り、天井部に坏部から押し込まれた粘土が指で押しつぶされた痕跡あり。 坏と脚は柄穴式で接合か？筒外面ヘラナデ。
92-34 40	土師器 高坏	床面＋２ 図示部分 4/5	口 — 高 — 底 10.6	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③赤茶色	脚外面全面にわたり丁寧なヘラ磨き。 脚内面ヘラ削り。筒部は細く短い。

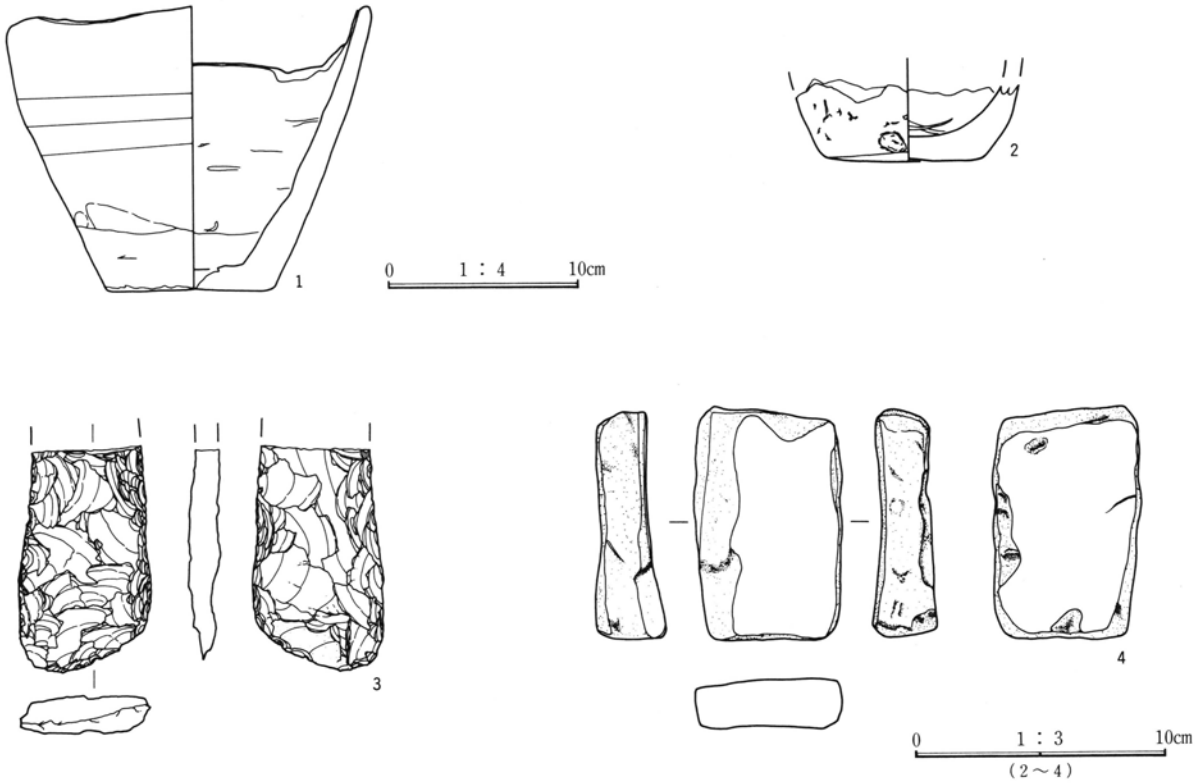
挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
92-35 40	土師器 高坏	床面＋9 脚部2/3	口 — 高 — 底 —	①1㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい赤褐色	脚外面ヘラナデ、内面下半3段の輪積痕、上半縦方向ナデ整形。筒部が短くて太い。
92-36 40	土師器 高坏	床面＋2.5 脚部2/3	口 — 高 — 底 —	①1㎜前後の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	筒外面ヘラナデ、内面下半は3段の輪積痕、上半は棒状工具を用いた縦方向の整形。
92-37 40	土師器 高坏	床面＋2 脚部4/5	口 — 高 — 底 —	①1㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③浅黄橙色	脚内面ナデ、外面全面にわたり丁寧なヘラ磨き。
92-38 40	土師器 高坏	床面＋5 図示部分 ほぼ完形	口 — 高 — 底 —	①1㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色　にぶい褐色	筒部外面ヘラナデ、下端部細い棒状工具で数多くのナデ。筒部内面縦方向のナデ。下端部内面刷毛目。
92-39 40	土師器 高坏	床面＋2 筒部完形 脚下1/3	口 — 高 — 底 —	①1㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	筒内面ナデ、脚下端内面に刷毛目。 脚外面ナデでヘラ磨きなし。 坏底面部分をもぎ取るような状態で割れている。
92-40	土師器 高坏	床面＋2 上半4/5 下半1/4	口 — 高 — 底 —	①1㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	脚外面ヘラナデ、内面は棒状工具等を用いたナデ整形。やや全体に雑な整形である。
92-41 40	土師器 高坏	14Q・R-5 図示部分 1/2	口 — 高 — 底 —	①1㎜以下の砂粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③外面橙色　内面にぶい橙色	筒部外面ヘラ磨き、内面上端しぼり目。 上部指等による縦方向のナデ。
92-42	土師器 高坏	床面＋1.5 図示部1/2	口 — 高 — 底 12.0	①密、1㎜以下の赤色粒と白色粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③橙色	表面ヘラ磨き。 高坏の脚部下端の部分と思われる。
92-43 40	土師器 高坏	床面＋2 図示部分 3/4	口 — 高 — 底 —	①1㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	脚内面上段しぼり目、下端輪積痕。 脚外面ヘラナデにより器表面密。
92-44 40	土師器 支脚	床直 図示部分 1/2	口 — 高 — 底 —	①密、1㎜前後の砂粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	天井部分は平で器表面密、筒部外面ヘラナデ。 内面指等による縦方向のナデ。表面塗彩され赤色高坏の脚部としては不自然である。用途不明。
93-45 41	土師器 坩	張出西半 口1/5 胴～ 底部完形	口 8.0 高 8.8 底 —	①1㎜以下の砂粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、胴下部ヘラナデ。 砂粒の移動は少なく、全体的に器表面密。
93-46 41	土師器 坩	床面＋9.5 口縁2/3 底部完形	口 — 高 6.1 底 —	①1㎜以下の砂粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	内側底部中央に放射状の凹上の指頭圧痕。底部周辺ヘラ削り、他ナデにより器表面密。 全体に少し歪んでいる。
93-47 41	土師器 坩	床直 胴～底部 ほぼ完形	口 — 高 — 底 4.2	①1㎜以下の砂粒を多く、白色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	外面全面ナデ。底面もナデ。ヘラを用いた整形なし。
93-48 41	土師器 坩	床面＋5 完形	口 9.9 高 10.2 底 —	①多くの輝石を含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ、口縁上部に輪積痕。 胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動は少ない。
93-49 41	土師器 坩	床直 張出東半 口～胴3/4	口 11.4 高 11.2 底 3.6	①1㎜以下の砂粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	口縁部内外面放射状ヘラ磨き、肩部もヘラ磨きであるがヘラの単位不明。胴部外面下半ナデ、一部ヘラナデ。
93-50 41	土師器 坩	床面＋6.5 口1/3 他完形	口 — 高 7.3 底 3.2	①1㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラナデ、頸部が狭く口縁が大きく外傾。口縁部内面刷毛後ヘラ磨き、外面縦方向刷毛目。肩部ヘラ磨き。胴下部外面ヘラナデで砂粒少し移動。
93-51 41	土師器 坩	床面＋3 口縁1/3 肩部1/5	口 11.4 高 — 底 —	①密、0.5㎜以下の砂粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい褐色	頸部が狭く口縁が大きく外傾。体部外面の一部に横ナデ。口縁部外面縦方向ヘラ磨き。内面ナデにて器表面密。
93-52 41	土師器 坩	床面＋4 胴部1/2 底部完形	口 — 高 (6.5) 底 3.0	①1㎜前後の白色粒を多量に含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	胴部内側上半にしぼり目状の痕跡。肩部ナデ。 胴部外側下半ヘラナデ。底面は平底で、中央部でやや凹状を呈する。
93-53 41	土師器 甕	床面＋10 口縁欠 胴 ～底部完	口 — 高 (7.1) 底 3.6	①1㎜以下の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	肩部ヘラ磨き、ヘラの単位不明瞭。胴部下半ヘラナデ。器表面ややあれているが、砂粒の移動は少ない黒班全くなし。
93-54 41	土師器 坩	床面＋6 口縁2/5 肩部1/10	口 10.4 高 — 底 —	①1㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③赤褐色	口縁内外面～肩部ヘラ磨き。肩部内側ナデ。 黒班なく赤の強い丁寧な作りの坩である。

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
93-55 41	土師器 直口壺	床面＋３ 図示部分 ほぼ完形	口 — 高 — 底 4.1	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③上半灰黄下半黒褐色　断面灰色	底面ナデ中央が凹状となる。胴部下半ナデ、上半ヘラ磨き。胴部内面に輪積痕が残る。
93-56	土師器 直口壺	床面＋1.5 口～胴1/4 底ほぼ完	口 — 高 — 底 6.6	①0.5㎜前後の白色粒を含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面灰黄褐色 内面黒色　肩部明赤褐色	底部外面ナデ。体部外面ナデ、内面刷毛目。肩部内側にしぼり目、内面に輪積痕あり。 ２つの破片を図上で復元実測。
93-57 41	土師器 直口壺	床面＋4.5 口縁9/10 胴部上1/2	口 13.4 高 — 底 —	①密、0.5㎜以下の砂粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③外面明赤褐色　内面にぶい黄橙色	胴部～口縁部ナデにより器表面密にし、ヘラ磨き、胴部内面ヘラナデ、器表面は密である。
93-58 41	土師器 直口壺	床面＋4.5 口縁1/3 胴下完形	口 (7.4) 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい褐色一部黒色	底部外面ヘラ削り。体部外面指等によるナデ。体部内面～底部内面ヘラ削り。 出土例の少ない器種である。
93-59	土師器 埦	床面＋３ 1/3	口 — 高 — 底 (7.0)	①１㎜前後の白色粒を多量に含む。②酸化焔 硬質 ③赤褐色	器表面全面ナデ、ヘラによる整形痕は全くなし。内面に棒状工具による３本の沈線あり。
93-60	土師器 埦	床面＋２ 1/3	口(12.0) 高 — 底 —	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③赤褐色	体部外面横方向ヘラ削り。口縁部外面にヘラの工具痕多く残る。内面ナデにて器表面密。
93-61 39	土師器 埦	床直 1/3	口 16.1 高 (6.2) 底 —	①１㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面にぶい黄橙色　内面浅黄橙色	内外面ともナデにより、器表面密。口縁部は折り返してある。刷毛やヘラ削り等は全く認められない。
93-62	土師器 坩	張出西半 口縁1/3 体部1/8	口 7.2 高 — 底 —	①１㎜前後の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③赤褐色	口縁部横ナデ。体部内面ナデ、外面ヘラ削り。 小破片を推定、図上復元したため、特に体部不確実。
94-63 41	土師器 埦	床面＋４ 口縁～胴 上部1/2	口(11.8) 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色	茎部外面刷毛目。内外面ナデにて器表面密。 全く黒班が認められない。
94-64	土師器 埦	14F-3･4 図示部分 1/3	口(11.8) 高 — 底 —	①密、0.5㎜前後の白色粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面下半の表面があれている。他器表面ナデにて器表面密。
94-65 41	土師器 埦	床面＋17 口小破片 胴部1/2	口(12.6) 高 — 底 —	①密、１㎜以下の白色粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色　赤褐色	体部外面ナデ。口縁部と頸部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 体部外面の整形はやや雑である。
94-66 41	土師器 埦	床直 口縁1/10 体部	口(10.0) 高 — 底 —	①密、１㎜以下の白色粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③断面にぶい黄橙色　表面にぶい赤褐色	体部外面下半ナデ。上半もナデにて器表面密。内面ナデにて器表面密であるが砂粒が目だつ。 赤を強く意識させる鉢である。
94-67 41	土師器 小型甕	14F･G-2 図示部1/4	口(10.0) 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③断面黒色　表面にぶい橙色	肩部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。 口唇端部を鋭利に仕上げている。
94-68	土師器 小型甕	13F-５ 14A-５ 小破片	口(11.8) 高 — 底 —	①１㎜前後の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色　黄橙色　黄灰色	体部～口縁部外面ナデにて器表面密。内面磨かれて器表面密。磨きの単位不明。
94-69 41	土師器 小型甕	床直 口縁4/5 体～底3/4	口 13.2 高 10.5 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③断面にぶい橙色　表面黒色	口縁部横ナデ。体部ナデにより器表面密。 底部外面ヘラナデ。砂粒の移動少ない。 表面黒色であり、煮沸用として使用されている？
94-70 42	土師器 小型甕	14D･E-６ 図示部分 1/5	口(15.0) 高 — 底 —	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面灰褐色　内面黒褐色	胴部外面細い棒状工具を用いたナデ？その部分が浅い凹状になっている。ヘラ磨きとは違う。内面刷毛に似た整形痕。
94-71 41	土師器 小型甕	床面＋15 口縁1/4 胴部1/5	口(12.0) 高 — 底 —	①１㎜以下の白色粒を多量に含む ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	口縁部外側斜方向、内側横方向刷毛目。 胴部外面縦方向刷毛目、内側ナデにより器表面密。 全体に雑な作りである。
94-72 41	土師器 壺	床面＋６ 口縁1/3	口(10.7) 高 — 底 5.0	①１～２㎜の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③赤色一部黒色	底部外面～胴部外面～口縁部内面の全面にわたりヘラ磨きによる光沢を持つ。赤にほぼ統一された壺である。
94-73 41	土師器 甑	床面＋３ 口縁2/3	口 21.0 高 11.7 底 6.6	①１㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明赤褐色	底部～胴部外面下半ナデ、胴部外面刷毛目、胴部内面全体刷毛目。口縁部外面棒状工具による圧痕あり。 胴部下端と底部との境部分が摩耗している。
94-74 41	土師器 小型甑	床面＋4.5 胴下半1/2 底部2/3	口 — 高 — 底 6.5	①１㎜以下の白色粒を多量に含む ②酸化焔 硬質 ③黒褐色	底部中央の穿孔は、製作段階であり、外側に器肉が盛り上がっている。内側底部中央の穿孔部周辺ナデで器肉が薄い。

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
94-75	土師器 甕	床面＋4 小破片	口(10.6) 高　— 底　—	①1㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③明褐灰色	肩部に刷毛目。口縁部横ナデ。胴部内面ヘラ等を用いた横ナデ。
94-76	土師器 壺	床面＋2 図示部分 1/3	口 16.0 高　— 底　—	①1㎜前後の砂粒を少量、2～3㎜の砂粒を少量含む。 ②酸化焔 硬質　③橙色	肩部ヘラ削り。口縁部外面刷毛目。頸部内側に輪積痕あり。
94-77	土師器 壺	14F-3・4 小破片	口　— 高　— 底　—	①1㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面にぶい橙色　内面褐灰色	口縁部横ナデにより器表面密。
94-78	土師器 甕	床面＋3 小破片	口 15.0 高　— 底　—	①1㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③表面にぶい褐色　断面赤灰色	肩部ヘラ等による弱いナデ。他器表面全体ナデにより密。
94-79	土師器 甕	張出東半 小破片	口(18.0) 高　— 底　—	①1㎜以下の砂粒と赤色粒を多く含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	口縁部が折り返されている。口縁部内外面横ナデ。出土例が少ない
94-80 42	土師器 甕	床面＋9.5 胴部下2/3 底部完形	口　— 高 (4.0) 底　7.4	①1㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい褐色　内面黒色	胴部外面ナデ、一部強いナデにより砂粒の移動あり。底面ヘラナデ。内面ナデにて器表面密。
94-81	土師器 直口壺	床面＋7 小破片	口　— 高　— 底 (6.0)	①1㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③橙色　灰褐色	底部～胴部外面ヘラ削り。内面は全体にわたりヘラ磨きにより器表面密。 非常に丁寧な作りである。
94-82 42	土師器 甕	床面＋3 胴下半1/6 底部完形	口　— 高　— 底　7.3	①1㎜以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面にぶい橙色　内面灰褐色	底部ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。 内外とも器表面密ではない。
94-83 42	土師器 甕	床直 胴下半3/4 底部完形	口　— 高 (7.0) 底　8.8	①1㎜前後の砂粒を多量に含む。 ②酸化焔 硬質 ③灰褐色	内外面ナデにて器表面密。胴部下端ヘラナデ。底部外面ナデにて器表面密。
94-84	土師器 甕	床面＋8 底部2/3	口　— 高　— 底　—	①1㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面黒色　内面にぶい橙色	底部外面ド-ナツ状で中央が凹状となる。胴部外面ナデ。内面ナデにて器表面密。
95-85 42	土師器 甕	床面＋3 口縁3/4 胴部1/3	口(15.4) 高　— 底　—	①1～2㎜の砂粒を多量に、8㎜前後の大きめな小石も少量含む。 ②酸化焔硬質③外橙色内明赤褐色	胴部外面ナデ、底部付近わずかにヘラ削り。内面ナデ、一部に輪積痕が残る。胴下部に輪状に煤付着。 口縁端部が一部欠損後も甕として使用している。
95-86 42	土師器 甕	床面＋3 1/8	口(20.4) 高 11.5 底　—	①1㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい黄橙色	胴部内面ヘラ等を用いた削り。砂粒が少し移動してやや器表面あらい。肩部に刷毛目が一部残る。 全体にやや雑な感じの甕である。
95-87	土師器 甕	13G-19 小破片	口(18.0) 高　— 底　—	①密、0.5㎜以下の白色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。頸部外面にわずかに刷毛目が残る。
95-88 42	土師器 甕	床面＋3.5 上半1/4 下半2/3	口　— 高　— 底　—	①1㎜前後の砂粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焔 硬質 ③黒褐灰色	胴部外面ナデで器表面密。内面横方向のナデ。 内外とも吸炭により黒褐色を呈している。
95-89 42	土師器 甕	床面＋4 口縁1/10 胴上1/4	口(18.6) 高(16.0) 底　—	①1～3㎜の白色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③にぶい褐色	胴部内面に明瞭な輪積痕を多く残す。 外面はナデにより器表面密。
95-90	土師器 甕	床直 図示部分 1/4	口　— 高　— 底 (6.5)	①1㎜以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③褐色　底部にぶい橙色	底部外面ヘラ削り。胴部外面刷毛目、上部ナデ、胴部内面全面にわたり刷毛目。刷毛の先端は角でなく丸である。
95-91 42	土師器 壺	床面＋4 1/3	口　— 高　— 底　—	①1㎜前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面にぶい褐色　内面にぶい橙色	胴部外面ナデにより器表面密。内面ナデ内側器表面の多くが剝落している。胴部下半に輪積痕あり。
95-92 42	土師器 甕	床面＋7 口縁1/4 他1/8	口 22.8 高　— 底　—	①1㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③褐色	胴部外面下半ヘラ磨き、上半ヘラナデ。口縁部ナデ、内面ナデ。他に出土例なし。 小破片の図上復元のために不確定要素が多い。

挿図番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
96-93 43	自然石	完形	かんらん岩	9.3　10.0　2.0　240	加工痕なし。石材として遺跡内に持ち込まれたものとおもわれる。	床面＋3
96-94 43	石	完形	珪質変質岩	4.0　3.8　1.6　32	自然石。	床面＋9

第11節　遺構外（PL.37・43）



第97図　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

挿図番号 PL	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法　量 (cm)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
97-1 37	須恵器 鉢	周辺の表採　図示部分完形	口　— 高　— 底　8.9	①密、砂粒ほとんど確認できない。 ②酸化焔 硬質 ③灰色	体部下端ヘラ削り、他内外面ナデ。底部中央の穴は最近二次使用時において穿けられている。 出土須恵器の上半部を欠いて、植木鉢として使用か。
97-2	土師器 鉢	8R-1 図示部分完形	口　— 高　— 底　6.2	①１㎜以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔 硬質 ③外面橙色　内面黒色	底部外面～体部外面ナデ。底部外面中央部がやや凹状を呈する。内面ヘラ状工具を用いたナデ。

挿図番号 PL	器　種	残存状況	石　材	計測値(cm・g) 全長　幅　厚さ　重量	特　　徴	出土状況
97-3 43	打製石斧	2/3	灰色安山岩	(8.8)　(5.2)　(1.5)　90	先端欠損。	11T-5 グリッド
97-4 43	砥石	図示部分完形	砥沢石	(9.0)　5.8　1.8　210	表裏の２面を砥石として使用その部分が摩耗して上部に欠損の痕跡あり。	北調査区１住西

第４章　調査成果の整理とまとめ

第１節　調査された遺構と遺物について

本遺跡で調査された遺構と遺物については、第３章で報告した。遺構の配列は遺構番号順とし、時期別とはしなかった。また県教育委員会の調査した北調査区は別にまとめて報告した。ここではそれらを以下の表にまとめた。

出土遺物については、掲載遺物の数と種類の他に掲載出来ない小さな破片がどのくらい出土しているかについても、資料を作成しその結果を数字で示した。この遺跡からは、破片を含めて7315個の遺物が出土しており、実測が可能で掲載できた遺物は378個であった。

各遺構がどのページに掲載されているかをわかり易く知ることができるように、ページ数を記載した。

遺構番号	時　期	グリッド	規　模	面積（㎡）	主軸方位	非掲載遺物破片数	掲載遺物数	頁
１号住居	６Ｃ後半	14Ｄ・Ｅ－１	4.1×3.7	14.76	Ｎ－10°－Ｗ	32	25	11
２号住居	６Ｃ前半	14Ｃ－１	3.6×4.0	14.12	Ｎ－18°－Ｗ	65	19	14
３号住居	７Ｃ前半	14Ｂ・Ｃ－２・３	4.4×3.9	16.83	Ｎ－67°－Ｅ	190	20	16
４号住居	７Ｃ前半	13Ｃ－19	4.9×4.8	不明	Ｎ－30°－Ｗ	96	16	20
５号住居	８Ｃ前半	13Ｃ－６	3.7×3.9	13.57	Ｎ－６°－Ｅ	432	15	23
６号住居	９Ｃ前半	10Ｂ－７	4.3×3.0	12.16	Ｎ－９°－Ｅ	1	5	26
７号住居	７Ｃ前半	10Ｃ－７	5.4×4.9	23.70	Ｎ－27°－Ｗ	150	22	28
８号住居	８Ｃ後半	10Ｄ・Ｅ－10	2.8×不明	不明	Ｎ－20°－Ｅ	18	4	33
９号住居	８Ｃ後半	13Ａ－９	2.02×2.75	5.43	Ｎ－５°－Ｗ	100	3	34
10号住居	９Ｃ後半	10Ｔ－９・10	3.3×3.9	12.10	Ｎ－３°－Ｗ	394	13	35
11号住居	５Ｃ前半	14Ａ－３・４	3.16×2.7	7.92	Ｎ－16°－Ｗ	0	1	38
12号住居	７Ｃ前半	11Ｔ－２・３	5.95×6.05	28.22	Ｎ－26°－Ｗ	31	14	39
13号住居	５Ｃ前半	11Ｓ－７・８	2.2×3.7	7.42	Ｎ－23°－Ｅ	33	7	42
14号住居	５Ｃ前半	11Ｏ－５	3.2×3.8	不明	Ｎ－38°－Ｅ	90	10	44
15号住居	５Ｃ前半	11Ｓ・Ｔ－３	3.8×2.9	10.98	Ｎ－18°－Ｗ	41	3	47
16号住居	７Ｃ前半	11Ｔ－２・３	2.7×3.4	7.54	Ｎ－22°－Ｗ	36	9	48
北１号住居	９Ｃ後半	11Ｃ・Ｄ－１	3.8×不明	不明	Ｎ－24°－Ｅ	17	3	88
北３号住居	６Ｃ後半	11Ａ－１	4.0×2.9	11.19	Ｎ－17°－Ｗ	12	8	89
北４号住居	６Ｃ後半	７Ｐ－20	3.7×2.75	9.58	Ｎ－10°－Ｗ	0	0	92
北５号住居	６Ｃ後半	７Ｐ－20	3.2×2.75	不明	Ｎ－10°－Ｗ	119	21	92
１号竪穴状遺構	５Ｃ前半	14Ａ・Ｂ－４	2.85×3.12	7.48	Ｎ－18°－Ｅ	2	0	51
２号竪穴状遺構	５Ｃ前半	13Ｅ・Ｆ－19・20	3.5×2.5	7.90	Ｎ－15°－Ｅ	7	0	52
３号竪穴状遺構	不明	11Ｓ－２・３	3.0×不明	不明	Ｎ－13°－Ｅ	0	1	53

★１～51土坑は47基調査され、内容に関しては79Ｐに一覧表にしてある。４基は欠番である。
★北１～６号土坑は６基調査された。内容に関しては100Ｐに一覧表にしてある。

遺構番号	時　期	非掲載遺物破片数	掲載遺物数	頁
１号溝	13～14Ｃ	2464	16	55
２号溝		16	0	58
３号溝		—	—	58
４号溝		—	—	60
５号溝		83	4	60
６号溝		—	—	61
７号溝	平安以前	—	—	55
８号溝	平安以前	—	—	55
９号溝	古墳中期	374	25	63
10号溝	古墳中期以前	—	—	64
11号溝		—	—	69
北１号溝		0	0	97
北２号溝	古代	0	4	97
埋没谷	古代	49	1	81

遺構番号	時　期	非掲載遺物破片数	掲載遺物数	頁
谷１号溝	古代	—	—	80
谷２号溝	古代	—	—	80
谷３号溝	古代	—	—	80
１号井戸	古墳中期	3	2	70
２号井戸	古代	—	—	71
３号井戸	古代	—	—	71
居館の堀	古墳中期	1226	94	102
遺構外		0	4	128
南土坑		14	3	72
北土坑		55	6	98
支用１号		1	0	83
北グリッド		526	0	—
北・表採		228	0	—

非掲載遺物破片総数　6937個　掲載遺物総数　378個　荒砥荒子遺跡出土遺物総数　7315個

第2節　荒砥地域における古墳時代の土器について

荒砥荒子遺跡の居館を理解するためには、居館の造られた時期を明らかにし、その時期前後の地域の歴史を知ることが必要となる。

遺跡の時期を決めるためには、そこから出土している土器の年代を知ることが有効な手段となっており、今日まで多くの研究成果が明らかにされている。註1ここではそれらの成果をもとに、遺跡の立地する荒砥地区という一定の限定された地域での古墳時代の土器編年の作成を試みた。その基準をもとに荒砥荒子遺跡とその周辺の遺跡の時期を想定し、その成果をもとに居館出現の歴史的意味について考えてみたい。ここでは土器の段階設定と各段階の特色についてごく簡単に述べる。

時期は古墳時代全般とし、全体を9段階に区分した。おおよそ1段階前半を3世紀後半、後半を4世紀初頭・2段階を4世紀前半・3段階を4世紀後半とし、以後1段階に約50年前後の時期幅を想定し、最後の9段階を7世紀後半と考えている。

弥生時代と古墳時代の区別は難しい問題であるが、土師器の小型器台の出現段階をもって便宜的に古墳時代とした。弥生系土器とは、1段階後半以降に弥生土器の強い影響下で造られ続けたと思われる土器全般を意味する。

各段階の特徴は以下のようである。

1段階

樽式、吉ヶ谷・赤井戸式土器を主とする器種構成の中に、古墳時代に定義される複数の外来系の器種が登場してくる。さらに樽式、吉ヶ谷・赤井戸式自身も複雑に変化してくる段階である。

また、この段階にはその後に定着しない一過性の土器を用いた遺跡も見られる註2。

前半　樽式、吉ヶ谷・赤井戸式を主とする土器群の中に、小型器台又は小型高坏を含む。樽式、吉ヶ谷・赤井戸式には櫛描紋や縄紋が多く施紋されている。甕の一部は装飾が簡略化され、さらに無紋化したものが登場してくる。煮沸用の甕は樽式、吉ヶ谷・赤井戸式からの甕が主である。

後半　古墳時代の土師器を主とする土器群の中に、櫛描紋や縄紋がほとんど消えて無紋化した弥生系土器の大小の甕や高坏がある。そのため多くの新旧の器種が入り乱れて複雑な土器群となっている。この段階に登場してくる大小の平底甕が、以後古墳時代中期以降まで変化しながら継続する。また5段階の5世紀後半に多い内斜口縁の埦に継続すると思われる内斜口縁の埦が、この段階から出現する。さらに大小の単口縁台付甕が使われてくるようになる。単口縁台付甕は、前半から現れているが、この段階に多いようである。小型器台は多いが、小型高坏はほとんど出土していない。さらに赤井戸系と思われる口縁部に輪積痕を持つ小型甕が使われている。S字甕はほとんど使われていない。図に掲載した東海系と思われるS字甕と高坏・器台・壺・台付甕等の良好なセットで出土している鶴谷遺跡96号住居の例は、この地区には極めて出土例の少ない住居例である。

2段階

弥生系土器がさらに減少し、新たな土器として小型丸底鉢が登場してくる。煮沸形態のS字甕はほとんど採用されていなく、前段階と同様に、単口縁の台付甕と、平底甕及び口縁部に段を持つ弥生系の甕が使われている。また小さな高坏・口縁部に段を持つ甕等はほとんどこの段階で消える。口縁部が長く丁寧にヘラ磨きされている直口壺はこの段階から登場してくる。

3段階

弥生系土器は甕に一部残るが、ほとんど消えて土師器が主体となる。この段階からS字甕が多く使われるようになる註3。このS字状口縁台付甕は全体が長胴化し刷毛目も粗く、部分的にヘラ削りも見られるようになる。高坏の出土量は極めて少なくなる。長脚化した高坏はこの段階で現れてくるが数は極端に少ない註4。前段階まで多く使われていた単口縁台付甕・単口縁平底甕も引き続き使われている。

4段階

祭祀的な要素の強い器台と小型丸底鉢が消え、小

さな坩が登場してくる。これまで少なかった坏類が数と種類を増加させている。個々人に盛り分けて使用する取り皿とまでは増加していないが、それに近い使われ方が想定される。新たに出現する器種として、小さな坩・皿のように浅く短い口縁部が直立する直立口縁の坏（この坏は内面に放射状のヘラ磨きを持つ物が多い）・内斜口縁状の高坏・土師器の甑・有段口縁の壺・甕とほぼ大きさが同じ大きな甑、さらに須恵器がわずかながら出土する。図示した須恵器高坏はTK-216段階である。土師器甕の整形はヘラ削りや刷毛であるが、ナデ等により表面が密で工具痕を残さない製品が多いのもこの段階の特色である。この段階の中で炉から竈へと次第に変化してゆく。このように新しい食文化が生活の中に導入されてきた段階である。

前半と後半に分けてみたが、高坏と甑以外に土器群や器形の変化を明瞭に区分することは出来なかった[註5]。この段階が荒砥荒子遺跡や丸山遺跡が造られた段階であると考えている。

５段階

坏類の出土数が増加しこの段階の後半頃から、須恵器坏を模倣した土師器の坏が登場してくる。以後８段階までこの模倣坏が坏類の基本となる。須恵器の坏や高坏が出土するようになり、特に荒砥北三木堂遺跡では多く出土している。

前半　荒砥北三木堂22号住から須恵器とともに出土している模倣坏は、ほぼ忠実に須恵器坏を模倣している。４段階に出現した浅い直立口縁の坏は丸底化し、口縁部には模倣坏に似た段を持つ。同じ住居から出土する模倣坏より口径が大きく、造りも異なるため須恵器坏の模倣ではなく、４段階に出現した皿型坏が変化したものと思われる。

半球形の坏が登場する。この段階では底部が厚く、平底であるが次第に丸底へと変化する。１段階後半から登場した内斜口縁の坏は、この段階でも底部がやや厚いが次第に丸底になってゆく。須恵器の坏蓋と坏身はTK-208段階である。

後半　模倣坏が次第に多く出土するようになる。この段階で従来呼称されてきた内斜口縁の坏が登場する。これ以前の内斜口縁の埦と異なり、底面の器肉が薄く、丸底で焼成が硬質になっている。内面に放射状のヘラ磨きを持つものが多い。甕と甑はしだいに長胴化してくる。須恵器の高坏と坏身はTK—23段階である。

６段階　前半　模倣坏が坏の中で主体を占めている。内斜口縁の坏と半球状の坏も残るが、数は次第に少なくなって行く。脚部の短い高坏があるが、出土量は少ない。甕は長胴化し、胴部中央に最大径を持つ。中型の大きさの甕も使われている。

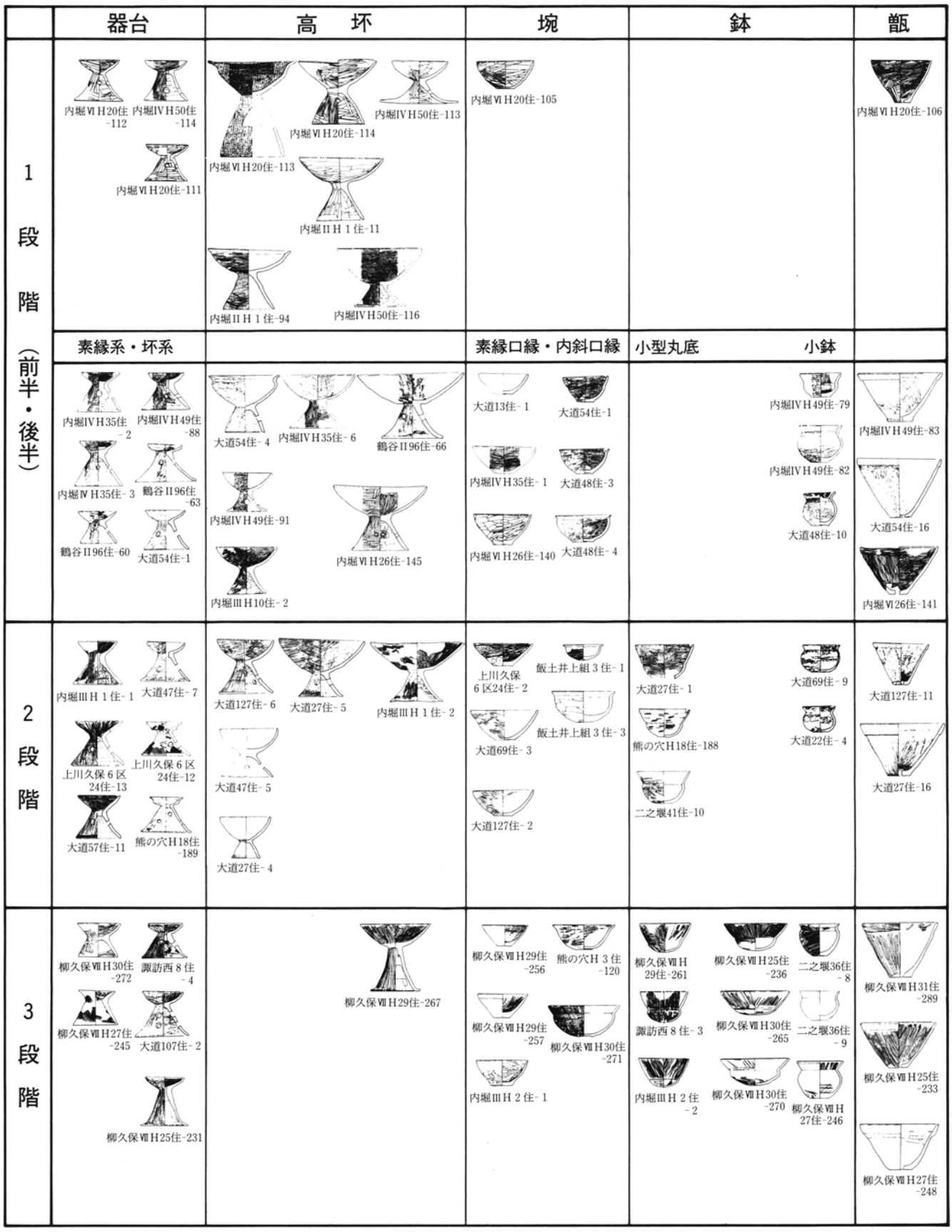
後半　模倣坏が坏の中で主体を占めている。内斜口縁の坏と半球状の坏はほとんど姿を消している。高坏は口縁部が外側に大きく開き、次第に長脚化してゆく。出土量は少ない。甕は長胴化し、胴部下半に最大径を持つ。

７段階　前半　模倣坏が坏の中で主体を占めている。その中に従来の坏身を模倣した坏の他に、坏蓋を模倣した坏が登場してくる。さらに口縁部に段を持つ有段口縁の坏が加わり、坏の種類が増加している。高坏はさらに口縁部が大きく外反し、浅くなってくる。造りが丁寧な、蓋を受けるような小型壺もこの段階に登場している。甕は長胴化し、胴部上半に最大径を持つ。中型の大きさの甕も使われている。

後半　模倣坏が浅くなる。甕は器肉がしだいに薄くなり長胴化する。大型甑の口縁部が次第に短くなってくる。

８段階　前半　模倣坏が浅くなり、しかも小型化してくる。有段口縁の坏も小型化してくる。大きな鉢が登場してきて、９段階まで使われ続ける。小型甕は全体に浅くなり、底部が丸底化する。壺は小型化してくる。甕はさらに長胴化し、この段階後半で長胴化は終了する。胴部上半に最大径を持つ。中型の大きさの甕も使われている。

後半　模倣坏がさらに浅くなる。長脚化してきた高坏は短脚となり、坏部はさらに浅くなりほとんど出土しなくなる。須恵器坏は前代の坏Hがほとんど出土しなくなり、坏Gにとって変わる。いずれの坏

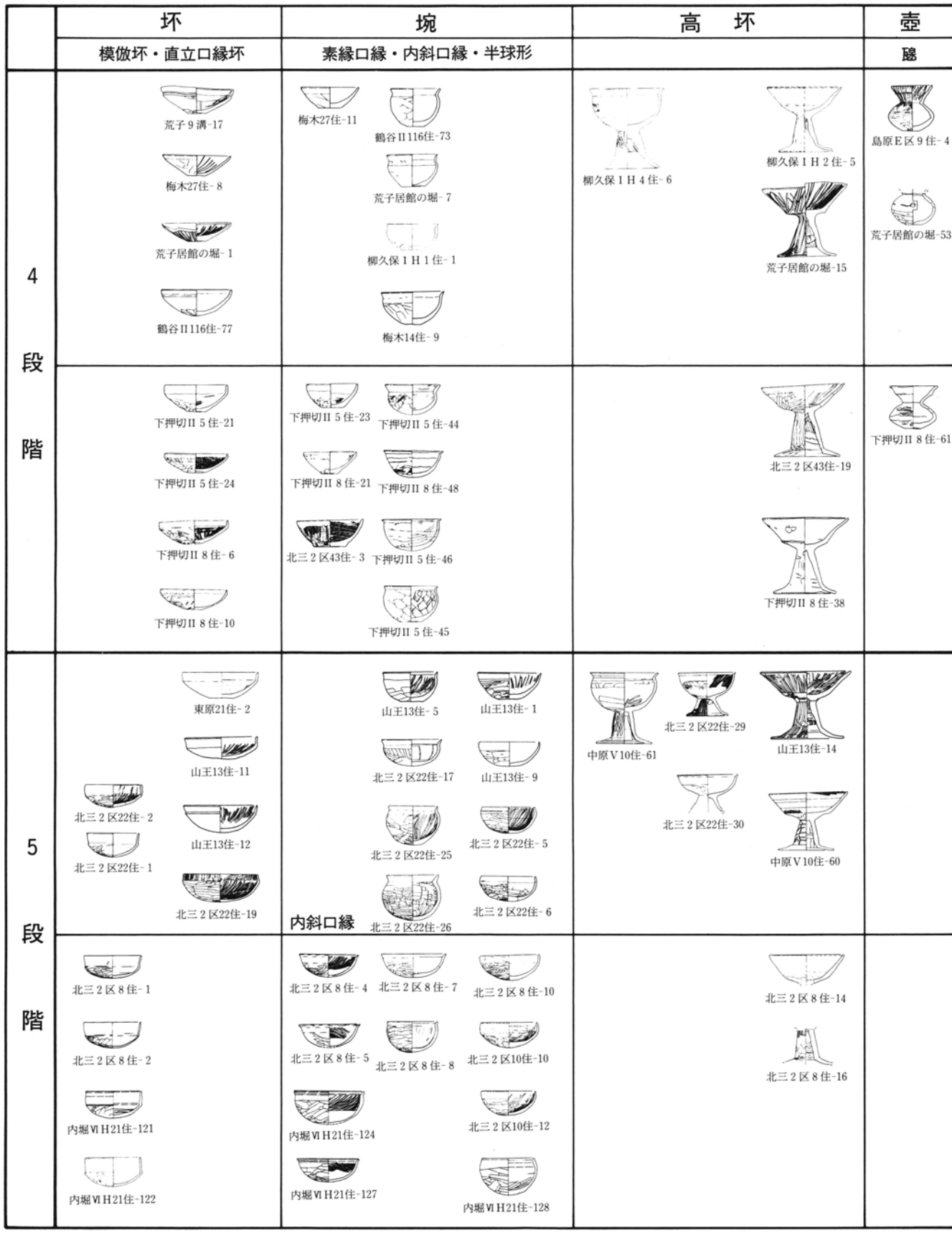


第98図　荒砥地域における古墳時代の土器群（１）

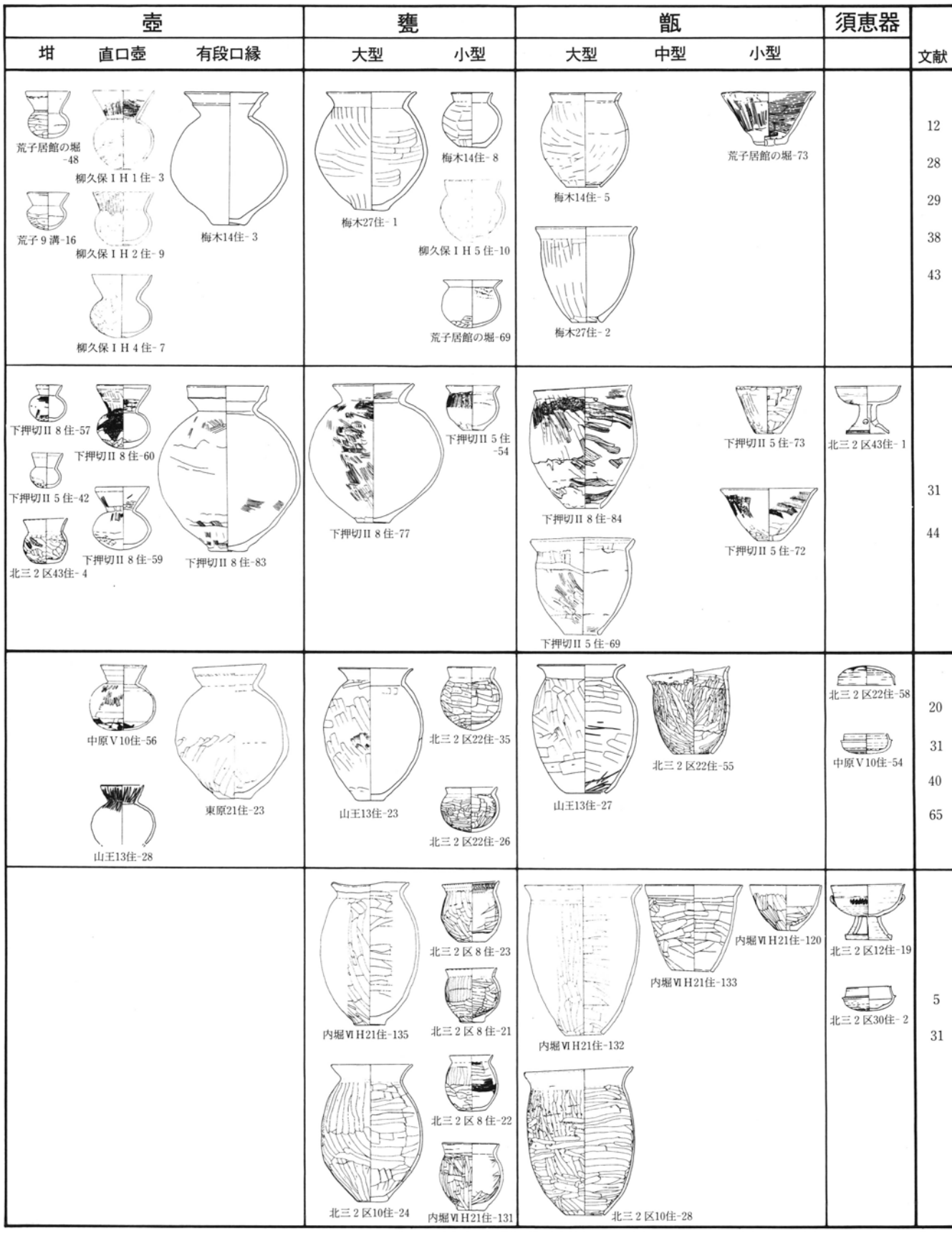
第99図　荒砥地域における古墳時代の土器群（２）

大道 →横俵遺跡群II（大道）　上川久保→荒砥上川久保遺跡
熊の穴→横俵遺跡群IV（熊の穴）　二之堰 →荒砥二之堰遺跡

文献は151ページに掲載

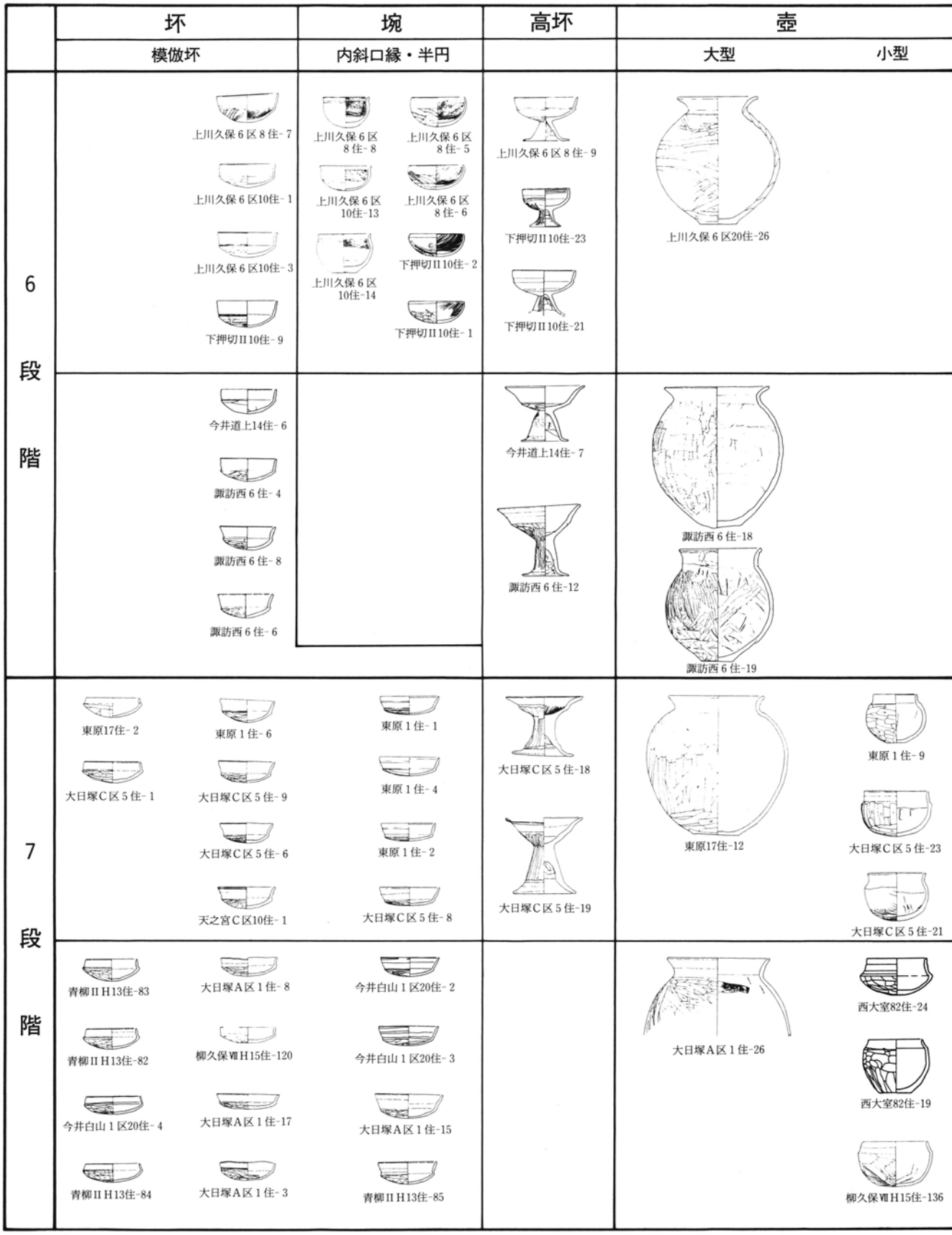


第100図　荒砥地域における古墳時代の土器群（３）

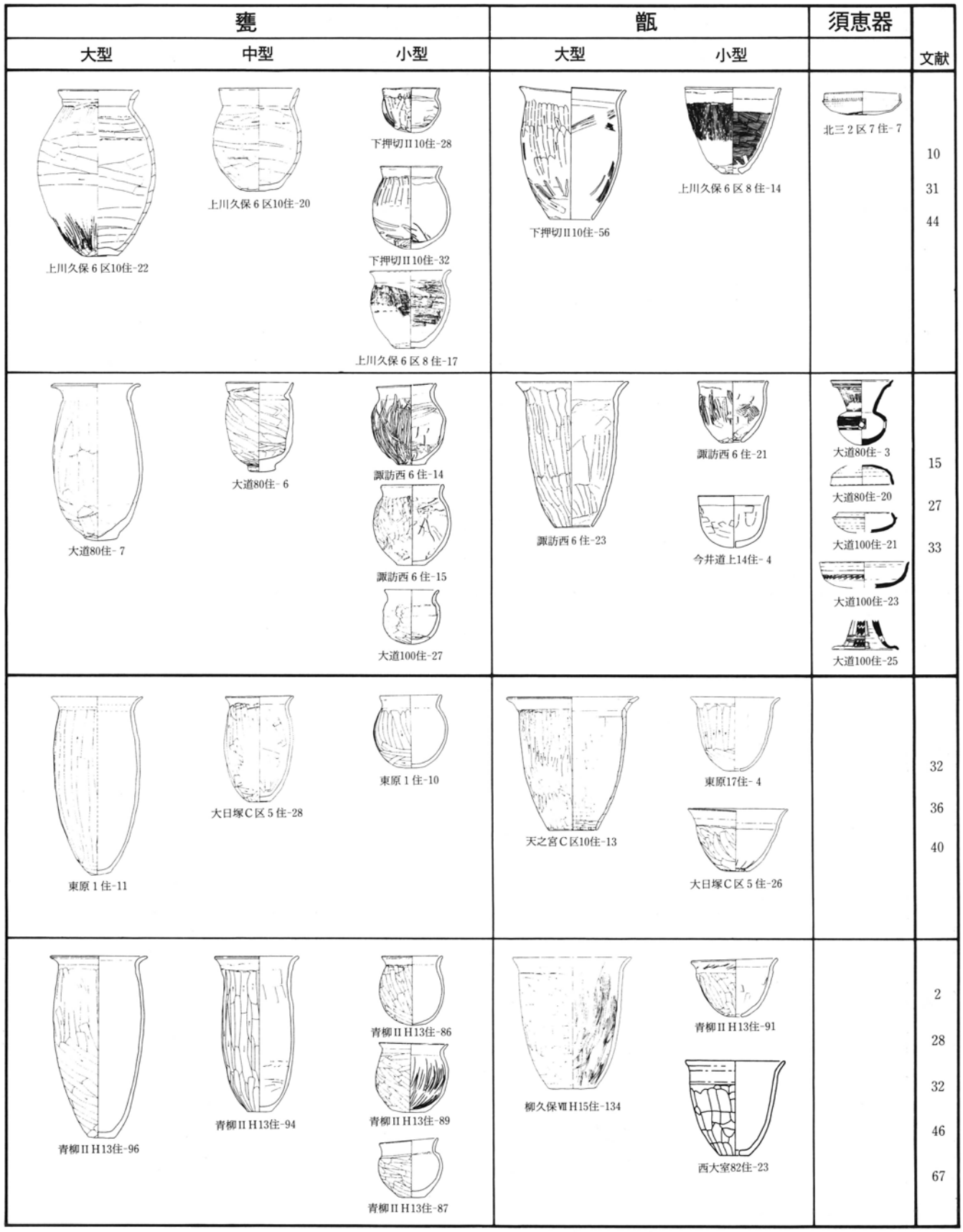


第101図　荒砥地域における古墳時代の土器群（４）

荒子　→荒砥荒子遺跡　　東原→荒砥東原遺跡
下押切II→荒砥下押切II遺跡　　北三→荒砥北三木堂遺跡

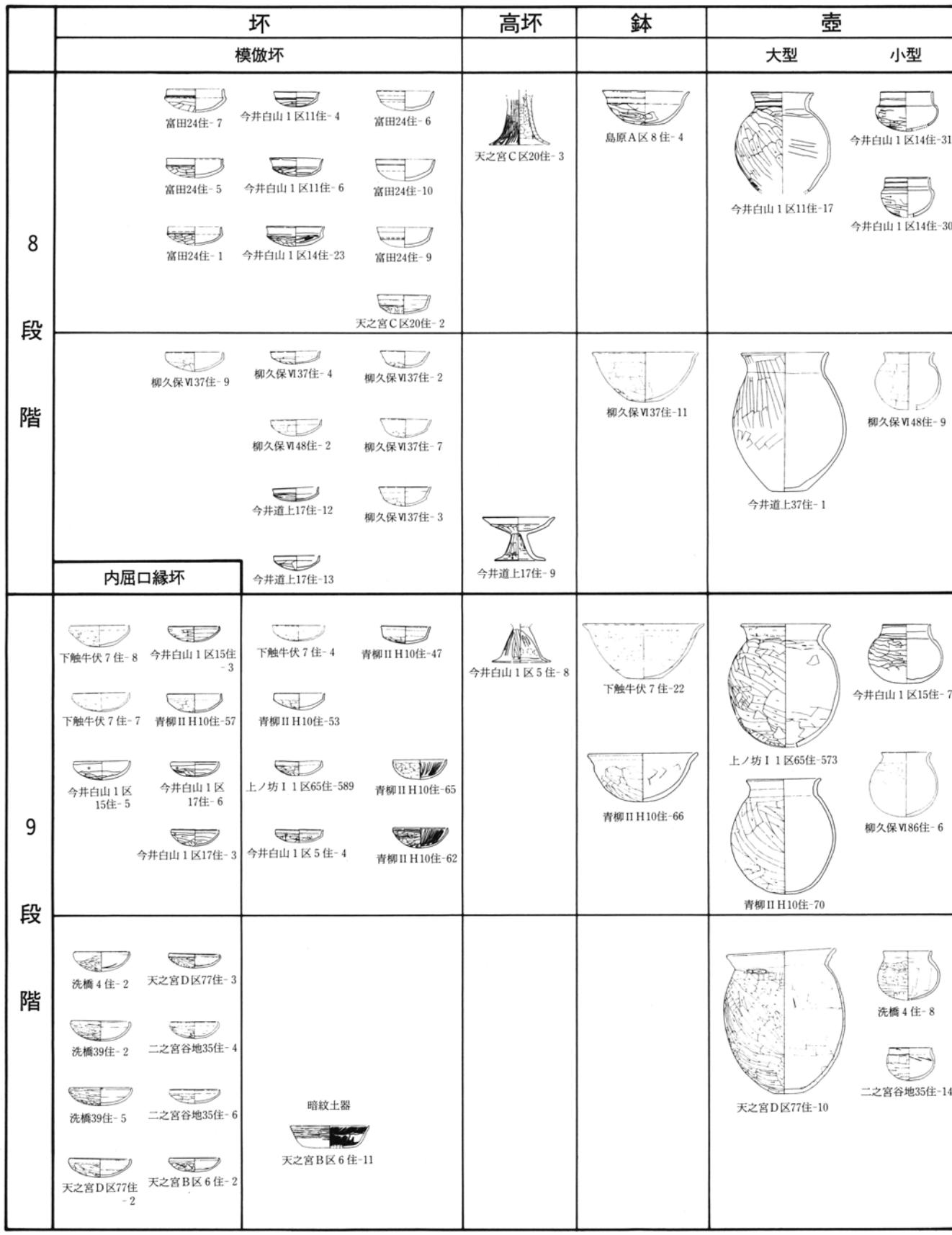


第102図　荒砥地域における古墳時代の土器群（５）

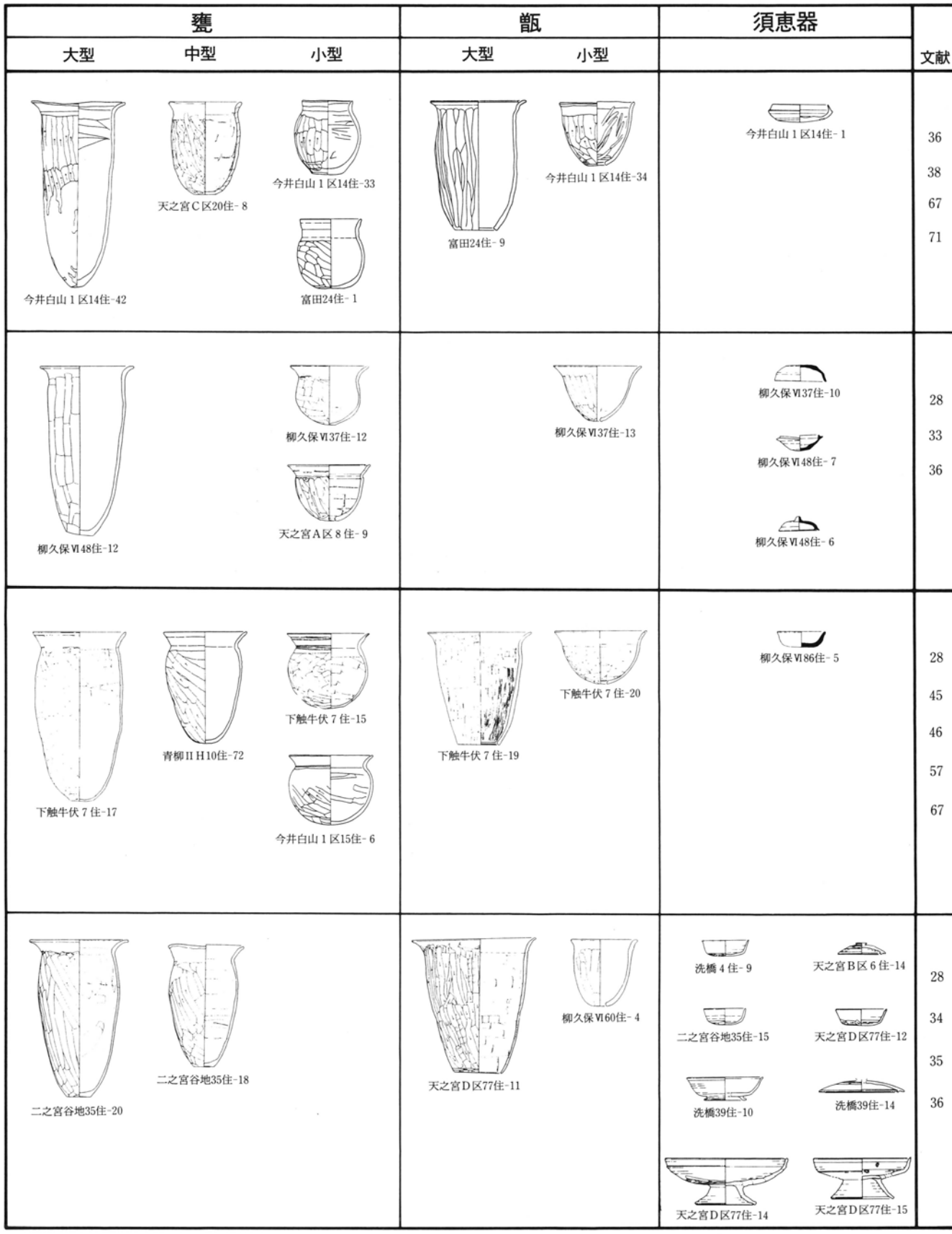


第103図　荒砥地域における古墳時代の土器群（６）

大道　→横俵遺跡群Ⅱ（大道）
下押切Ⅱ→荒砥下押切Ⅱ遺跡
北三　→荒砥北三木堂遺跡Ⅰ
上川久保→荒砥上川久保遺跡
天之宮→荒砥天之宮遺跡
大日塚→荒砥大日塚遺跡
青柳Ⅱ→荒砥青柳Ⅱ遺跡



第104図　荒砥地域における古墳時代の土器群（７）



第105図　荒砥地域における古墳時代の土器群（８）

天之宮→荒砥天之宮遺跡　上ノ坊Ⅰ→荒砥上ノ坊Ⅰ遺跡
島原　→荒砥島原遺跡　洗橋　→荒砥洗橋遺跡
青柳Ⅱ→荒砥青柳Ⅱ遺跡

も口径10cm前後と小さくなっている。

9段階

古墳時代の従来の土器がほぼ終了し、奈良時代につながる土器へと大きく変化する段階である。古墳時代に便宜上区分しているが、土器は奈良時代に連なるものとなっている。土師器の胎土は全体に赤褐色が強くなり、硬質な焼成となっている。

前半　模倣坏が浅くなり、この段階で使われなくなる。口縁部が内屈する大小の坏が登場し模倣坏と交代してゆく。有段口縁の坏はこの段階でほとんど使われなくなる。北島型暗文土器と呼ばれている土器が登場してくるが、出土例は多くない。甕は8段階よりやや短くなり、肩部に最大径を持つ。口縁部が大きく外反し、ヘラ削りは縦方向ではなく、斜め方向となる。

後半　模倣坏が出土しなくなり、内屈する大小の坏が主体となり、畿内産の暗文土器とそれを真似た暗文土器が出土するようになる。前半には少なかった須恵器坏が口径10～18cm前後と種類を増加させ、さらに大きな高坏あるいは高盤と呼ばれている製品も出土するようになる。この段階以降集落の中にしだいに多くの須恵器が持ち込まれるようになる。

本文をまとめるにあたり、佐藤明人　綿貫邦男　相京建史　大木紳一郎　坂口　一　桜岡正信　小島敦子　友廣哲也　春山秀幸　須田貞崇氏に多大なご助言、ご指導をいただいた。記して感謝します。また5世紀における須恵器の年代については、坂口氏の研究を使わせていただいた。

註1

坂口　一　「群馬県における古墳時代中期の土器編年」『研究紀要4』1987
坂口　一　「荒砥北三木堂遺跡出土の土師器と須恵器の編年」『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ』1991
三宅敦気・相京建史　「樽式土器の分類-榛名山東南麓を中心として」第1回三県シンポジウム資料弥生終末期の土器　4世紀の土器　群馬県考古学談話会　1982
若狭　徹　「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』1号　1990　群馬土器見会
小島敦子　「古墳時代初頭の出土土器について」『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』1995　以上（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
友廣哲也　「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳』2号　1991　群馬土器見会
友廣哲也　「北関東の古墳文化の受容」『古代』98号　1997
友廣哲也　「石田川式土器考」『古代』104号　1997
深澤敦仁　「「赤井戸式」土器の行方」『群馬考古学手帳』9号　1999　群馬土器見会

註2

この時期の中には北陸系の土器を多く出土する荒砥上ノ坊遺跡や、南関東系の土器を多く出土する荒砥前原遺跡等が含まれ、また数遺跡では少量ながら東関東系の土器ももたらされている。しかし遺跡数や土器の出土量は少ない。またこれらの土器を伴う遺跡は、一時的で以後長く影響を残していないようである。そのために今回検討した土器群の中にはこれらの遺跡から出土したものは含めていない。

註3

荒砥地区ではS字状口縁台付甕が煮沸具として主体を占めて、一軒の住居から完形品に近い製品が多く出土するといった状況は無い。S字口縁台付甕は荒砥地区においては、最後まで客体であった。このような状況は国道50号南の五目牛清水田遺跡になると状況が変わり、19・20号住居からは、一軒の住居から多くのS字状口縁甕が出土し、煮沸具の主体を占めている。この違いは、これらの古墳時代以前の地域の歴史の違いのほかに、立地にも深く関係していると思われる。荒砥地区では複雑な微高地が主であり、水田耕作に不向きであった。それに対し、五目牛や波志江地区では、広い平地が広がり、水田耕作に適していた。

註4

今のところ筆者が調べた限りでは、この長脚化した高坏の出土例は少なく、荒砥地区では柳久保遺跡群VII 29・31・43号住居で各1個ずつ出土しているだけである。近接した地域として伊勢崎市の下植木壱町田遺跡1区1住で2個、同じく伊勢崎市の三和工業団地Ⅰ遺跡80号住で2個、前橋市の芳賀東部団地Ⅰ遺跡428号住で2個出土しているだけである。このように出土例が少ないために、この高坏の出現をもって段階設定の画期には無理がある。

註5

特に4段階前半の土器群の実態は明らかに出来な

かった。ここに前半と位置づけた土器群は後半に含まれる可能性を否定できない。今後の大きな課題である。

参考文献

『土器がかたる』古墳時代土器研究会　1997
赤塚次郎「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　1990
田中広明『東国土器研究』第4号「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向」東国土器研究会　1995
『下植木壱町田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999
『芳賀東部団地Ⅰ（古墳～平安時代その1）芳賀団地遺跡群第1巻』前橋市教育委員会　1984
桜岡正信「群馬県内出土の暗文土器について」『群馬県史研究』第30号　1989

第3節　荒子・丸山・梅木遺跡の居館について

はじめに
1.居館の立地と構造と規模
2.伴出遺物と噴出火山灰と居館の時期
3.居館と集落と古墳の関係
おわりに

はじめに

荒砥地域の東西南北約8㎞の狭い範囲に、荒砥荒子・丸山・梅木の3つの居館、さらに内容が明らかでないが、笂井八日市遺跡の居館を加えると4基の5世紀代の居館が作られている。このように狭い一定の地域に5世紀代の居館がまとまって作られている地域は、他に類例は少ないであろう。この中で内容や規模が明らかでない笂井八日市遺跡の居館を省いた、3居館の内容を比較検討する。また居館出現以前の古墳時代初頭からそれ以降の古墳時代後期までの荒砥地域の遺跡の動きの変化を詳しく探り、この地域に荒砥荒子遺跡の居館をはじめとした5世紀代の居館が多く作られた意味について考えてみる。

文章中で荒砥荒子遺跡・丸山遺跡・梅木遺跡の居館については、荒子居館・丸山居館・梅木居館と略して記述する。

1. 居館の立地と構造と規模

3居館について、その概要を次の表にまとめた。

（立地）立地に関しては、3基とも川に近接している点が共通している。そのために川が原因と思われる居館の破壊がある。

荒砥荒子遺跡では東に接して、現在江竜川が南北方向にながれている。川の東側は一段高くなっており、川は平地から一段高い地形変換点の境界に添って流れている。その変換点の下段に居館が作られている。おそらくこの川は古代においても付近を南北方向に流れており、その川の氾濫等により、居館の北西部分が深く削り取られ谷を形成したものと思われる。谷の幅は約30m、深さ約1.6mと大きな規模である。

梅木遺跡では東に接して桂川が流れている。この川は江竜川より規模が大きく水量も多い。おそらくこの川の氾濫により、居館の大部分が削り取られたものと思われる。残っていたのは南側の堀と柵列だけであった。削られた居館北側は現在低く水田として利用されている。

丸山遺跡は、大きな荒砥川の右岸に位置する。しかし他の居館と異なり、河川に接してはいない。さらに河川の氾濫原でなく、氾濫原より約10m高いローム台地の上に作られている。たとえ荒砥川が氾濫しても館には影響は無かったであろう。このローム台地は舌状になっており、先端部分に居館が作られていた。周辺を見渡すことが可能な地形であり、この点が他の居館と大きく異なっている。

（構造と規模）3居館とも堀と柵列を持つ。しかし布堀は梅木居館では掘られていなかったようである。

丸山遺跡では内部のほぼ全面にわたり竪穴住居が造られていたようである。中央の21号住居は大型で炉がなく、主屋と考えられている。他に掘立柱建物や祭祀等の遺構は存在しない。

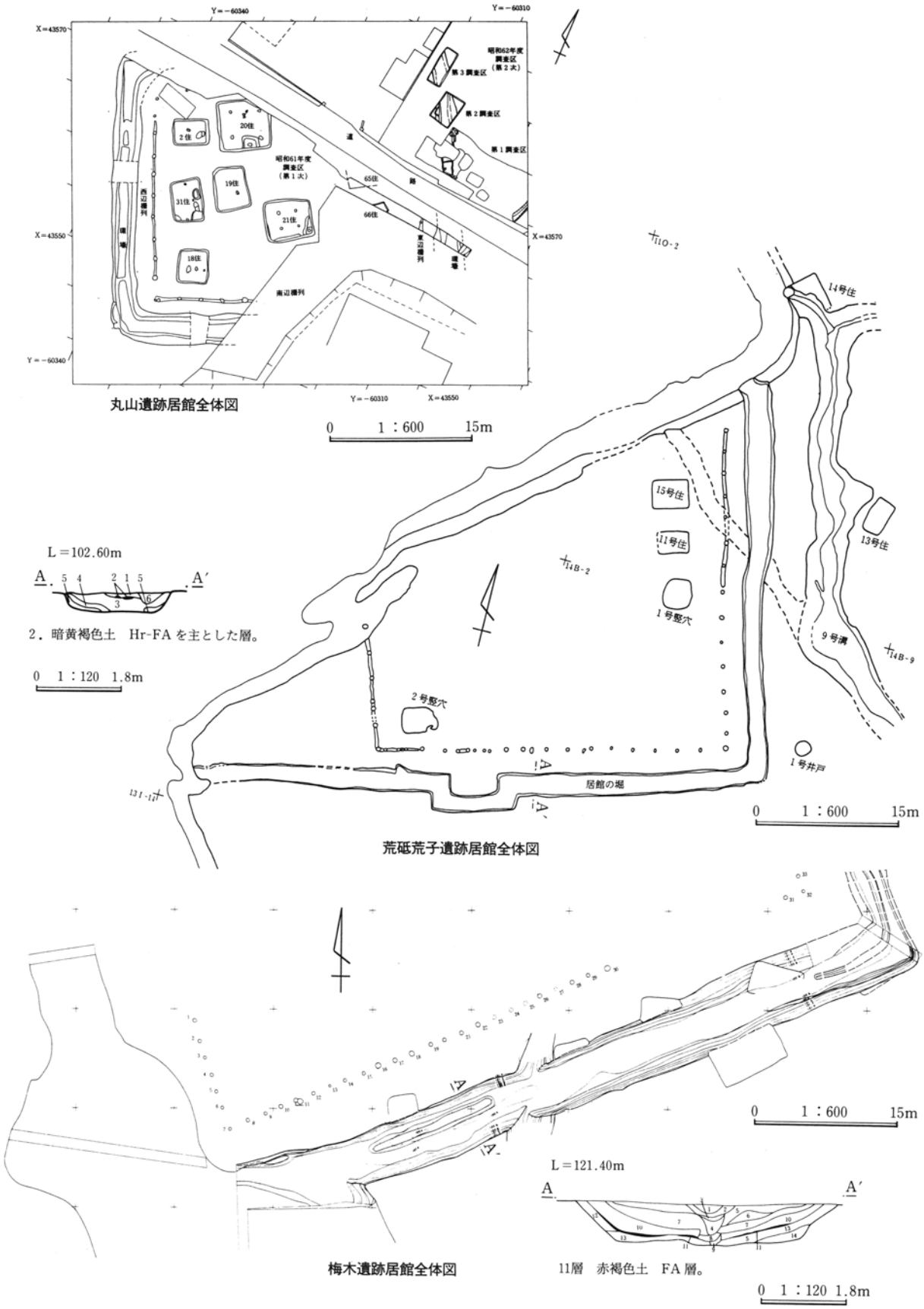
荒砥荒子遺跡では2軒の竪穴住居と、残りが悪いが本来竪穴住居であったと思われる2軒の竪穴状遺構の計4軒が、居館に伴う時期の住居と考えられて

いる。造られている場所は、柵列に添って東側に３軒、南西コーナー部分に１軒である。中央部分に建物を確認することはできなかったが、竪穴住居と掘立柱建物は造られていなかったであろう。

梅木遺跡では居館に近い古墳中期の住居は存在するが、堀により１軒が、また柵列により３軒が掘り込まれており、同時存在の竪穴住居は無いとされている。南側の堀と柵列寄り北の主要部分は全く残っていないために、内部構造は不明である。

荒砥地域における居館の概要一覧表

		荒砥荒子遺跡の居館	丸山遺跡の居館	梅木遺跡の居館
立地	河川 地形 その他	小さな江竜川の右岸。北西部分が谷により削り取られる。水田の適地でない。	一級河川荒砥川左岸で、遺跡周辺の平坦面より約10cm高い小丘陵にあり、最近の開発前までは、ほぼ完全に残っていた。	小さな桂川右岸。川の氾濫により削り取られ南辺の堀と柵例以外残っていない。
堀（環濠）	東西規模 南北規模 堀の幅 堀の深さ	59m＋α（推定60m） 43m＋α（推定45m） 1.8～３m 2.2m前後が多い。 18～46cm 32cm前後が多い	36m 25m 2.7m 1.2m	約85m 不明 ４～6.6m １～1.2m
	堀底部の標高差からみた水の存在	南西の堀底部の標高102.3m 北東の堀底部の標高103.8m 1.5mの差である。この差は堀の深さより大きい。堀に水はなかった。	南西の堀底部の標高 121.8m 北西の堀底部の標高 122.3m 0.5mの差である。この範囲内の数値で水があったかは不明。	西の堀底部の標高 120.8m 東の堀底部の標高 120.6m 0.2mの差である。この範囲内の数値で水があったかは不明。
柵	東西規模 南北規模 柱穴間の距離 堀と柵列の距離 柵列の柱穴の規模 柵列の柱穴の深さ	37m 33m 2.4m 2.2～2.4m 28～39cm　平均39cm 32～93cm　平均60cm	29m 不明（現状で22m） 2.4m 1.0～1.5m 20～43cm　平均31cm 45～90cm　平均70cm	63m 不明（現状12m） 1.8m ３～６m　平均５m 31～50cm　平均41cm 46～88cm
布堀	幅 深さ	30～39cm 10～15cm	20～30cm 10cm	なし
張出し	張出しの奥行き 横幅	２m ９m	不明	西側に可能性あり
内部構造	竪穴住居 その他	柵列内に居館と同時期の住居２軒と、住居の可能性を持つ２軒の住居状遺構がある。２軒の住居の残りも悪く出土遺物も少ない。同時存在には疑問も残る。住居以外、他の施設なし。	同時期と考えられる竪穴住居が８軒調査されている。住居の方位が濠、柵列の方位と近似８軒の住居は重複することなく整然と配置されている。住居以外他の施設なし。	同時期の竪穴住居は存在しない。古墳中期の住居で堀に切られた住居１軒、柵列に堀り込まれた住居３軒あり。他の施設なし。
出土遺物	堀（環壕）内	柵列の東側の堀の中から多く出土、高坏が特に多い。居館の時期に近いと思われる。	南西西端部の環壕内の底部近くから土器片が集中して出土し３個の甕が図示されている。	堀内よりほとんど出土遺物なく、実測図は図示されていない。
	内部施設	同時期と考えられる竪穴住居からはほとんど出土していない。	居館に伴うと考えられる８軒の竪穴住居が確認されている。その住居内より多くの出土遺物あり。館の時期決定の根拠となる。	出土遺物の報告なし。
	その他	堀に平行して掘られている９号溝から多く出土、居館の時期に近いと思われる。		館の堀により壊されている住居と館の柵列により掘り込まれている住居から多くの出土遺物あり。しかし館以前の土器である。
噴火火山灰の堆積状況	堀（環壕）内への堆積状況	堀の底部から25cmの所に Hr-FA の堆積あり。	壕の覆土上位に Hr-FA の堆積あり（底面から約100cm）	堀の覆土下位で底部から10cmの所に Hr-FA 堆積あり



第106図　荒砥地域における５世紀代の３居館全体図

柵列の作り方は、３居館とも堀の内側に添って造られているが、荒子居館だけは柵列が西側で堀に添うことなく北上している。長方形の堀に対し、ほぼ東西南北約37mの正方形の柵列を形成している。偶然の一致かもしれないが、この37m四方の中に丸山居館が堀を含めてそっくり入ってしまう。

３居館の規模は大きく異なる。堀の東西規模で比較すると丸山居館が36m、荒子居館が約60m、梅木居館が約85mと約25mの差をもって次々と大きくなっている。

堀の幅は荒子居館と丸山居館が2.2～2.7mと比較的近いが梅木居館では６m前後とほぼ倍の幅を持っている。深さは荒子居館が約0.32mと特に浅く、他の２居館は1.2m前後と深い。丸山居館が規模の割に深いのは傾斜地によるためか。

柵列として掘られている各柱穴の間隔は、丸山居館と荒子居館が約2.4mで丸山居館が1.8mと狭くなっている。柱穴の大きさは30～40cmと大きく深さは60～70cmといずれとも深いものになっている[註1]。

居館の出入口の施設として、張り出し構造がある。これが明らかなのは、荒子居館だけである。南の堀中央部を、南へ２m横幅９mほど張り出して造られている。この張り出し部分の内側には柵列ある。この柵列は張り出し部分で柱の配置が異なり、通常の柱穴の間に２本の特別な柱穴が掘られていた。門の存在を想定したい。

３居館を平面形で比較するために、重ねあわせたのが第108図である。最も小さな丸山居館は、堀を含めて、荒子居館の柵列の中にそっくり入り込んでしまう。荒子居館は堀を含めて、梅木居館の柵列の中にそっくり入り込んでしまう。また居館の主軸は南北方向でなく、少し東に傾いた南南東方向でほぼ一致している。荒子居館で見るなら、正面の出入り口が、朝日の登る辰巳の方向を向いているのである。このように、規模と方位における関連性は、おそらく偶然の一致ではなく、一定の規制のもとで造られていることを示しているようである。

２．伴出遺物と噴火火山灰と居館の時期

荒子居館

土器の多くが堀と、居館と同時期と考えられる９号溝から出土している。それらの土器は、堀や溝の底部に近い位置から多く出土している。出土遺物の中で高坏が特に多い傾向を持っている。出土土器に時期的な幅はほとんど認められなく、ほぼ同時期のものと思われる。居館が使われなくなった段階で、破棄されていったものと考えられる。

堀の底から約25cmの所に、Hr-FA の堆積が認められる

この土器群と居館の時期は近く、土器群は今回の変遷図では４段階に相当する。５世紀中頃を含む前半の時期が考えられる。

丸山居館

居館と同時期と考えられる８軒の住居から、多くの遺物が出土している。また居館の溝南西端部の環壕内の底部近くから、３個の甕が出土している。それらの土器群に、時期的な幅はほとんど認められない。この土器群は今回の変遷図では４段階に相当する。５世紀前半の時期が考えられる。またそれらの土器群の中に、一般集落と異なるような特別な遺物は含まれていない。

環壕の底から約100cmの覆土上位に、Hr-FA の堆積が認められる。Hr-FA 降下の時期におそらく堀の多くは埋まっていたものと思われる。

梅木居館

報告書の中には、居館に伴う堀から少量の遺物が出土したと記載されている。しかし小破片のためか図示されていない。居館に伴う遺物は不明である。居館の堀により削られた住居と、柵列により床下まで掘られている住居が４軒あり、そこから多くの遺物が出土している。それらの住居が意図的に埋められて居館が造られたのなら、居館の造られた時期と住居から出土した土器との時間差は少ないことになる。しかしそれらの住居は、３～４層の自然な埋没状況を示している。その埋没土を掘り込んで居館の溝が掘られていることと、住居が埋まらない状態で

柵列が出来たとは考えにくいこと等により、これらの４軒の住居がある程度埋まった段階で居館が造られた可能性が高い。住居から出土した土器群は、今回の変遷図では４段階に相当し、５世紀中頃を含む前半の時期が考えられる。これらの住居が埋まった後、おそらく５世紀後半のある段階で、居館が造られたと考えられる。またこのことは居館の堀の中に底部からわずか10cmの位置に、Hr-FA が堆積していたことも、Hr-FA 降下時期に近いことを物語っている。明瞭な時期は決められないが、５段階後半で５世紀後半でも新しい段階を想定したい。西に近接する大室古墳群の前二子古墳と時期が近い段階の居館となりそうである。

これまで３居館の問題について検討してきた。造られた時期は、５世紀の古墳時代中期であることに問題はないが、同時期ではなく時期差が存在したようである。おそらく前半のある時期に、最も小さい丸山居館が微高地上に造られ、次に立地は異なるが、規模が比較的近い荒子居館が造られ、最後に規模の大きな梅木居館が造られていったものと思われる。

3．居館と集落と古墳の関係

現在まで荒砥地域で発掘調査されている住居は、全体から見ると一部に過ぎない。その一部をもってこの地域の住居数の推移を語ることにどれほどの意味があるのかわからない。しかし他の幹線調査と異なり、県営圃場整備事業に伴う調査が多く、広い面積と多くの地点を調査している。そのためにある程度この地域の傾向を示していると思う。この仮定の上に、居館と住居数の変化について考えてみる。

これらの３居館が造られた荒砥地域の居館出現以前と以降の住居数について調べ、地域毎に表にまとめた。表が示すように３居館が出来た地域において、住居数の変化は少なく、居館が出来たことにより住居数が増加したような傾向も認められない。荒砥全体で５世紀以前の集落は４世紀後半が68軒、５世紀前半が81軒、後半が127軒となっている。

古墳は５世紀前半に荒砥地区には無く、近くでは南の伊勢崎市に御富士山古墳、東の赤堀町に赤堀茶臼山古墳がある。５世紀後半になると10基前後つくられ、近くでは前方後円墳の今井神社古墳がある。６世紀になる同じように継続的に造られ、県内でも有数な前方後円墳３基の大室古墳群が登場してくる。このように古墳については居館成立以降、この地域に県内でも有数な古墳が継続的に造られてくるようになる。居館との関係は非常に深いと思われる。しかし居館と古墳がどのように結び付くのか、明らかでない。

参考までに５世紀段階に居館の造られていない多野郡吉井町の例と比較してみる。荒砥地域と近い面積の中で４～７世紀段階で822軒調査されている。その内容を表とグラフで示した。比較してみるとほぼ同じ800軒の住居が時期的に大きく異なっていることがわかる。居館が確認されていない吉井町では、４世紀から５世紀の住居は極めて少なく、６世紀以降一気に住居が増加している。

当然ではあるが、４～５世紀段階に多くの住居が造られた荒砥地域、一定の人口と経済基盤のある地域のなかで、３つの居館が継続的に造られたのである。その果たした役割については、残念ながら明らかでない。今後刊行されてくる多くの調査報告書の分析と５世紀以降多く展開する古墳群との関係等をもとに、さらなる研究の進展を期待したい。

おわりに

これまで検討してきたことをまとめて、おわりとしたい。

① 荒砥地域の比較的狭い範囲に、５世紀代の居館が３つつくられている。

② ３居館には新旧関係が存在する。最も古い居館が丸山居館、次が荒子居館、最後に梅木居館であると考えられる。

③ ３居館の規模は大きく異なり、最も大きな梅木居館の柵列の中に堀を含む荒子居館が、荒子居館の柵列の中に堀を含む丸山居館がそれぞれ入る大きさとなっている。小さな居館から次第に大きな居館になってゆくようである。

④ 居館が造られる荒砥地域には、以前から集落

丸山遺跡20住	2　3　4　5　1	・館環壕内の最も大型の住居 ・東西5.6m南北5.3m ・炉 ・覆土は4層で自然堆積 ・文献26
丸山遺跡21住	15　13　8　22　20　17　4　2　16　18　14　12　10　21　27	・館環壕内の区画のほぼ中央に位置する。 ・東西5.0m南北3.7m ・炉も竈も無し ・覆土は9層で自然堆積 ・文献26
丸山遺跡環壕南西部	1　2　3	・館環壕の南西部分の環壕底部付近から出土 ・覆土上層にFAが堆積 ・文献26
荒砥荒子遺跡居館の堀	1　7　15　45　48　85　2　5　16　49　46　13	・居館の堀の中から出土 ・堀の覆土上面で底面から約25cmの所に、Hr-FAの堆積が確認されている。 ・文献43
荒砥荒子遺跡9号溝	14　15　20　16　25　17　7　19	・居館とほぼ同時存在と考えられる溝から出土 ・溝の覆土上面で底面から40～60cmの所に多くの場所でHr-FAの堆積が確認されている。 ・文献43

梅木遺跡14住	6　9　10　2　3　5	・館の堀により住居の北約1/3壊されている。 ・東西3.5m×南北不明 ・竈を持つ ・覆土は4層で自然堆積 ・文献12
梅木遺跡20住	8　4　5　3　2　1	・館の柵列により住居床下まで掘られている。 ・規模不明 ・炉か竈か不明 ・覆土は3層で自然堆積 ・文献12
梅木遺跡23住	4　7　8　3　6　1　2	・館の柵列により住居床下まで掘られている。 ・東西3.4m南北約3.4m ・炉 ・覆土は7層で自然堆積 ・文献12
梅木遺跡27住	11　8　6　5　7　1　3　2	・館の柵列により住居床下まで掘られている。 ・東西3.4m南北3.3m ・炉 ・覆土は3層で自然堆積 ・文献12

第107図　3居館に関連した遺構出土遺物

文献は151ページに掲載

荒砥地域と多胡郡地域との比較

荒砥地域古墳時代時期別住居数

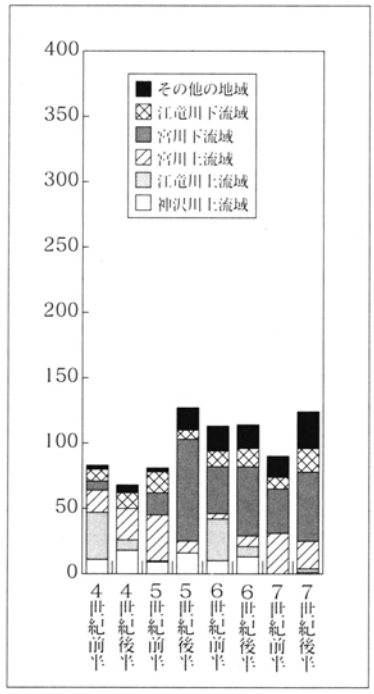
	4世紀前半	4世紀後半	5世紀前半	5世紀後半	6世紀前半	6世紀後半	7世紀前半	7世紀後半	計
神沢川上流域	11	18	9	16	10	13	0	1	78
江竜川上流域	36	8	1	0	32	8	0	3	88
宮川上流域	17	24	35	9	4	8	31	21	149
宮川下流域	7	0	17	78	36	53	34	53	278
江竜川下流域	9	12	16	7	12	14	9	18	97
その他の地域	3	6	3	17	19	18	16	28	110
計	83	68	81	127	113	114	90	124	800

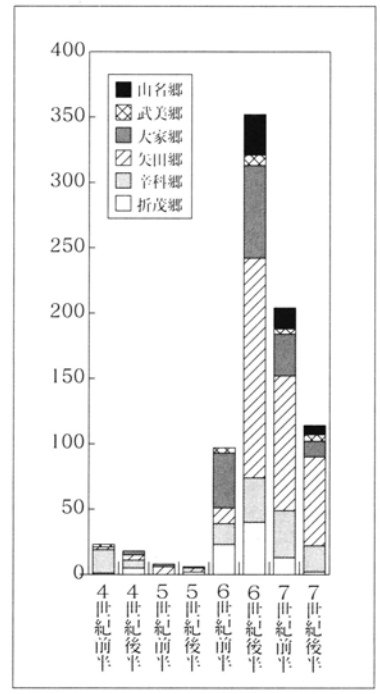
多胡郡地域古墳時代時期別住居数

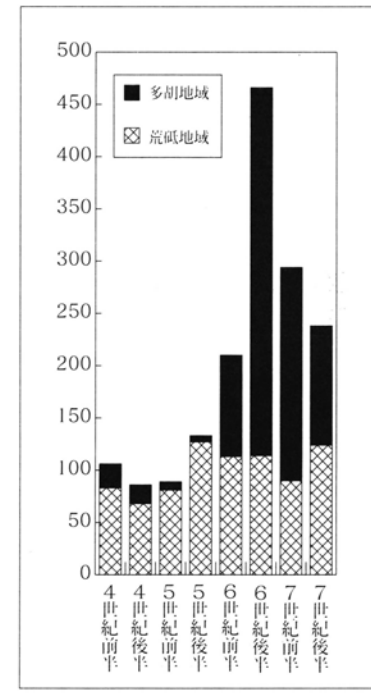
	4世紀前半	4世紀後半	5世紀前半	5世紀後半	6世紀前半	6世紀後半	7世紀前半	7世紀後半	計
折茂郷	1	5	0	2	23	40	13	2	86
辛科郷	18	6	0	0	16	34	36	20	130
矢田郷	2	4	6	3	12	168	103	68	366
大家郷	0	3	2	1	42	71	32	12	163
武美郷	2	0	0	0	4	8	4	5	23
山名郷	0	0	0	0	0	31	16	7	54
計	23	18	8	6	97	352	204	114	822

荒砥地域と多胡郡地域古墳時代時期別住居数比較

荒砥地区	4世紀前半	4世紀後半	5世紀前半	5世紀後半	6世紀前半	6世紀後半	7世紀前半	7世紀後半	計
荒砥地域	83	68	81	127	113	114	90	124	800
多胡地域	23	18	8	6	97	352	204	114	822
計	106	86	89	133	210	466	294	238	1622







ここに記載した多胡郡内の郷の位置は、筆者の考えによる。
折茂郷とは天引川と安坪川の間で、長根安坪遺跡・折茂東遺跡・長根遺跡群・道六神・西場脇遺跡を含む。
辛科郷とは安坪川と大沢川の間で、長根羽田倉遺跡・神保富士塚遺跡・植松遺跡・神保下条遺跡を含む。
矢田郷とは大沢川と矢田川の間で、多胡蛇黒遺跡・柳田遺跡・矢田遺跡・椿谷戸遺跡・川内遺跡・御内遺跡・竹腰遺跡を含む。
大屋郷とは矢田川と土合川の間で、入野遺跡・東沢遺跡・多比良追部野遺跡を含む。
武美郷とは土合川西の地域で黒熊遺跡・黒熊栗崎遺跡・黒熊中西遺跡・黒熊八幡遺跡を含む。
山名郷（山部郷）とは烏川と鮎川の合流地点から西で、山名原口・山名戸谷遺跡・田端遺跡を含む。

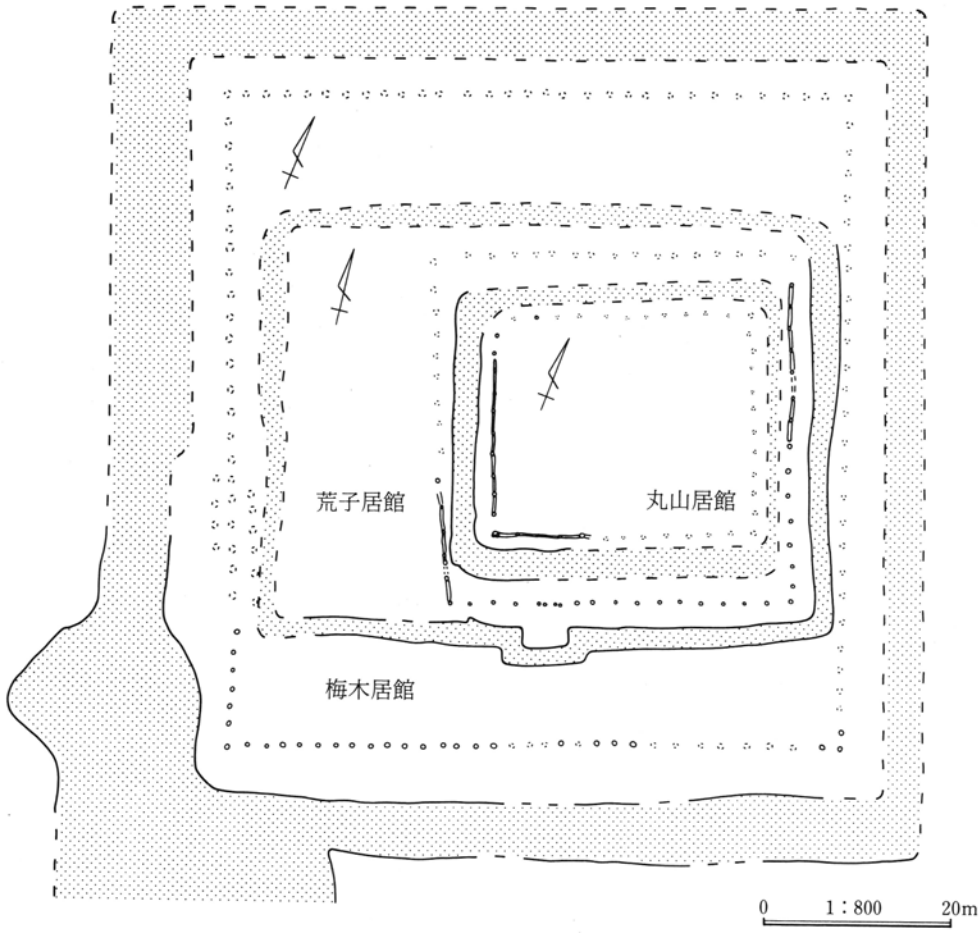
が継続的に造られている。それらの集落は居館ができることにより、増加あるいは減少傾向は示していないようである。つまり集落の増減と居館との間に、大きな関係を認めることはできなかった。

⑤　古い段階の丸山居館には、ほぼ全区域にわたり竪穴住居が造られている。次の荒子には、竪穴住居が数軒存在するが、全面ではなく中央部には、別な施設があったものと思われる。しかしその施設が、どのようなものかは不明である。最も大きな梅木居館では、残念ながら内部施設が不明である。数軒竪穴住居と掘立柱建物等の施設があったと考えたい。

このように時期が新しくなるにつれて、竪穴住居だけでなく、他の施設を必要とし拡大していったものと思われる。

⑥　３居館の平面形としての規模は異なるが、柵列を造っている柱穴の大きさと深さは不思議と共通している。深さは60cm以上が多く、柱穴の径は30cm前後となっている。おそらく高さ２ｍ前後の大きな柵列となっていたであろう。柵の柱と柱の間をどのような構造でつないでいたのか不明であるが、壮大な柵列であり外部から中は見えない構造も考えられる。

⑦　居館の堀は、梅木居館では幅が大きいが、丸山居館と荒子居館では幅が狭い。この堀は区画することに意味があり、防御的な役割は多くなく、堀以上に柵列が重要視されていたと考えた



第108図　３居館の平面規模の比較（推定復元図による）

い。

⑧　堀の内側と柵列との間には一定の距離がある。この距離は堀が大きい梅木居館が最も大きく３～６ｍも離れている。他の２居館は１～２ｍである。堀の大小に比例しているようである。おそらく堀の土を盛り上げて、簡単な土塁が築かれていたことが考えられる。

⑨　荒子居館の玄関と思われる張り出し部分が、ほぼ東西の堀の中央部に位置している。しかし柵列は西側まで全面に造られているわけでなく、東側に片寄っている。張り出しの内側の柵列では柱穴の間隔が他と異なり、門に似た構造があったと考えられる。その位置は柵列全体から見るなら、大きく西に片寄っていることになる。なぜこのような片寄った構造になっているのであろうか。１つの可能性として次のことも考えられる。平安時代以前に北西部分を大きく谷によって削られている。この大きな谷が形成される前から低地であり、小さな河川が流れていたのではないだろうか。そのために北西部分は低く溝と柵列で囲うことが出来なかった。そのために柵列が大きく東側にずらして造られた。

⑩　堀の中に水を、池のよう溜めていたのか、あるいは常に流れるような構造にしてあったのだろうか。このことは堀の土層観察から水は流れていなく、また池のように溜めてはいなかったことを示す。さらに堀底部の高さを比較した結果、荒子居館では北東と南西の堀の間に１ｍの高さの違いがあり、水を溜めておくことは出来ないことが明かである。また居館の東を堀に平行した溝が造られており、出土土器から同時期に使われていたことが明らかである。水を堀の中に流していないことが、このことでも明らかである。

註１

この深さに対しどのくらいの長さの柱が地上に立っていたのであろうか。様々な条件で異なると思うが、全体の長さに対し地中の深さを２割と考えてみる。約３ｍの２割が60cmとなる。３ｍ-0.6m=2.4ｍとなり、計算上地上に2.4mの柵列が建てられていたこたが仮定できる。布堀を持ち基礎から塀を築き、高さ２ｍ以上、幅30～60mの柵列である。当然周辺から中を見渡すことは出来ない。溝と異なりこの柵列は巨大である。

参考文献

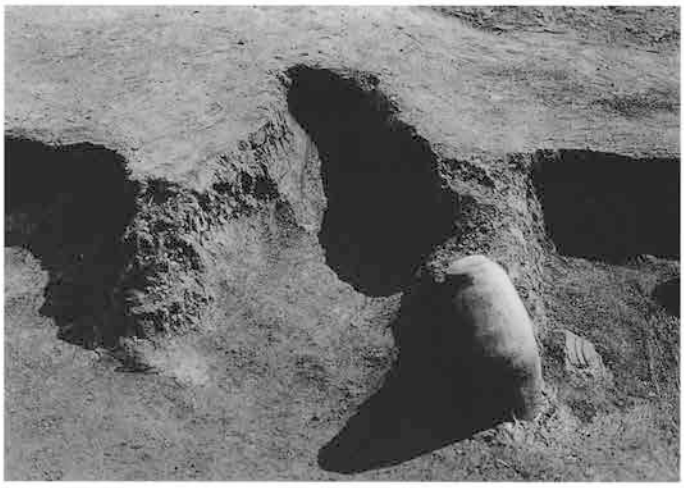
鹿田雄三ほか「荒砥荒子遺跡の方形区画遺構」『研究紀要』１（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984
『梅木遺跡』山武考古学研究会　1986
『丸山・北原』群馬県教育委員会　1986
『丸山・北田下・中畑・村主・中山Ｂ遺跡』群馬県教育委員会　1988
『古代東国の王者』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県立歴史博物館 群馬県教育委員会　1988
『再現・古代の豪族居館』国立歴史民俗博物館　1990
『季刊考古学』第36号　1991
『古代学研究』141　古代学研究会　1998
『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会　1988
『東国土器研究会』第５号　東国土器研究会　1999

文献

1 『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』前橋市教育委員会　1979
2 『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』前橋市教育委員会　1979
『富田遺跡群・西大室遺跡群』前橋市教育委員会　1982
3 『西大室遺跡群Ⅱ』前橋市教育委員会　1981
4 『後二子古墳・小二子古墳』前橋市教育委員会　1992
5 『内堀遺跡群Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ』前橋市教育委員会　1989～1995
6 『中二子古墳』前橋市教育委員会　1995
7 『前二子古墳』前橋市教育委員会　1993
8 『荒砥上諏訪遺跡』群馬県教育委員会　1977
9 『大室小学校校庭Ⅲ遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1998
10 『荒砥上川久保遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982
11 『荒砥五反田遺跡』群馬県教育委員会　1978
12 『富田遺跡群・西大室遺跡群』前橋市教育委員会　1982
『梅木遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1986
13 『横俵遺跡群Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1990～1993
14 『横俵遺跡群Ⅳ・Ⅵ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1992・1993
15 『横俵遺跡群Ⅱ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1991
16 『東原Ａ・Ｂ遺跡』荒砥北部遺跡調査会 群馬県教育委員会　1988
17 『山崎遺跡・寺東遺跡・寺前遺跡・東前田北遺跡・東原西遺跡・新山遺跡』群馬県教育委員会　1984
18 『丸山・北田下・中畑・村主・中山Ｂ遺跡』群馬県教育委員会　1988
19 『丸山・北田下・中畑・村主・中山Ｂ遺跡』群馬県教育委員会　1988
『荒砥北部遺跡群』荒砥北部遺跡群調査会　群馬県教育委員会　1988
20 『阿弥陀井戸道上・伊勢山・大道・山王・明神山』群馬県教育委員会　1989
21 『小稲荷遺跡』前橋市教育委員会　前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1987
22 『堤東遺跡』群馬県教育委員会　1985
23 『下境Ⅰ・天神遺跡』群馬県教育委員会　1990
24 『上西原・向原・谷津』群馬県教育委員会　1986
25 『諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡』群馬県教育委員会　1998
『上西原・向原・谷津』群馬県教育委員会　1986
26 『丸山・北原』群馬県教育委員会　1986
『丸山・北田下・中畑・村主・中山Ｂ遺跡』群馬県教育委員会　1988
27 『諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡』群馬県教育委員会　1998
28 『柳久保遺跡群Ⅰ・Ⅵ・Ⅶ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1985
29 『鶴谷遺跡群発掘調査概報Ⅱ』前橋市教育委員会　1981
『鶴谷遺跡群発掘調査概報』前橋市教育委員会　1980
30 『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986
31 『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991
32 『荒砥大日塚遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
33 『今井道上遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
34 『二之宮谷地遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
35 『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985
36 『荒砥天之宮遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
37 『二之宮宮下東遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
38 『荒砥島原遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984
39 『地田栗Ⅲ遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1994
40 『荒砥東原遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1989
41 『舞台・西大室丸山』群馬県教育委員会　1991
42 『西大室丸山遺跡』群馬県教育委員会　1997
43 『荒砥荒子遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2000
44 『荒砥下押切Ⅱ遺跡、荒砥中屋敷Ⅱ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999
45 『荒砥上ノ坊遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995
46 『荒砥青柳Ⅱ遺跡』前橋市文化財発掘調査団　1995
47 『中並木遺跡』前橋市文化財発掘調査団　1994
48 『飯土井上組遺跡・波志江中峰岸遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995
49 『飯土井中央遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991
50 『飯井土井二本松遺跡・下江田前遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991
51 『荒砥二之堰遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985
52 『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』帝室博物館
53 『下触向井遺跡』赤堀町教育委員会　1988
54 『今井南原遺跡発掘調査概報』赤堀村教育委員会　1981
55 『川上遺跡』赤堀村教育委員会　1980
56 『下触片田遺跡』赤堀町教育委員会　1990
57 『下触牛伏遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986
58 『宮貝戸古墳群・蟹沼東古墳群』伊勢崎市教育委員会　1980
59 『波志江今宮遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995
60 『五目牛清水田』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993
61 『大沼下遺跡・西稲岡遺跡』伊勢崎市教育委員会　1997
62 『群馬県史研究(2)』群馬県史編纂委員会　1975
63 『御富士山古墳』伊勢崎市教育委員会　1990
64 『荒砥前原遺跡・赤石城址』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985
65 『中原遺跡群』前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1996
66 『笂井中屋敷』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997
67 『今井白山遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993
68 『笂井八日市遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
69 『小島田八日市遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
70 『宮田遺跡』宮田遺跡調査会　1996
71 『富田遺跡群・西大室遺跡群』前橋市教育委員会　1982
『富田遺跡群Ⅱ・宮下遺跡』前橋市教育委員会　1981
『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』前橋市教育委員会　1979
72 『稲荷前遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1996
73 『荒砥北部遺跡群発掘調査概報』群馬県教育委員会　1984
74 『赤堀村地蔵山の古墳Ⅰ』赤堀村教育委員会　1977
★北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査事業平成10年度事業概要
(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999

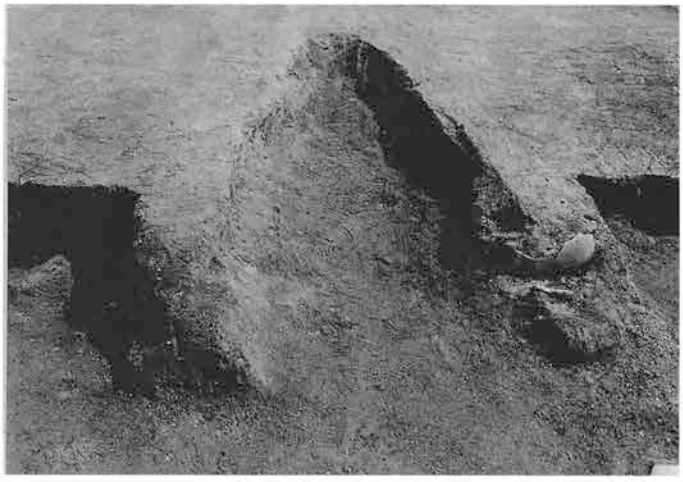
写　真　図　版

1号住居跡全景（西から）



1号住居跡カマド（西から）

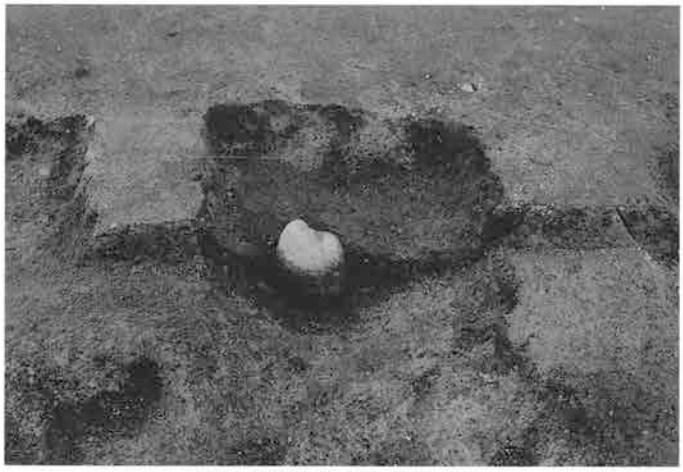
2号住居跡全景（西から）



2号住居跡カマド（西から）

3号住居跡全景（西から）

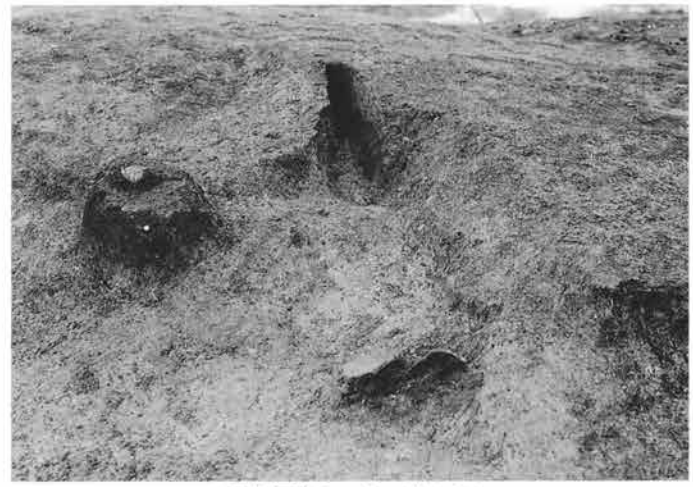
3号住居跡遺物出土状況（西から）



3号住居跡カマド（西から）

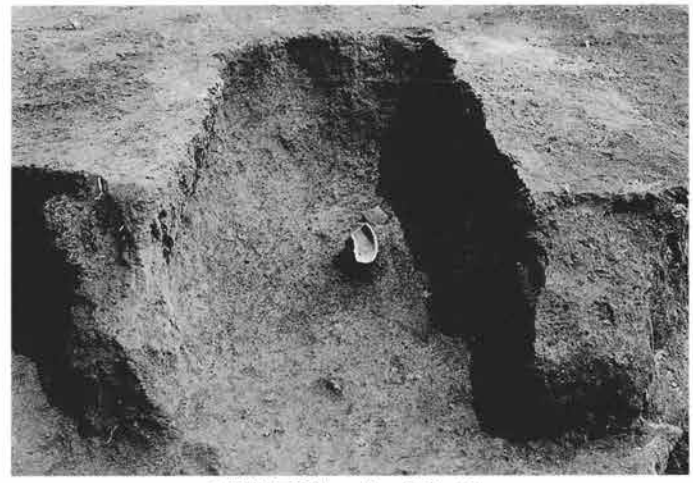
4号住居跡全景（西から）

4号住居跡遺物除去後全景（南から）

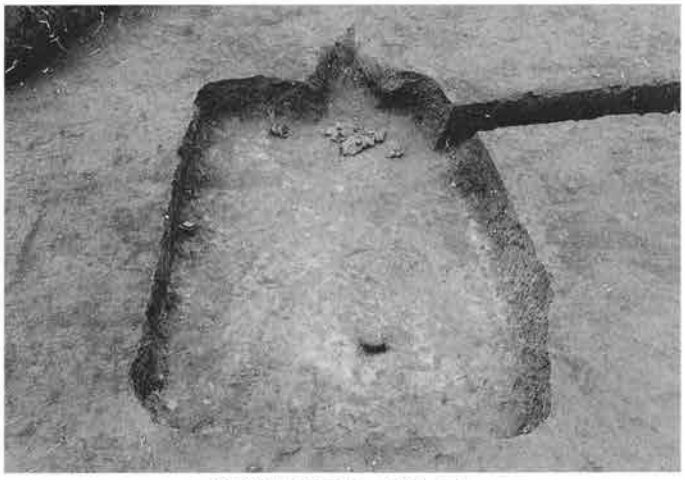


4号住居跡カマド（南から）

5号住居跡全景（西から）



5号住居跡カマド（西から）



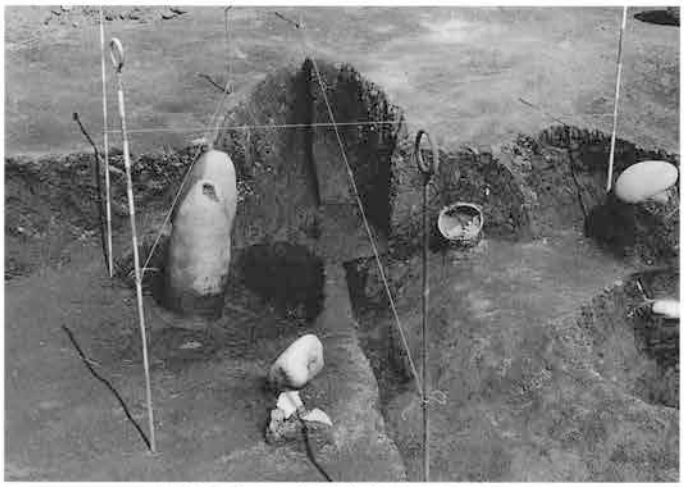
6号住居跡全景（西から）

6号住居跡カマド付近（西から）

6号住居跡カマド（西から）

7号住居跡全景（西から）

7号住居跡カマド付近（西から）



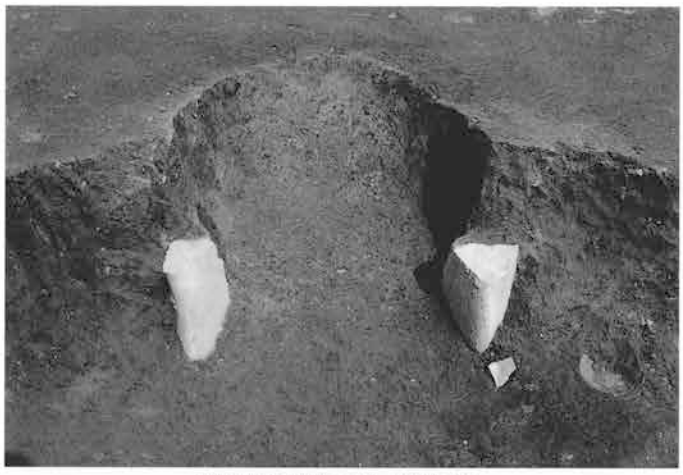
7号住居跡カマド解体状況１（西から）

7号住居跡カマド解体状況２（南から）

8号住居跡全景（西から）

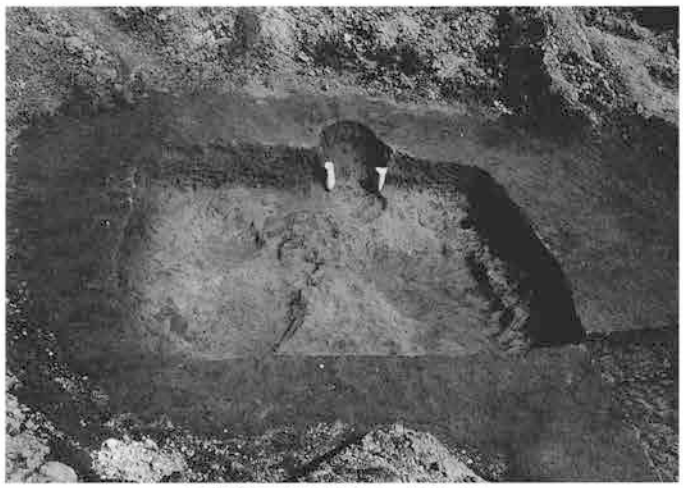
9号住居跡全景（西から）

10号住居跡全景（西から）

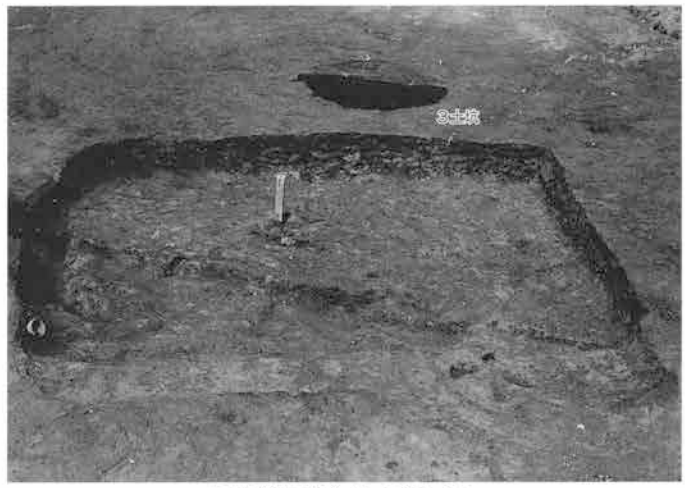


10号住居跡カマド（西から）

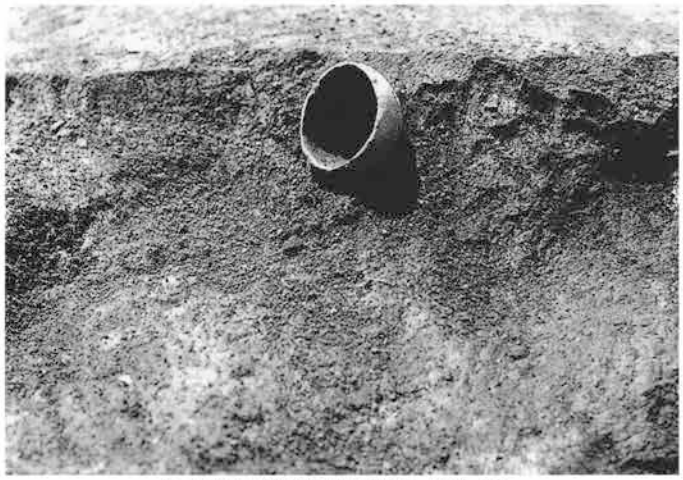
10号住居跡床下セクション（西から）



10号住居跡床下全景（西から）



11号住居跡全景（南から）



11号住居跡遺物出土状況（東から）

12号住居跡全景（南から）

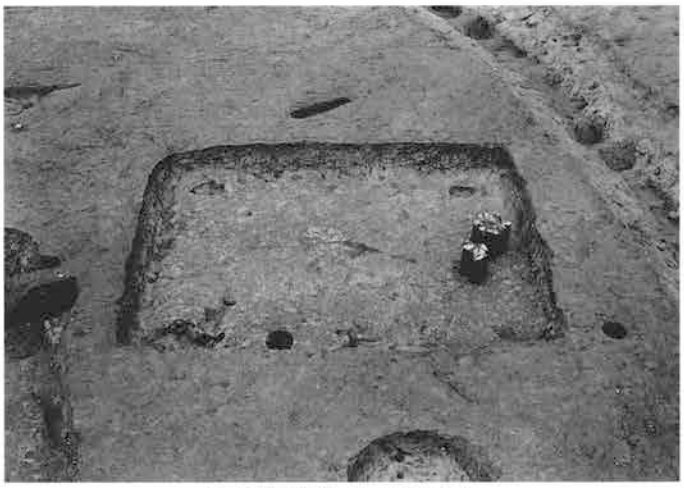
12号住居跡カマド（西から）

12号住居跡カマド解体状況（西から）

13号住居跡全景（東から）

13号住居跡遺物出土状況（北から）

14号住居跡全景（北から）


15号住居跡全景（南から）

15号住居跡遺物出土状況（南から）

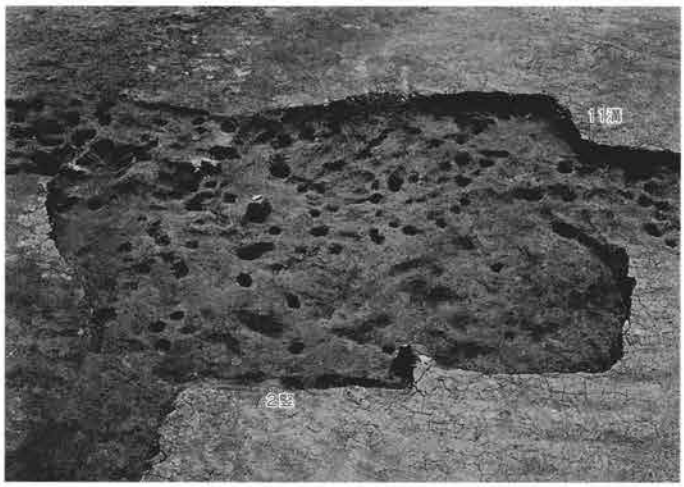
16号住居跡全景（西から）

16号住居跡遺物出土状況（上から）

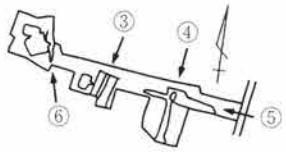
16号住居跡カマド（西から）

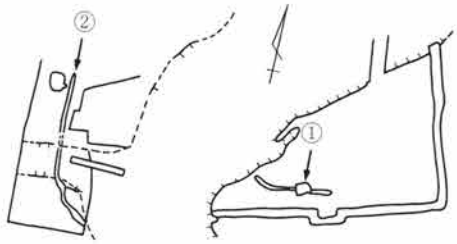
16号住居跡カマド解体状況（西から）

1号竪穴状遺構（西から）



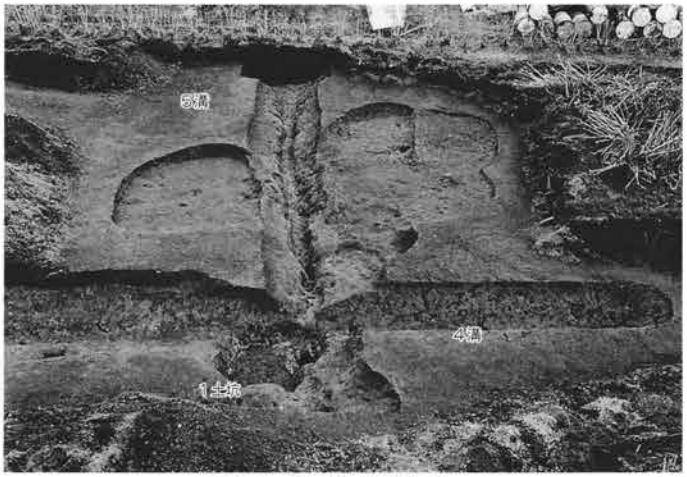
①2号竪穴状遺構（北から）





②1号溝（北から）

③2・3号溝（北から）



④4・5号溝（北から）

⑤4・5号溝（東から）

⑥6号溝（南から）

7号溝（北東から）

7号溝（南東から）

9号溝（北から）

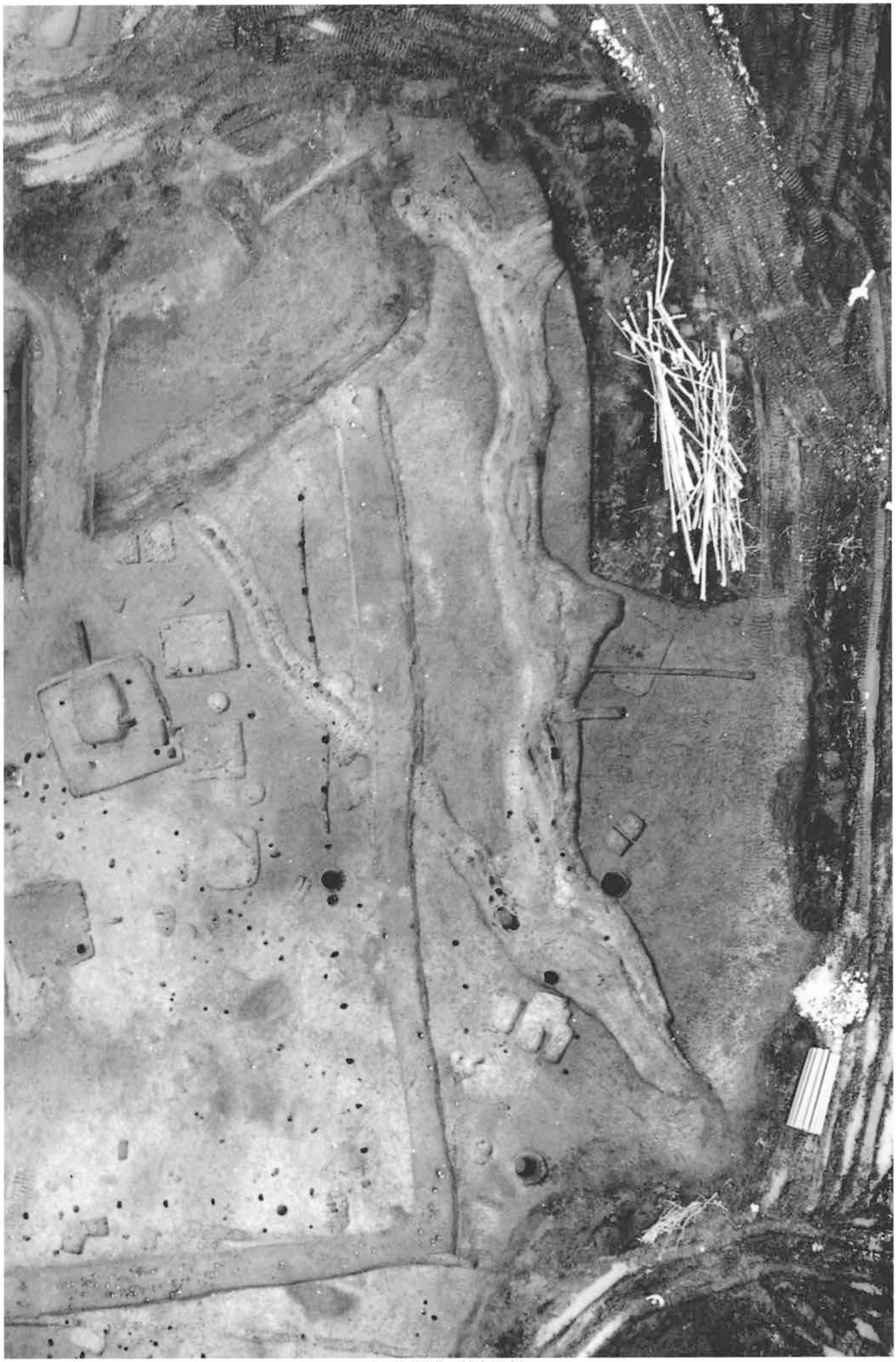
10号溝（北から）

9・10号溝合流付近（北西から）

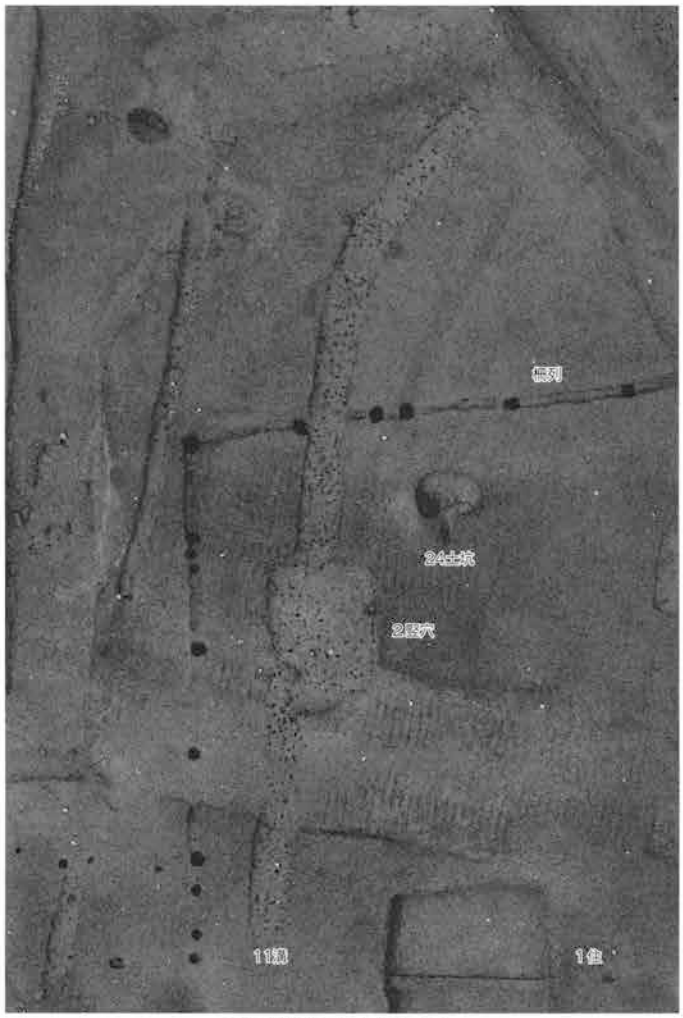
9・10号溝南側（北西から）

9・10号溝合流付近セクション（南東から）

9・10号溝と発掘風景（北東から）



9・10号溝（航空写真）



11号溝全景（上から）

11号溝セクション（東から）

1号井戸全景（西から）

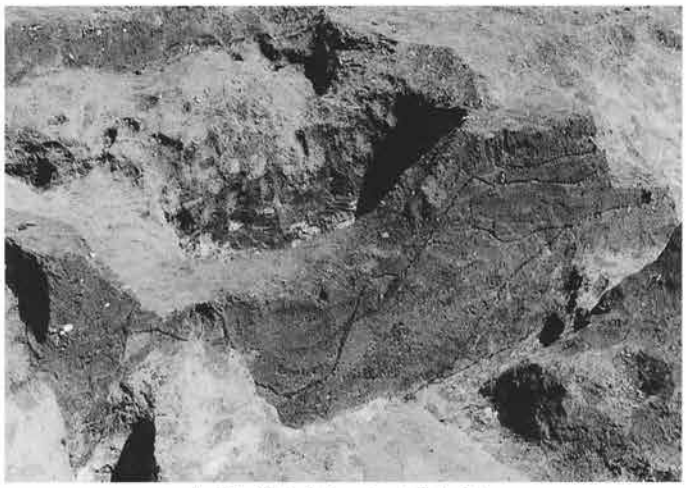
1号井戸セクション（北から）

2号井戸セクション（南から）

3号井戸全景（南から）

3号井戸セクション（南から）

1号土坑全景（北から）


1号土坑セクション（北から）

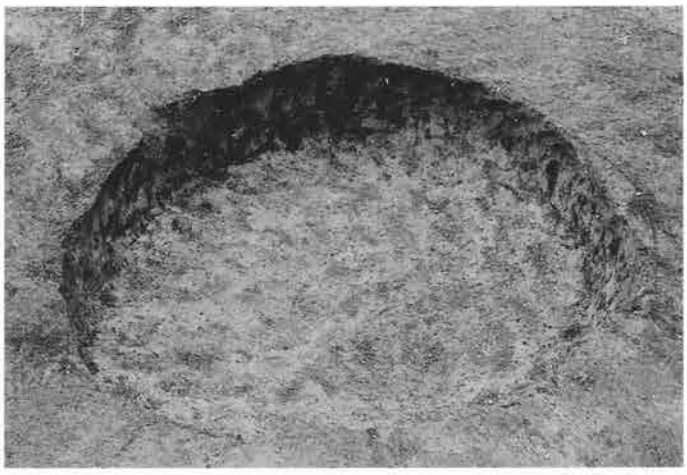
2号土坑全景（南から）

2号土坑セクション（南から）

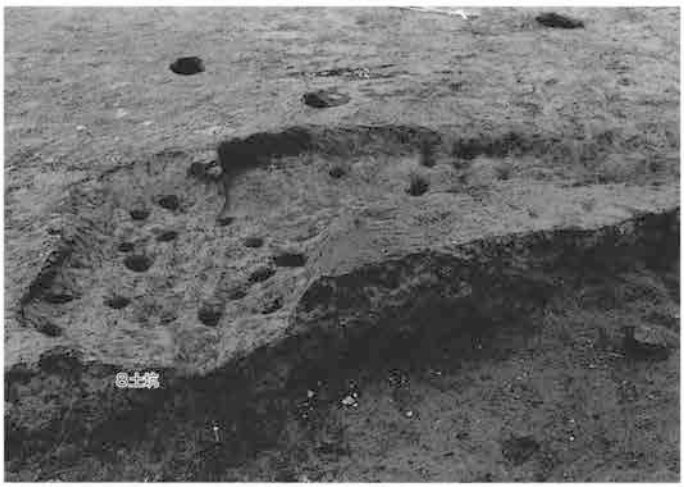
3号土坑全景（南から）

3号土坑セクション（南から）

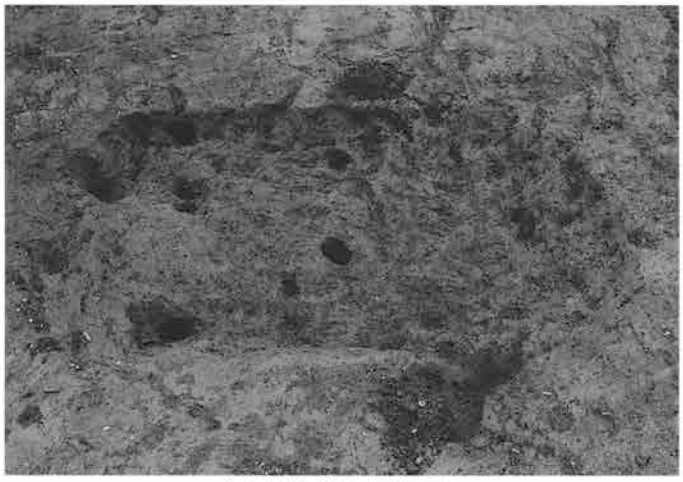
4号土坑全景（南から）


5号土坑全景（北から）

6号土坑全景（東から）

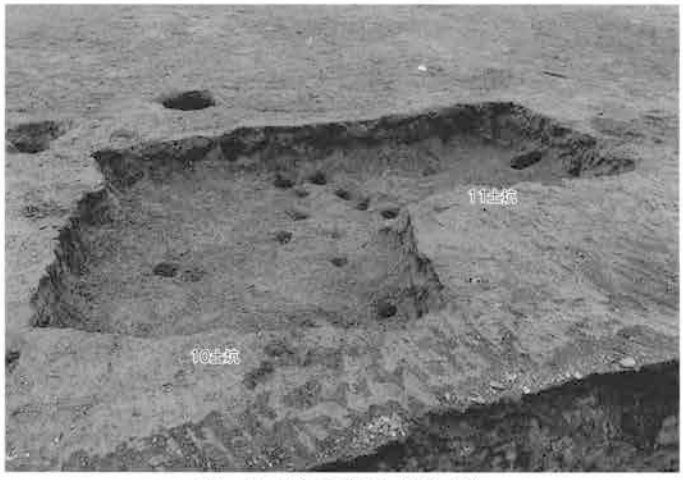


8号土坑全景（南から）

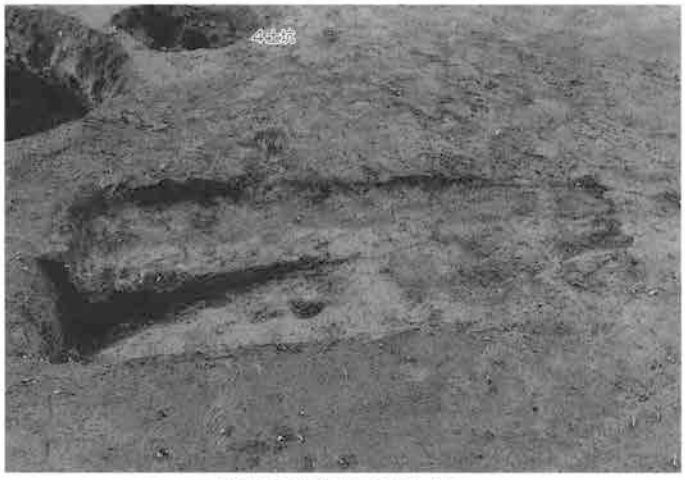


9号土坑全景（西から）

10・11号土坑全景（東から）



10・11号土坑全景（南から）



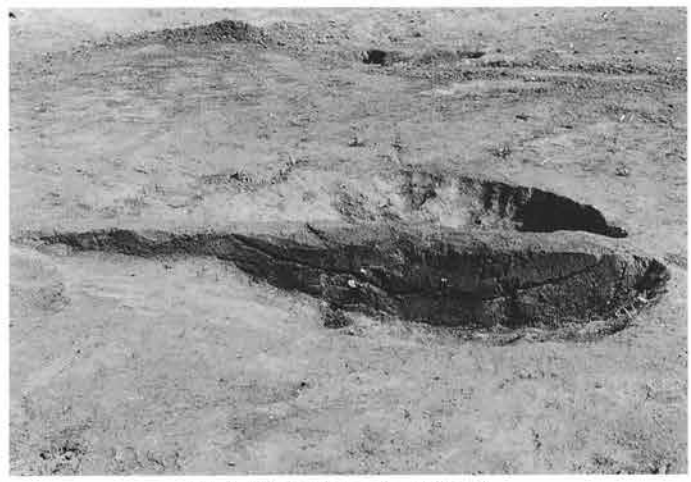
12号土坑全景（西から）

13号土坑全景（南から）

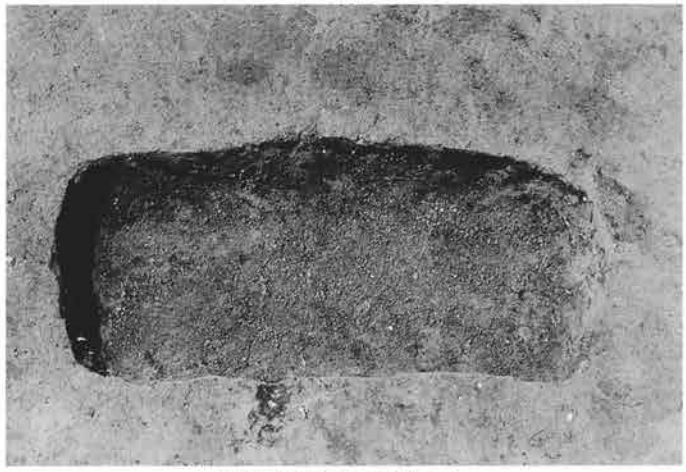
13号土坑セクション（南から）

14・15・16・17号土坑全景（北から）

18号土坑全景（北東から）



18号土坑セクション（南から）



19号土坑全景（東から）

20号土坑全景（東から）

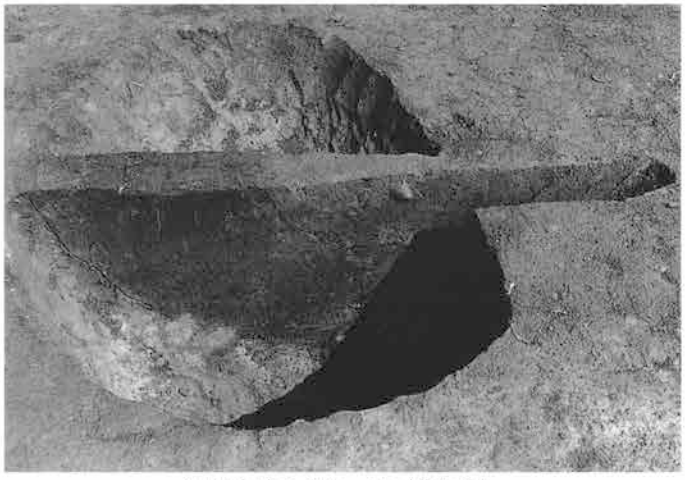
21号土坑全景（東から）

22号土坑全景（南から）

23号土坑全景（西から）

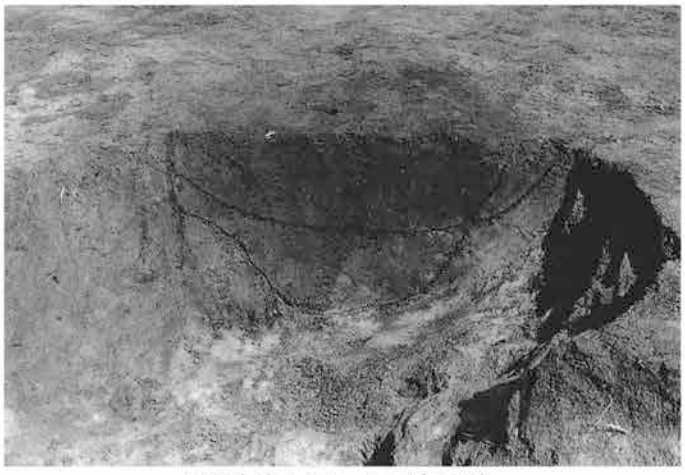
23号土坑セクション（南から）

24号土坑全景（東から）



24号土坑セクション（北から）

26号土坑全景（南から）



26号土坑セクション（南から）

28・29号土坑全景（西から）

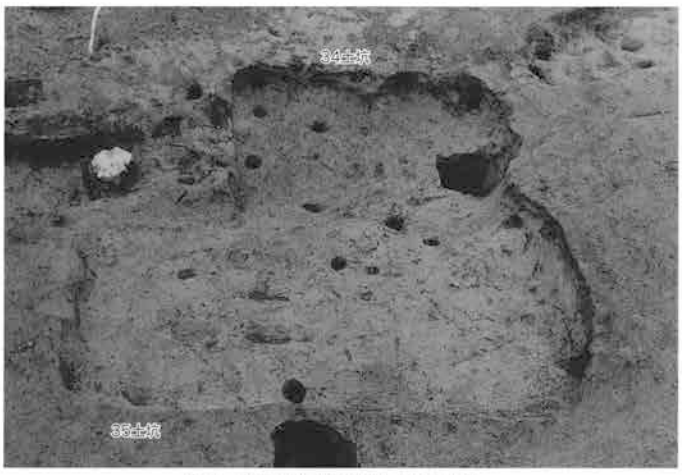
30号土坑全景（東から）

31号土坑全景（東から）

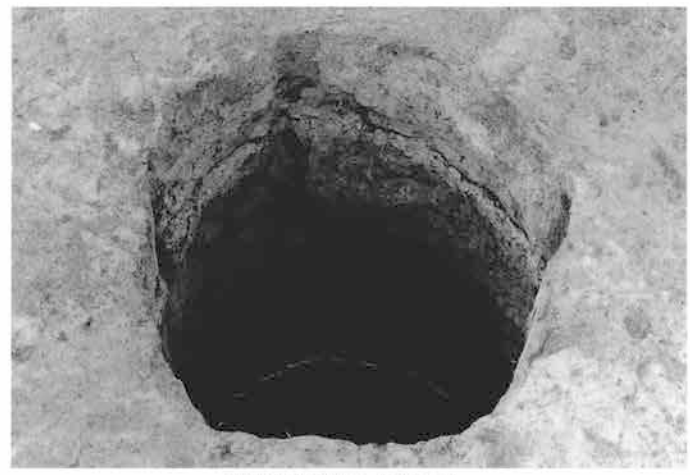
32号土坑全景（西から）

33号土坑全景（西から）

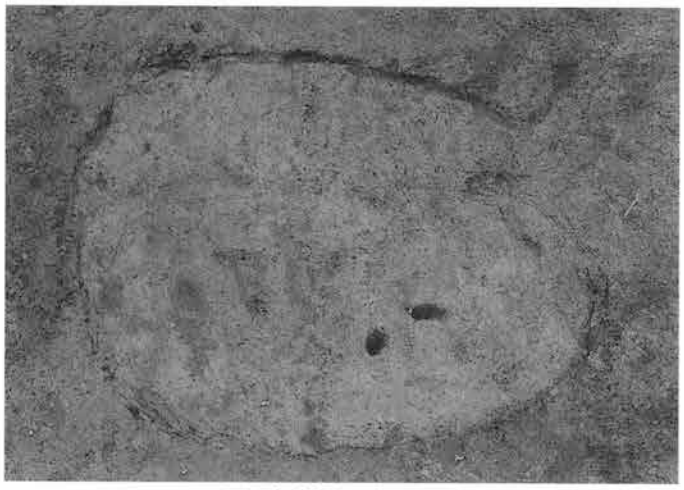
33号土坑セクション（南から）



34・35号土坑全景（南から）



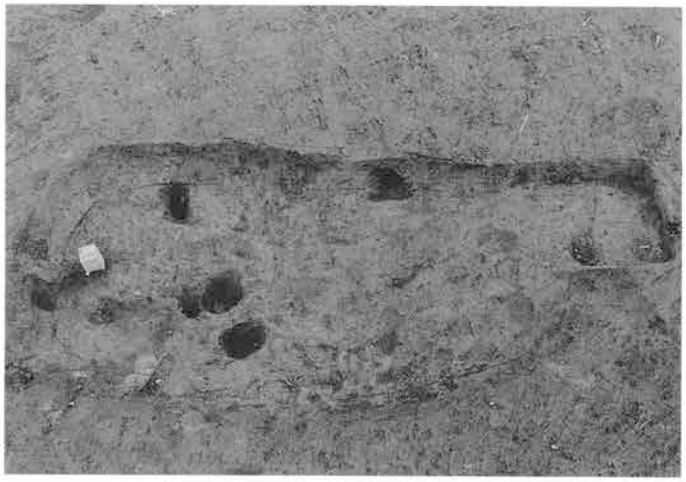
36号土坑全景（南から）



37号土坑全景（西から）

39号土坑全景（西から）

40号土坑全景（北西から）



41号土坑全景（西から）

43号土坑全景（北西から）

45号土坑全景（南東から）

51号土坑全景（東から）

46～50号土坑全景（南から）

埋没谷全景（上空から）

居館と埋没谷（東上空から）

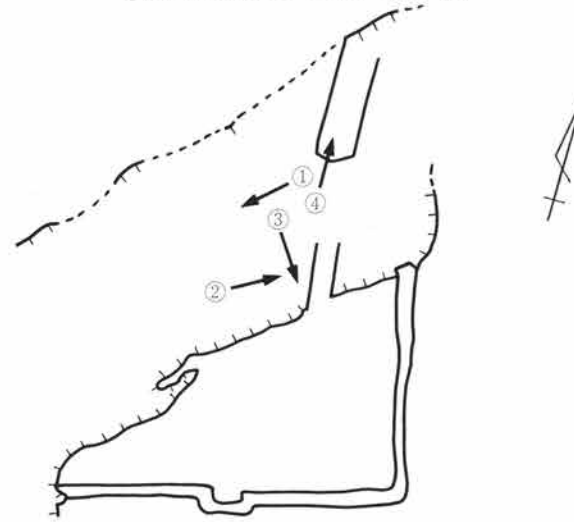
埋没谷北側調査状況（北西上空から）

埋没谷（北東から）

①埋没谷除去後（北東から）

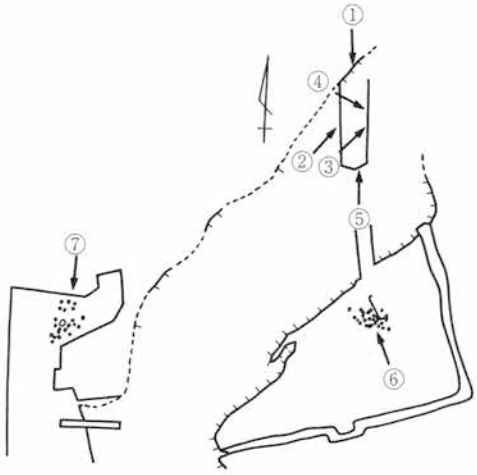
②埋没谷南北セクション（西から）

③埋没谷下面セクション（北西から）

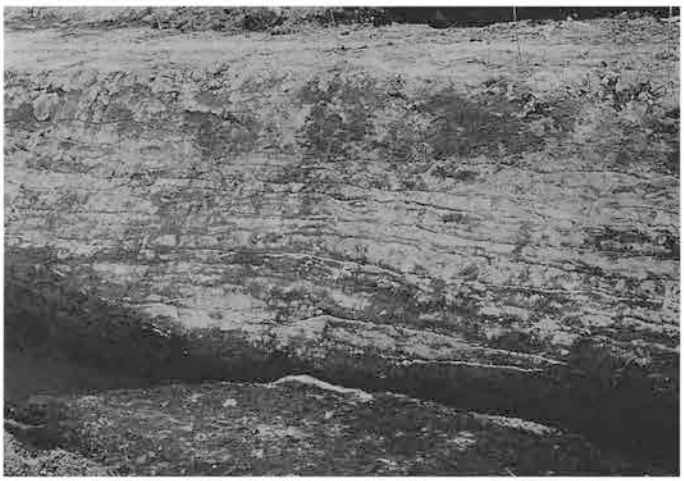


④埋没谷南北トレンチ（南から）

①埋没谷南北トレンチ（北から）



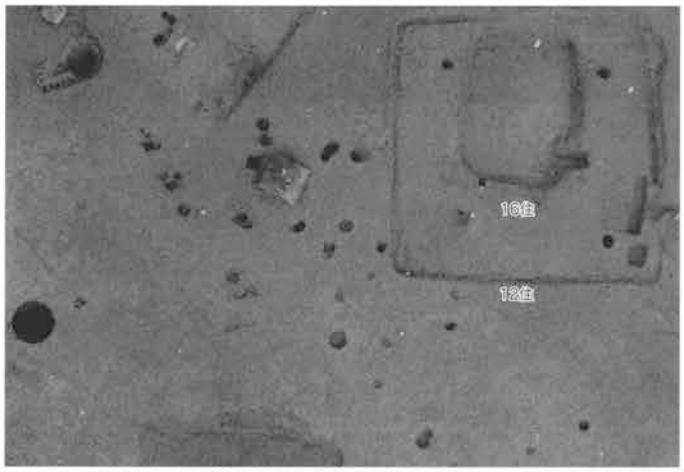
②埋没谷南北トレンチ北側セクション（南西から）



③埋没谷南北トレンチ中央部セクション（南西から）

④埋没谷南北トレンチ中央部セクション（北西から）

⑤埋没谷南北トレンチ（南から）

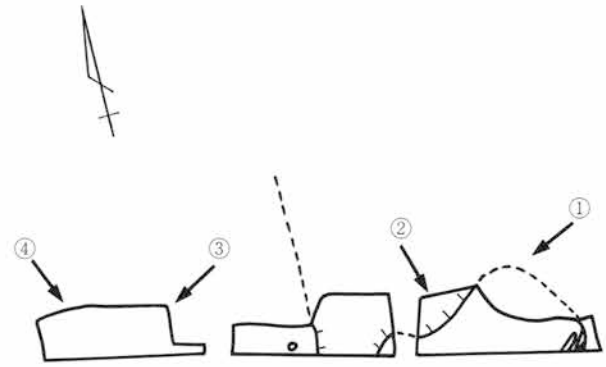


⑥第１小穴群（上空から）

⑦第２小穴群（北から）

①支用１号の東側全景（北東から）

②支用１号の東側全景（北西から）



③支用１号の西側（北東から）

④支用１号の西側（北西から）

北調査区を含む遺跡全景（北上空から）

北調査区全景（北上空から）

北調査区全景（南から）

北調査区全景（北から）

北調査区全景（北から）

北調査区北側部分（南から）

北１号住居跡全景（西から）

北１号住居跡北東部分（西から）

北１号住居跡北東部分（北東から）

北１号住居跡貯蔵穴（北から）

北３号住居跡全景（西から）

北３号住居跡カマド周辺（西から）

北３号住居跡カマド付近（南から）

北３号住居跡貯蔵穴付近（煙道部方向から）

北３号住居跡カマド（西から）

北３号住居跡床面遺物除去後全景（西から）

北４・５号住居跡全景（西から）

北４・５号住居跡全景（東から）

北４・５号住居跡全景（北から）

北５号住居跡カマド付近（南から）

北５号住居跡カマド付近（煙道部方向から）

北５号住居跡カマド付近（北から）

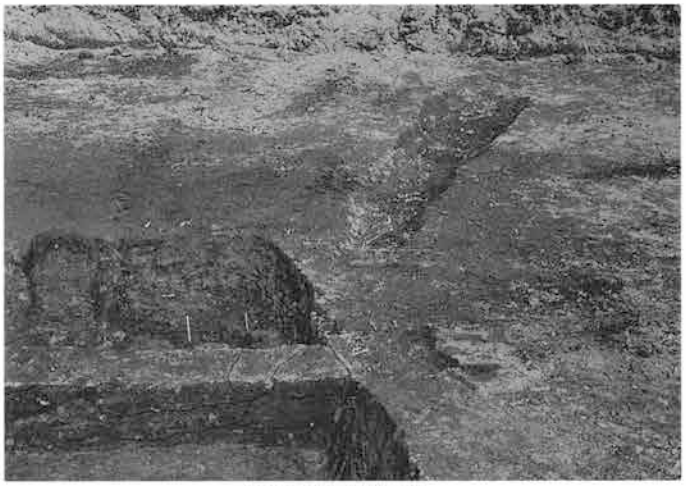
北５号住居跡カマド（西から）

北５号住居跡カマド（南から）

北５号住居跡カマド遺物除去後（西から）

北５号住居跡カマド遺物除去後（南から）

北５号住居跡カマド解体状況（南から）



北１号溝（西から）

北２号溝（南から）

北１・２号土坑（南から）

北３号土坑（南から）

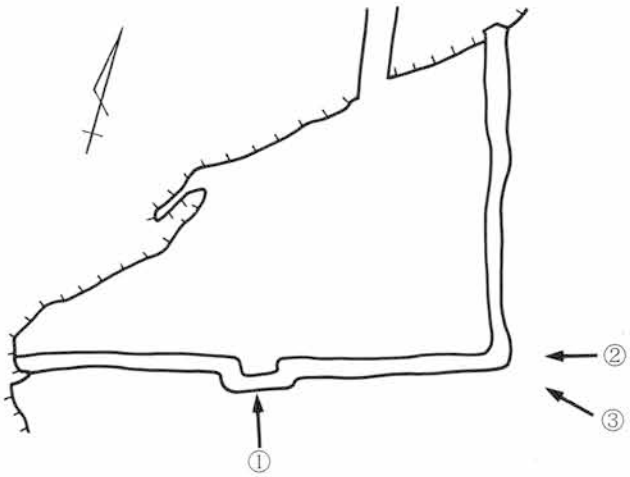
北４号土坑（南から）

北５号土坑（南から）

北６号土坑（西から）

①居館の堀張り出し部分（南から）

②居館の堀東西部分（東から）

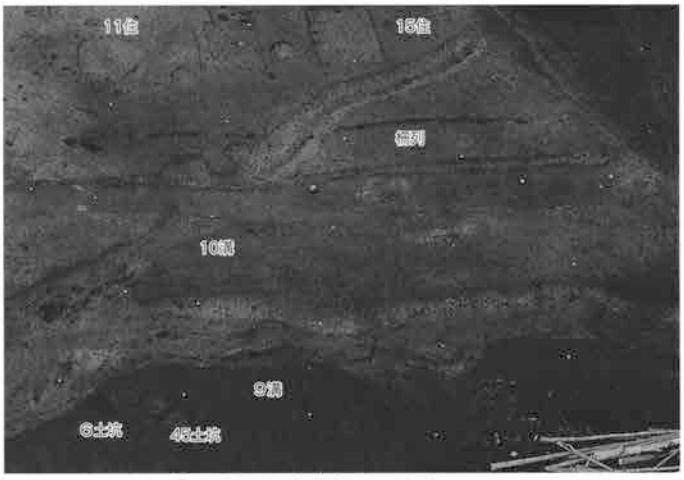


③居館の堀東西～南北部分（東から）

①居館の堀南北部分遺物出土状況（北から）

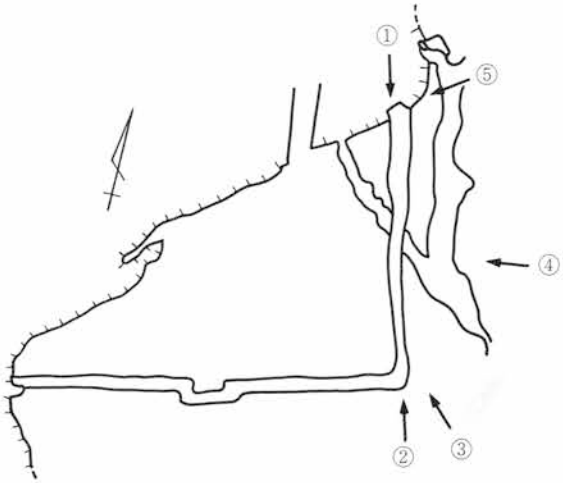
②居館の堀南北部分遺物出土状況（南から）

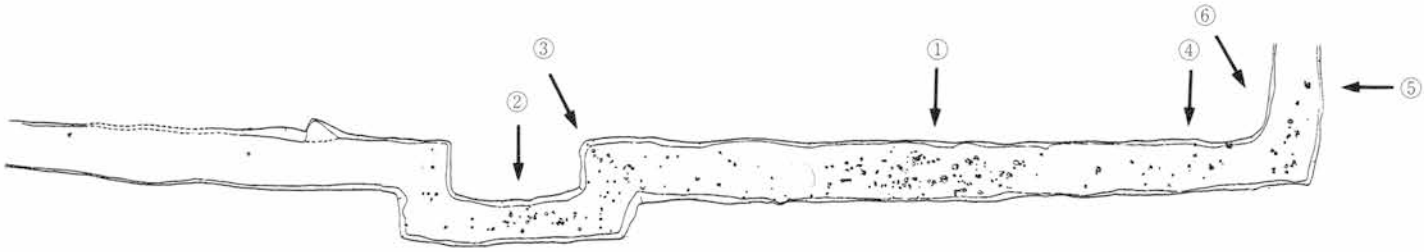
③居館の堀南北部分（南東から）



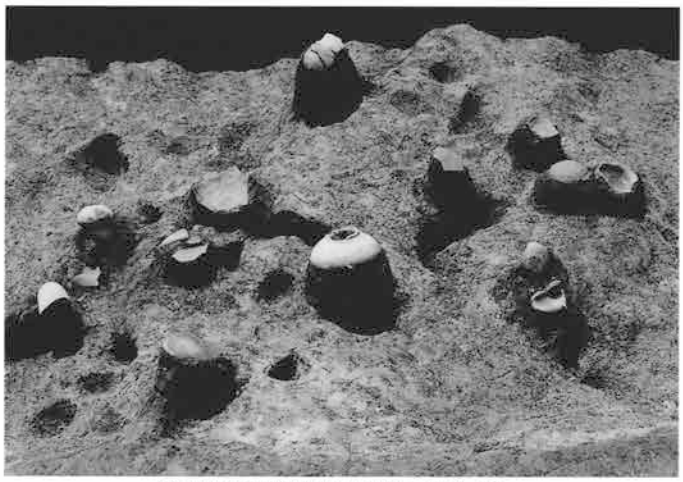
④居館の堀南北部分（南東から）

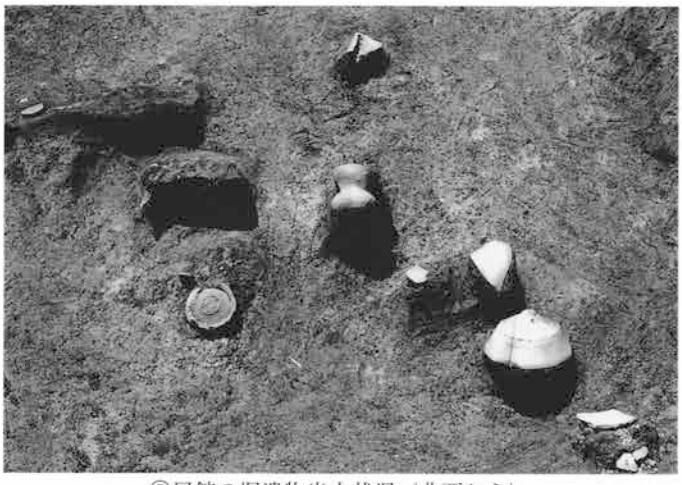
⑤居館の堀南北部分北端（東から）





①居館の堀遺物出土状況（北から）


②居館の堀遺物出土状況（北から）


③居館の堀遺物出土状況（北西から）

④居館の堀遺物出土状況（北から）

⑤居館の堀遺物出土状況（東から）

⑥居館の堀遺物出土状況（北西から）

埋戻状況

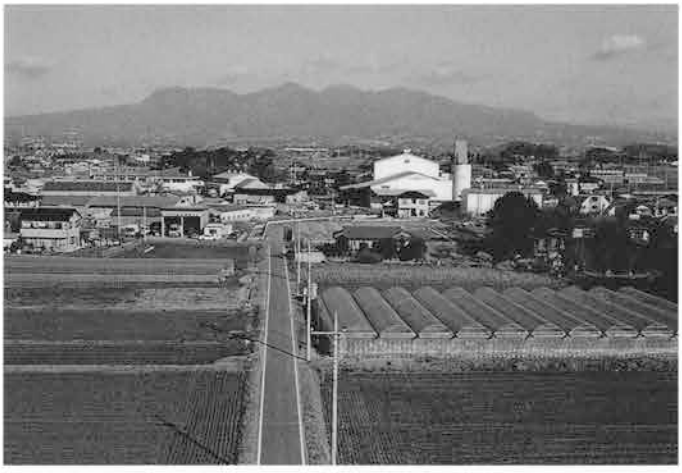
埋戻状況

埋戻状況

埋戻状況

埋戻状況

埋戻状況



荒砥荒子遺跡の現状

荒砥荒子遺跡の現状

1住-1

1住-2

1住-9

1住-5

1住-6

1住-7

2住-5

2住-1

2住-4

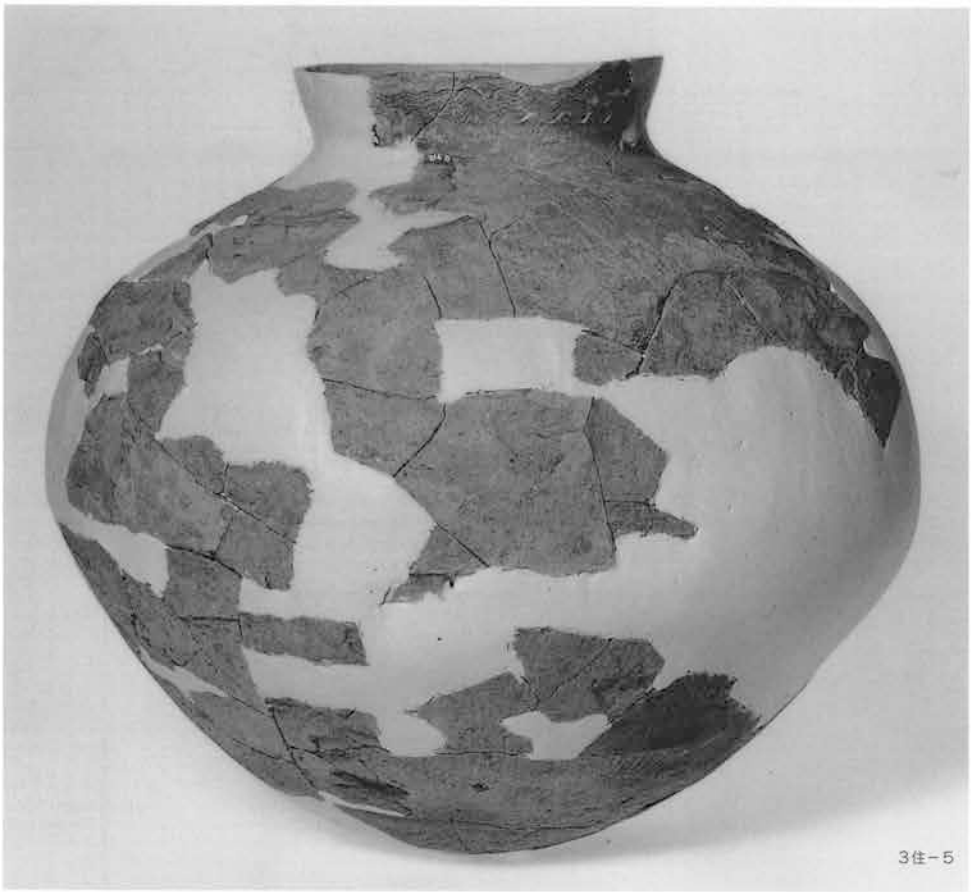
2住-6

3住-1

3住-2

3住-3

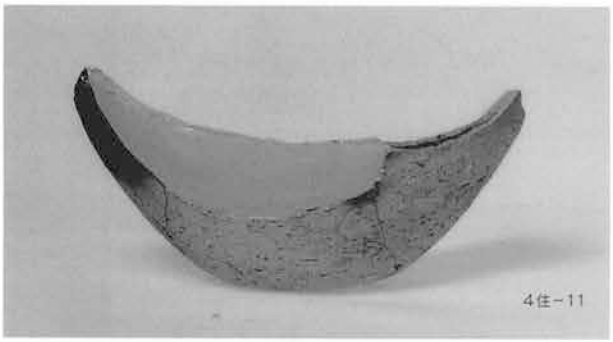
3住-4


3住−5

4住−2

4住−3

4住−1


4住−11

4住−6

4住−4

4住−9

4住−5

5住−1

5住−2

5住−4

5住−5

5住−11

5住−8

5住−12

6住−4

5住−13

5住−14

6住−5

7住−5

6住−2

7住−1

7住−4

7住−11

7住−6

7住−7

7住−9

7住−8

7住−10

8住−1

8住−2

9住−2

10住−6

10住−1

10住−5

10住−12

11住−1

12住−1

12住−3

12住−2

12住−5

12住−6

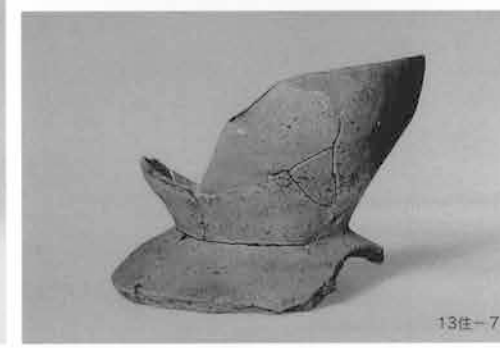
12住－8

12住－9

13住－2

13住－4

12住－7


13住－7

13住－6

14住－2

14住－1

14住－5

14住－7

14住－9

14住－8

15住－3

15住－1

16住－2

16住－1

16住－3

16住－4

16住－5

16住－8

16住－6

16住－7

9溝−4

9溝−3

9溝−6

9溝−2

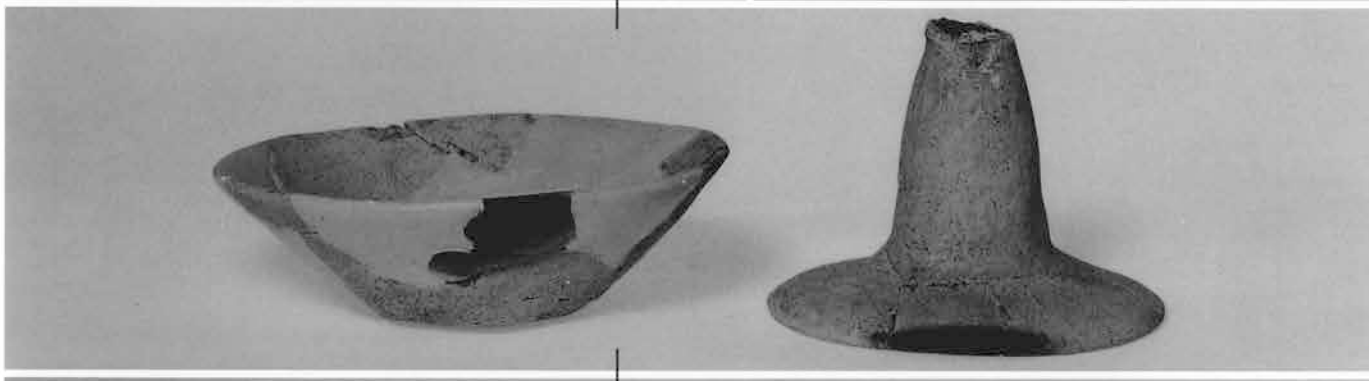
9溝−5

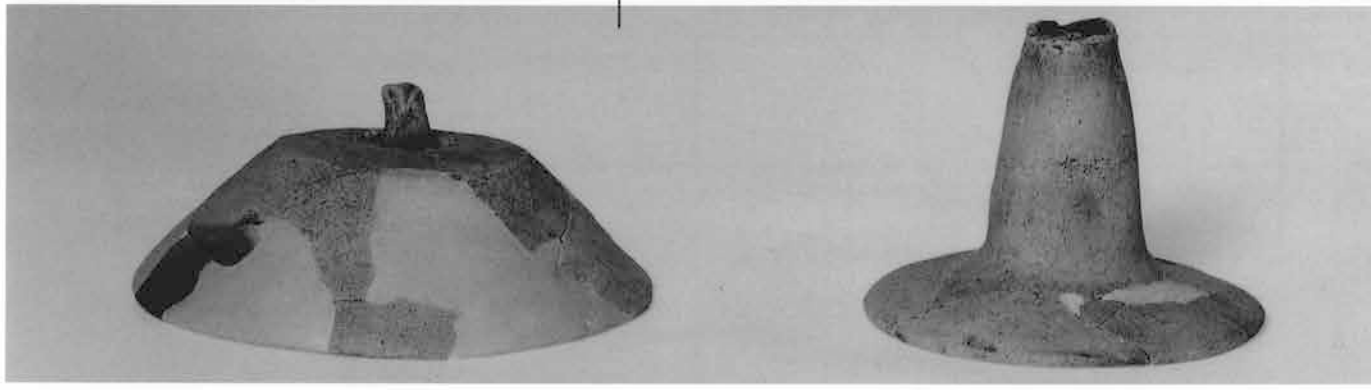
9溝−9

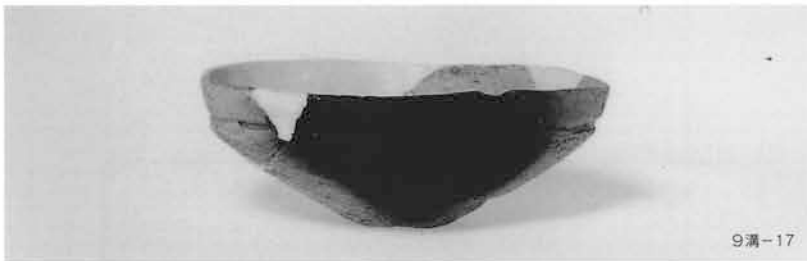
9溝−13

9溝−18

9溝−20






9溝－17

9溝－15

9溝－14

9溝－19

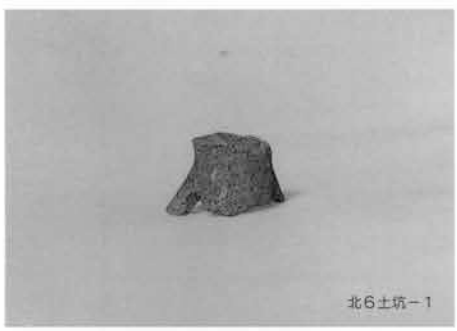
9溝－16

9溝－24

9溝－25

9溝－23

9溝－22


北6土坑－1

北6土坑－3

埋没谷－1

43土坑－1

43土坑－2

遺構外－1

北1住−3

北1住−2

北3住−1

北3住−3

北5住−10

北3住−5

北3住−6

北3住−4

北5住−4

北5住−6

北5住−2

北5住−1

北5住−5

北5住−11

北5住−8

北5住−7

北5住−14

北5住−9

北5住−13

北5住−12

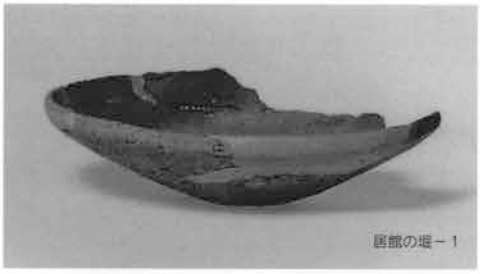
北5住−15

北5住−17

北5住−16

居館の堀－4

居館の堀－13


居館の堀－1

居館の堀－2

居館の堀－8

居館の堀－10

居館の堀－9

居館の堀－5

居館の堀－7

居館の堀－14

居館の堀－16

居館の堀－6

居館の堀－61

居館の堀－11

居館の堀－15

居館の堀－19

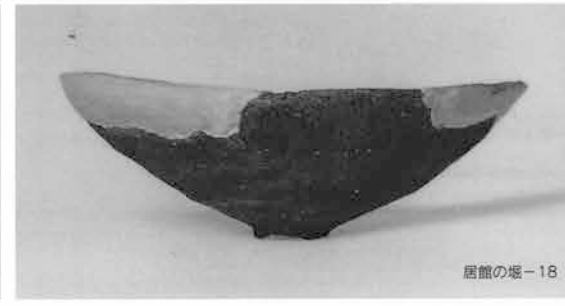
居館の堀－20

居館の堀－23

居館の堀－17

居館の堀－41

居館の堀－22


居館の堀－18

居館の堀－44

居館の堀－24

居館の堀－21

居館の堀－25

居館の堀－32

居館の堀－31

居館の堀－30

居館の堀－34

居館の堀－33

居館の堀－37

居館の堀－39

居館の堀－38

居館の堀－36

居館の堀－35

居館の堀－43

居館の堀－49

居館の堀－48

居館の堀－45

居館の堀－46

居館の堀－51

居館の堀－54

居館の堀－50

居館の堀－47

居館の堀－57

居館の堀－53

居館の堀－73

居館の堀－55

居館の堀－52

居館の堀－74

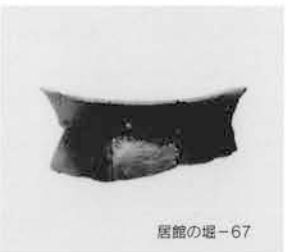
居館の堀－65

居館の堀－66

居館の堀－58

居館の堀－72

居館の堀－63


居館の堀－67

居館の堀－71

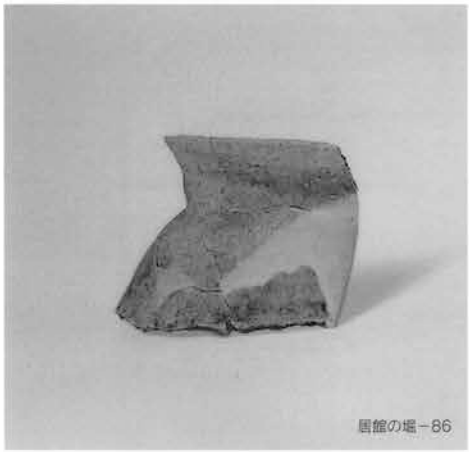
居館の堀－69

居館の堀－85

居館の堀－92

居館の堀－89

居館の堀－91


居館の堀－86

居館の堀－70

居館の堀－88

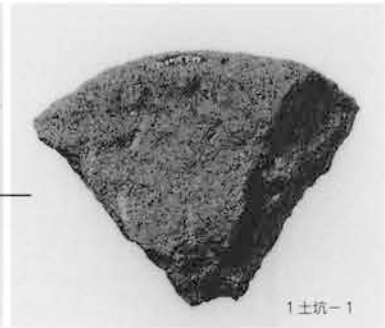
居館の堀－82

居館の堀－80

居館の堀－83

3竪穴−1

5溝−4

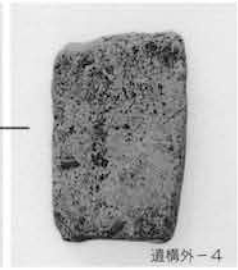

1土坑−1

遺構外−3

3住−6

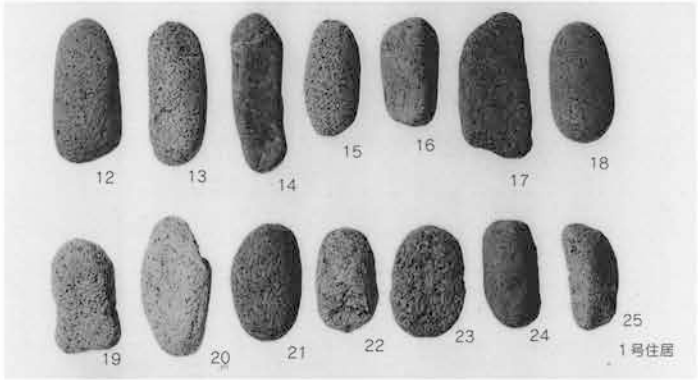
5住−15

10住−13


遺構外−4

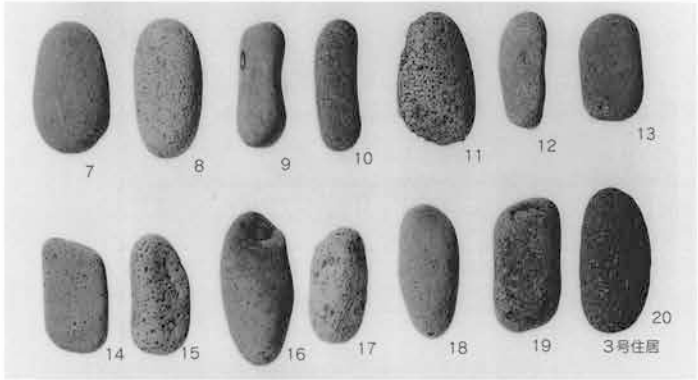
居館の堀−94

居館の堀−93

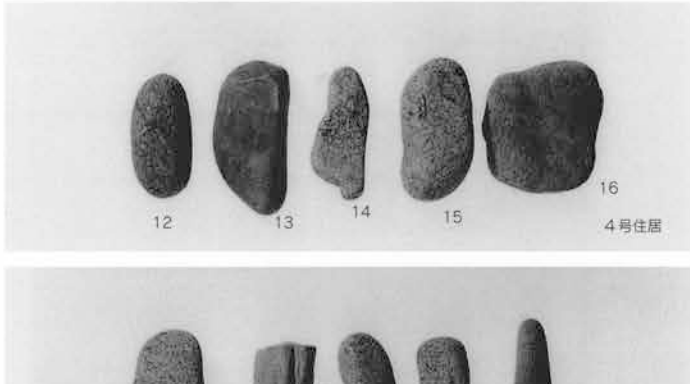


1号住居

2号住居



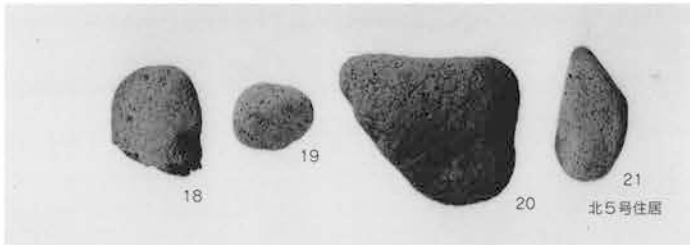
3号住居



4号住居

12号住居

7号住居



北5号住居

報告書抄録

ふ り が な	あらとあらこいせき
書　　名	荒砥荒子遺跡
副　書　名	県営圃場整備事業荒砥北部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	第７集
シ リ ー ズ 名	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第265集
編 著 者 名	中沢　悟
編 集 機 関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
所　在　地	〒377-8555　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2　　ＴＥＬ　0279―52―2511
発 行 年 月 日	2000年３月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コ　ー　ド		北　緯 °　′　″	東　経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
荒砥荒子（あらとあらこ）	前橋市荒子町（まえばししあらこまち）	10201	00062	36°22′20″	139°10′40″	1983年 ３月22～ 1983年 ５月10日	9800	県営圃場場整備事業荒砥北部地区に伴う調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特　記　事　項
荒　砥　荒　子	集　落	古墳時代中期 古墳時代後期 奈良時代 平安時代 古　　代	居館の堀と柵列 竪穴住居　4軒 竪穴状遺構　2軒 井戸　1基 溝　2条 土坑　1基 竪穴住居　10軒 竪穴住居　3軒 竪穴住居　3軒 谷 井戸　2基 溝　14基 土坑　52基	土師器 杯・甕 須恵器 杯 砥石	古墳時代中期の居館が注目される。居館の堀と柵列その内部に竪穴住居が検出された。居館の堀と居館と同時期の溝からは高坏を中心とした多くの遺物が出土。近接する同じ古墳時代中期の丸山・梅木遺跡の居館とともに、この地域の居館研究に重要な遺跡である。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
調　査　報　告　第　265　集

荒砥荒子遺跡

昭和57・58年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

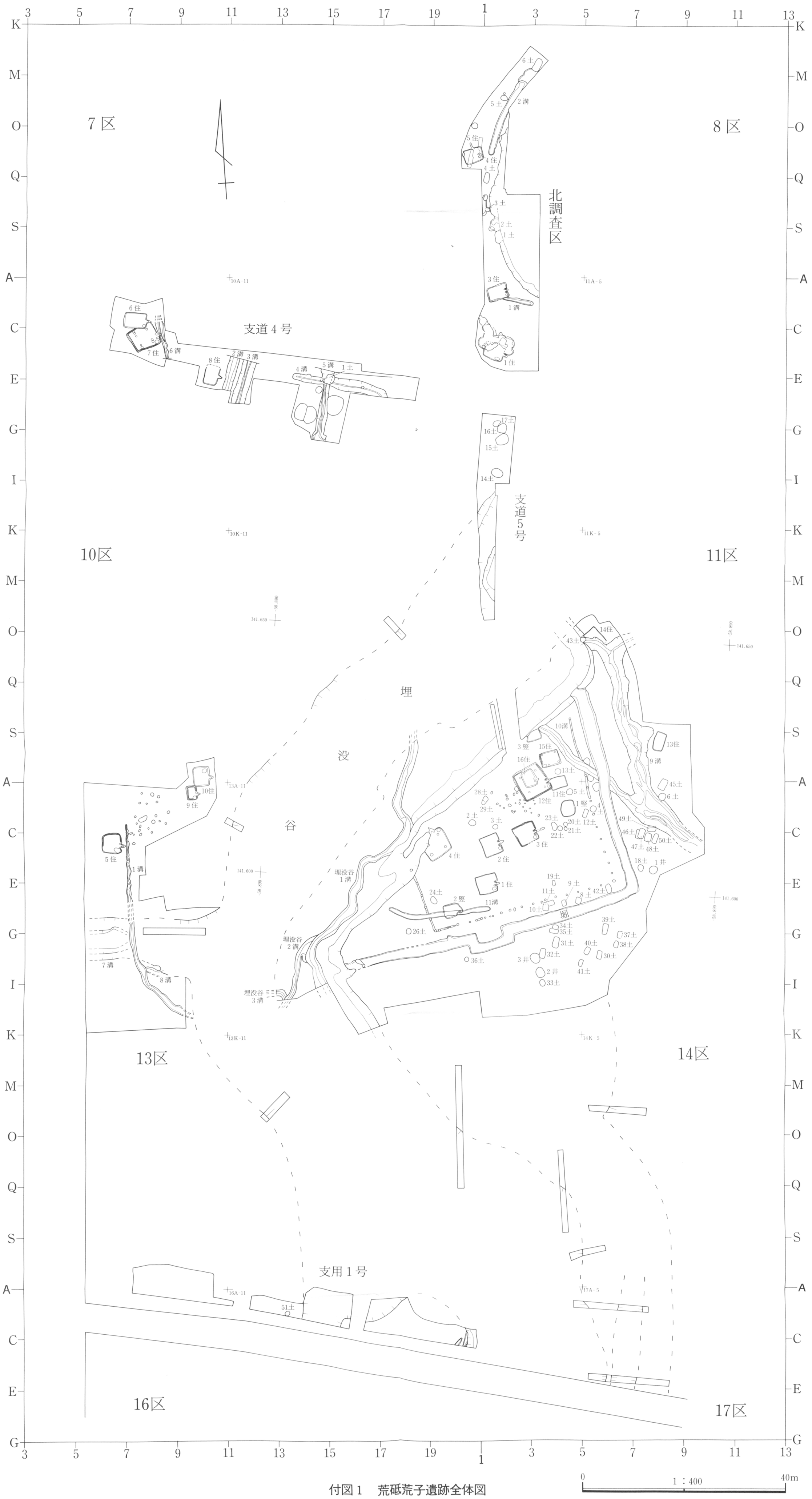
平成12年３月21日　印刷
平成12年３月27日　発行

編集・発行／群馬県教育委員会
〒371-8570　前橋市大手町１丁目１番１号
電話（027）223―1111（代表）

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555　勢多郡北橘村大字下箱田784番地の２
電話（0279）52-2511（代表）

印刷／朝日印刷工業株式会社

© 2000



付図1　荒砥荒子遺跡全体図

1：100

付図２　荒砥荒子遺跡居館の全体図（航空写真測量図）

昭和53年4月測図　等高線間隔 1.0m（溝内 2.0m）
座標系 第Ⅸ系

中央航業株式会社調製

群馬県埋蔵文化財調査事業団

付図３　荒砥荒子遺跡居館の堀と９号溝出土遺物分布図